福　岡　市

有田・小田部

第11集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第234集

1990

福岡市教育委員会

有田・小田部 第11集　正誤表

頁	行	誤	正
例言	10	平川敬二	平川敬治
VII	19	Fig.102 環溝周辺の	Fig.102 環濠周辺の
2	15	平川敬二	平川敬治
6	7	長沙窯糸	長沙窯系
12	7	弥生時代初頭頃の環溝	弥生時代初頭頃の環濠
〃	12	コンテナ56箱	コンテナ31箱
14	12	外湾気味に	内湾気味に
〃	18・24	内湾気味に	外湾気味に
21	21	やや外湾気味に	やや内湾気味に
51	Tab.4	桁　行	桁行（cm）
61	14	口縁部は外湾気味に	口縁部は内湾気味に
65	19	遺物乞含層	遺物包含層
67	13	瓦質土器三足支脚片	瓦質土器三足鍋支脚片
73	18・21・25	暗茶褐色	暗褐色
〃	18・21 22・24	黒色粘質土層	暗青灰色粘土
75	13	立ち上がり明瞭な	立ち上がりに明瞭な
88	23	出土遺物(Fig.66.PL28)	出土遺物(Fig.66)
99	Tab.7	No. Fig. No. 種類 −15	No. Fig. No. 種類 75−15
103	15・26	やや外湾	やや内湾
〃	24	内湾して	外湾して
120	24	166は基部の一部, 167は…。	165は基部の一部, 166は…。

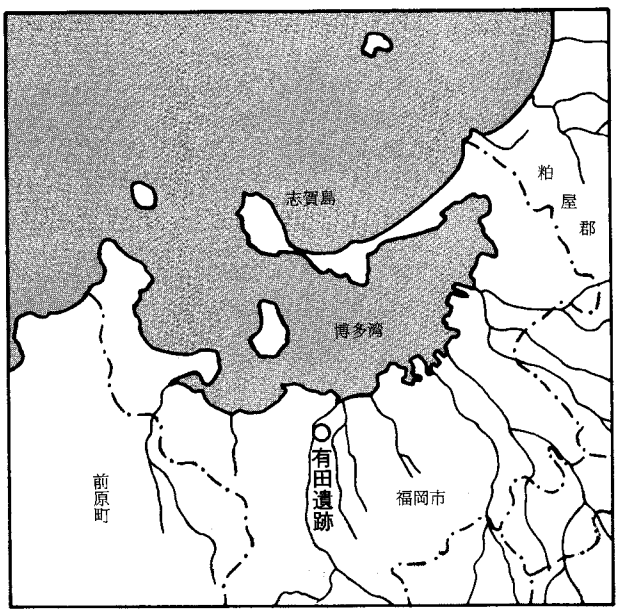
頁	行	誤	正
120	26	168は…。169はSP21…	167は…。168はSP21
120	27〜33	170は…。171は… 172〜175は…。172は… 173〜175は…。173・174は 175は…。176・177は… 176は…, 177は…, 178はSP57…。 179・180は…。	169は…。170は… 171〜174は…。171は… 172〜174は…。172・173は 174は…。175・176は… 175は…, 176は…, 177はSP57…。 178・179は…
123	1〜6	179は…。180は…171と… 181…。182は… 183・184…。183…, 184…。185…。186・187…。 186は…。187…。	178…179…170と…。 180…。181は… 182・183…。182…, 183…。184…。185・186…。 185…。186…。
124	1	188は…	187は…
126	13	位置ずけられている。	位置づけられている。
〃	注1	森貞二郎	森貞次郎
127	Fig.102	弥生時代の遺構	環濠周辺の弥生時代遺構
137	8	口縁部が内湾気味	口縁部が外湾気味
142	4	工作台と思われる石製品。	作業台と思われる石器。
150	遺物番号 1056	登録番号 00115	登録番号00114・00115
154	遺物番号 183	図版	図版21
160	遺物番号 090・091	登録番号 00098・00099	登録番号 00097・00094

NO. 17760

有田・小田部

〈福岡市早良区有田・小田部における遺跡群の発掘調査報告〉

第11集



1990

福岡市教育委員会

巻頭図版

第107次調査区全景（北から）

序

福岡市は古くから大陸への門戸として繁栄しており，特に本市の西南部に位置する早良平野は埋蔵文化財が数多く包蔵されている地域として知られています。この平野の北部に位置する有田・小田部地区にある有田遺跡群は，旧石器時代から近世にわたる重要な遺跡です。昭和41～43年にかけて九州大学考古学研究室が区画整理に伴う発掘調査を行ない，弥生時代初頭の環濠集落や奈良時代の建物が確認されて以来，学界の注目するところとなりました。本市では昭和50年度から開発行為に先行して発掘調査を実施し，今年度迄に157か所を数えています。その結果数多くの成果が得られています。

今回報告する７か所の遺跡は，旧石器時代から近世にわたるものです。縄文時代終末から弥生時代前期にかけての環濠，古墳時代初頭の集落跡，古墳時代後期から奈良時代にかけての大型建物群跡，中世の居館跡などを検出し，有田・小田部の歴史の一端を明らかにすることが出来ました。特に弥生時代の環濠は推定の大きさで，博多区板付遺跡より大きく，注目されるべきものです。

発掘調査から報告書作成にいたるまで，ご指導をいただいた先生方をはじめ，地方の皆様方，作業員，整理補助員，地権者など関係者の方々に，深く感謝の意を表します。

本書が埋蔵文化財保護の理解を深める一助となり，併せて研究資料としてご活用いただけることを願うものです。

平成２年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　佐藤善郎

例　　言

(1). 本書は福岡市早良区有田・小田部・南庄地域における開発に伴い，福岡市教育委員会が平成元年度の国庫補助を得て実施した，緊急発掘調査の報告書である。

(2). 本書には昭和61年度の第107次調査・第113次調査，昭和62年度の第120次調査・第131次調査・第133次調査，昭和63年度の第146次調査，平成元年度の第149次調査を収録する。

(3). 本書では有田・小田部台地上の遺跡は一連のものと見なし，広義の有田遺跡群と呼称する。

(4). 本書に収録した発掘調査は，第107次・第113次・第120次調査を山崎龍雄・米倉秀紀（現福岡市博物館）が，第131次・第133次調査を山崎・小林義彦が，第146次・第149次調査を山崎・加藤良彦が担当した。

(5). 本書に掲載した遺構の実測・写真撮影については各調査担当者が，遺物の実測と製図，遺構の製図については山崎・平川敬二・岡根なおみが，遺物の写真撮影は平川が行なった。また第107次・第131次調査の旧石器の整理・執筆は埋蔵文化財課の小畑弘己に依頼した。なお遺物の製図にあたっては長家伸に協力を得た。付図の作成は山崎と岡根が行なった。

(6). 遺構番号については第107～133次調査迄は遺構の種類毎個別に通し番号を付し，第146・149次調査についてはピット以外，遺構の種類を問わず，通し番号とした。

(7). 遺構記号は福岡市の遺構記号規準によっている。

SA……柵　　SB……掘立柱建物　　SC……竪穴住居跡　　SD……溝状遺構
SE……井戸　　SK……土坑　　SP……ピット　　SX……その他

(8). 本書掲載遺物の縮尺は土器・陶磁器については1/4，土製品・石器については1/3を原則としている。

(9). 本書に使用した方位は磁北であり，その他については図中に記した。

(10). 本書報告の遺物・図面・写真類はすべて本市の埋蔵文化財センターに収蔵保管する予定である。

(11). 本書の執筆は以下のとおりである。

第１章　はじめに　…山崎
第２章　遺跡の立地と調査の成果　…山崎
第３章　調査の記録　…山崎・米倉・小畑（各担当のおわりに明記）

(12). 第133次調査付論については，福岡市埋蔵文化財センターの本田光子氏に玉稿をいただき，内容を充実した。

(13). 本書の編集は米倉と協議のうえ，山崎が行ない，編集にあたっては平川・岡根両氏に多大な協力を受けた。

本　文　目　次

本文頁

第１章　はじめに……1
　１．調査に至る経過……1
　２．発掘調査の組織……2
第２章　遺跡の立地と調査の概要……4
　１．立地と調査の成果……4
　２．平成元年度の調査の概要……6
第３章　調査の記録……11
　１．第107次調査……12
　　１）調査地区の地形と概要……12
　　２）遺構と遺物……12
　　３）小結……66
　２．第113次調査……73
　　１）調査地区の地形と概要……73
　　２）遺構と遺物……73
　　３）小結……87
　３．第120次調査……88
　　１）調査地区の地形と概要……88
　　２）遺構と遺物……88
　　３）小結……90
　４．第131次調査……91
　　１）調査地区の地形と概要……91
　　２）遺構と遺物……91
　　３）旧石器時代の調査……96
　　４）小結……100
　５．第133次調査……101
　　１）調査地区の地形と概要……101
　　２）遺構と遺物……101
　　３）小結……126
　　付論……128
　６．第146次調査……132
　　１）調査地区の地形と概要……132

2）遺構と遺物 ……133
3）小結 ……139
7．第149次調査……140
1）調査地区の地形と概要 ……140
2）遺構と遺物 ……141
3）小結 ……148
8．Tab. 8各調査地点出土遺物一覧表 ……149

図 版 目 次

巻頭図版1 第107次調査区全景（北から）
PL. 1 有田遺跡周辺航空写真（1946年撮影，上が北）
PL. 2 (1)第107次調査区全景（東から）
(2)同（北から）
PL. 3 (1)第107次調査区完掘状況（北から）
(2) SC01（北東から）
PL. 4 (1) SC01遺物出土状況（南から）
(2)同（南から） (3) SC02（北西から） (4)水晶出土状況
PL. 5 (1) SC03（東から） (2) SC04（東から） (3) SC05（東から） (4) SK01（北から）
(5) SK02（北から）
PL. 6 (1) SK04（北から） (2) SK05～07（西から） (3) SK15（北から） (4) SK16（北東から）
PL. 7 (1) SK28・31（東から） (2) SK39・40（北から） (3) SK49（北から） (4) SK03・43（東から）
PL. 8 (1) SK45（東から） (2) SK50（南から） (3) SD01（北東から） (4) SD02（東から）
PL. 9 (1) SD03（北から） (2) SD04（東から） (3) SD06（東から） (4) SP271遺物出土状況
PL. 10 (1) SD01・02交差部土層 (2) SD02土層（東から） (3) SD03（南から） (4) SD04（東から）
PL. 11 (1)掘立柱建物群検出状況（東から） (2) SB01と SD04（東から）
PL. 12 (1) SA01と SB03・05（北から） (2) SB01（北から） (3) SB02
PL. 13 (1) SB03（南から） (2) SB04（西から） (3) SB05（南から） (4) SB06（北から）

PL. 14　(1) SB07（南から）　(2) SB08（西から）　(3) SB09（東から）　(4)同断割り状況（東から）
PL. 15　(1) SB09完掘状況（北から）　(2)同根石状況（東から）　(3) SB01—2柱穴断割り（北から）　(4)同P4柱穴断割り（北から）
PL. 16　(1) SA01（北から）　(2)同布掘り断割り（北から）　(3) SA02（北から）　(4) SA03（南から）
PL. 17　SC01出土遺物I
PL. 18　SC01出土遺物II
PL. 19　(1) SC01出土遺物III　(2) SC02出土遺物
PL. 20　SC04・05・土坑・掘立柱建物出土遺物
PL. 21　掘立柱建物・柵・SD01・02出土遺物
PL. 22　SD03〜05・ピット出土遺物及び旧石器
PL. 23　(1)第113次調査区全景（南から）　(2) SD02（西から）　(3) SD03（南から）
PL. 24　(1) SD01礫群（西から）　(2)同完掘状況（東から）　(3) SD01土層（南から）　(4)同木製品出土状況
PL. 25　(1) SD02土層（南から）　(2) SD01出土遺物I
PL. 26　SD01出土遺物II
PL. 27　出土遺物III
PL. 28　(1)第120次調査区全景（西から）　(2) SK01（南から）　(3) SK02（南から）　(4) SK03（北から）　(5)出土遺物
PL. 29　(1)第131次調査区全景（東から）　(2) SC01（北から）　(3)同カマド検出状況（東から）
PL. 30　(1)旧石器時代調査全景（南から）　(2) SC01出土遺物
PL. 31　旧石器時代遺物
PL. 32　(1)第133次調査区全景（西から）　(2) SD01（南から）
PL. 33　(1)第133次調査区全景（北から）　(2) SC01・SD03（北西から）
PL. 34　(1) SC01（西から）　(2)同完掘状況（南東から）　(3) SK01（東から）　(4) SK02（南から）
PL. 35　(1) SK03（西から）　(2) SK04（北から）　(3) SK05（南から）　(4) SE01（西から）
PL. 36　(1) SD02（南から）　(2) SD03（南西から）　(3) SD01北壁土層（南から）　(4) SD03・SC01東壁土層（西から）
PL. 37　(1) SD03南壁土層（北から）　(2)同中央土層（南西から）　(3) SA01—10根石状況（東から）　(4)土坑・井戸・柵出土遺物

PL. 38　SC01出土遺物Ⅰ
PL. 39　SC01出土遺物Ⅱ
PL. 40　SD01・02出土遺物
PL. 41　SD03・ピット出土遺物
PL. 42　(1)第146次調査区全景（南西から）　(2) SA09（北東から）　(3) SA09柱穴土層（北西から）　(4)出土遺物
PL. 43　(1)第149次調査区全景（南から）　(2) SC05（南東から）
PL. 44　(1) SC05遺物出土状況（東から）　(2) SC05内 SK14（北から）　(3) SK04（南から）　(4)同遺物出土状況
PL. 45　(1) SK06（東から）　(2) SK08（西から）　(3) SK10（北東から）　(4) SK10（北から）
PL. 46　SC05出土遺物
PL. 47　SC05・土坑・ピット出土遺物

挿　図　目　次

本文頁
Fig. 1　有田・小田部周辺の遺跡（1/25000）……5
Fig. 2　有田・小田部台地と発掘調査地点（1/5000）……折込み
Fig. 3　有田・小田部台地の旧地形図（1/5000）……7
Fig. 4　各調査地点位置図（1/2500）……11
Fig. 5　第107次調査遺構配置図（1/200）……13
Fig. 6　SC01（1/60）……15
Fig. 7　SC01出土遺物Ⅰ（1/4）……16
Fig. 8　SC01出土遺物Ⅱ（1/4）……17
Fig. 9　SC01出土遺物Ⅲ（1/4）……18
Fig. 10　SC01出土遺物Ⅳ（1/4）……19
Fig. 11　SC01出土遺物Ⅴ（1/4・1/3）……20
Fig. 12　SC02（1/60）……22
Fig. 13　SC02出土遺物（1/4・2/3）……23
Fig. 14　SC03・04，SC04玉出土状況（1/60・1/2）……24
Fig. 15　SC03～05出土遺物（1/4・1/1）……25
Fig. 16　SC05（1/60）……26
Fig. 17　住居跡・土坑・溝配置図（1/300）……27

Fig. 18　SK01・02・04（1/40）……28
Fig. 19　SK01～03出土遺物（1/4・2/3）……29
Fig. 20　SK03・05～07・15・43（1/40）……30
Fig. 21　SK06・07・20出土遺物（1/4・1/3・2/3・1/1）……31
Fig. 22　SK16・17・19・20（1/40）……33
Fig. 23　SK28・31・39・40・45・48（1/40）……34
Fig. 24　SK49……35
Fig. 25　SK50（1/40）……36
Fig. 26　掘立柱建物・柵配置図（1/300）……38
Fig. 27　SB01（1/100）……39
Fig. 28　SB02～04（1/100）……41
Fig. 29　SB05・06・08（1/100）……42
Fig. 30　SB01～06・08・11出土遺物（1/4）……44
Fig. 31　SB09・11・13（1/100）……45
Fig. 32　SB07・12（1/100）……47
Fig. 33　SB14～18（1/100）……48
Fig. 34　SB09・18出土遺物（1/4）……49
Fig. 35　建物出土のその他の遺物（1/4・1/3・2/3・1/1）……50
Fig. 36　SA01・02・04（1/100）……折り込み
Fig. 37　柵出土遺物（1/4・1/3）……53
Fig. 38　SA03・05（1/100）……54
Fig. 39　SD01・02土層図（1/40）……56
Fig. 40　SD01出土遺物（1/4・1/3・2/3）……58
Fig. 41　SD02出土遺物Ⅰ（1/4・1/3）……59
Fig. 42　SD02出土遺物Ⅱ（1/4・1/3・2/3）……60
Fig. 43　SD03～05土層図（1/40）……61
Fig. 44　SD03出土遺物（1/4・1/3）……62
Fig. 45　SD04・05出土遺物（1/4・1/1）……63
Fig. 46　ピット出土遺物（1/4・1/3・2/3・1/1）……64
Fig. 47　攪乱土坑出土遺物（1/4）……65
Fig. 48　旧石器時代遺物（2/3）……66
Fig. 49　有田地区台地古墳時代前期住居跡分布状況（1/1500）……68
Fig. 50　第107次調査区建物類型図Ⅰ……71

Fig. 51　第107次調査区建物類型図II ……72
Fig. 52　第113次調査区遺構配置図 ……74
Fig. 53　調査区北壁・東壁土層図（1/60） ……76
Fig. 54　SD01上・中層出土遺物Ⅰ（1/4・1/3・2/3） ……78
Fig. 55　SD01上・中層出土遺物II（1/4） ……79
Fig. 56　SD01礫群出土遺物Ⅰ（1/4） ……80
Fig. 57　SD01礫群出土遺物II（1/4） ……81
Fig. 58　SD01下層出土遺物（1/3） ……82
Fig. 59　SD01・02出土石塔類（1/4） ……83
Fig. 60　SD02北壁土層（1/60） ……84
Fig. 61　SD02上・中層出土遺物（1/4） ……85
Fig. 62　SD02下層出土遺物（1/4） ……86
Fig. 63　第120次調査区位置図（1/2500） ……88
Fig. 64　第120次調査区遺構配置図（1/200） ……89
Fig. 65　SK01～03（1/40） ……90
Fig. 66　出土遺物（1/4・1/3） ……90
Fig. 67　第131次調査区位置図（1/2500） ……91
Fig. 68　第133次調査区遺構配置図（1/200） ……92
Fig. 69　調査区西壁・南壁土層図（1/40） ……93
Fig. 70　SC01及びカマド（1/60・1/30） ……94
Fig. 71　SC01出土遺物（1/4） ……95
Fig. 72　グリッド配置図（1/200） ……96
Fig. 73　石器出土状況図（1/80） ……96
Fig. 74　出土石器実測図Ⅰ（2/3） ……97
Fig. 75　出土石器実測図II（2/3） ……99
Fig. 76　有田・小田部地区旧石器出土地点 ……100
Fig. 77　第133次調査区遺構配置図（1/200） ……102
Fig. 78　SC01（1/60） ……折り込み
Fig. 79　SC01出土遺物Ⅰ（1/4） ……104
Fig. 80　SC01出土遺物II（1/4） ……105
Fig. 81　SC01出土遺物III（1/5・1/6） ……106
Fig. 82　SC01出土遺物IV（1/4） ……107
Fig. 83　SC01出土遺物V（1/4） ……108

Fig. 84　SC01出土遺物VI（1/4）……109
Fig. 85　SC01出土遺物VII（1/3・2/3）……110
Fig. 86　SK01～05（1/40）……112
Fig. 87　SK02・03・05出土遺物（1/3・1/4）……113
Fig. 88　SE01と出土遺物（1/60・1/4）……114
Fig. 89　SA01（1/100・1/200）……115
Fig. 90　SA01出土遺物（1/4）……116
Fig. 91　SD01～03（1/100）……折り込み
Fig. 92　SD01・02土層図（1/60）……117
Fig. 93　SD01出土遺物I（1/4）……118
Fig. 94　SD01出土遺物II（1/4）……119
Fig. 95　SD02出土遺物（1/4）……120
Fig. 96　SD03土層図（1/60）……121
Fig. 97　SD03上・中層出土遺物（1/4）……122
Fig. 98　SD03下層出土遺物（1/4）……123
Fig. 99　SD03出土遺物（1/3・2/3）……124
Fig. 100　ピット出土遺物（1/4）……125
Fig. 101　玉類実測図（1/1）……126
Fig. 102　環溝周辺の弥生時代遺構配置図（1/2500）……127
Fig. 103　第146次調査区遺構配置図（1/200）……132
Fig. 104　SA09（1/100）……133
Fig. 105　SD01南壁土層（1/40）……133
Fig. 106　出土遺物（1/4・1/1）……134
Fig. 107　第146次調査区遺構配置図（1/200）……136
Fig. 108　SC05（1/60）……137
Fig. 109　SC05出土遺物I（1/4）……138
Fig. 110　SC05出土遺物II（1/6）……139
Fig. 111　SC05出土遺物III（1/4）……140
Fig. 112　SC05出土遺物IV（1/4）……141
Fig. 113　SC05出土遺物V（1/4）……142
Fig. 114　SK14（1/40）……142
Fig. 115　SK14出土遺物（1/4）……143
Fig. 116　SK04・06・08・10・11・18（1/40）……144

Fig. 117　SK04出土遺物（1/4）……145
Fig. 118　SK06・08・10出土遺物（1/4）……146
Fig. 119　ピット出土遺物（1/4・2/3）……148

表　目　次

Tab. 1　昭和61～平成元年度調査一覧表……9
Tab. 2　住居跡一覧表……26
Tab. 3　土坑一覧表……36
Tab. 4　掘立柱建物一覧表……51
Tab. 5　柵一覧表……55
Tab. 6　有田地区台地大型建物跡一覧表……70
Tab. 7　出土石器属性表……99
Tab. 8　各調査地点出土遺物一覧表……149

付　図　目　次

I　有田・小田部地区各調査地点配置図（1/1000）
II　有田地区大型建物群配置図（1/1000）
III　第133次・146次調査の調査地点遺構配置図（1/300）

第１章　はじめに

１．調査に至る経過

福岡市近郊の純農村地帯であった有田・小田部の台地上には，有田・小田部・南庄地区の３つの集落が存在している。近年国道202号線バイパスが西へ延長した事と，昭和57年の市営地下鉄１号線の開通等の影響を受け，市街地への変貌は著しく，過日の農村の面影はない。

有田遺跡群の発掘調査は昭和41年の九大による調査以降，昭和50年度から，国庫補助事業として出発したが，昭和52年度から1000m²以下の小規模開発についても対応を行なって来ている。

昭和60年度迄の開発傾向は都心に近い手近な住宅地として個人専用住宅の建設が多かったが，ここ数年は好景気や，地価高騰の影響を受け，民間資本により，202号線バイパス沿に店舗，高層の共同住宅，分譲住宅などの大規模開発が増加しつつある。平成元年度までの調査件数は計157件である。この内には学校建設，下水道事業，市営住宅建設などの公共事業も含まれている。

平成元年度の発掘件数は９件で，平成元年４月13日～平成２年３月31日迄行なった。

本書では，昭和61年度の第107次・113次調査，昭和62年度の第120次・131次・133次調査，昭和63年度の第146次調査，平成元年の第149次調査を報告する。

（昭和61年度発掘調査）

第107次調査	福岡市早良区有田１丁目31－１外	申請面積	925m²	申請者	松尾半三郎
第113次調査	福岡市早良区有田１丁目28－９	申請面積	166m²	申請者	猪股興

（昭和62年度発掘調査）

第120次調査	福岡市早良区有田１丁目38－３外	申請面積	329m²	申請者	蒲池俊喜
第131次調査	福岡市早良区小田部２丁目131	申請面積	300.39m²	申請者	森田稔
第133次調査	福岡市早良区有田１丁目32－４	申請面積	480m²	申請者	坂口竹彦

（昭和63年度発掘調査）

第146次調査	福岡市早良区有田１丁目32－６	申請面積	237m²	申請者	川野俊彦

《平成元年度発掘調査》

第149次調査	福岡市早良区有田１丁目21－３	申請面積	368.22m²	申請者	三角米蔵
第150次調査	福岡市早良区小田部３丁目168	申請面積	1182m²	申請者	新栄住宅
第151次調査	福岡市早良区小田部１丁目203，207	申請面積	630.28m²	申請者	照栄建設
第152次調査	福岡市早良区小田部５丁目48，49	申請面積	873m²	申請者	照栄建設
第153次調査	福岡市早良区小田部５丁目70，71	申請面積	330m²	申請者	中央信託銀行
第154次調査	福岡市早良区有田１丁目24－２	申請面積	450.35m²	申請者	都築修三

第155次調査　福岡市早良区有田２丁目地内　申請者　福岡市下水道局
第156次調査　福岡市早良区有田１丁目12－２　申請面積　165m²　申請者　富谷和敏
第157次調査　福岡市早良区小田部５丁目134－１,131－１　申請面積　215.58m²　申請者　西岡修三

２．発掘調査の組織

(1)　昭和61年度～平成元年度調査の組織

調査主体　福岡市教育委員会

調査体制　福岡市教育委員会埋蔵文化財課第２係

事務担当　**昭和61～63年度**　埋蔵文化財課第２係長　飛高憲雄，（庶務）岸田隆
平成元年度　埋蔵文化財課第２係長　柳沢一男，（庶務）阿部徹

発掘担当　**昭和61年度**　山崎龍雄，米倉秀紀（現福岡市博物館）
昭和62年度　山崎，米倉，小林義彦
昭和63年度　山崎，小林，加藤良彦
平成元年度　山崎，加藤

調査補助員　**昭和61年度**　大内士郎（現今宿公民館主事），平川敬二（九州大学）
昭和62・63年度　平川，梶村嘉長
平成元年度　平川，溝口武司，黒田和生，英豪之

調査協力者　**昭和61年度**　合屋龍介，馬場寿男，三浦義隆，本多育央，松尾司，松尾和雄，高浜謙一，神尾順次，吉村哲美，有富いつ子，板倉文子，井上紀世子，緒方マサヨ，金子由利子，清原ユリ子，後藤ミサヲ，坂口フミ子，佐藤テル子，柴田勝子，庄野崎ヒデ子，土斐崎初栄，徳永ノブヨ，西尾たつよ，平井和子，堀川ヒロ子，松井フユ子，松井邦子，松尾玲子，宮原邦江，萬スミヨ，吉岡田鶴子，井上真寿美，北原ヒサ子，蓑原幸江，山田サヨ子，青柳フミ子

昭和62年度　松尾和雄，高浜謙一，神尾順次，三浦義隆，松尾司，金田英夫，桃崎祐輔，吉村哲美，有富いつ子，板倉文子，井上紀世子，緒方マサヨ，金子由利子，清原ユリ子，後藤ミサヲ，坂口フミ子，佐藤テル子，柴田勝子，庄野崎ヒデ子，土斐崎初栄，徳永ノブヨ，西尾たつよ，平井和子，堀川ヒロ子，松井フユ子，松井邦子，松尾玲子，宮原邦江，萬スミヨ，吉岡田鶴子，青柳フミ子

昭和63年度　松尾和雄，高浜謙一，神尾順次，三浦義隆，吉村哲美，佐伯鐵志，原田圭助，瀬戸啓治，百武義隆，岡根義男，青柳フミ子，有富いつ子，板倉文子，井上紀世子，緒方マサヨ，金子由利子，清原ユリ子，後藤ミサヨ，佐藤テル子，徳永ノブヨ，土斐崎初栄，西尾タツヨ，平井和子，堀川ヒロ子，松井フユ子，松井邦子，松尾玲子，松尾君子，宮原邦江，門司ヒロ子，山田サヨ子，吉岡田鶴子，萬スミヨ，

坂田セイ子，柴田常人，舎川春江，松尾鈴子，高田マサエ

平成元年度　高浜謙一，神尾順次，三浦義隆，吉村哲美，瀬戸啓治，百武義隆，有富いつ子，板倉文子，井上紀世子，緒方マサヨ，金子由利子，清原由利子，後藤ミサヲ，佐藤テル子，坂口フミ子，柴田勝子，庄野崎ヒデ子，徳永ノブヨ，土斐崎初栄，西尾タツヨ，平井和子，堀川ヒロ子，松井フユ子，松井邦子，宮原邦江，門司ヒロ子，山田サヨ子，吉岡田鶴子，萬スミヨ，坂田セイ子，柴田常人，舎川春江，高田マサエ，松尾キミ子，松尾鈴子

資料整理　昭和61～平成元年度　平川敬治，池田礼子，井上マツミ，内尾トミ子，岡根なおみ，小金丸わかば，永井和子，仲前智江子，中原尚美，松下節子，吉田祝子，綿加知子，田中智子，徳永亜紀，舛本亜希，野田純子

以上のほか，発掘調査・資料整理にあたっては，土地所有者の方々あるいは多くの地元の方々から，多大な援助をいただいた。これらの方々に，末筆ながら深くお礼申し上げる次第です。

第２章　遺跡の立地と調査の成果

１．立地と調査の成果

有田遺跡群は福岡市の西南部に広がる早良平野の北側中央部に所在する，標高15m前後を測る独立中位段丘上に立地する。行政的には福岡市早良区有田・小田部・南庄の一帯にまたがる。この台地は北側に八手状に広がる複雑な谷部を形成し，南北約1.7km，東西0.8km，面積約70万㎡の広がりを持つ。この台地の西には室見川，東には金屑川が北流している。特に室見川は過去度々洪水によって流路を変えたらしく，航空写真などで幾筋もの旧河道が読みとれる。また台地縁辺は度々の流路変更によって浸蝕を受け小段崖を形成している。

有田遺跡群の所在する有田・小田部・南庄地区はもともと早良六郷の一つ田部郷にあたり，明治22年の町村制実施によって早良郡原村の一部として組み込まれ，昭和４年に福岡市に編入された。昭和40年代初めの区画整理以前は純農村的風景を残していたが，国道202号線バイパスや地下鉄１号線開通以降は，都心に近い住宅地として開発が急激に進み，景観の変化には著しいものがある。

有田遺跡群は台地上に分布する旧石器時代から近世迄の複合遺跡である。現在迄の調査次数は昭和41年の九州大学の調査以来，150ケ所を越える。旧石器時代については有田地区の最高所部の第６次地点，小田部地区の第131次地点で発見されている。第６地点ではナイフやポイントが検出されている。縄文時代の遺構は中期から後期にかけての貯蔵穴群が有田地区西側の第５次・第116次調査地点で発見されている。弥生時代では前期初頭のＶ字溝が第２次調査を初めとして第45次・54次・77次・95次・133次調査区で確認されている。これらの地点の溝をつなぎあわせると，有田地区台地高所部を楕円形に巡る環濠が予想出来，その規模は長径300m，短径200mを測る。遺跡群の南西側にある有田七田前遺跡では縄文時代晩期末の土器に大陸系の無文土器や石器を伴っており，既に水田経営のあったことを示唆している。前期後半には集落が有田地区台地中央上，小田部地区では５丁目地内の第16次・121次・125次調査区で確認されている。この時期の甕棺墓は有田・小田部地区で５ケ所知られているが，その内，西福岡高校地内では金海式甕棺墓より細形銅戈が発見され，また小田部地区から細形銅矛の出土も伝わる。中期は前期より更に集落が拡大し，分布の濃淡はあるにせよ，台地全域に拡がるようである。当遺跡地内では青銅利器が製造されたらしく，その溶范が第３次・82次・108次調査区で出土しており，早良平野において，吉武遺跡群などと共に拠点集落の一つとして考えられる。しかし後期になると一変して，集落は縮小する傾向を示す。古墳時代の集落は全時期を通して台地上に広く確認されており，長期間に亘った集落が各所に存在している。この時期には小田部地区に筑紫殿塚・松浦殿塚などの大円墳が存在し，また調査によっても石棺墓や粘土槨（第97次調査区）も

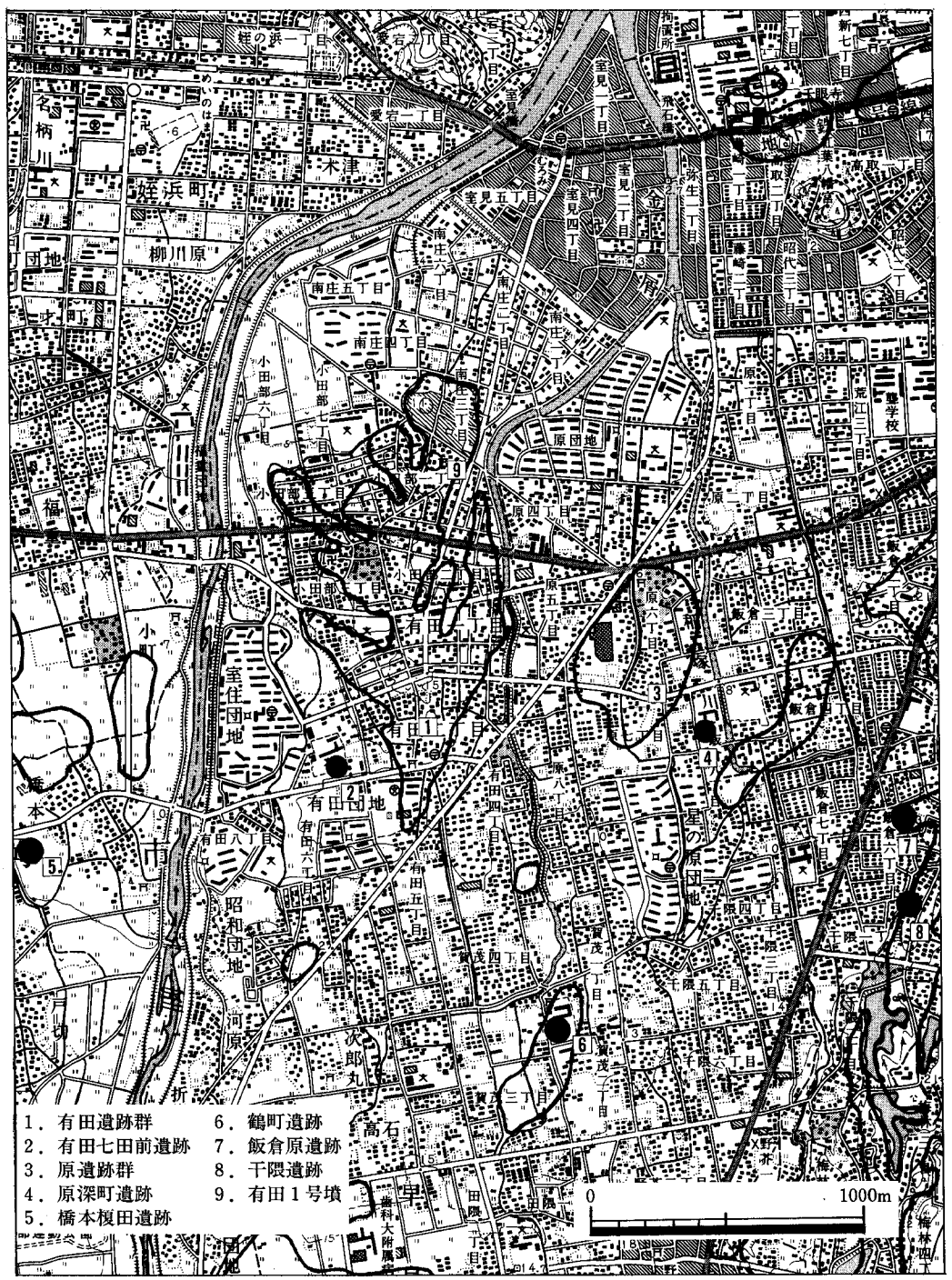


Fig. 1 有田・小田部の周辺遺跡（1/25,000）

検出されている。遺跡北側にある原北小学校内には南庄地区より出土した石棺墓が移築保存されている。

律令時代はこの地区は早良郡の田部郷に比定されている。有田地区の第56次・57次・77次・78次・82次・101次・107次調査区では大型の掘立柱建物群が検出されている。更に小田部地区にある第102次・105次調査区では，３本柱の柵に囲まれた倉庫群を検出している。これらの建物群は古代西海道に付設された額田駅が西方約２km離れた野方あたりに比定されていることから，それに関連する官衙的規模の建物群と考えてよく，円面硯や石帯・越州窯・長沙窯糸磁器の出土から，早良郡衙と推定することが可能である。中世には在地領主の成長とともに名田や名主屋敷が開発され，遺跡内にも中園屋敷，淀姫屋敷などの名屋敷が形成される。中世後半には大内氏の早良郡代大村興景の知行地や，大友氏の被官であった小田部氏の里城である小田部城が存在する。有田地区には幅５～10mを測る空濠が200m四方の範囲に曲輪を形成するように掘開されている。築造時期は出土した大内氏関連の遺物や中国明代，李朝の陶磁器類から16世紀前半～中頃である。小田部城は台地の南端に推定されているが，この曲輪状遺構はその北側にあり，小田部城との関連が注目される。

２．平成元年度の調査の概要

平成元年度は公共・民間合わせて計９ケ所調査を行なっている。調査期間は平成元年４月13日～平成２年３月31日迄である。調査次数は第149次～157次迄である。第155次調査は下水道建設に伴う公共事業であり，国庫補助事業は第149次・150次・156次・157次調査，他は民間受託調査である。以下今年度の調査概要について述べる。

第149次調査　有田１丁目地内の調査で，台地最高所に立地している。周辺は有田遺跡群内で最も多く調査が行なわれている。

遺構　古墳時代初頭住居跡１棟，中世土坑５基

遺物　古墳時代前期初頭土師器，中世輸入陶磁器・土師質土器・瓦など

第149次調査

第150次調査　小田部３丁目地内の調査で，北西に延びる台地の先端に立地する。周辺の調査例は少ない。南接する第59次・60次調査では，弥生時代前期末の甕棺墓，中世末の居館跡が検出されている。

遺構　弥生時代住居跡１棟，貯蔵穴７基，古墳時代住居跡４棟，土坑18基，掘

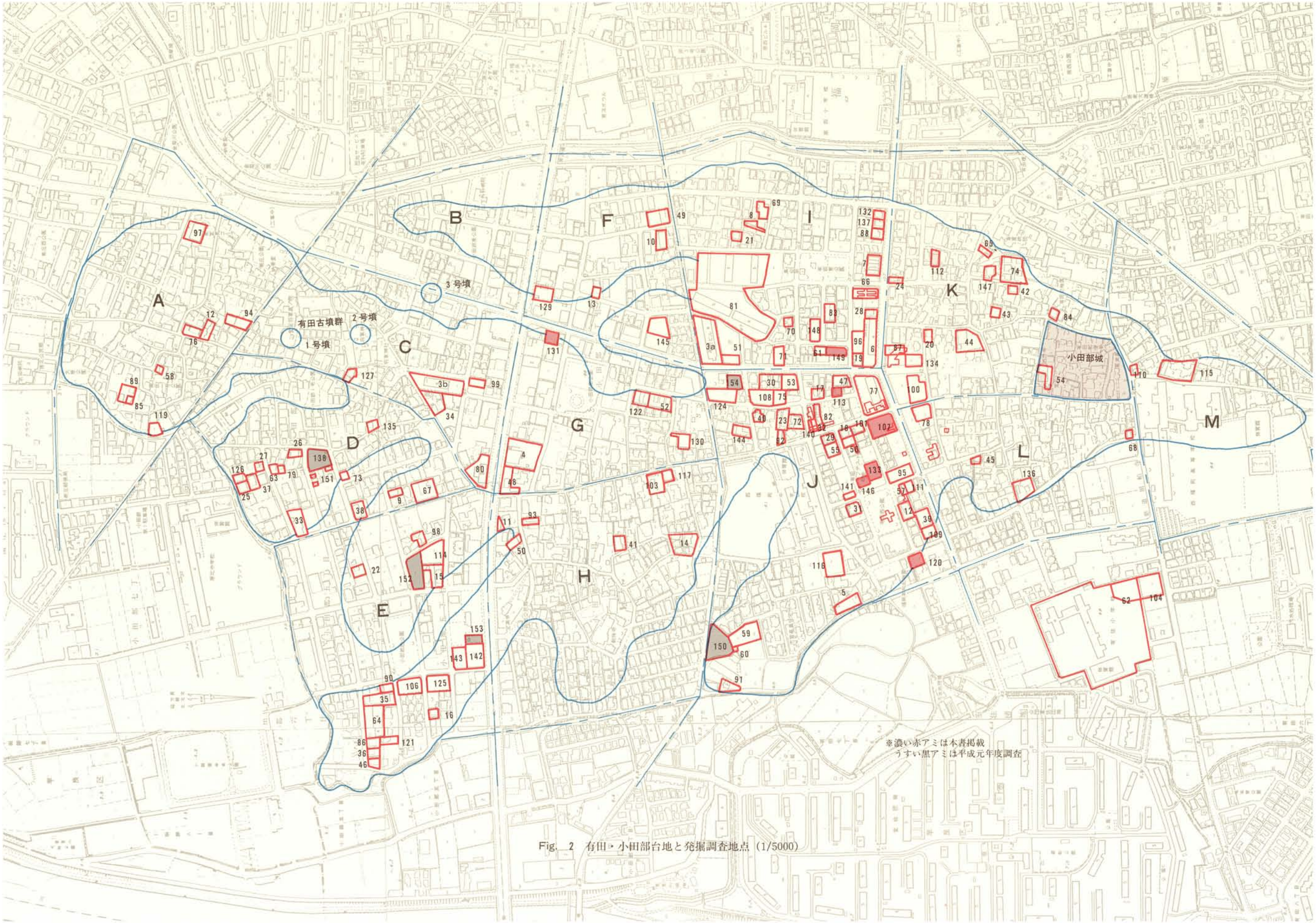


Fig. 2 有田・小田部台地と発掘調査地点（1/5000）

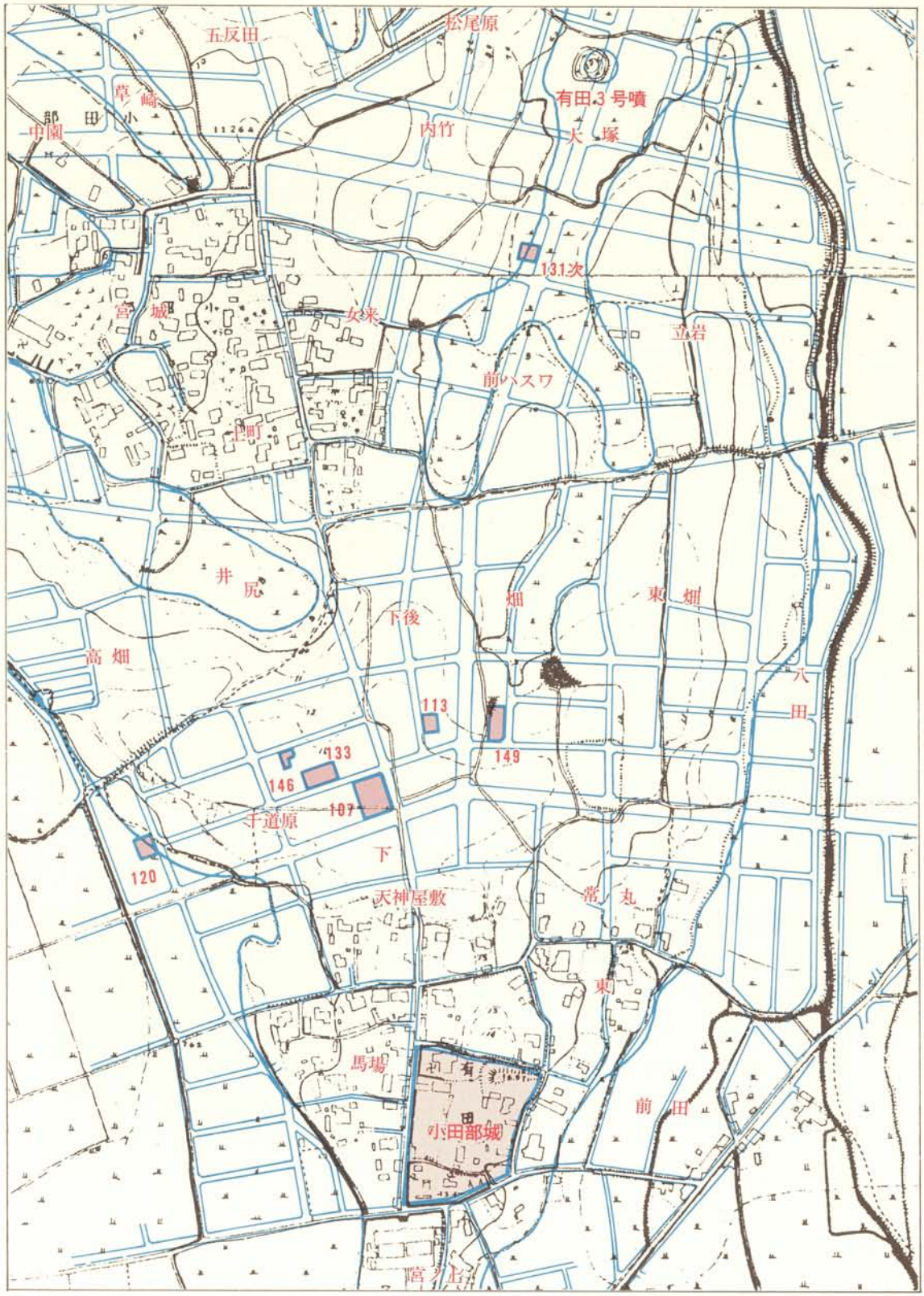


Fig. 3 有田・小田部台地の旧地形図（1/5000）数字は調査次数

立柱建物４棟，溝１条，中世溝１条

遺物　弥生式土器と石器，古墳時代土師器・須恵器など

第151次調査　小田部１丁目地内の調査で，昨年度行なった第138次調査の西側に位置する。周辺の調査例は多く，弥生時代前期末から中期前半の甕棺墓群，中世の掘立柱建物跡が検出されている。今回の調査は車庫建設に伴う調査である。

遺構　柱穴，溝

遺物　量は少ない

第152次調査　小田部５丁目地内の調査で，台地の西側縁辺に立地する。周辺は３ケ所調査が行なわれている。南側の第15次・114次調査では弥生時代から古墳時代住居跡や平安時代の掘立柱建物跡群が検出されている。今回の調査では西側を中心に遺構を確認出来た。

遺構　弥生時代住居跡１棟，古墳時代住居跡４棟，掘立柱建物３棟，焼土坑１基

遺物　弥生式土器と石器，古墳時代土師器・須恵器など

第153次調査　小田部５丁目地内の調査で，西側は昭和63年度に第142次・143次調査が行なわれ，弥生時代中期の円形住居跡や古墳時代前期～後期の住居跡が検出されている。今回の調査では北側中心に遺構を確認した。

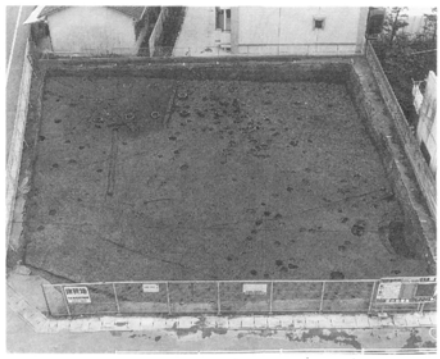
遺構　古墳時代前期住居跡１棟，近世初頭１条

遺物　古墳時代土師器，中世輸入陶磁器，近世日常雑器

第154次調査　有田１丁目地内の調査で，北から入る谷の谷頭部にあたる。周辺は最も調査

第150次調査

第152次調査



第154次調査

が行なわれており，弥生時代から中世迄の各時期の遺構が確認されている。当地点では古墳時代後期の住居跡１棟，平安時代井戸１期，鎌倉時代木棺墓，谷部に弥生式土器から古墳時代後期の須恵器を含む遺物包含層がある。

遺構　古墳時代後期住居跡１棟，土坑１基，溝１条，平安時代井戸１基，掘立柱建物４棟，鎌倉時代木棺墓１基

遺物　旧石器時代ナイフ型石器，弥生式土器・石器，古墳時代土師器・須恵器，中国産輸入磁器

第155次調査　有田２丁目地内の下水道工事に伴う調査である。

遺構　中世末溝１条など

遺物　中世日常雑器など

Tab. 1　昭和60～平成元年度発掘調査一覧表　（注　第１次～99次調査迄は有田第九集を参照のこと）

調査次数	調査番号	地点名	調査地域（地番）	調査面積	調査期間	遺構	文献
第100次	8510	K	早良区有田３丁目８～２	671m²	昭和 60年８月23日～10月27日	弥生時代前期の貯蔵穴，土坑４基，弥生時代中期竪穴住居跡１軒，古墳時代前期竪穴住居跡３軒，中世の掘立柱建物18棟，中世の溝５条，井戸１基，中世末の濠１条，土壙墓１基	④
〃101〃	8511	J	〃　有田１丁目32－３	215m²	〃　９月４日～10月１日	奈良時代の掘立柱建物４軒，古墳時代竪穴柱居跡１軒，中世溝状遺構３条，掘立柱建物１棟，土壙墓２基	①
〃102〃	8512	G	〃　小田部２丁目154	330m²	〃　９月26日～11月７日	掘立柱建物１棟，柵１条	③
〃103〃	8513	H	〃　〃　３丁目３－14	501m²	〃　10月４日～10月22日	近世初頭井戸１基，溝２条，近代井戸１基掘立柱建物２棟	④
〃104〃	8514	L区外	〃　有田字七田前389－１	544m²	〃　10月１日～10月23日	突帯文土器の包含層	⑤
〃105〃	8515	G	〃　小田部２丁目18－８	660m²	〃　10月26日～11月22日	古墳時代後期住居跡１軒，溝状遺構１条奈良時代掘立柱建物１棟，中世土坑	③
〃106〃	8538	E	〃　〃　〃　168	706m²	〃　11月８日～61年２月14日	古墳時代竪穴柱居跡15軒＋α，中世溝３条古墳時代から律令時代の掘立柱建物３棟	
〃107〃	8602	J	〃　有田１丁目31－１外	925m²	61年４月24日～８月１日	古墳時代初頭竪穴住居跡３軒，同後期の竪穴住居跡３軒，古墳時代後期～奈良時代掘立柱建物11棟，柵３列，奈良時代の溝１条，中世の濠３条	本書
〃108〃	8603	J	〃　〃　〃27－１外	787m²	〃　５月８日～６月３日	古墳時代前期竪穴住居跡１，同後期住居跡１，奈良時代の溝１条，掘立柱建物５棟，中世末濠２条，近世以降溝５条	②
〃109〃	8611	J	〃　〃　〃37－８	290m²	〃　５月30日～６月13日	奈良時代ピット群	③
〃110〃	8623	M	〃　〃　３丁目71	231m²	〃　５月28日～６月３日	古墳時代溝１条	
〃111〃	8624	J	〃　〃　１丁目37－３	135m²	〃　７月11日～７月29日	古墳時代中期竪穴住居跡１ 掘立柱建物１，土坑	③
〃112	8644	K	〃　〃　２丁目９－２	264m²	〃　10月21日～11月21日	掘立柱建物３棟（うち２棟－平安時代後半）中世土坑18基	
〃113〃	8646	J	〃　〃　１丁目28－９	166m²	〃　11月５日～11月29日	中世末濠２条	本書
〃114〃	8651	E	〃　小田部５丁目51－２外	1,028m²	〃　11月27日～62年１月26日	弥生時代中期竪穴住居跡１軒，古墳時代竪穴住居跡５軒掘立柱建物７棟，土坑２基	
〃115〃	8655	M	〃　有田３丁目８－53	800m²	62年２月４日～５月22日	弥生時代土壙，井戸，中世末製鉄関連遺構	
〃116〃	8656	J	〃　小田部３丁目189－１内	500m²	〃　２月９日～３月25日	古墳時代前期竪穴住居跡１，同後期竪穴住居跡１，律令期掘立柱建物１	
〃117〃	8657	H	〃　〃　〃　３－14	218m²	〃　３月２日～３月25日	井戸３基，溝１条	③
〃118〃	8639	（下水道）	〃　有田１・２丁目	2,242m²	〃　９月24日～３月31日		
〃119〃	8701	A	〃　南庄３丁目270－１外	203m²	〃　４月17日～５月19日	弥生時代の甕棺基８基，土壙墓，江戸時代土壙墓	
〃120〃	8705	J	〃　有田１丁目38－３外	77m²	〃　５月14日～５月21日	中世土坑３基	本書

遺跡の立地と調査の成果

調査次数	調査番号	地点名	調査地域（地番）	調査面積	調査期間	遺構	文献
〃121〃	8706	E	〃 小田部5丁目154－2	165m²	〃 5月20日～6月13日	弥生時代前期貯蔵穴2基，弥生時代後期甕棺墓1基，柵1条，中世溝2条，掘立柱建物1棟	
〃122〃	8707	G	〃 〃 2丁目11－16	375m²	〃 5月25日～6月26日	古墳時代後期の土坑，律令時代の掘立柱建物7棟	③
〃123〃	0712	（下水道）	〃 有田・小田部	11,000m²	〃 5月20日～63年3月31日		
〃124〃	8713	J	〃 有田1丁目24－4	650m²	〃 6月23日～9月26日	弥生時代～古墳時代の竪穴住居跡7棟，古墳時代～中世の掘立柱建物，奈良時代の溝1条，平安時代の溝1条，井戸2基	
〃125〃	8718	E	〃 小田部5丁目172外	722m²	〃 6月29日～10月7日	弥生時代前期土壙5，古墳時代竪穴住居跡8棟，掘立柱建物2棟	
〃126〃	8724	D	〃 〃 1丁目34－9	111m²	〃 8月4日～8月26日	弥生時代前期～中期甕棺基4基，土壙墓2基	
〃127〃	8729	C	〃 〃 〃 418－1	180m²	〃 9月17日～10月9日	弥生時代後期土坑1，古墳時代住居跡1軒，柵2条	
〃128〃	8730	A	〃 南庄3丁目16	213m²	〃 9月28日～10月26日	弥生時代後期土坑1基，古墳時代後期竪穴住居1棟，柵2条	
〃129〃	8735	F	〃 小田部2丁目38	386m²	〃 10月27日～11月26日	古墳時代以降の土坑2基	
〃130〃	8739	G	〃 〃 〃 185－2	293m²	〃 11月28日～12月26日	中世溝1条，近世以降の土坑1，埋甕1	④
〃131〃	8742	G	〃 〃 〃 131	118m²	〃 12月16日～1月6日	古墳時代後期の竪穴住居跡1棟	本書
〃132〃	8749	I	〃 有田1丁目8－3	200m²	63年1月25日～3月3日	奈良時代平安時代の掘立柱建物1，土壙1	
〃133〃	8750	J	〃 〃 〃 32－4	420m²	〃 1月26日～3月31日	弥生時代前期環濠，中世末濠	本書
〃134〃	8752	D	〃 有田2丁目12－3・4	433m²	〃 3月3日～3月24日	弥生時代前期溝，掘立柱建物	④
〃135〃	8754	K	〃 小田部1丁目361	293m²	〃 3月7日～3月24日		
〃136〃	8803	L	〃 有田2丁目22－31	460m²	〃 4月11日～5月30日	弥生時代中期住居跡1棟，古墳時代前期住居跡2棟，平安時代井戸，中世末濠2条，防空壕1基	
〃137〃	8804	I	〃 有田1丁目8－4	162m²	〃 4月15日～6月6日	弥生時代包含層，古墳時代から中世の掘立柱建物，土，柵列2条	
〃138〃	8811	D	〃 小田部1丁目204	801m²	〃 5月23日～6月29日	弥生時代中期竪穴住居跡1棟，土坑古墳時代竪穴住居跡2棟，掘立柱建物7棟	
〃139〃	8812	（下水道）	〃 有田・小田部地区	2,800m²	〃 4月～平成元年3月		
〃140〃	8815	J	〃 有田1丁目29－10		〃 5月28日～6月16日	中世末溝2条，土坑，井戸1基	
〃141〃	8822	J	〃 〃 〃 33－6	250m²	〃 6月20日～7月18日	古墳時代前期から後期竪穴住居跡6棟，掘立柱建物1棟，土坑	
〃142〃	8836	E	〃 小田部5丁目17－10	790m²	〃 9月12日～11月	古墳時代前期から後期住居跡5棟，溝1条，中世末溝2条，土坑	
〃143〃	8836	E	〃 〃 〃 73・74	562m²	〃 9月12日～11月25日	弥生時代前期から中期円形住居跡2棟，貯蔵穴4基，古墳時代前期～後期住居跡9棟，掘立柱建物1棟，溝1条，土坑1基，中世溝3条，土坑	
〃144〃	8844	J	〃 有田1丁目25－4	429m²	〃 12月8日～64年1月	律令時代1条，土坑	
〃145〃	8851	G	〃 小田部2丁目90	682m²	平成 元年1月19日～3月13日	弥生時代前期から中期後半住居跡2棟，弥生時代から古墳時代の掘立柱建物2棟	
〃146〃	8853	J	〃 有田1丁目32－6	237m²	〃 1月24日～2月3日	古墳時代後期から古代の柵1条	本書
〃147〃	8854		〃 〃 2丁目7－7	739.60m²	〃 1月24日～3月13日	古墳時代後期から古代の建物2棟，中世溝2条	
〃148〃	8861	I	〃 〃 1丁目18－4	441m²	〃 2月22日～3月13日	中世濠1条と溝，土坑	
〃149〃	8905	I	〃 有田1丁目21－3	145m²	〃 4月13日～5月1日	古墳時代初頭住居跡1棟，中世末土坑3基	本書
〃150〃	8912	J	〃 小田部3丁目168	1,087m²	〃 5月10日～7月7日	弥生時代住居跡1棟，貯蔵穴6基，古墳時代住居跡6棟，溝2条，掘立柱建物4棟，近世溝1条	
〃151〃	8919	D	〃 小田部1丁目203・207	70m²	〃 6月2日～6月9日	溝1条	
〃152〃	8953	E	〃 小田部5丁目48・49	770m²	〃 10月26日～11月21日	弥生時代円形住居跡1棟，古墳時代住居跡3棟，掘立柱建物3棟，焼土坑1基	
〃153〃	8960	E	〃 小田部5丁目70・71	263m²	〃 11月15日～11月30日	古墳時代住居跡1棟，古墳時代溝1条，中世末溝1条	
〃154〃	8961	J	〃 有田1丁目24－2		〃 12月6日～平成2年1月	古墳時代住居跡1棟，掘立柱建物4棟	
〃155〃		（下水道）	〃 有田2丁目地内				
〃156〃		I	〃 有田1丁目12－2				

①「有田・小田部第7集」1986
②「有田・小田部第8集」1987
③「有田・小田部第9集」1988
④「有田・小田部第10集」1989
⑤ 昭和60年に九州大学が調査を行なった

第３章　調査の記録

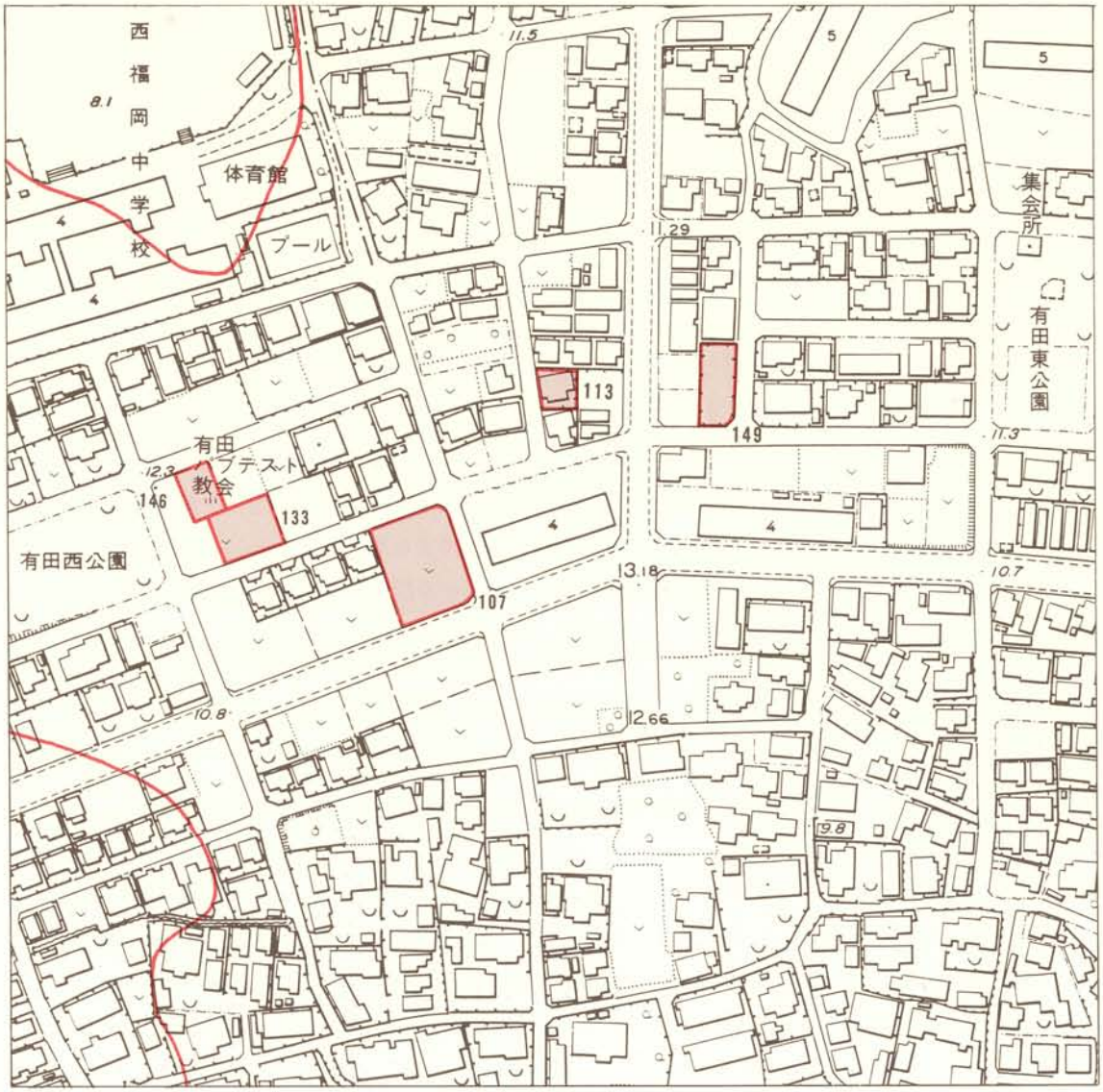


Fig. 4　各調査地点位置図（1/2500）

1. 第107次調査（調査番号8602）

1）調査地区の地形と概要

申請地は早良区有田１丁目31－１・31－２に所在し，開発申請面積は925m²である。

申請地は有田地区台地の最高所に立地し，標高は約13mを測り，調査前は畑地であった。申請地に倉庫建設の計画が申請され，事前調査を行ない遺構が検出された事から発掘調査を行なった。調査期間は昭和61年４月24日～８月１日迄で，調査実施面積は914m²である。

調査区周辺は有田地区で最も調査が多く行なわれており，かつ最も各時代の遺構が検出されている地域である。周辺では50ケ所近い地区が調査されており，旧石器時代の包含層をはじめとし，弥生時代初頭頃の環溝，古墳時代全時期に亘る住居跡群，古墳時代末から奈良時代頃にかかる大型建物群，中世末頃の曲輪状遺構などが検出されている。

調査区の遺構面は橙色の鳥栖ロームで，表土下15～30cmで検出した。包含層は認められなかった。検出した主な遺構は古墳時代住居跡５棟，土坑20基，掘立柱建物17棟，柵５列，溝状遺構６条などである。特に古墳時代末から律令期にかけての建物群は複雑に重なっていた。

出土遺物は古墳時代住居跡，溝を中心にコンテナ56箱出土した。特に古墳時代のSC01からは前期の土師器が一括して出土した。主な遺物としては弥生式土器・石器（石斧・石鏃など），古墳時代土師器・須恵器，鉄製品・玉類・奈良時代須恵器，中世の土師質土器・瓦質土器・中国産輸入陶磁器・鉄製鋤先などである。また蛸壺などの漁撈具もある。また出土遺物の中に旧石器時代の遺物が含まれていたので，調査の最後にトレンチを設定し，調査を行なった。

2）遺構と遺物

住居跡（SC）

５棟検出した。内訳は古墳時代前期が３棟，他の２棟は後期である。

SC01（Fig. 6，PL 3・4）

調査区南側で検出した。南側は道路，北側はSD01によって破壊され，更にSA03・SB10や後世のピットに切られている。長軸方向を東西に取り，長辺6.0m，短辺が4.56m，床面積が推定で27.36m²を測る長方形の住居跡である。住居跡の残りは悪く，床面迄の深さは最大15cmを測る。長軸側の東西側には左右非対称のＬ字形のベッド状遺構がある。ベッド状遺構は床面より14cm位高く，幅は0.8～1.1mで，地山を削り出して作っている。周壁下には幅10cm前後，深さ２～６cm位の溝が巡るが，ベッド状遺構の部分には一部しか巡らない。床面はベッドに囲まれた区域であるが，その南壁中央には長径0.86m，短径0.65m，深さ30cmの楕円形の屋内土坑（SK44）

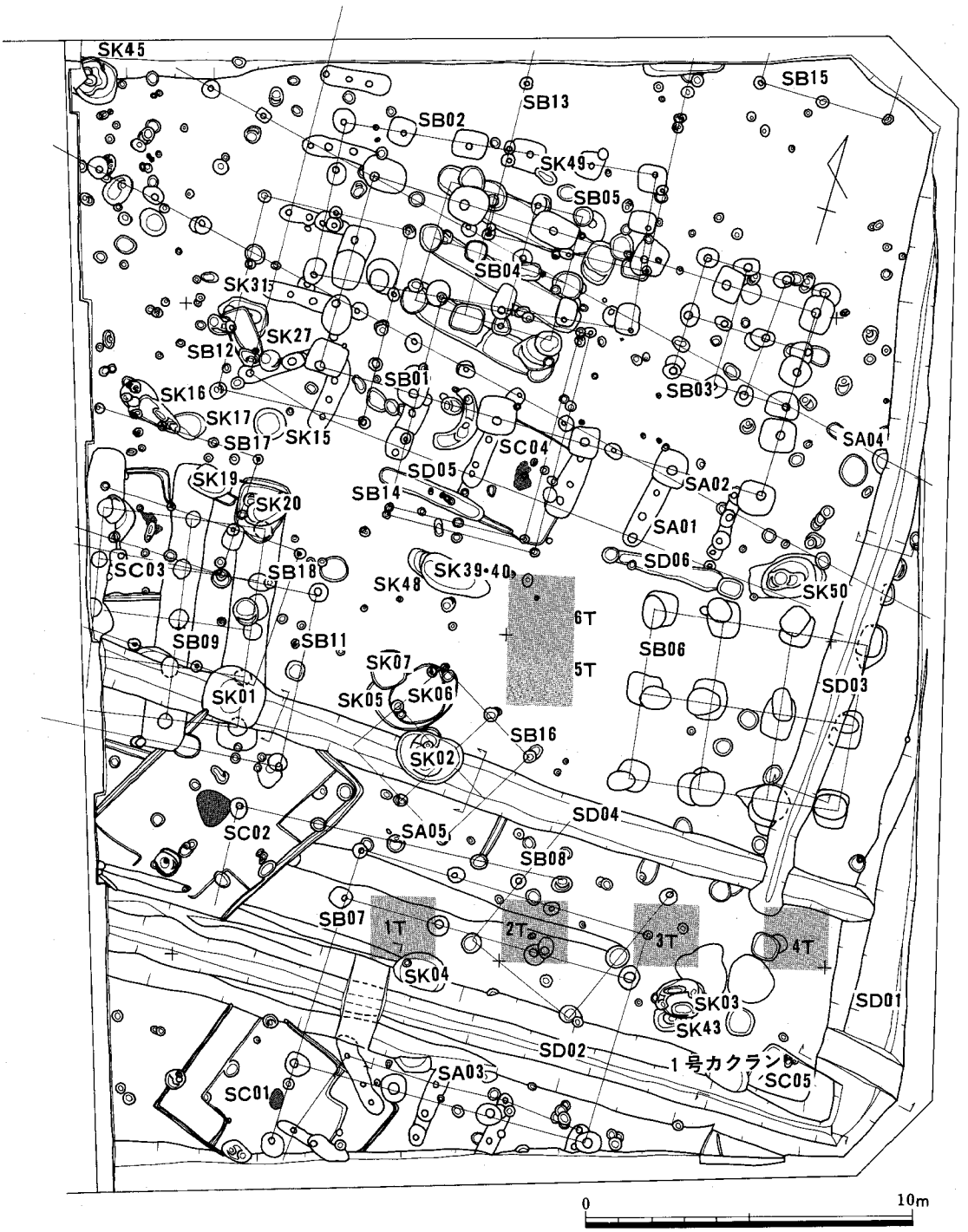


Fig. 5 第107次調査遺構配置図（1/200）

があった。底面の両側はピット状に深くなっていた。住居跡の床面は貼床ではないが，永年の使用により汚れていた。住居跡の主柱は炉を挟んだ2個の柱穴Ｐ１，Ｐ２である。いずれもベッド状遺構に接した位置にある。Ｐ１は直径53cm，深さ20cmを測り，南北両壁からほぼ中央にあるが，SA03床面下より検出されたＰ２はやや右に寄っている。しかし，他に該当する柱穴が見当らないので，一番可能性が強いと考える。2柱間の距離は3.35mを測る。炉は長径0.58m，短径0.46mの楕円形で，浅く窪み，内には炭化物。焼土が充満していた。

出土遺物（Fig. 7～11，PL17～19） 出土量は多く，土師器の甕・壺・高坏・器台・支脚・鉢などすべての器種があり，他に小量ではあるが弥生式土器，須恵器，黒曜石剝片などが混入していた。図化しえたものは50点であるが，主要な遺物45点について図示する。砥石3点を除いて土師器である。

1～14は甕形土器である。1～13迄は中型の甕であるが，1～4は比較的小さく，11～13は大きい。口縁部が直に開くものＡ類，外湾気味に開くものＢ類に分ける事が出来る。Ａ類は1・2・4・9・10，Ｂ類は3・5～8・11・12である。Ａ類の中でも口端部内面を少しつまみあげるもの1・4などがある。外面の調整はハケ目で，器壁は全般に薄い。13・14は小型甕で，あまり張りの強くない胴部からく字状に外反する口縁部を持つ。口縁部の外傾具合は13の方が強い。13の外面下半には叩き痕が残り，上面はハケ調整である。

15～22は壺形土器である。15～17は小型壺の口縁部片で，15は小型丸底壺で外へ開く長い口縁部を持ち，頸部はしまる。炉内出土16は内湾気味に外へ開く。器形，17は16よりは口縁部の開きが小さい。18は二重口縁壺の口縁部片である。19・21・22はく字状に外反する口縁部を持つ。22は口縁部がやや肥厚し，胴部外面上半は叩きを加える。20の口縁部は内傾し，胴部の膨みは弱い。

23～34迄は高坏である。23の坏部は口径の割には坏部が深く，口縁部と底部の境には明瞭な段がつく。脚部は比較的短い。24は脚筒部片で23と同形のものと思われる。25は口縁部片で内湾気味に大きく開く器形である。26は坏部が深く，底は尖る。口縁部は内湾気味に開くが，底部との境はあまり明瞭でない。脚部は裾部が筒部より外折し大きく開く器形で，器壁は全体に薄い。27～30も26と同様の器形と思われるが，27は口縁部が真直ぐ外へ開く。29は26より坏部が深くない。30は脚部が26より高く，直径5㎜の円形透し孔を3ケ所有す。31は坏部の底は丸く，脚部には，直径7㎜の円形透し孔3ケ所が入る。32は坏部の底は深くなり，23に近い形態，33は29に近い口縁の形態。34は脚部片で内面はヘラ削り痕が残る。

35はいわゆる沓形の支脚である。上面の一部は口嘴状に突出し，そこに直径5㎜の円形の孔があけられている。36～37は器台である。外来系の36は鼓形器台片である。37・38は筒部の上方で強くしまり，受部は水平に近い角度で開く。39～42は鉢型土器である。39は短く八字状に開く。脚台部で円形透し孔が入る。40～41は椀に近い器形で，40はやや平底気味である。いず

れも口縁部は直立し鋭くおさまる。42は大型の深鉢で，口縁部は直立し，その端部は平坦におさめる。43は断面が方柱状形をなす砥石で，石質は目の細かい粘板岩である。上下左右４面が砥面である。

45は長方形の砥石で砂岩質の砥石，上下左右を砥面として使用。44はＰ１の横にあり，扁平

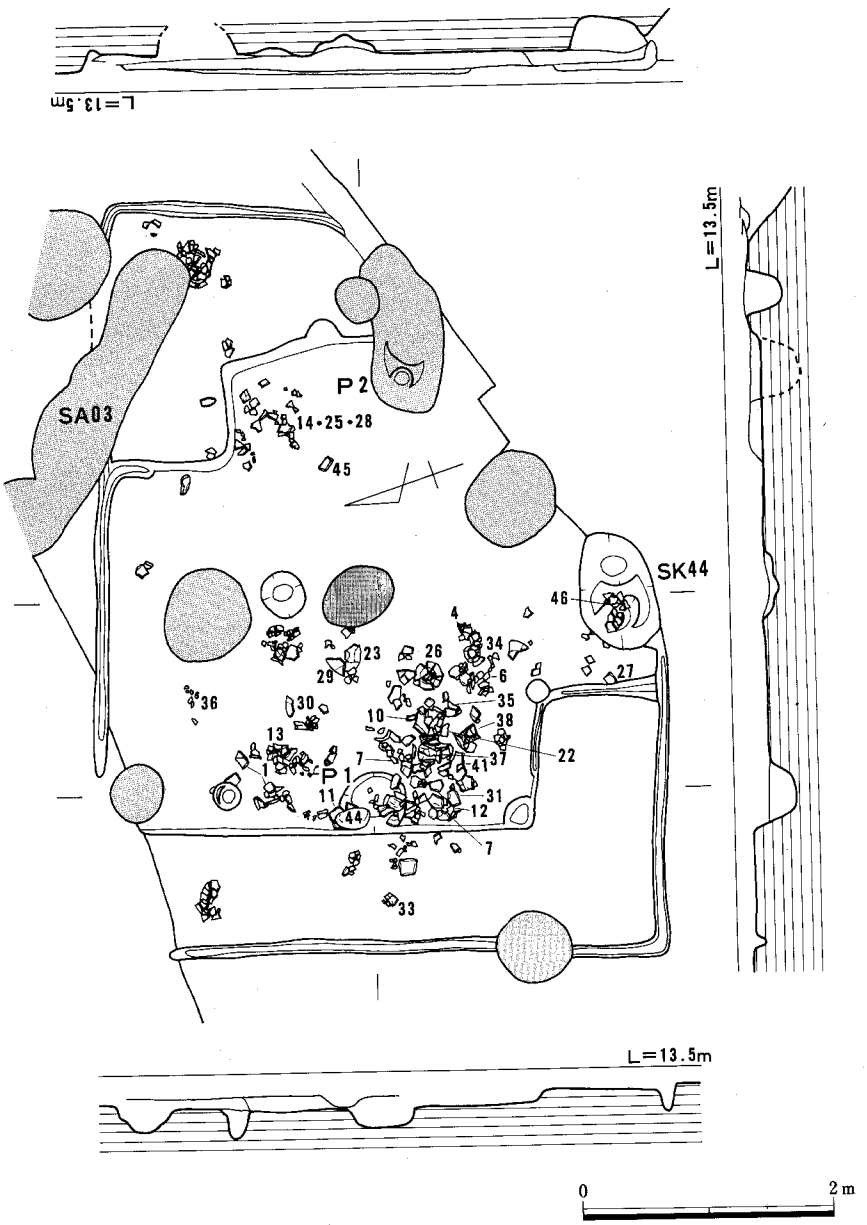


Fig. 6 SC01 (1/60)

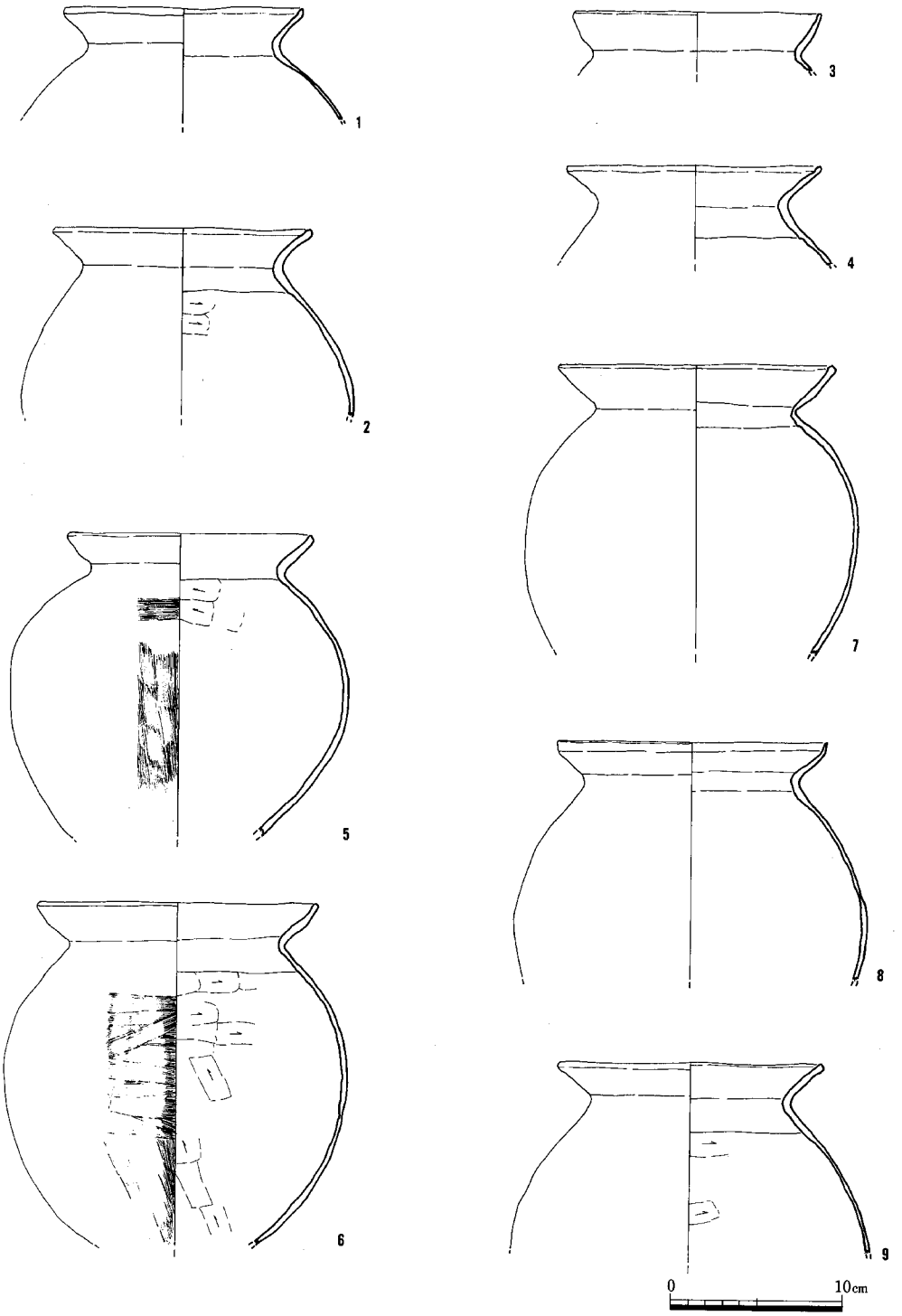


Fig. 7 SC01出土遺物Ⅰ (1/4)

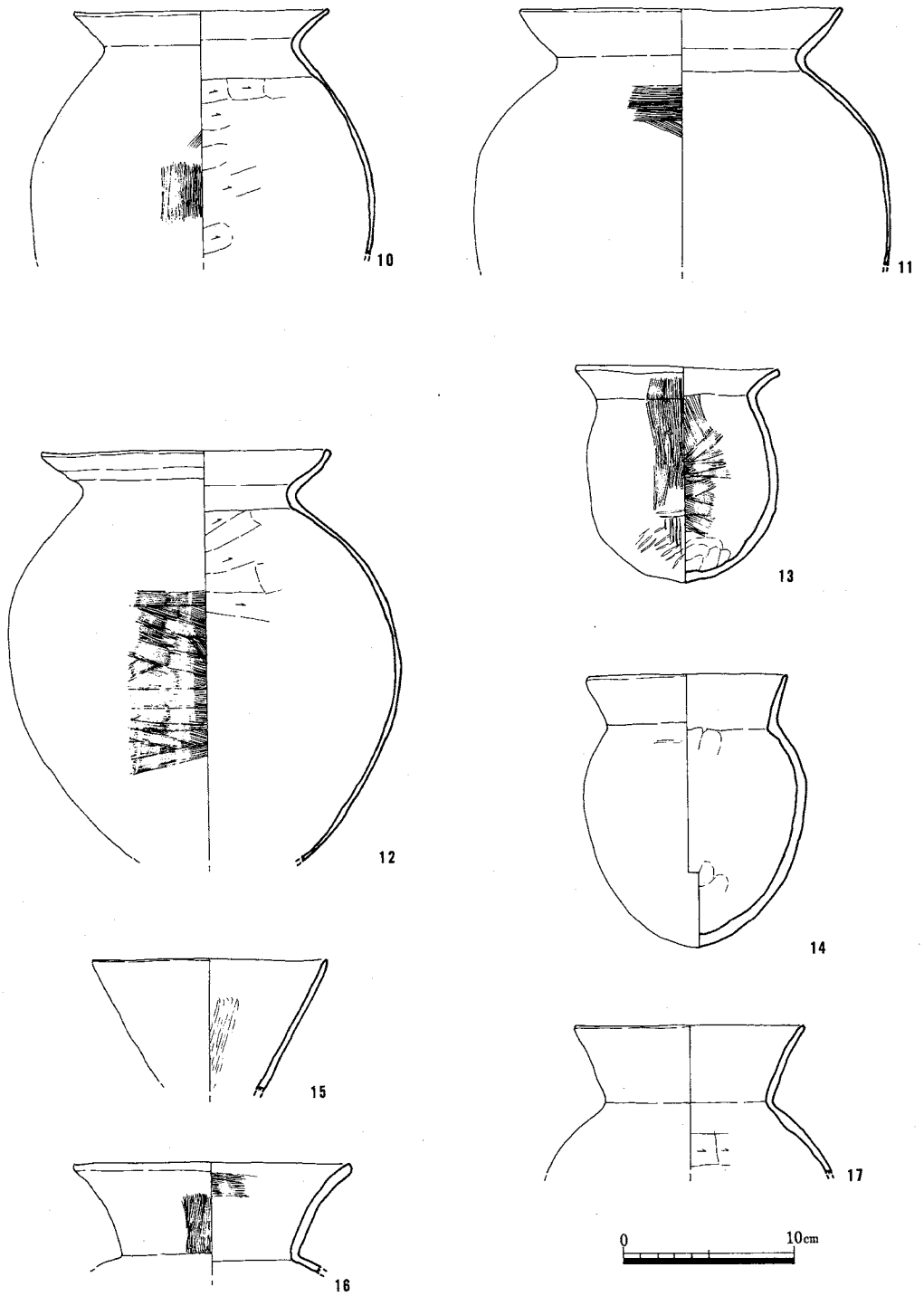


Fig. 8 SC01出土遺物II (1/4)

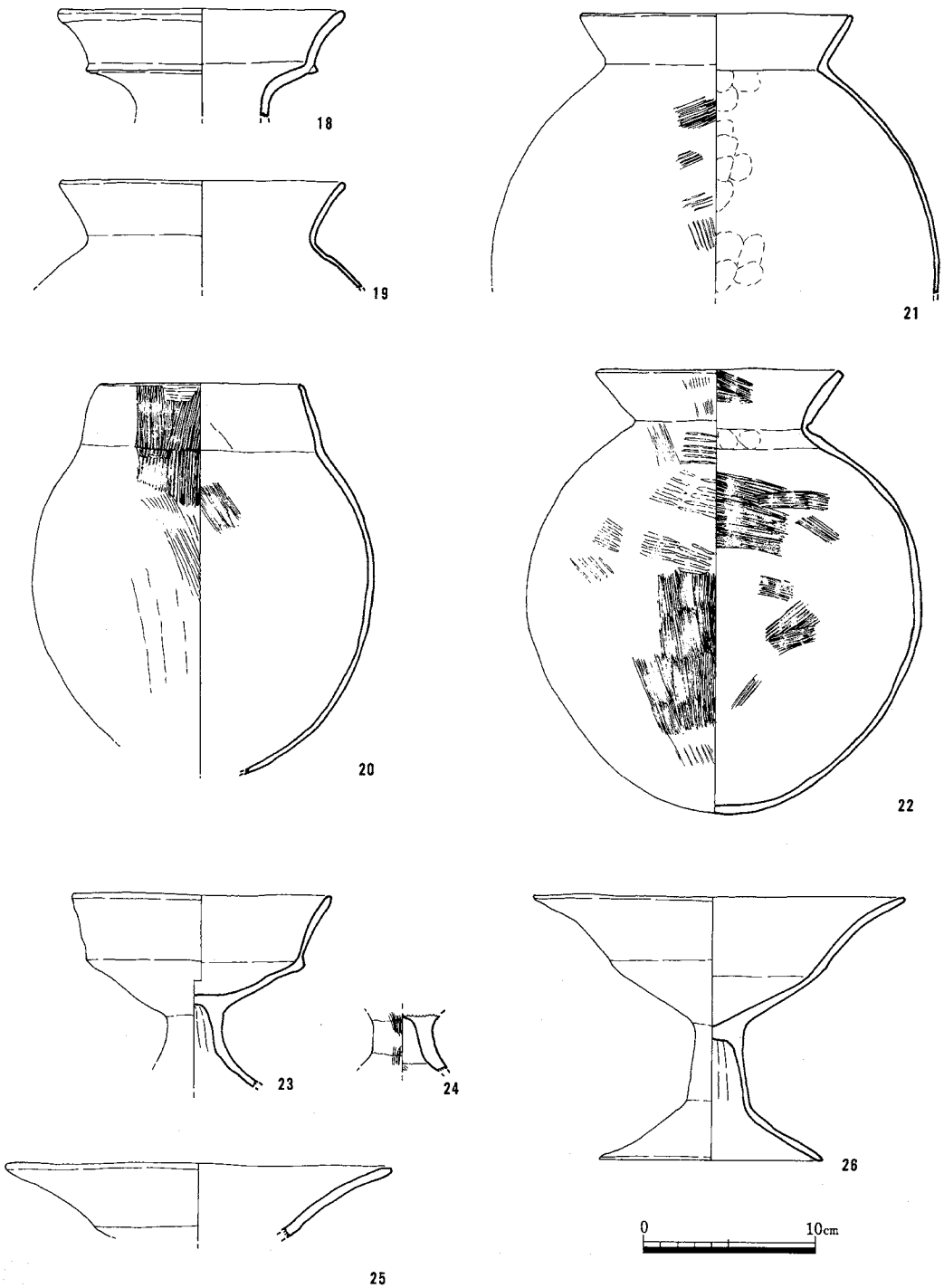


Fig. 9 SC01出土遺物III (1/4)

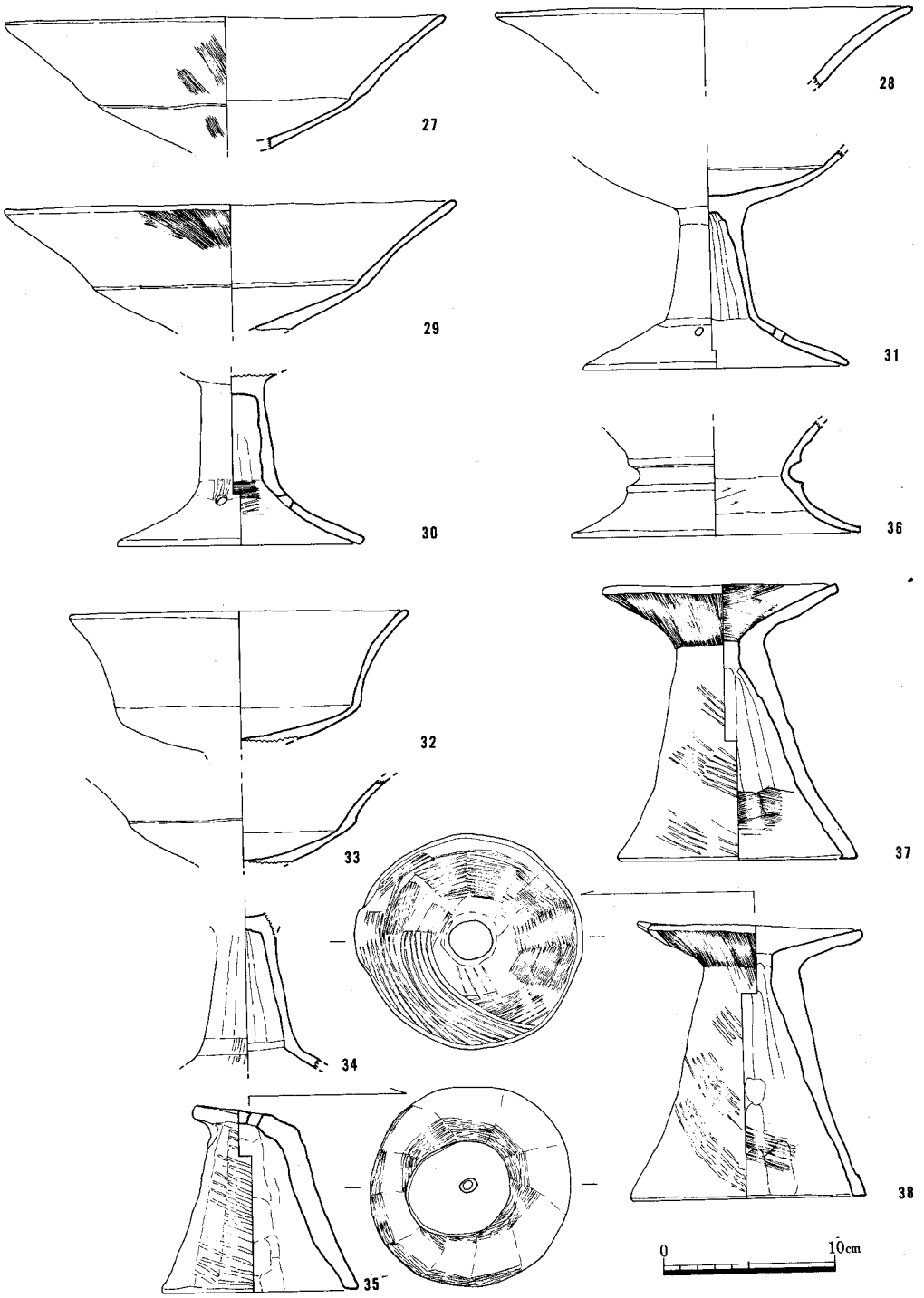


Fig. 10 SC01出土遺物Ⅳ (1/4)

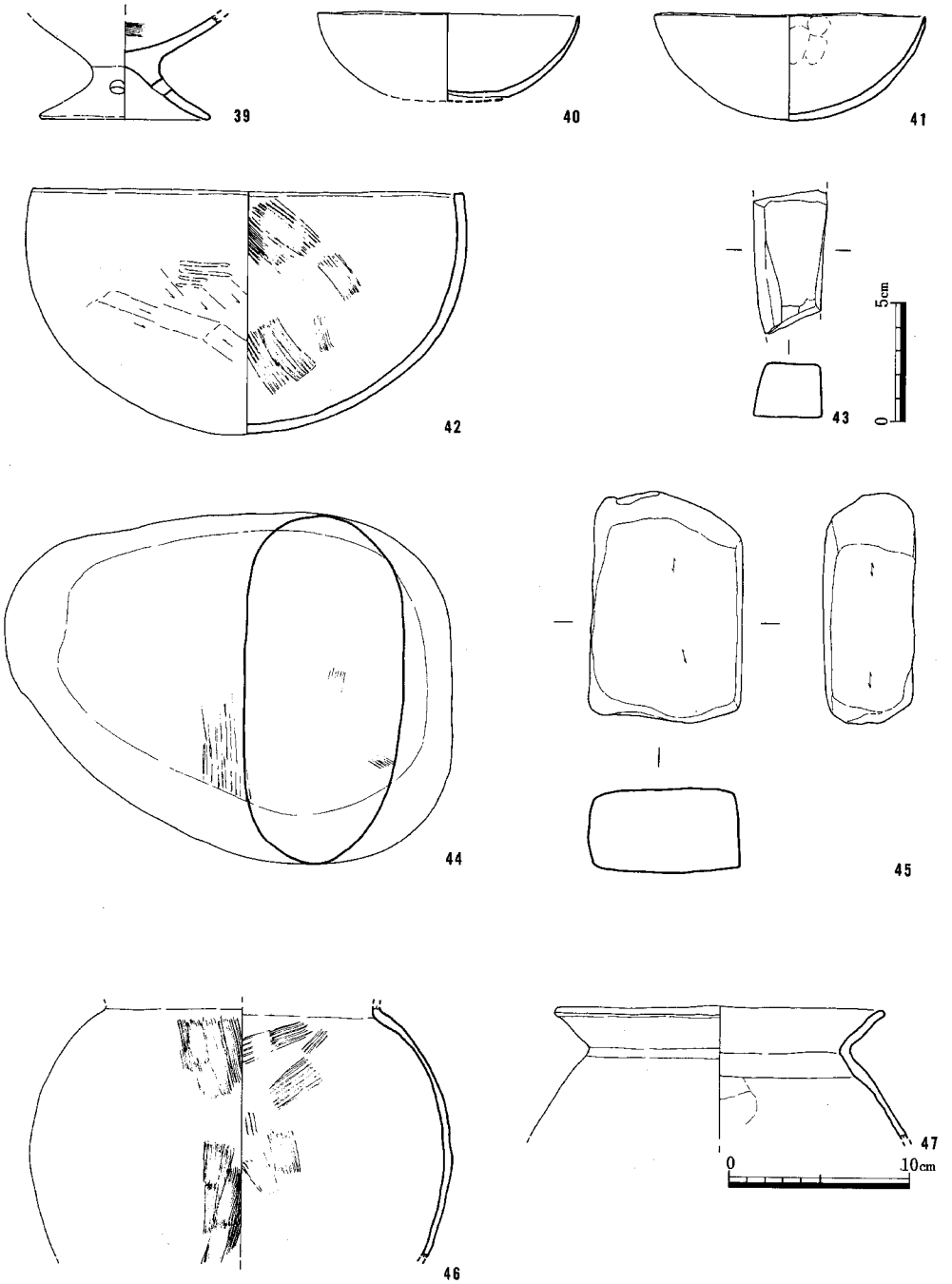


Fig. 11 SC01出土遺物VI(1/4・1/3)

な楕円形の石である。全体に磨滅し擦痕が残る。重量は6kg。46・47はいずれも土師器の甕形土器で，46は胴部片，47は口縁部片である。口縁部はく字状に外折する。図示していないが，他に柱状片刃石斧の小片がある。

SC02（Fig. 12，PL 4）

調査区東側で，SD01と04に両端を破壊されている長方形の大型住居跡である。規模は長辺7.73m，短辺5.30mを測り，床面積は41m²と推定出来る。しかし区画整理時の削平によるものか遺存状況は悪く，残存壁高は最大で20cmと浅い。住居跡の周壁下には幅15～20cm，深さ10cm内外の溝が巡る。ベッド状遺構は南壁側から東壁に曲るL字状のベッドとその北の屋内土坑を挟んで東壁沿に幅0.9m，長さ2.4mの長方形状のベッドが2ケ所あった。なお北側のベッド状遺構は一部地山ロームブロックを用いて作りつけられていた。ベッド状遺構の配置は不規則的である，ベッド状遺構に沿う壁溝は認められなかった。

主柱穴はベッド状遺構に囲まれた床面内にあり，P1，P2が主柱となる。2つは中央炉を挟んで向いあっており，柱穴の規模はP1が直径1m，短径0.7m，深さ80cm，P2が長径0.75m，短径0.55m，深さ75cmで，平面形は不定形である。柱径はP2底の痕跡から15cm位と推定される。また床面は中央がすこし下がっている。炉は1辺1.1m前後の隅丸三角形状を呈し，深さ10cm位浅く窪んでおり，その内に焼土がつまっていた。屋内土坑については東壁中央の長径0.6m，短径0.35m，深さ20cmの楕円形の小土坑(SK29)のみである。この部分が入口と考えられる。

出土遺物(Fig. 13，PL19)　埋土中から土師器を中心に弥生式土器，須恵器，黒曜石製石鏃，水晶などが出土した。しかし細片が多く，図化出来たものは少ない。

48～60は土師器である。48は甕形土器でく字状にやや外湾気味に外傾する口縁部を持つ。器壁は比較的薄い。この土器はSC01床面のものと接合した。49～52は鉢型土器で，49・50は皿状で底が浅い。51・52は前述の2点に比べて底は深い。53・54は蛸壺片で飯蛸用であろう。51は周溝内出土である。55は平底の鉢の底部片と思われる。56～60は高坏の脚部片である。56・57は筒部から脚裾部が緩やかに大きく開く器形で，円形透孔が3ケ所入る。58・59は脚筒部片であるが，59は坏部との接合面に10ケ所の窪みがつけられていた。60は脚裾部片で56とほぼ同様の器形であろう。61は水晶で，断面は6角形を呈す。埋土中層から出土。62・63は黒曜石石鏃で62はベッド上，63は埋土上層出土である。他に図示していないが，磨石，今山型石斧の破片などがある。

SC03（Fig. 14，PL 5）

調査区中央西側境界地にかかる住居跡で，SB09に東壁の一部と西側を破壊されている。平面形態は方形と呈すと思われるが，全様はわからない。確認長は4.12mを測る。遺存状況は悪く，残存壁高は4cmである。周壁下には幅15～22cm，深さ最大10cmの小溝が巡る。床面にはP1，

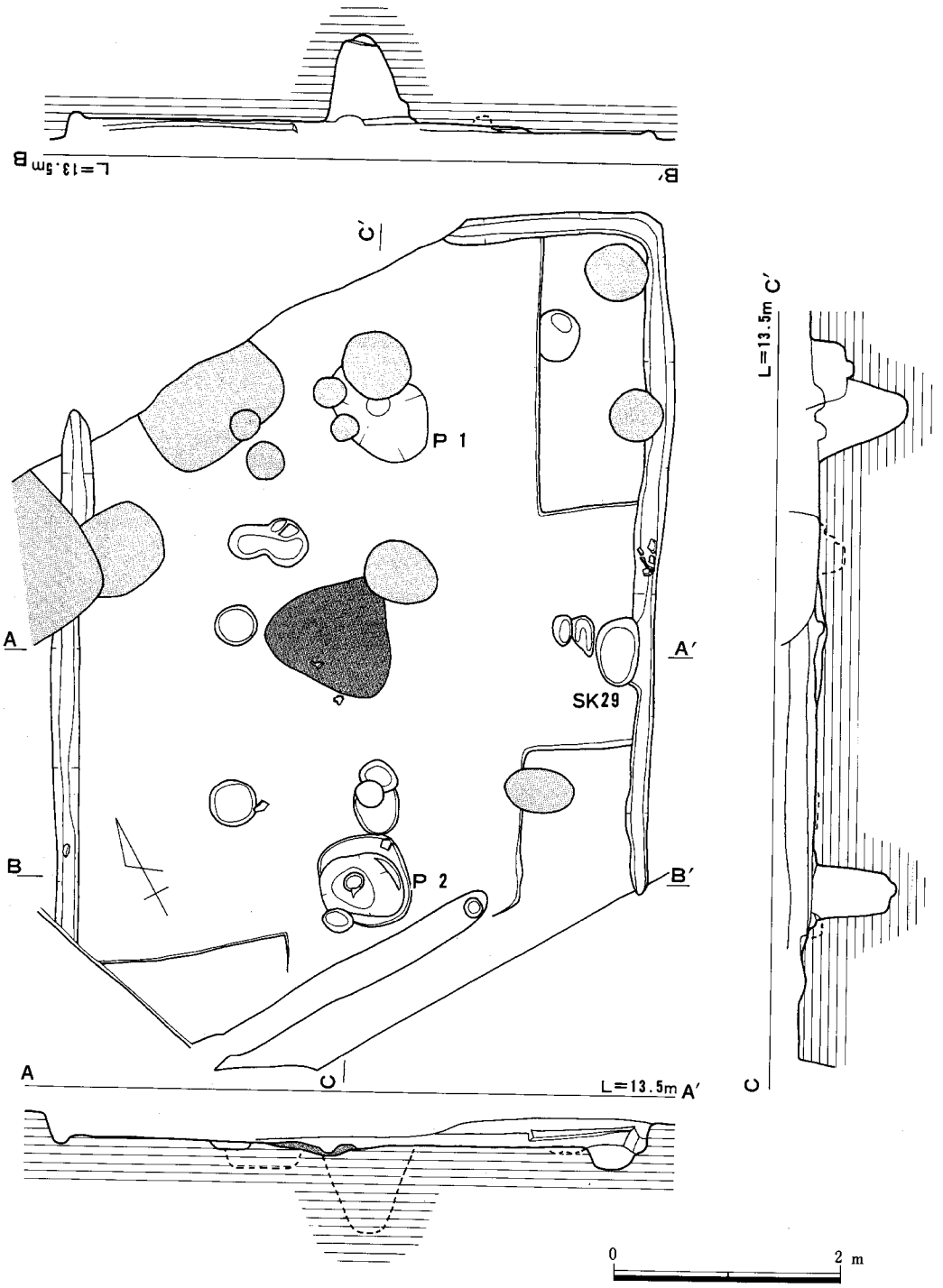


Fig. 12 SC02 (1/60)

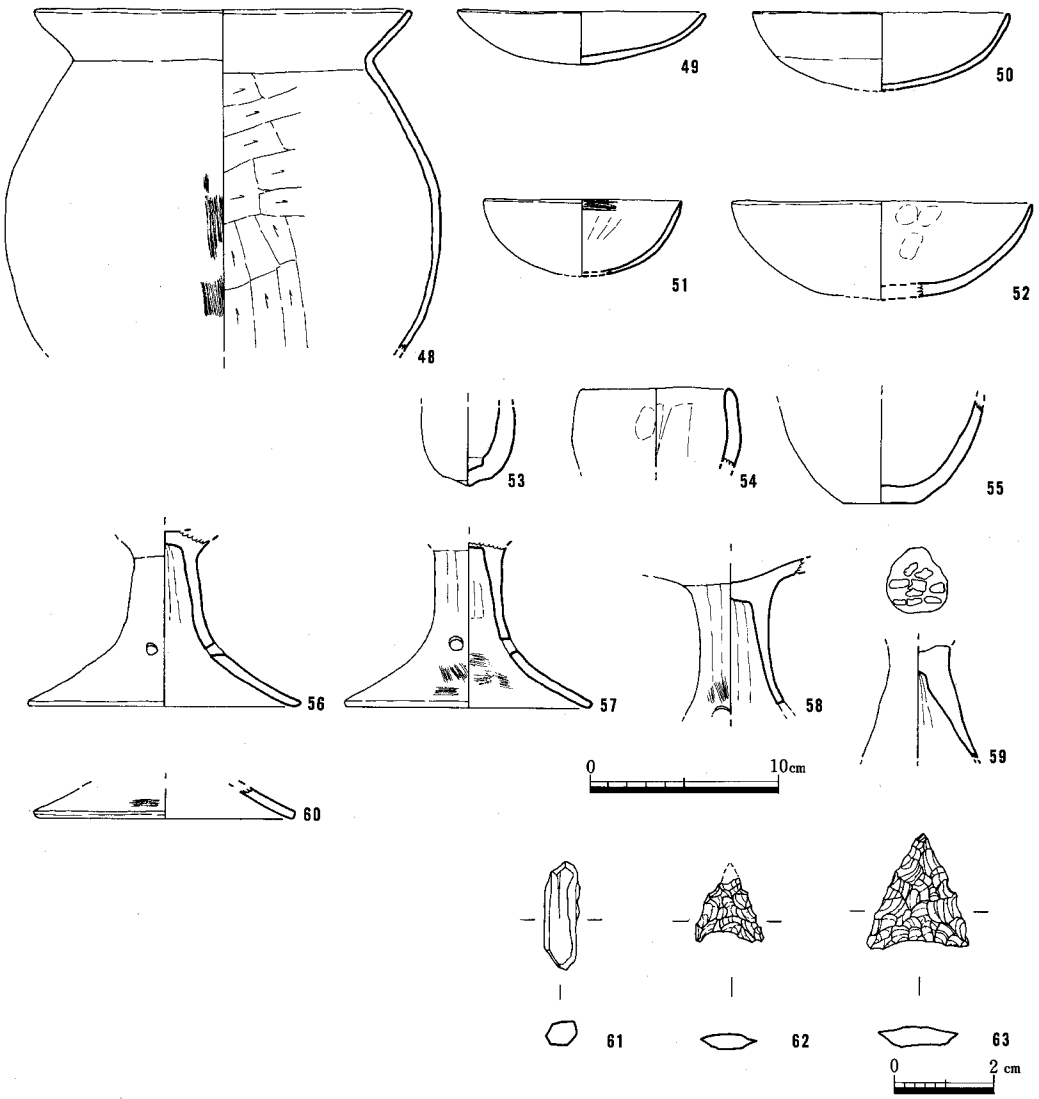


Fig. 13 SC02出土遺物 (1/4・2/3)

P 2があるが，いずれも直径が20cmと小さく，また企画性もなく，主柱とは考えにくい。東壁中央沿には長辺35cm，短辺25cmの焼土面があり，その西側には炭化物が散布していた。またその下には長さ75cm，幅25cmの長楕円形状のピットがあった。

出土遺物 (Fig. 15)　出土量は少ない。弥生式土器片，土師器片，須恵器の甕片，中世の土師皿片などの細片が出土した。図示出来るものを掲げる。

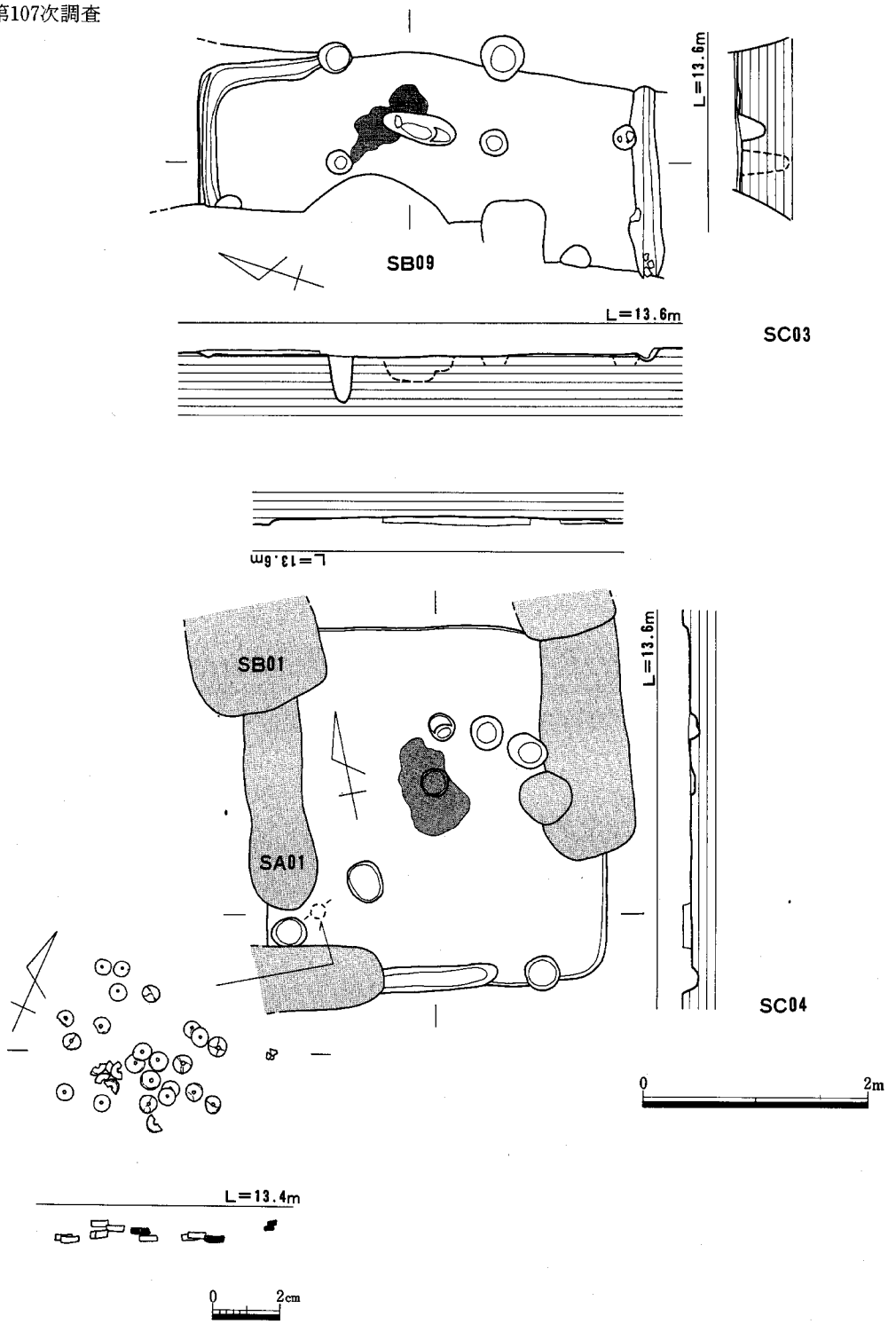


Fig. 14 SC03・04, SC04玉出土状況 (1/60・1/2)

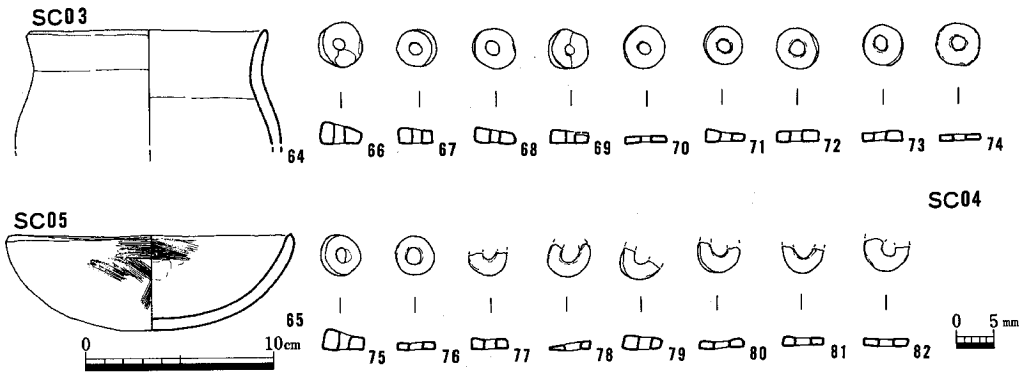


Fig. 15 SC03～05出土遺物（1/4・1/1）

64は土師器の小型甕の口縁部片である。しまりのない頸部から，やや外傾気味の口縁がつく。

SC04（Fig. 14, PL 5）

調査区中央で検出した，平面形態が略方形を呈す住居跡でSB01・SA01・SD06に切られている。規模は長辺3.25m，短辺3.03mを測る。遺存状況は悪く，壁高は最大で5cmしか残っていない。床面にはピットが4個あったが，柱穴と確定出来るほどしっかりしていない。床面中央には長さ0.9m，最大幅0.55mの不定形の焼土面があり，その下にP 3があった。住居跡の南西コーナー部の床には滑石製の臼玉が22個以上かたまって出土した。他に破片も多く実数は26個以上と思われる。

出土遺物(Fig. 15, PL20)　玉類のほか弥生式土器，土師器，須恵器片が出土したが，量は少なく図化出来たものはない。

66～82は滑石製の臼玉で，直径は0.5～0.6cm，厚さ1～3mmである。

SC05（Fig. 16, PL 5）

調査区南東隅で検出した住居跡で，東側・南側を道路やSD01・02に破壊されているため，全体の形状は不明である。確認した規模は長辺4.1m，幅は2m，壁高は最大で20cmを測る。床面には炭化物が厚く堆積しており，本来は焼失家屋であった可能性が強い。床面には主柱らしき柱穴は認められなかった。北西コーナー部では西壁から内側40cm位の幅で高いテラス部があり，ベッド状遺構の存在を窺わせる。

出土遺物(Fig. 15, PL20)　土師器の鉢，甕，須恵器片，炭化物などが少量出土した。須恵器は細片が1点である。

65は土師器の鉢型土器で，浅い丸底で口端部は丸くおさめている。

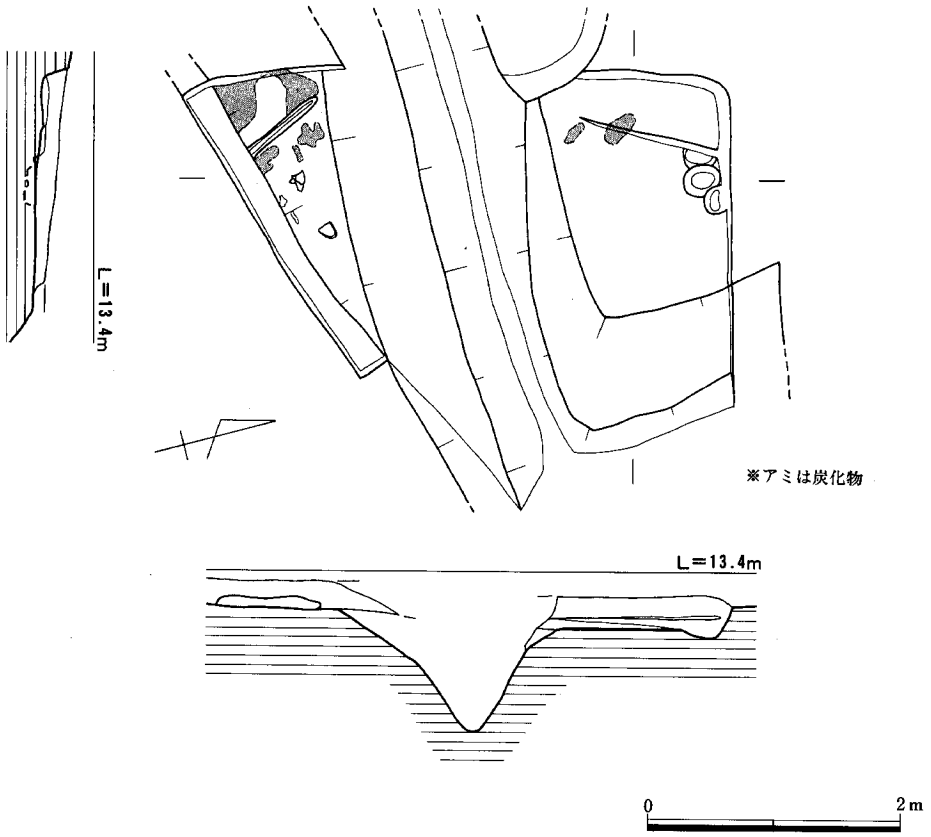


Fig. 16 SC05 (1/60)

Tab. 2 住居跡一覧表 ( ) は現存値

住居跡番号	平面形態	規模 cm 長辺	短辺	深さ	床面積 m²	長軸方位	ベッド状遺構の有無	時期	主柱数	備考
SC01	長方形	600	456	15	27.36	N−71°30′−W	両短辺L字形ベッド	前期	2	SA03・SD02に切られる
02	長方形	773	530	20	40.97	N−29°−E	南壁から東壁側に有り	前期	2	SB09・SD04に切られる
03	方形	412		4		不明	無し	後期	不明	カマド付き？ SB09に切られる
04	方形	325	303	5	9.85	N−10°30′−E	無し	後期	不明	SA01に切られる
05	長方形？	(410)	(200)	20		N−14°−E	有？	前期	不明	SD01・02に切られる

土坑（SK）

全部で20基検出した。当初土坑番号を付したものの，その後遺構の性格から土坑番号をはずしたものが多く，欠番がある。土坑の規模等については一覧表にまとめた。

SK01（Fig. 18, PL 5）

SD04・SB09を切り，平面形態が不整楕円形を呈す土坑である。土坑断面は逆梯形を呈し，床面は中央が深くなる。埋土は上下2層に分かれる。上層は暗褐色粘質土。下層はそれに地山ロームブロックを混入する。

出土遺物（Fig. 19, PL20）　弥生式土器，土師器の甕・皿，須恵器，炭化物などが出土したが，量が少なく，大半が細片で，図示出来たものは少ない。

83は土師器の牛角状の把手で，外面は指おさえ仕上。遺構の時期よりは古い。84は凹石片で，中央は使用により凹む。

SK02（Fig. 20, PL 5）

SD04・SK06を切り，平面形態が不整楕円形を呈す土坑で，平面規模の割には底は浅い。底面は2段掘りで，長径0.84m，深さ10cmの範囲で円形状で一段低くなる。その北壁沿中央にはピットの痕跡があった。埋土は3層に分かれるが，暗褐色粘質土と地山ロームブロックを主体としている。

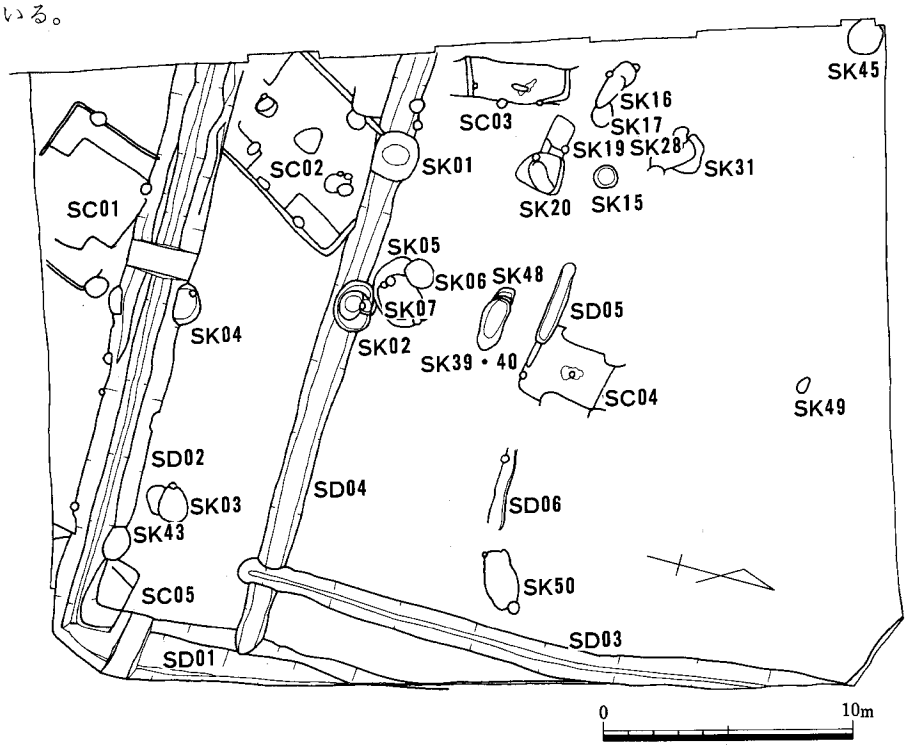
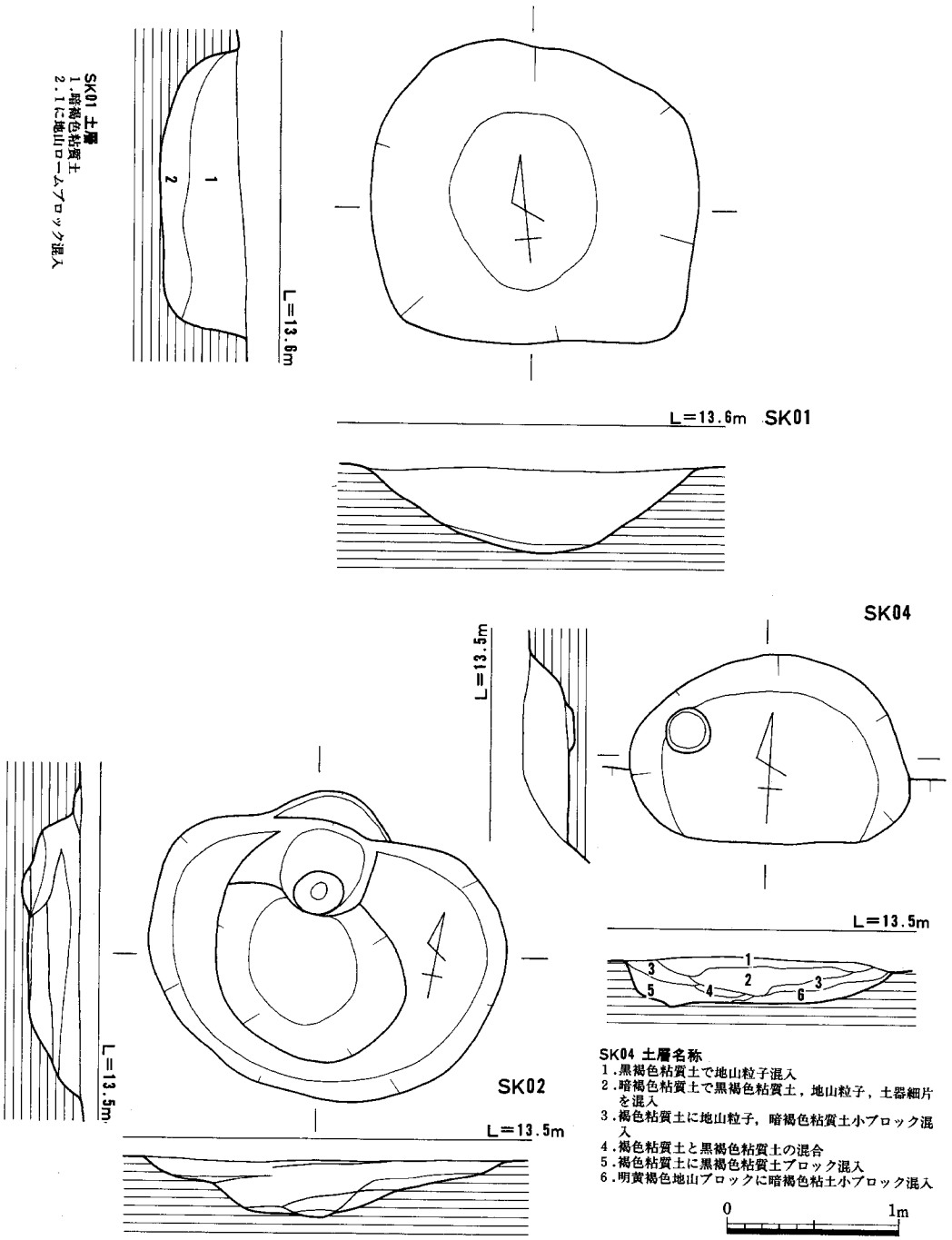


Fig. 17　住居跡・土坑・溝配置図（1/300）


SK01 土層
1.暗褐色粘質土
2.1に地山ロームブロック混入
1
2
L=13.6m
L=13.6m SK01
SK04
L=13.5m
L=13.5m
1
2
3
4
5
6
SK02
L=13.5m
L=13.5m
SK04 土層名称
1.黒褐色粘質土で地山粒子混入
2.暗褐色粘質土で黒褐色粘質土，地山粒子，土器細片を混入
3.褐色粘質土に地山粒子，暗褐色粘質土小ブロック混入
4.褐色粘質土と黒褐色粘質土の混合
5.褐色粘質土に黒褐色粘質土ブロック混入
6.明黄褐色地山ブロックに暗褐色粘土小ブロック混入
0
1m

出土遺物は土師器の高坏，土師質土器の鍋，須恵器の甕などの細片が24点出土した。大半が細片で図示出来ない。

SK03（Fig. 18，PL 7）

SK43を切る平面形態が不整楕円形を呈す土坑である。土坑の北側から西・南側にかけてコ字状に一段落ち込む。埋土は3層に分けることが出来るが，黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物（Fig. 19，PL20）　出土量はやや多い。土師器の甕・坏・皿，須恵器の坏，鉄滓2，石鏃1などがある。

85は須恵器の坏底部片で，底部には外に短く開く高台がつく。86は土師器の大皿である。底部には外側に開く細くて長い高台がつく。器壁はあれている。87は黒曜石製の石鏃である。

SK04（Fig. 18，PL 6）

SD02に切られる土坑で，本来平面形態は不整円形と思われる。床面は中央が深くなり，断面形は浅い皿状を呈す。埋土は上層が黒褐色粘質土，下層の方が褐色粘質土が主体となる。床面北西側に直径25cmの浅いピット状の落込みがあった。

出土遺物は弥生式土器，土師器皿などの細片21点が出土したが，図示出来るものはない。

SK05～07（Fig. 20，PL 6）

SB16を切り，SK02に切られる土坑で，それぞれ重複し，規模は最大で長さ2.66m，幅2.33mを測り，平面形態は不定形である。SK05～07は埋土の微妙な違いで区別したが，床面のレベルの高低差，埋土の違いなどに余り差はなく，同一遺構と見做した方がよいかもしれない。遺存状況は悪く，最大で10cmの深さである。埋土は黒褐色粘質土を主体とし，地山ロームブロック，炭化物などを混入していた。

出土遺物（Fig. 21，PL20）　床面を中心に弥生式土器，土師器，須恵器，鉄製品，石庖丁，

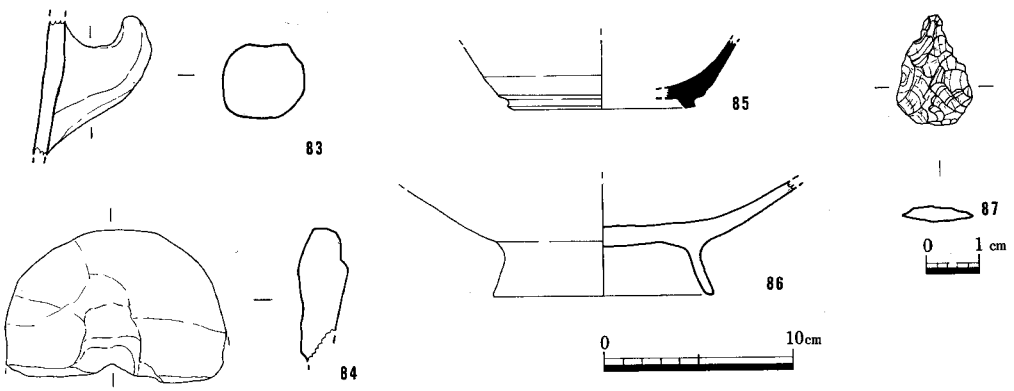


Fig. 19　SK01～03出土遺物（1/4・2/3）

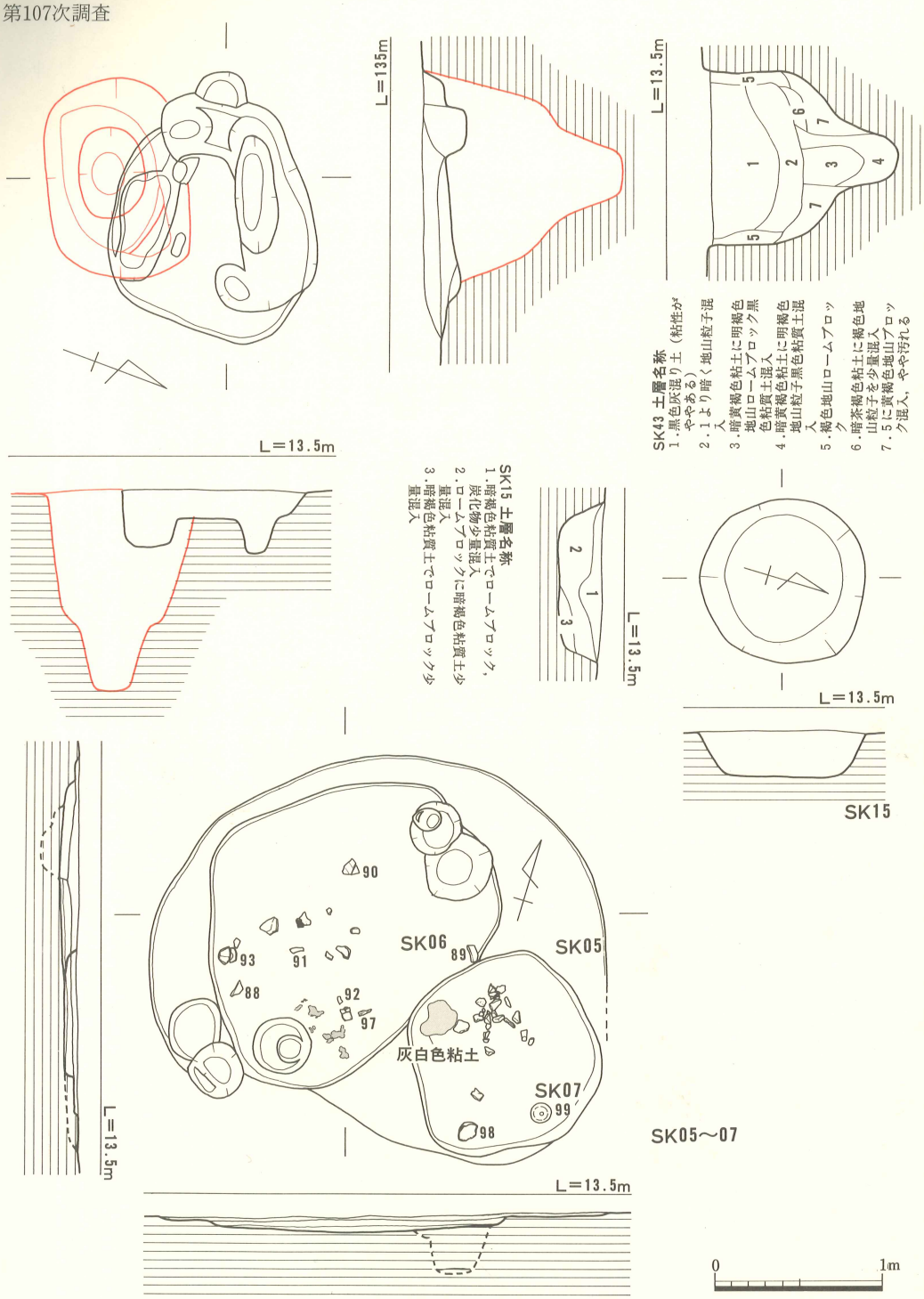


Fig. 20 SK03・05～07・15・43 (1/40)

滑石製臼玉などがあるが，大半が細片で，図示出来たものは少ない。SK05～07まとめて報告する。

88～97はSK06出土である。88～93は土師器，88・89は甕の口縁部片で，頸部から口縁部が丸味を持って外反する器形である。口縁部が88が丸味を持ち，89は口端部に浅い凹線が入る。90は高坏の底部片で，底部と胴部の境にかるい段がつき，口縁部は少し外反する。91は皿状の器形で，手捏ね土器である。92は深鉢型の器形で，丸味を持った胴部からく字状に短く外反する口縁部を持つ。全体に器壁は薄い。93は平底の鉢底部片で，朝鮮系軟質土器の平底鉢に近いものである。94・95は滑石製臼玉である。96はサヌカイト製の石鏃である。97は鉄製品の一部で，刀又は刀子の一部である。かなり腐蝕が進んでいる。

98～99はSK07出土。98は須恵器の高坏坏部片である。体外面にはカキ目が入る。99は土師器の脚部片である。脚裾部は丸味を持って外へ水平に開き，端部を鋭くおさめる。

SK15（Fig. 20, PL 6）

調査区西側中央で検出した平面形態が円形を呈す土坑である。断面形は逆梯形を呈し，底面

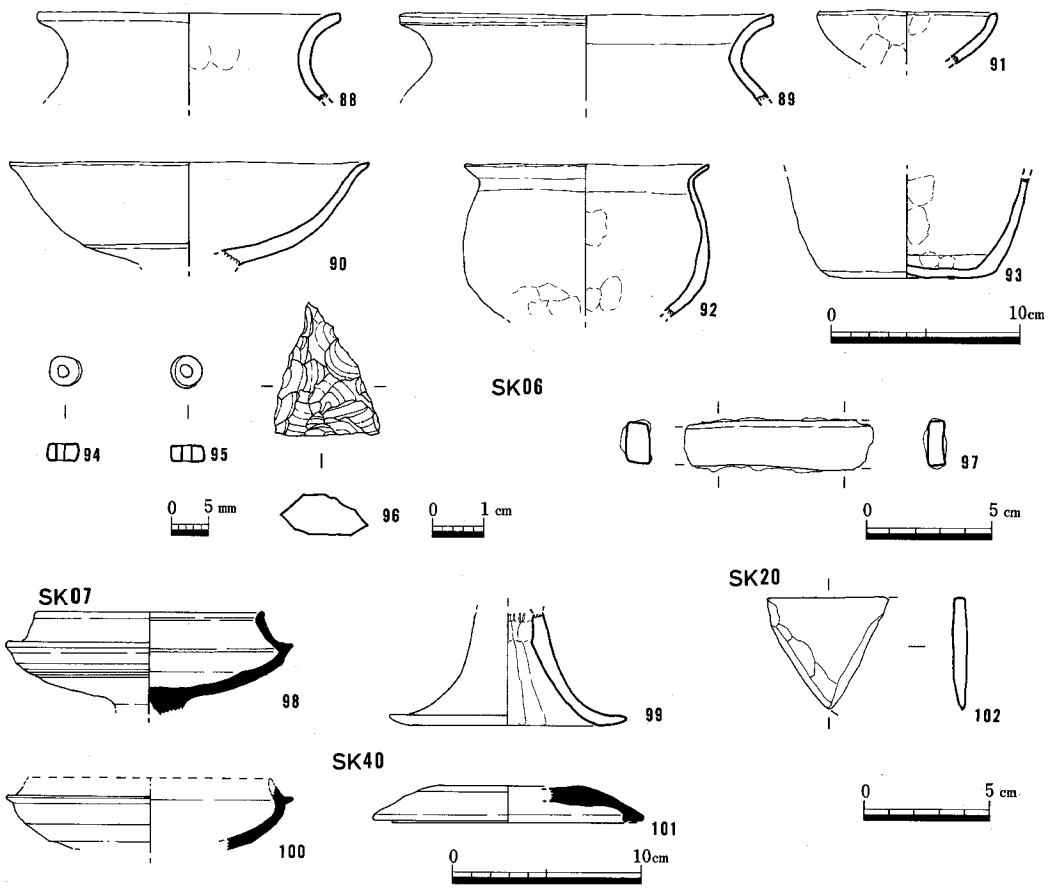


Fig. 21 SK06・09・20・40出土遺物（1/4・1/3・2/3・1/1）

はほぼ水平である。埋土は暗褐色粘質土を主体とし，地山ロームブロックを含んでいる。

出土遺物は少なく，土師器の皿，青磁，焼土ブロック，玄武岩の丸石などがある。いずれも細片で図示出来ない。

SK16（Fig. 22，PL 6）

調査区西壁寄りで検出した，平面形態がちまき形を呈す土坑で，SK17に切られる。底面はピット等によって凹凸が著しく，東側は一段落込んでいる。埋土は暗褐色粘質土に地山ロームブロックを混入する。

出土遺物は少なく，土師器・須恵器細片など13点出土した。いずれも細片で図示出来ない。

SK17（Fig. 22）

SK16に切られ，平面形態は不整楕円形を呈す浅い土坑である。埋土は暗褐色粘質土を主体とする。

出土遺物は少なく，土師器の細片が1点，焼土ブロック，炭化物などが少量出土した。

SK19（Fig. 22）

SB09を切る平面形態が隅丸方形を呈す土坑で，底面はほぼ平坦である。壁の傾斜は西が直に近く，東が緩やかである。埋土は暗褐色粘質土に黄褐色地山ロームブロック混入。

出土遺物は古墳時代の須恵器・土師器の細片合わせて17点出土したが，図示出来るものはない。

SK20（Fig. 22）

SB09を切る平面形態が隅丸長方形を呈す土坑である。二段掘りであるが，床面は少し掘りすぎている。断面形は逆台形を呈す。埋土は暗褐色粘質土を主体とし，地山ロームブロックや黒褐色粘質土を混入している。

出土遺物(Fig. 21)　弥生式土器，古墳時代土師器，須恵器，石庖丁，浮子？などがあるが，いずれも細片で大半が図示出来ない。

100は須恵器の坏身で，立上りは内傾する。Ⅲb期位であろうか。102は石庖丁片である。

SK28（Fig. 23，PL 7）

調査区北側で検出した。SK31･SA01を切り，平面形態が隅丸長方形を呈す土坑である。深さは15～20cmを測り，底面はほぼ水平，壁の傾斜は急である。南から東壁にかけては狭いテラスがある。埋土は暗褐色粘質土を主体とする。副葬品はなかったが，形状から見て土壙墓であろうか。

出土遺物は古墳時代の土師器・須恵器，黒曜石の剝片などが50点出土したが，細片で図示できない。

SK31（Fig. 23，PL 7）

SK28に切られる平面形態が隅丸長方形を呈す土坑である。底面は二段掘りで，直径1.15m，

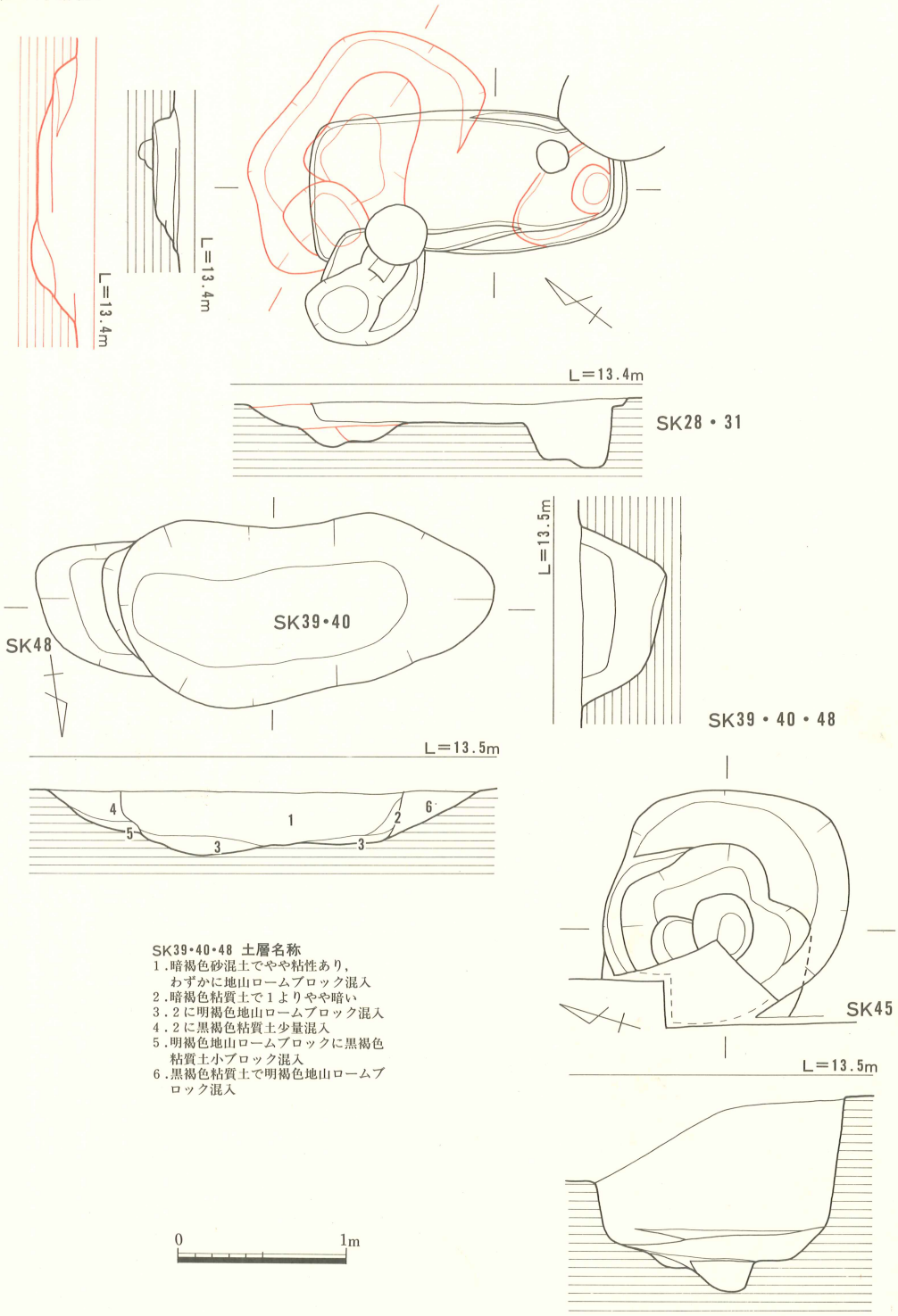


Fig. 23 SK28・31・39・40・45・48（1/40）

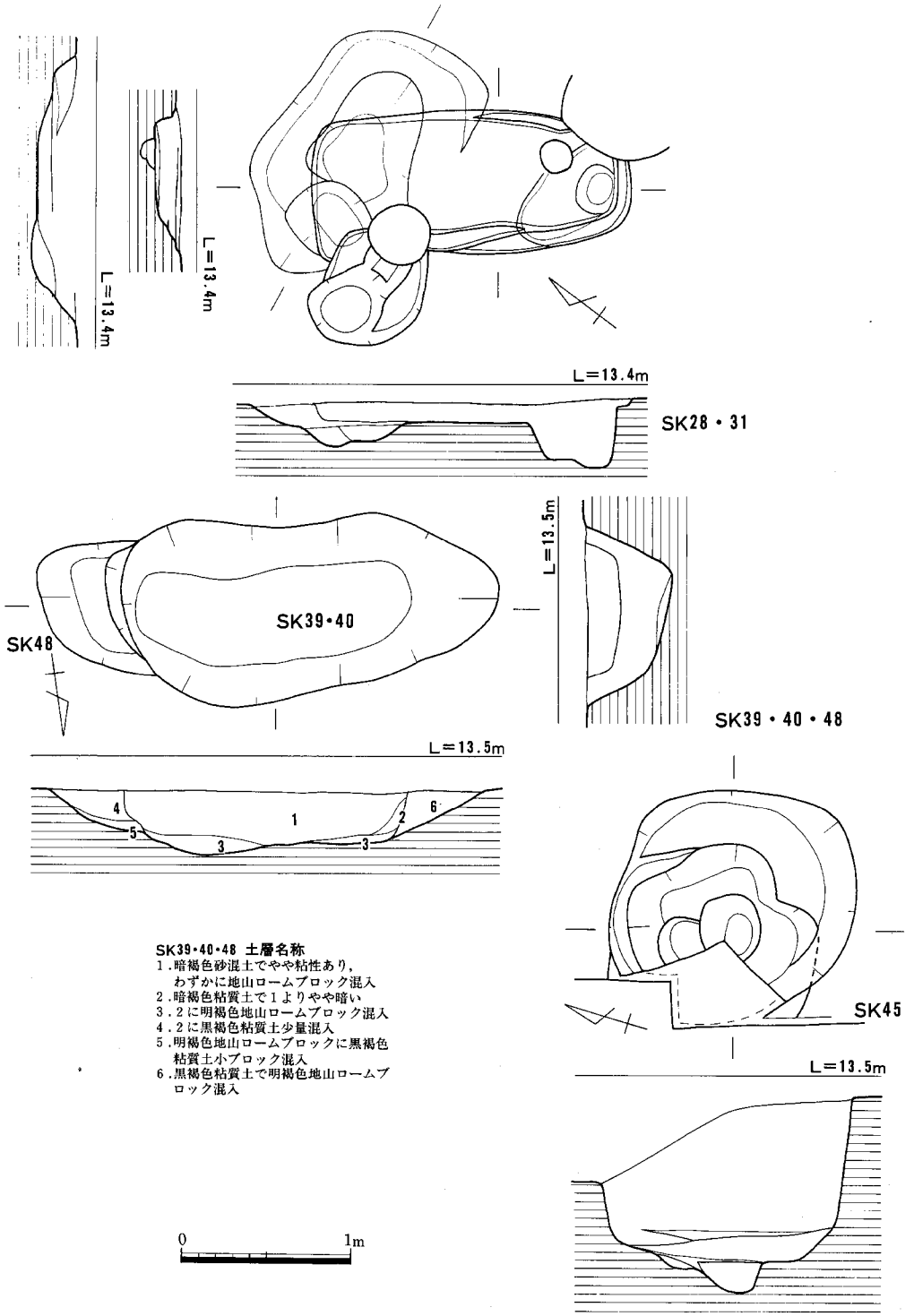


Fig. 23 SK28・31・39・40・45・48 (1/40)

ており，堆積状況に違いがある。

出土遺物，(Fig. 21) SK39部分からは古墳時代須恵器の坏・甕，土師器の甕・鉢などの細片が49点。SK40からは古墳時代の須恵器・土師器の細片が77点出土した。大半が図示できない。

101は須恵器の坏蓋でV期からVI期のものである。

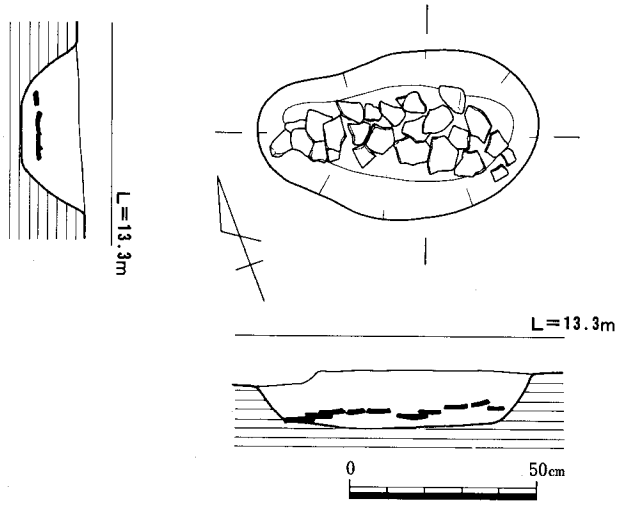


Fig. 24 SK49 (1/20)

SK43 (Fig. 20, PL 7)

調査区南側のSK03に切られる土坑で，平面形態は隅丸方形を呈す。壁は直立するが，底は中央に向って深くなり，中央に0.55×0.40m，深さ40cmの楕円形のピットがある。埋土は上層の1・2層が黒色灰混り土，3～7層にかけては地山ローム土を多量に混入している。貯蔵穴もしくは落し穴のようなものであろうか。出土遺物はなかった。

SK45 (Fig. 23, PL 8)

調査区北西隅で検出した。西側境界地にかかり，全体の形状はわからない。壁はほぼ直に立ち上がり，床面は平坦であるが，西側が一段15cm程低くなる。その低くなった面に直径40cm，深さ15cmの楕円形のピットがあった。SK45は形状から掘立柱建物の柱穴であろうか。

出土遺物は弥生式土器，古墳時代の土師器，須恵器と思われる細片を29点出土した。図示出来るものはない。

SK48 (Fig. 23, PL 7)

SK39・40に切られる土坑で，一部しか残っていない。埋土は暗褐色粘質土である。

出土遺物は弥生式土器，土師器，須恵器を合わせて18点出土した。

SK49 (Fig. 24, PL 7)

SB02を切り，平面形態が長楕円形を呈す土坑である。断面形は底が丸味を持った逆梯形を呈す。床面より5cm位浮いた位置に土師器の甕の破片が並べてあった。

出土遺物は同一個体と思われる甕の破片が32点出土したが，複元・図化しえなかった。

SK50 (Fig. 25, PL 8)

調査区中央で検出した，SA02に切られ平面形態が不定形の土坑である。底面は狭く平坦でなく，西側寄りが一番深く，地表より1.15mを測る。周壁も段がついている。埋土は上下2層に大きく分ける事が出来る。上層は1・2層で暗褐色土を主体とし，下層は4・5層で黒褐色粘

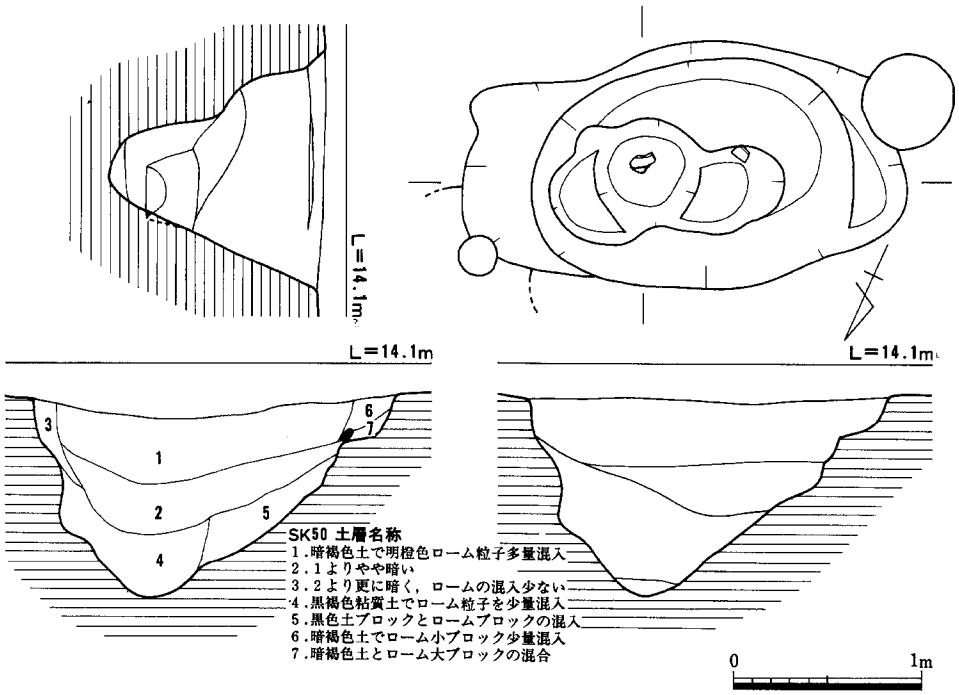


Fig. 25 SK50 (1/40)

質土で地山ロームブロックを混入する。底面の状況や，埋土の状況から複数の遺構の切り合いであるかもしれない。

出土遺物 弥生式土器，古墳時代土師器・須恵器などが103点出土したが，いずれも細片で，図示できるものはない。土師器の中には高台付埦の高台部片が数点出土した。

Tab.3 土坑一覧表

遺構名	形態 平面	形態 断面	規模(計測値) 長さ(cm)	規模(計測値) 幅(cm)	規模(計測値) 深さ(cm)	切り合い関係	時期	備考
SK01	不整楕円形	逆台形	174	193	50	SD04を切る	中世	
02	〃	二段掘	157	210	30	SD04を切る	〃	
03	〃		120	160	11～19	SK43を切る	奈良	
04	不整円形	凸レンズ状	160	112	27	SD02に切られる		
05	〃	浅い皿状	266	233	2			
06	〃	〃	直径112～115	157	3～8	SK05を切る	6C	
07	円形	〃			5	SK05 SK06を切る	〃	
08	欠番							SA03
09	〃							〃
10	〃							〃
11	〃							SA01
12	〃							〃

遺構名	形態		規模(計測値)			切り合い関係	時期	備考
	平面	断面	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)			
13	欠番							SA01
14	〃							〃
15	円形	逆台形	直径100		25			
16	不整楕円形	〃	217	75	20～30			
17	〃	浅い皿状	100以上	87	1.5～2.0			
18	欠番							SB09柱穴
19	隅丸長方形	逆台形	92	160	46	SB09を切る		
20	〃	摺鉢状	194	175	35	〃		
21	欠番							SB09
22	〃							〃
23	〃							〃
24	〃							〃柱穴
25	〃							SA03
26	〃							〃
27	〃							SB09
28	隅丸長方形					SK31を切る		
29	欠番							SC02屋内土坑
30	〃							攪乱？
31	隅丸長方形	二段掘						
32	欠番							SA01
33	〃							SB04
34	〃							SA01
35	〃							〃
36	〃							〃
37	〃							〃
38	〃							土坑でない
39	不整楕円形	船底形	224	104	44	SK40に切られ SK48を切る		
40	隅丸長方形	箱形	166	76	35	SK39を切る		
41	欠番							SA01
42	〃							SK31と同じ
43	隅丸長方形	漏斗状	120	84	114	SK03に切られる		中央にピットあり
44	欠番							SC01屋内土坑
45	不整楕円形	逆台形	142	135以上	120			柱穴抜跡か
46	欠番							SA01
47	〃							〃
48	不整楕円形		72以上	80	23	SK39に切られる		
49	〃		75	45	17	SB02を切る		
50	〃		244	132	110			
51	欠番							SB04

掘立柱建物（SB）（Fig. 26）

全体で17棟検出した。しかし建物としてまとめえなかったものの，柱痕跡が残るピットも多々あり，実際にはもっと建物が建つものと思われる。建物群は古墳時代末頃から奈良時代頃のものと中世のものの2時期に分かれる。SB10は欠番である。

SB01（Fig. 27，PL12）

調査区北側で検出した主軸方位をN－90°－Eに取る3×5間の側柱建物である。梁間全長6.10m，桁行全長14.10mを測る。柱穴の平面形態は方形又は長方形で，柱径は柱痕跡から30cm前後と推定出来る。柱筋は大体通るが，わずかにゆがむ。柱穴掘方は桁側の掘方が大きく深く，梁側は浅く小さい。柱痕跡はほぼ真直に底迄通っている。掘方埋土は柱痕跡が暗褐色粘土，掘方部分は地山ロームと黒褐色粘土で互層状につき固めている。

出土遺物（Fig. 30，PL20）　各柱穴から弥生式土器，土師器，須恵器などが出土している。量は多いが，大半は細片で図示出来るものは少ない。またP4・9・13からは土師質土器，瓦器，土師器皿，白磁碗片が10点出土している。

103～108は須恵器である。103は坏身の受部片，立上りはやや内傾する。104は坏蓋で天井部と口縁部の境に明瞭な段がつく。105は陶質土器の高坏の坏部片である。受部に先端がシャープ

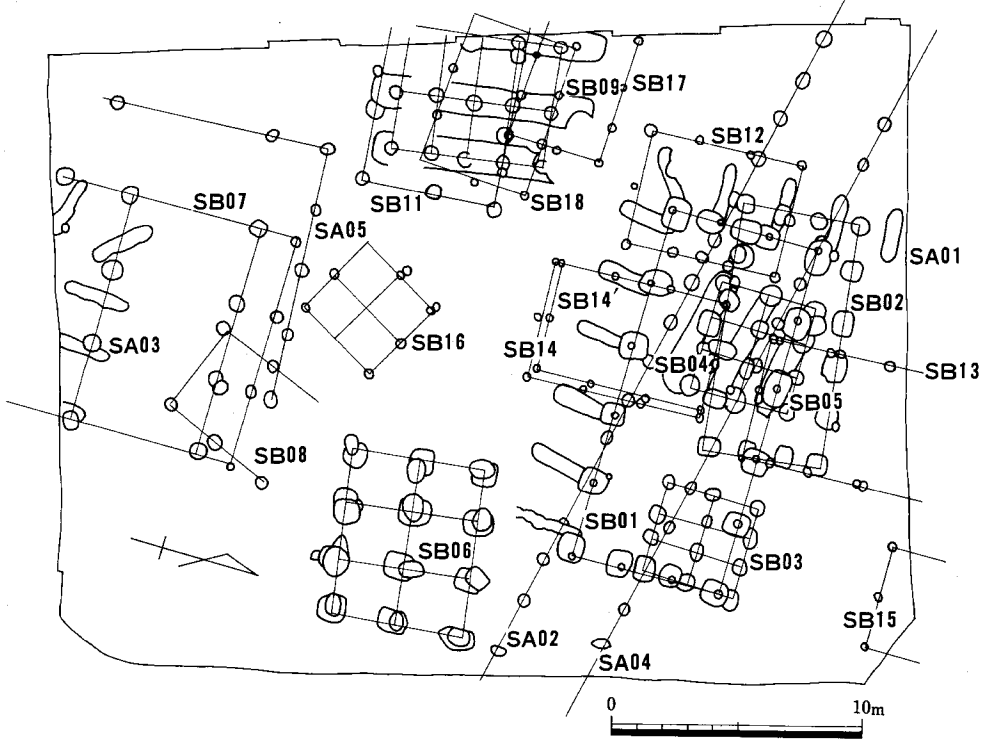


Fig. 26　掘立柱建物・柵配置図（1/300）

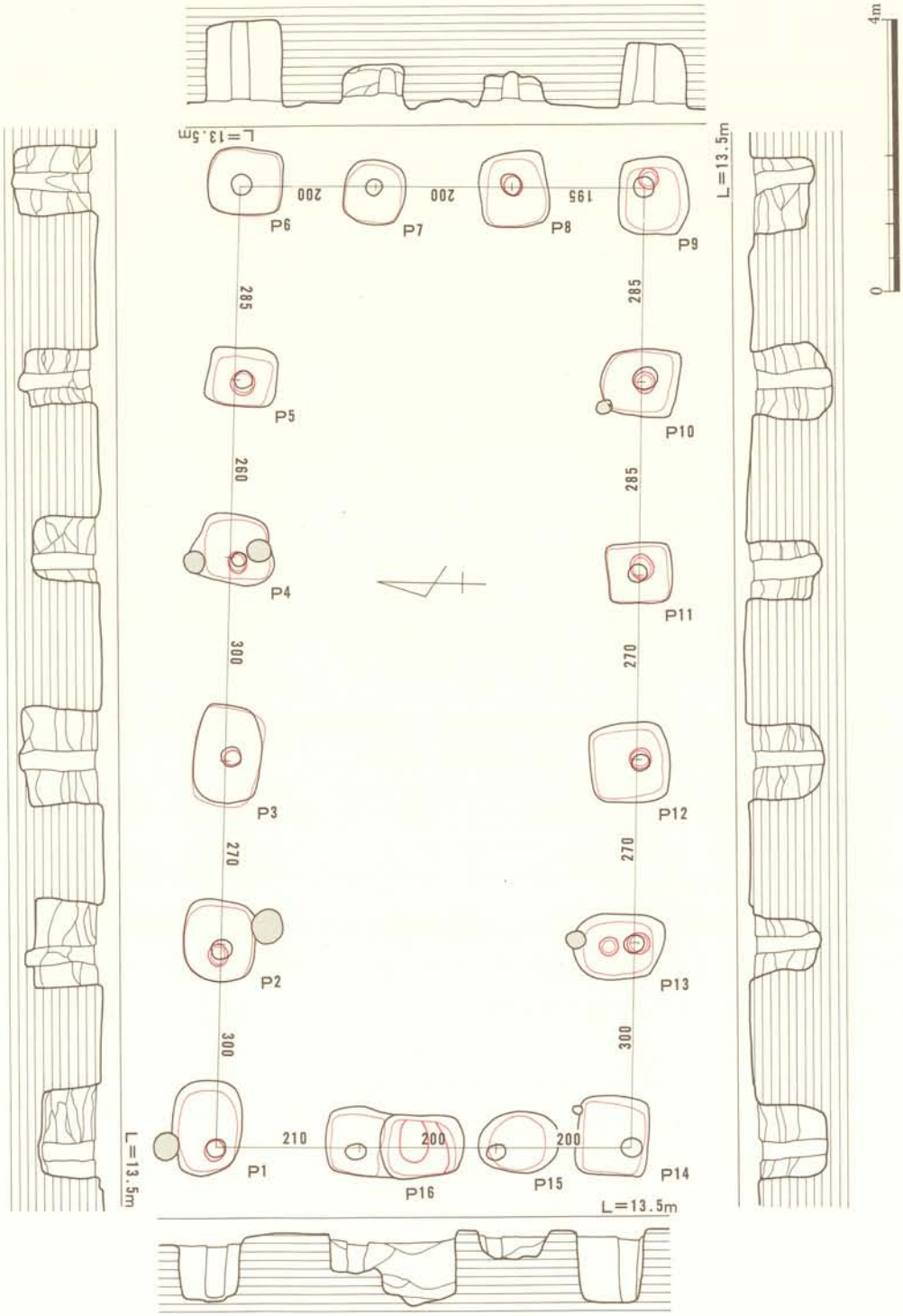


Fig. 27 SB01 (1/100)

な鍔状凸帯がつく。106は坏蓋片で，天井部に扁平な中窪みのつまみがつく。107は坏蓋の口縁部片で，口縁内面に短いかえりが付く。108は瑳の体部片で，体部上半には一条の沈線と波状文が入る。109は土師器の把手で，指おさえ仕上で，断面は略円形である。

SB02（Fig. 28，PL12）

SB01に切られる主軸方位をN—84°—Wに取る3×5間の建物である。梁間全長4.80m，桁行全長9.90mを測る。柱径は平面形態が方形又は長方形で，柱径は柱痕跡から15cm前後を測る。柱筋は大体通るが，南側が少し開く。柱穴掘方は浅く，遺存状況は良くない。柱痕跡は大体直で，底迄届かないものもある。

出土遺物（Fig. 30）　各柱穴から古墳時代の土師器・須恵器が大半であるが，P13から白磁が1点出土している。細片が多く図示出来るものは少ない。

110は坏身が高坏の坏部片である。受部の鍔状凸帯はシャープに作り出す。古式の須恵器である。

SB03（Fig. 28，PL12）

SB01に切られ，SA04を切る主軸方位をN—89°—Wに取る2×3間の総柱の建物である。梁間全長3.65m，桁行全長3.75mを測り，梁間が少し長い。柱穴は平面形態が円形又は楕円形である。柱筋は側柱部分が大体通るが，中央東柱部分が少しずれる。柱穴掘方は浅く，遺存状況は良くない。

出土遺物（Fig. 30）　大半が各柱穴掘方出土で，少数の弥生式土器以外は，古墳時代の土師器，須恵器である。すべて細片で，図示出来るものは少ない。

111は土師器の甕形土器で，く字状に外傾する口縁部を持つ。頸部のしまりは強く，口縁内面には横ハケを施す。

SB04（Fig. 28，PL13）

SB02，05に切られる布掘り建物である。主軸方位をN—77°—Wに取る。3条の布掘り溝の遺存状況は悪く，最も良く残る中列溝の規模は長さ5.2m，幅0.8m，深さ20cmを測る。溝の底面はほぼ平坦であるが，南列の布掘り溝は東側が20cm程深くなっている。柱痕跡は確認出来なかった。埋土は黒褐色土と地山ロームブロックを主体としている。

出土遺物（Fig. 30）　掘方から古墳時代土師器・須恵器が出土しているが，1点弥生式土器片を含む。ほとんどが細片で，図示出来るものは少ない。

112・113は須恵器。112は甕の体部片で，外面は格子目叩きのちナデ消し。113は坏蓋の口縁部片で，内面に短いかえりが付く。須恵V期のものである。114は土師器の坏で底部は平底，須恵器を模倣したものか。

SB05（Fig. 29，PL13）

SB04を切りSB01・02などに切られる主軸方位をN—87°—Eに取る2×3間の総柱建物であ

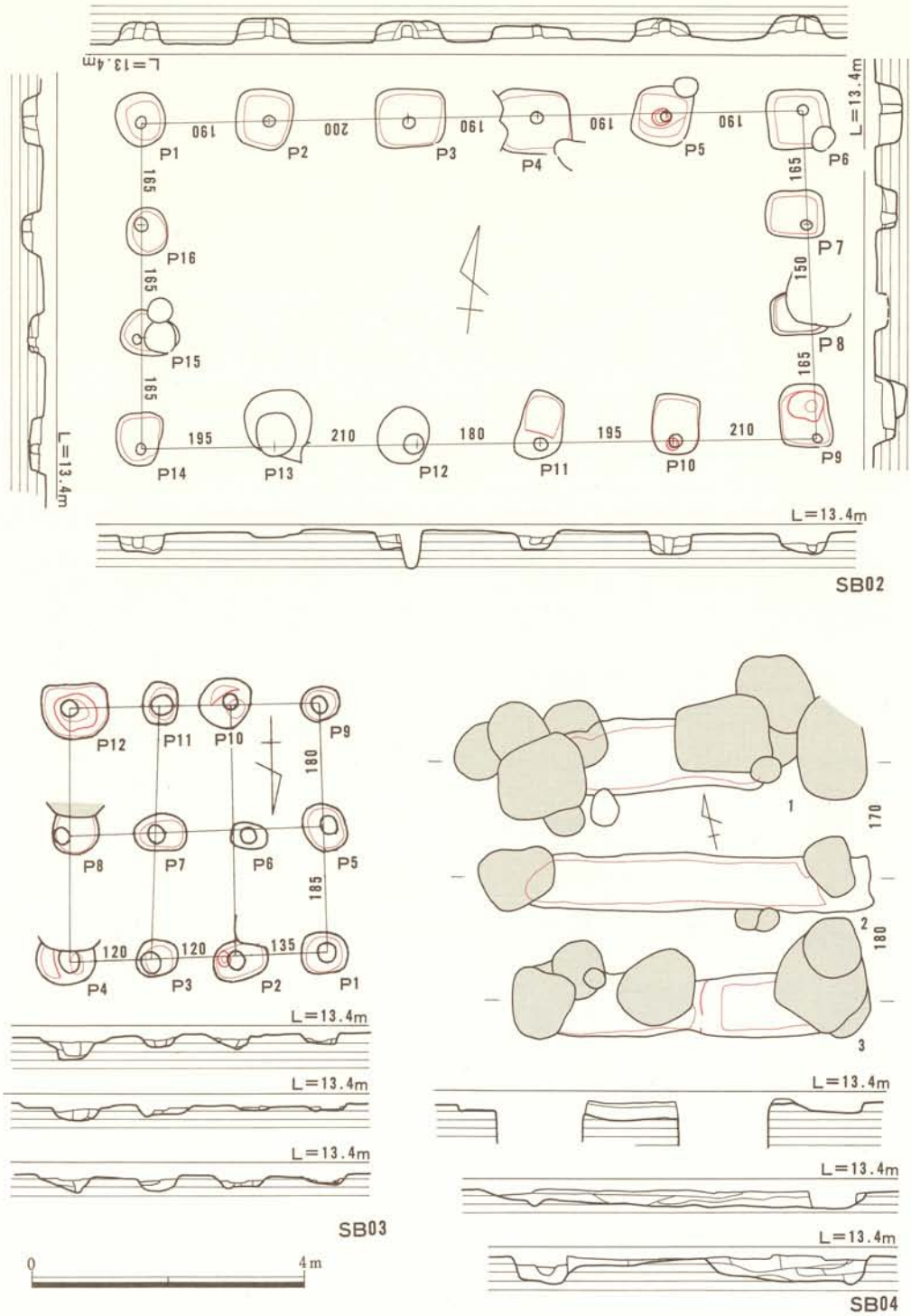


Fig. 28 SB02～04 (1/100)

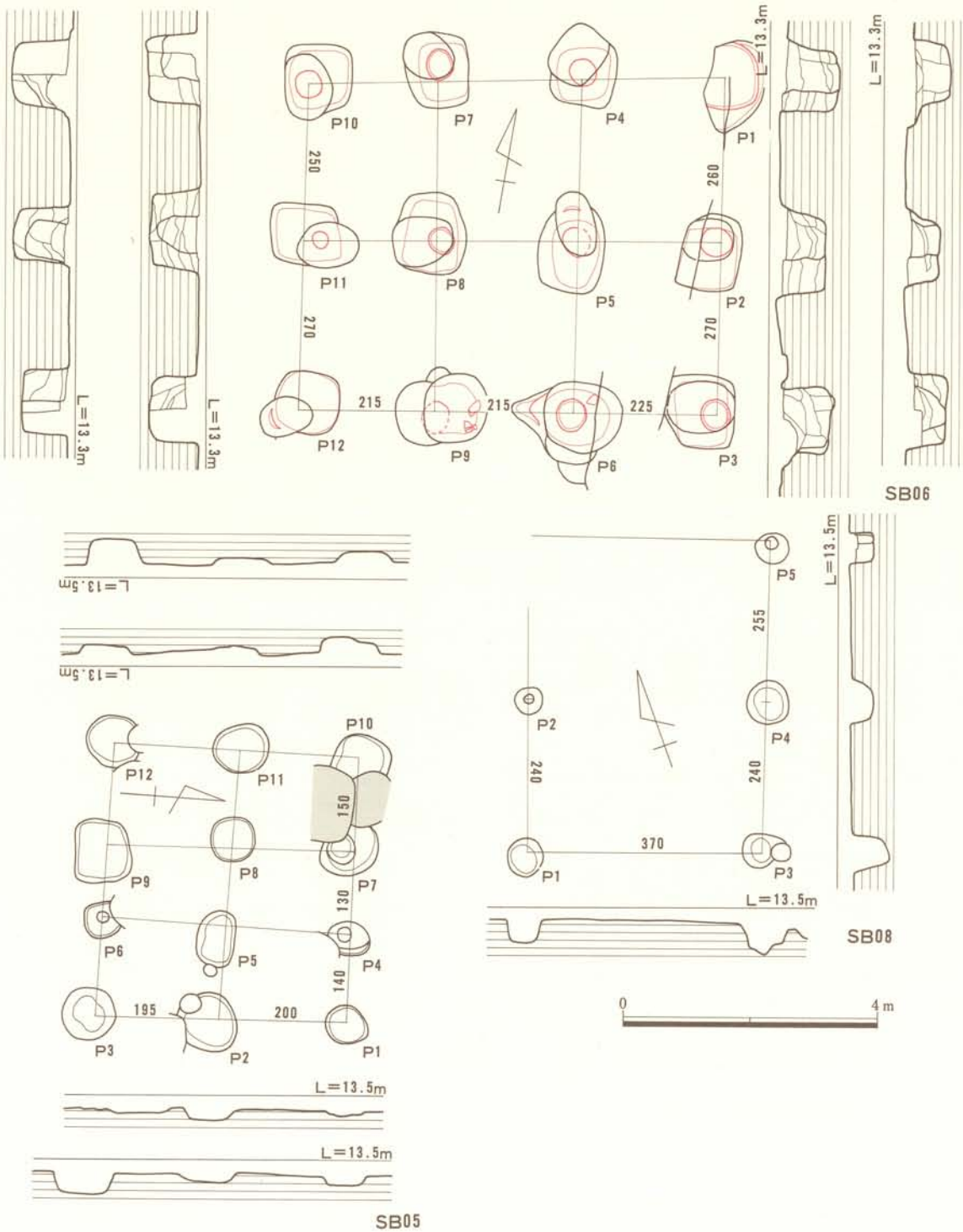


Fig. 29 SB05・06・08 (1/100)

る。梁間全長3.95m，桁行全長4.20mを測る。柱穴の大きさ形態はまちまちで，全体に浅く遺存状況は悪い。柱筋は余り通らず，全体にひしゃげている。

出土遺物は古墳時代の土師器・須恵器片が出土しているが，いずれも細片で図示出来ない。

SB06（Fig. 29，PL13）

調査区南東側SB03に切られ，主軸方位をN－80°－Eに取る2×3間の総柱の建物である。梁間全長5.30m，桁行全長6.55mを測る。柱穴の平面形態は方形で，いずれも柱の抜跡痕が残る。柱穴は全体に大きく，深くしっかりしている。柱筋はほぼ通るが，東にやや傾いている。柱径は掘方底面に残った痕跡から，50cm前後と推定出来る。

出土遺物（Fig. 30，PL20）　各柱穴から古墳時代の土師器・須恵器・鉄滓などが出土した。P6は中世のピットと重複しているようで，中世の土師器皿片が混入している。

115～119は須恵器である。115は坏で底部に短い高台が付く。抜跡出土である。116・117は坏身でいずれも内傾する立上りを持つが，116の方が立上りは高い。116は須恵IVb期に近いものである。118・119は坏蓋でいずれも古式のものである。120・121は土師器。122は甕の口縁部片でく字状に外傾する。121は高坏脚部片で，裾部は水平に引出し，端部を鋭くおさめる。筒部下半に直径12mmの円形の透し孔が入る。

SB07（Fig. 32，PL14）

調査区南側にあり，SD02に切られSA03・SC01を切る主軸方位をN－87°－Eに取る3×3間（？）の総柱と思われる建物である。一部が破壊されたり，調査区外にかかるため全容は不明。北側には廂がつく。規模は推定で梁間全長7.70m（廂部分迄9.15m），桁行全長9.30mを測る。柱穴の平面形態は円形で，柱径は痕跡から推定して15～30cmである。柱筋は南側桁行と廂部分がそろわない。掘方は全体に大きいが，廂部分は小さく，かつ浅い。

出土遺物（Fig. 34）　各柱穴から古墳時代の土師器・須恵器などが出土しているが，中世の土師器皿らしきものや白磁の細片（P8から）が少し出土している。

122は須恵器の坏蓋の口縁部片。器形からIIIb期頃と思われる。123は土師器の甕の口縁部片である。口縁部はく字状に外傾し，口端部を丸くおさめる。

SB08（Fig. 29，PL14）

調査区南側で検出した主軸方位をN－20°30′－Eに取る1×2間の建物である。梁間全長3.70m，桁行全長4.95mを測る。柱穴は平面形態が円形で，それ程大きくない。P3は他ピットで切合う。柱筋はP3が少し内側に入り込む。柱径は痕跡から13～20cmである。

出土遺物（Fig. 30，PL20）　各柱穴から少量ずつ出土した。古墳時代土師器・須恵器が出土したが，大半が細片で，図示出来るものは少ない。

124は須恵器の高坏脚部片である。短脚で外面にカキ目が入る。下半部には直径1cmの円形の透し孔が入る。

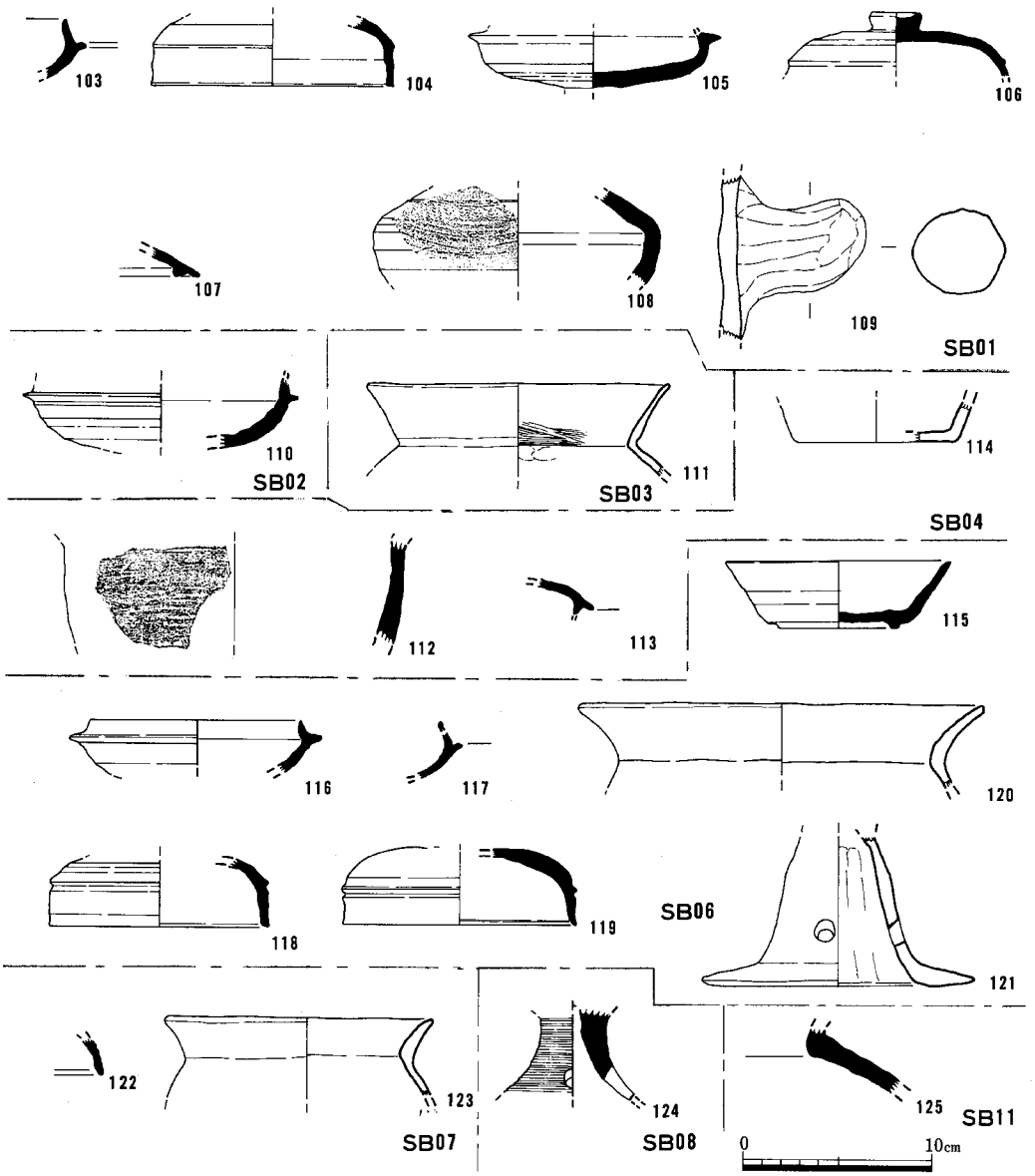


Fig. 30 SB01～06・08・11出土遺物（1/4）

SB09（Fig. 31, PL14・15）

調査区西側境界地にかかる布掘りの建物である。SD04に切られ，SC03を切る。上面には後世のピット，土坑が多々切り込んでいる。確認したのは布掘り3条分である。各布掘り溝の規模は東側が長さ8.45×1.4m，中央が9.0×1.2m，西側が長さ6m以上である。深さは0.8～1.0m

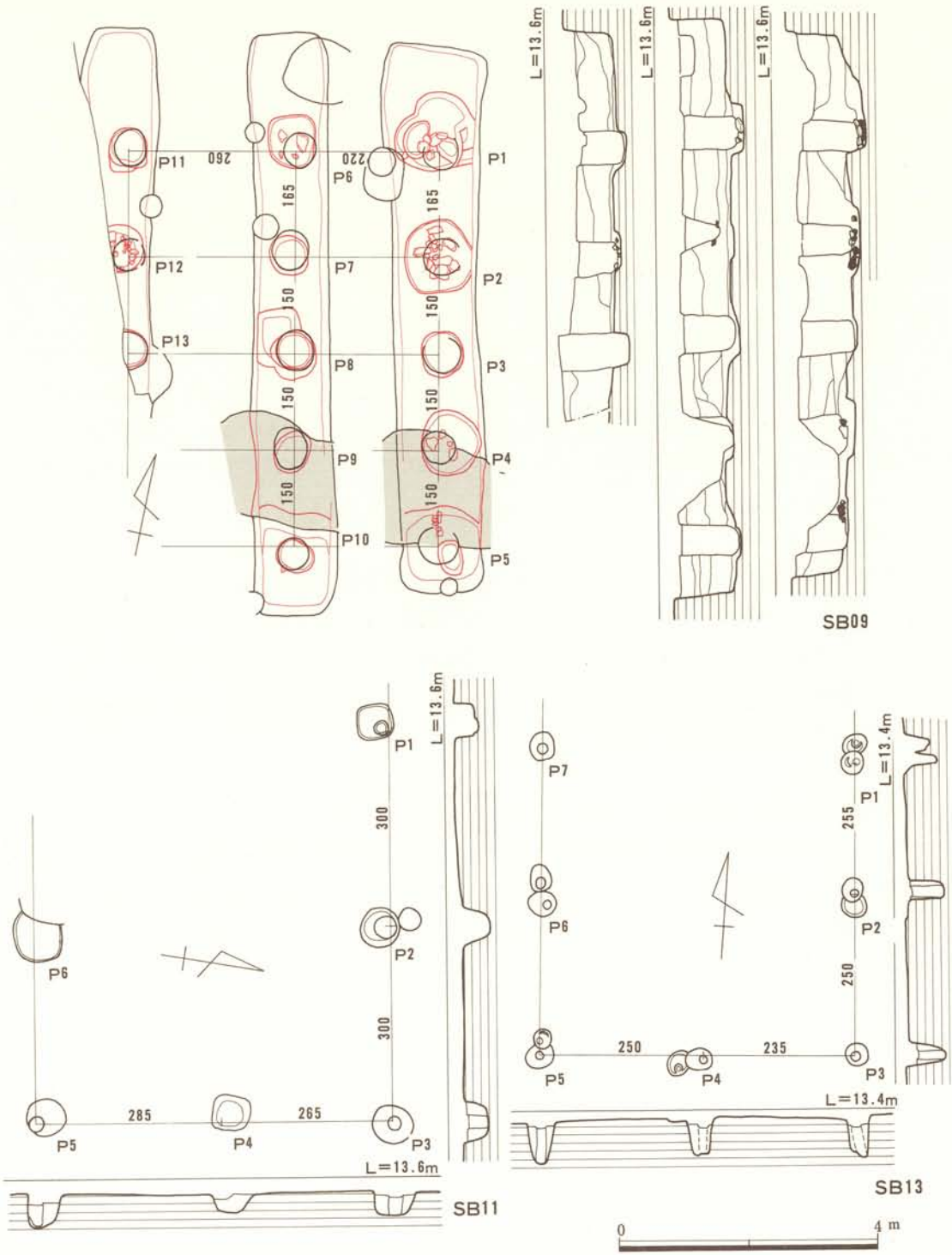


Fig. 31 SB09・11・13 (1/100)

と深く，箱掘り状を呈す。柱痕跡は各列５個ずつ検出しており，柱径は50cm前後を測る。柱間の距離は桁行で6.15m，梁間で4.80mを測る。柱痕跡は底迄真直ぐ達し，一段掘込み，根石を数個配しているものもある。根石を配したのは東列布掘りに多い。埋土は柱痕跡部分が暗褐色粘質土で柔らかく，掘方部分は地山ロームを主体に，黒褐色粘質土や暗褐色粘質土を交えた層で，大ざっぱに水平につきしめている。

出土遺物（Fig. 34，PL20）　各布掘り溝より弥生式土器や古墳時代の土師器・須恵器片が出土している。西側溝からは土師器皿の破片が少量出土している。大半が細片で，図示出来るものは少ない。

126・127・131は須恵器である。126・127は坏身受部分である。124は口径が小さく，立上りの内傾具合は強い。IVｂ期位であろう。127は口径が比較的大きく，立上りは長く内傾具合は弱い。IIIｂ期頃である。131は甕の体部片で，外面は木目直交の平行叩きのちナデ。128～130は土師器である。128は平底の鉢底部片。129は高坏の筒部片である。130は大型の鉢で，口端部に軽く段が付く。

SB11（Fig. 31）

SB09に切られ主軸方位をN－80°－Eに取る東西方向の建物で，西側境界地にかかり全容はわからない。梁間全長5.50m，桁行全長６m以上を測る。柱穴は平面形態が円形又は隅丸方形である。柱径は柱痕跡から15cm前後である。柱筋はＰ１・２が若干内側にずれる。

出土遺物（Fig. 30）　各柱穴より古墳時代土師器・須恵器の細片が出土したが，量は少ない。125は須恵器の甕の頸部片である。

SB12（Fig. 32）

調査区北西側でSA01・SB01を切り，主軸方位をN－４°－Wに取る２×３間の建物である。梁間全長4.50m，桁行全長6.0mを測る。柱穴の平面形態は円形で，柱径は痕跡から推定で15cm前後である。柱筋はＰ５がはずれるが，他は通る。Ｐ１・７・８は炭化物・焼石を含む。

出土遺物　各柱穴より弥生式土器，古墳時代土師器・須恵器，中世土師器皿，白磁などが少量出土した。いずれも細片で図示出来ない。

SB13（Fig. 31）

調査区北側境界地にかかり，SB01・０２を切る主軸方位をN－４°－Wに取る建物である。梁間全長4.85m，桁行全長4.80m以上を測る。柱穴は平面形態がいずれも円形で，柱径は痕跡から15cmを測る。柱筋はＰ６・７が内側にずれる。

出土遺物　各柱穴から弥生式土器，古墳時代の土師器・須恵器，中世の土師器皿，青磁・白磁・陶器片などが少量出土した。いずれも細片で図示出来ない。

SB14（Fig. 33）

SB12に平行し，SB01・SA01などを切る主軸方位をN－４°－Wに取る２×３間の建物である。

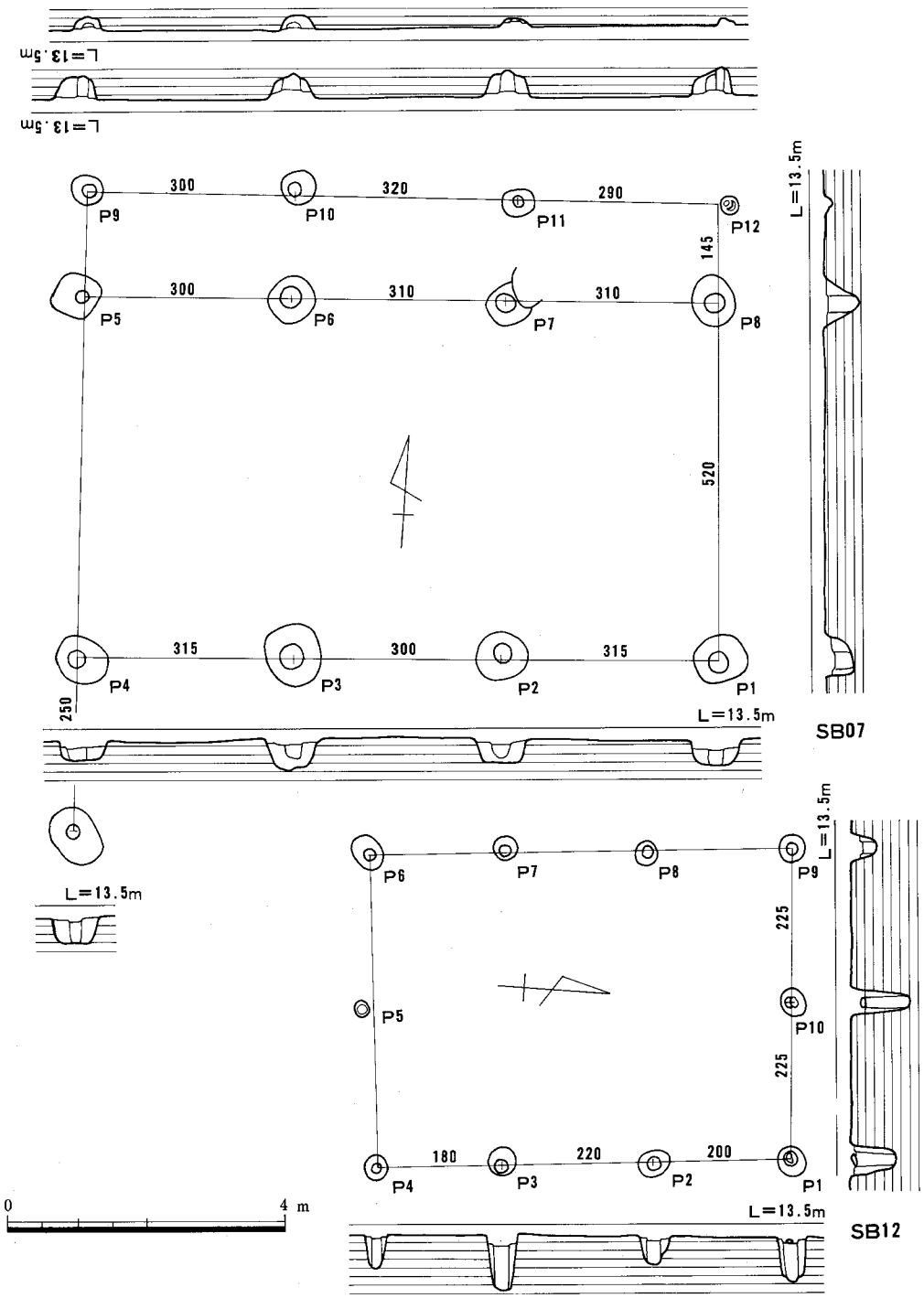


Fig. 32 SB07・12 (1/100)

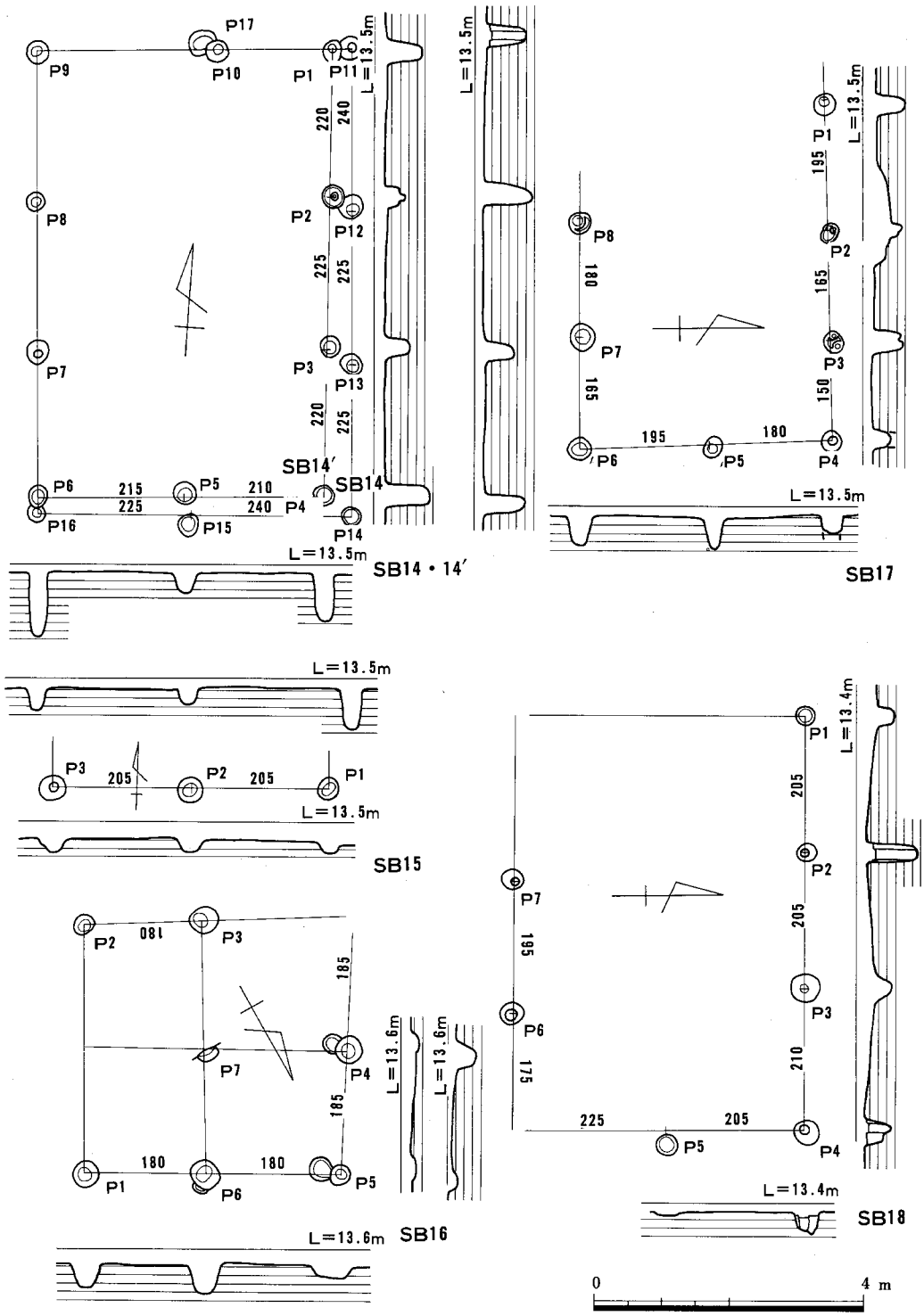


Fig. 33 SB14～18 (1/100)

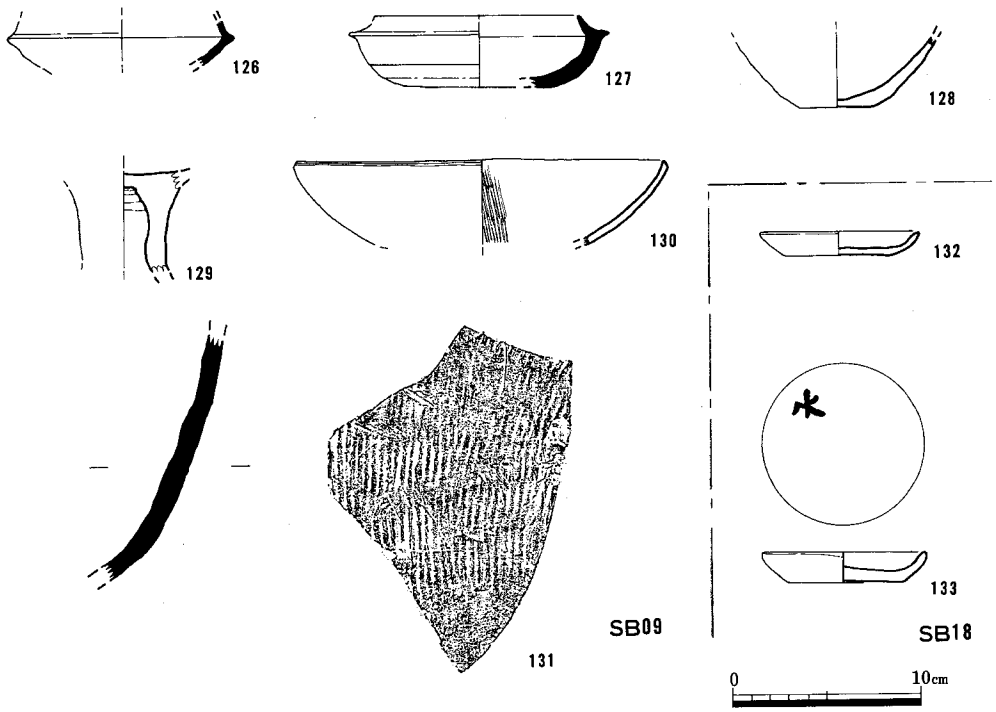


Fig. 34 SB09・18出土遺物（1/4）

この建物は建て替えられており，外側（SB14）から内側（SB14′）へ建て直されている。SB14の規模は梁間全長4.65m，桁行全長6.90m，SB14′は梁間全長4.25m，桁行全長6.65mを測る。SB14′の北側梁間の柱間隔が少し東へずれる。柱穴の平面形態は円形で，隅柱が一段深くなっている。

出土遺物　各柱穴から弥生式土器，古墳時代土師器・須恵器，中世の土師器皿・土師質土器などの破片が少量出土したが，いずれも細片で図示出来ない。P16からは炭化物が出土している。

SB15（Fig. 33）

調査区北側境界地で検出した2間分の柱列で，北側に延びると思われる。梁間部分で全長4.10mを測る。柱穴の平面形態はいずれも円形で，浅く残りは悪い。

出土遺物　量は少なく，古墳時代須恵器，中世の土師器皿片など合せて4点出土した。図示出来るものはない。

SB16（Fig. 33）

SK05～07と切り合い，SD04に切られる主軸方位をN－29°－Wに取る2×2間の総柱の建物である。規模は3.70×3.90又は3.60mで，平面形はややゆがむ。柱穴の平面形態は円形である

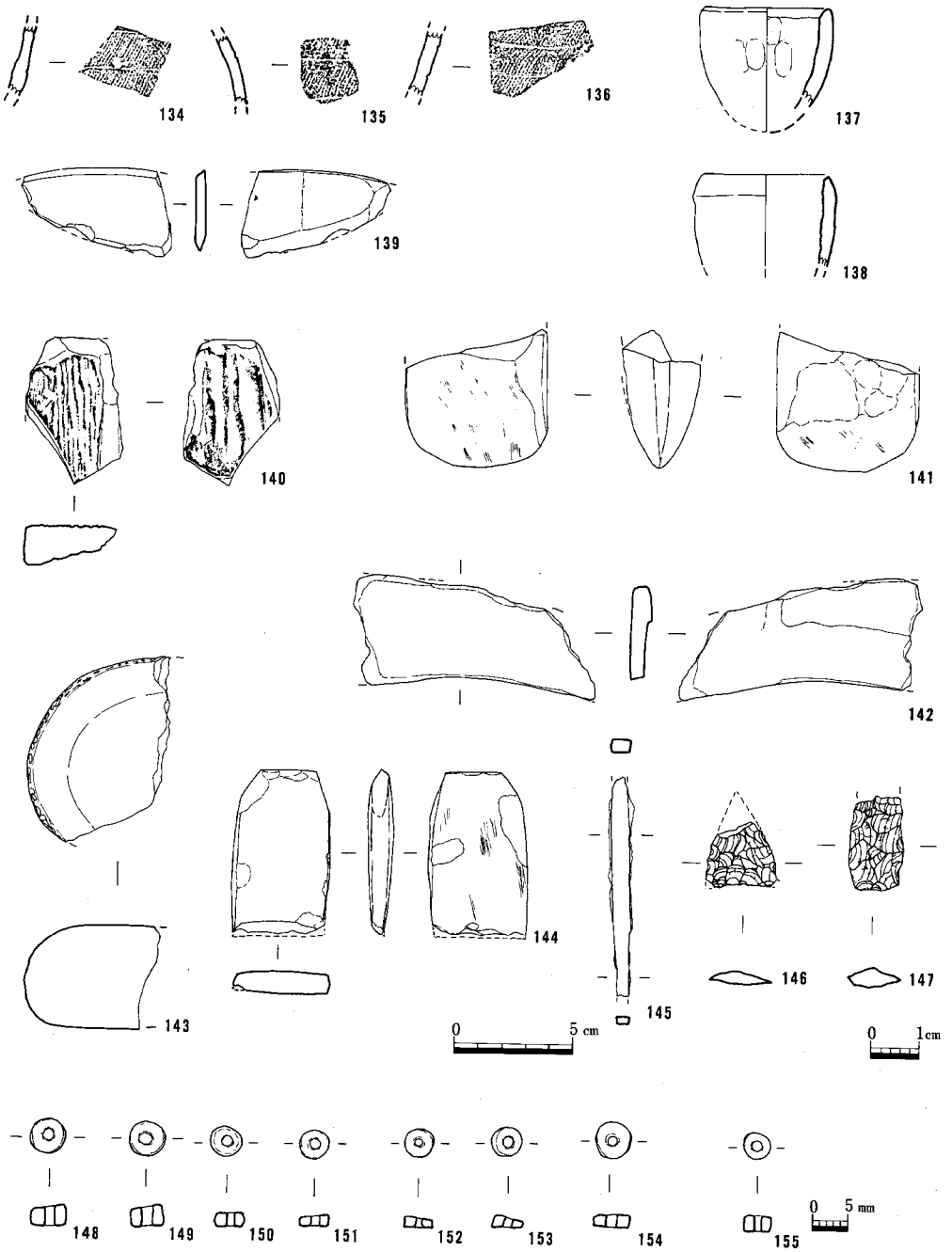


Fig. 35 建物出土のその他の遺物 (1/4・1/3・2/3・1/1)

が，抜跡痕が一部残る。遺存状況は悪く，浅い。

出土遺物　掘方から古墳時代の土師器片が20点出土したが，細片で図示出来ない。

SB17（Fig. 33）

SB09・11を切り，SB18と重複する主軸方位をN—90°—Eに取る2×3間（？）の建物である。西側は境界地にかかり，全容はわからない。梁間全長3.75m，桁行全長5.10m以上を測る。柱穴の平面形態は円形で，深くしっかりとしている。柱筋はほぼ通る。

出土遺物　掘方から古墳時代土師器・須恵器，中世の土師器皿・白磁片などが，わずかに出土したが，細片で図示出来ない。

SB18（Fig. 33）

SB09を切りSB18と重複する。西側は境界地にかかり全容は不明。主軸方位をN—90°—Eに取る2×3間の建物と思われる。梁間全長4.30m，桁行方向は6.20mである。柱穴の平面形態はいずれも円形で，柱径は痕跡から14～20cmである。柱穴の深さはまちまちで，また柱筋は少し外へはずれる。

出土遺物（Fig. 34，PL21）　各柱穴から古墳時代の土師器・須恵器，中世の土師器，青磁碗片が少量出土している。

132・133は土師器皿で口径は8.1cm，8.0cmと小さく，底部糸切り。132はP3出土。133はP4。133の内底部には呪符らしき内容の墨書があった。縦書きの3行の漢字であるが，遺存状況が悪く，左上がかろうじて水と読めるだけで，他は解読出来ない。P4は建物の北東の隅柱で，地鎮祭に関連する遺物であろうか。

Tab. 4　掘立柱建物一覧表

建物番号(SB)	規模(間数)	主軸方向	梁間(cm)		桁行		床面積(m²)	方位	備考
			実長	柱間寸法(尺)	実長	柱間(尺)			
01	3×5	東西	610	7・6.7・6.7	1410	10・9・9・9.5・9.5	86.01	N—90°—E	
02	3×5	東西	480	5.5・5・5.5	990	6.5・(7)・6・6.5・7	47.52	N—84°—E	
03	2×3	東西	365	6.2・6	375	4・4・4.5	13.69	N—89°—W	総柱
04	2×2	東西						N—77°—W	布堀り建物
05	2×3	東西	395	6.5・6.7	420	4.7・4.3・5	16.59	N—87°—E	総柱
06	2×3	東西	530	9・8.7	655	7.2・7.2・7.5	34.72	N—80°—E	総柱，抜跡あり
07	3×3？	東西	770(915)		930	10.5・10・10.5	71.6	N—87°—E	北側廂か
08	1×2	北北東	370	12.3	4.95	8・8.5	18.32	N—20°30′—E	
09	2×4	南北	480+α	8.7・7.3	615	5・5・5・5.5	29.52+α	N—11°—W	布堀り建物
11	2×2以上	東西	550	9.5・8.8	600+α	10・10・α	33+α	N—80°—E	
12	2×3	南北	450	7.5・7.5	600	6・7.3・6.7	27.0	N—4°—W	焼土ブロック混入
13	2×2+α	南北	485	8.3・7.8	505+α	8.3・8.5・α	23.28+α	N—4°—W	
14	2×3	南北	465	7.5・8	690	7.5・7.5・8	32.09	N—4°—W	建て替え
14′	2×3	南北	425	7.2・7	665	7.3・7.5・7.3	28.14		
15	2×α	南北	410	6.8・6.8	？	？	？	？	2×3間？
16	2×2	北東	390 360	6・7(？) 6・6	370(？)	6.2・6.2(？)	13.88	N—29°—E	総柱
17	2×3+α	東西	375	6.5・6	510+α	5・5.5・6.5	19.13	N—90°—E	
18	2×3？	東西	430	7.5・6.8	620	7・6.8・6.8	26.66	N—89°—W	

各掘立柱建物・柵出土のその他の遺物（Fig. 35, PL20）

各建物柱穴より出土した土製品・石器・玉類を一括して報告する。

134～136は陶質土器の破片で，器種は不明。外面は縄蓆文叩きを施す。色調は赤褐色を呈す。137・138は蛸壺形土器の口縁部片。139は石庖丁の破片で粘板岩製。140は不明石製品で，上面に幾条もの深い溝が切られている。141は今山型の石斧の刃部片で玄武岩製。142は石鎌片である。143は叩石又は磨石で，上下面は磨滅し，側辺は敵打痕が残る。144は頁岩製の扁平片刃石斧である。石質は良い。145は鉄鏃片で，全体に銹化が進む。146•147は黒曜石の石鏃片で，いずれも先端が欠失する。148～154は滑石製の臼玉である。

134・135・137・139・146・148・149はSB01，150・151はSB02，145はSB03，136はSB04，140・141・147・152・153はSB06，154はSB07，143はSB08，142・144・145はSB09，155はSA03出土である。

柵（SA）

全部で5列検出した。その内2列は鍵型に曲る布掘り柵，2列は相平行する柵である。

SA01（Fig. 36, PL16）

調査区北側で検出した東西方向から南北方向へ鍵型に曲る布掘り掘方を持つ柵で，南北方向の主軸方位をN－3°30′－Wに取る。柵列の確認規模は東西方向6間分15.2m以上，南北方向4間分9.5m以上を測る。遺存状況は不良で，東側はSD03西側で消滅する。布掘り掘方は北側の一つを除いてSB01柱穴に切られている。布掘り掘方の規模は北側の完全に残るもので，長さ2.18m，幅0.6m，深さ40cmを測る。柵は3本1組で，その掘方の間隔は，2.25～2.70mと不統一である。3本の柱列の間隔は0.55～0.90mで一定性はなく，その柱筋は全体的に通らない。コーナー部分は掘方が斜に入っている。掘方底面は一般的に両端が一段深く，中央が浅くなる。柱痕跡は20cm前後で，底迄達するのもあれば，達しないのもある。その埋土は暗褐色粘質土，掘方は黒褐色粘質土と地山ロームブロックの混合である。

出土遺物（Fig. 37）　各掘方から古墳時代の土師器・須恵器片などと，弥生式土器・中世土師器皿片が各1点出土したが，大半が細片で図示出来るものは少ない。

156は土師器の把手で，断面形は扁円，指おさえ調整。161は石鎌片である。

SA02（Fig. 36, PL16）

SB01・SA01に切られ，主軸方位をN－79°－Wに取る東西方向に延びる柵である。確認規模は15間分で27.6mを測る。柱間隔は1.60～1.95mを測り，柱筋はほぼ通る。柱穴掘方の平面形態は円形又は楕円形で，大きさは45～65cm，深さは20～60cmを測る。柱痕跡は15～20cmで，その埋土は暗褐色か黒褐色土である。掘方埋土は黒褐色粘質土と地山ロームブロックを主体とする。

出土遺物（Fig. 37）　各柱穴から古墳時代の土師器・須恵器片が出土したが，量はそれ程多

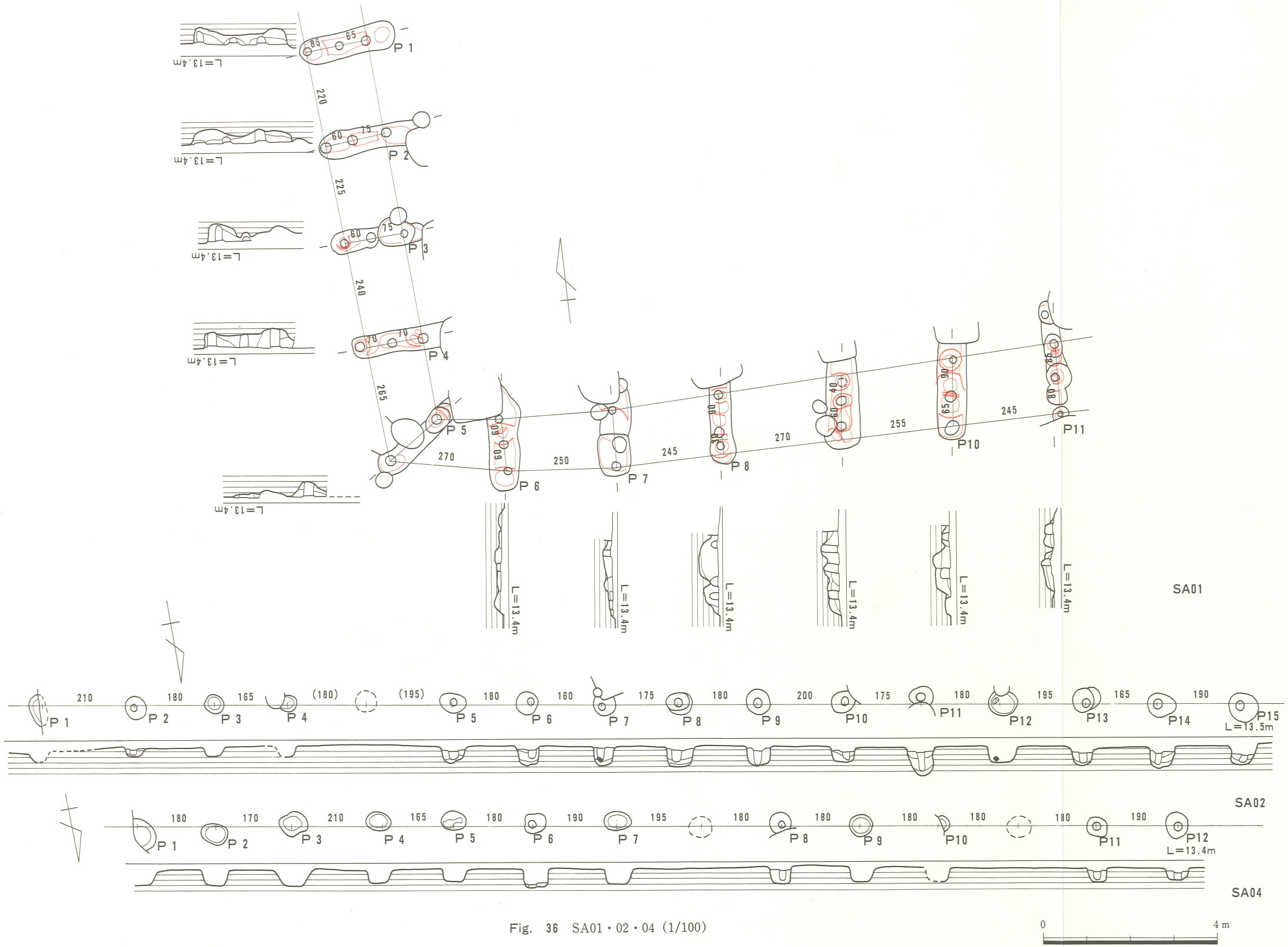


Fig. 36 SA01・02・04 (1/100)

くない。P11から土師器皿らしきものが1点出土した。P11は中世のSB12に切られている。

157は土師器の差込み式の把手で，上面に鋭い切り込みが入る。158は縄文土器の深鉢片で，胎土に滑石を混入する。中期の阿高系のものか。

SA03（Fig. 38，PL16）

調査区南側で検出した東西方向から南北方向に曲るSA01と同形態の柵である。東西方向で主軸方位をN—86°—Eに取る。確認規模は東西方向で7.45m以上を測る。柵は3本1組であるが，掘方の間隔はコーナー部分ということもあって，一定性もなく，柱筋も通らない。3本の柱列の間隔は50～105cmと狭く，不統一である。柱痕跡は15cm前後であるが，底迄届かないものもあり，底面の形態は一定性がない。埋土は黒褐色粘土にローム土を混入する。

出土遺物（Fig. 37）　各掘方から古墳時代の土師器・須恵器が出土したが，中世土師器皿らしきものも3点混入している。

159は須恵器の坏の口縁部片である。155は滑石製の臼玉である。

SA04（Fig. 36）

SA02と相平行して東西方向に延びる柵で，SB02・03に切られている。主軸方位はN—78°30′—Wに取る。SA02との間隔は3.7mを測る。確認規模は13間分23.5m以上を測る。柱間隔は1.65～1.95mの範囲でバラツキがある。柱穴の平面形態は円形又は楕円形が多く，直径は50～60cm前後，深さは30～40cm位である。柱痕跡は15～20cmで，その埋土は黒褐色粘質土である。掘方は黒褐色粘質土にロームブロックを混える。

出土遺物（Fig. 37）　各柱穴から弥生式土器，古墳時代土師器・須恵器などが出土しているが，大半は土師器で，出土量は少ない。又細片が多く図示出来るものが少ない。

160は土師器の牛角状の把手で，上面に深い切り込みが入る。162は土師質の管状土錘の破片である。

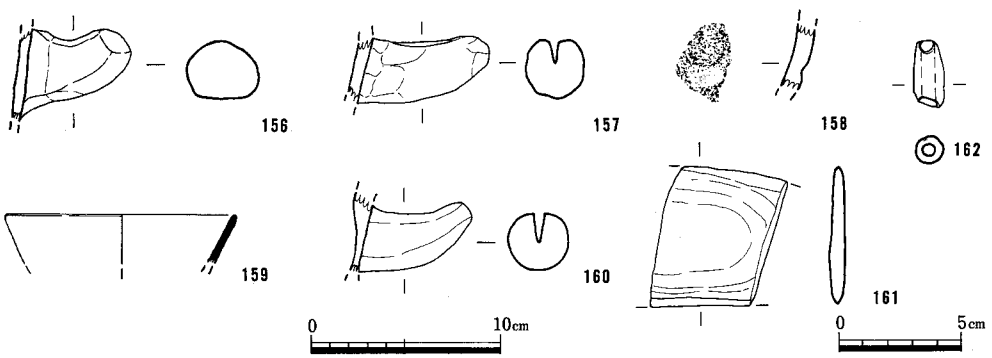
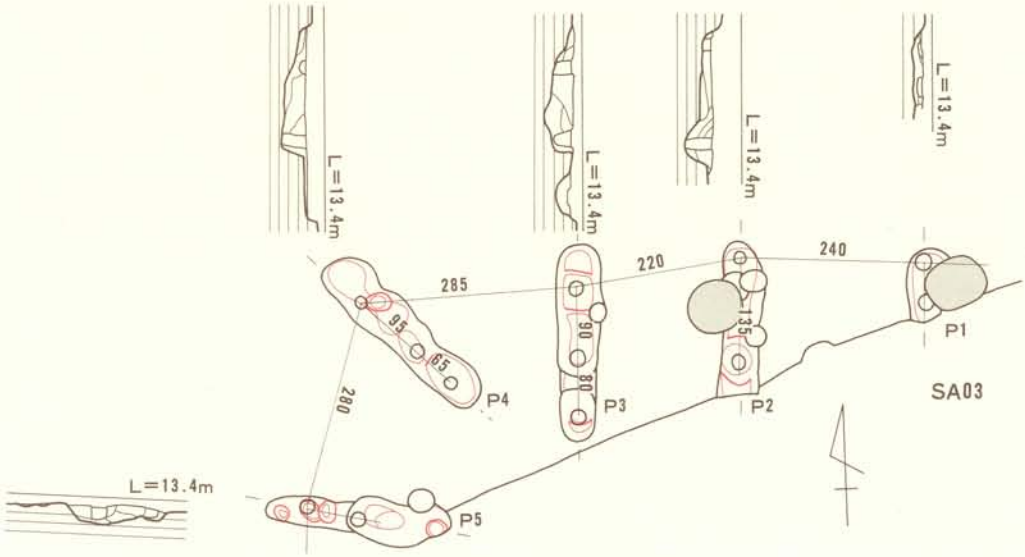


Fig. 37　柵出土遺物（1/4・1/3）



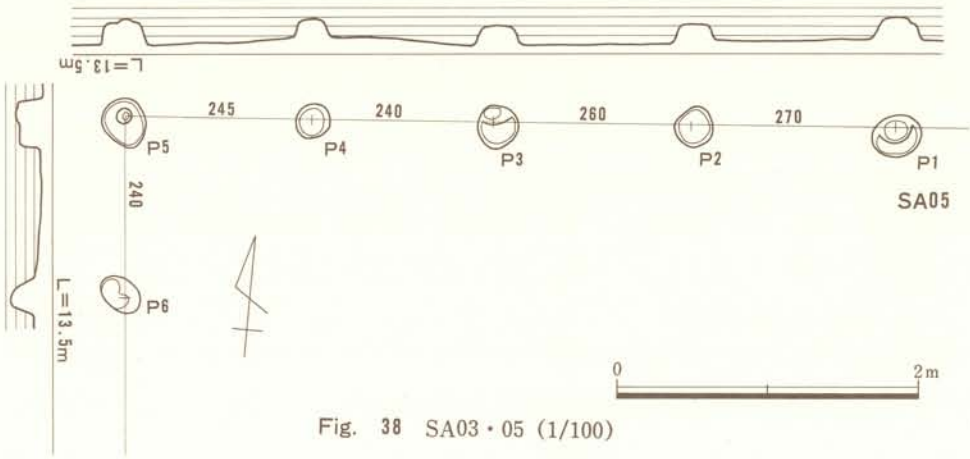


Fig. 38 SA03・05 (1/100)

SA05 (Fig. 36)

調査区南側で検出したSC01・02を切り，鍵型に曲る柵である。東西方向の主軸方位をN—86°—Eに取る。確認規模は東西方向で4間分10.15m，東西方向は2.4mを測る。柱間隔は2.40～2.60mの範囲でばらつき，柱筋は通る。柱穴の平面形態は円形又は楕円形で，直径は43～70cm，深さ20～30cmを測る。柱痕跡は20cmで，その埋土は暗褐色か黒褐色土である。P1の柱痕跡埋土には焼土を混入していた。掘方埋土は黒褐色土とロームブロックの混合である。目隠し塀のようなものであろうか。

出土遺物　各柱穴から弥生式土器，古墳時代土師器・須恵器，中世の土師皿・瓦器椀・青磁蛸壺などが出土した。古墳時代土師器の量が一番多い。いずれも細片で図示出来ない。

Tab. 5 柵一覧表 （尺は約30cmでする）

柵列番号	規模（間数）	方向	実長（m）	柱間寸法（尺）	方位	備考
SA01	南北→東西 10＋α	南北→東西	南北9.5 東西15.2	南北7.6・7.5・8・8.8 東西9・8.3・8.2・9・8.5・8.2	南北方向主軸 N−3°30′−W	布掘柵
02	15＋α	東西	27.6(92)	6.3・5.5・6.5・6・5.8・6.7・6・5.8・5.3・6 (12.5)・5.5・6・7	N−79°−W	SA04と平行
03	東西→南北 4＋α	東西→南北	東西7.6m以上 南北2.75m以上	東西9.5・7.3・8 南北9.3	東西方向主軸 N−86°−E	78次調査区に延びる
04	13＋α	東西	23.5m(78.3)	6.3・(12)・6・6・(12.5)・6.3・6・6 5.5・7・5.7・6	N−78°30′−W	
05	東西 4 南北 1	東西	東西10.3(34.3) 南北2.4(8)	東西8.2・8・8.7・9 南北8	N−86°−E	鍵形に曲る

注 SA01・03の柱間寸法は外側の数値である

溝状遺構（SD）

6条検出した。内訳は古墳時代後期から奈良時代頃の溝3条，中世末頃の溝3条である。

SD01（Fig. 39, PL 8）

南東隅で検出した南北方向の溝で，SD04を切る。東側は境界地にかかり，全容はわからない。確認長で16m，溝幅は3m以上，深さ1.85mを測る。溝断面はV字溝と思われる。埋土は暗褐色土から粘質土を主体とし，中層あたりでは少し砂を交え，下層は明褐色の地山ロームブロックを混える。南東隅でSD02と交差するが，平面観察，土層断面観察（Fig. 39）ではSD01が02を切るという状況を示し，また，溝の深さも一段下がる。しかし，SD01・02出土遺物にほとんど時期差はないこと，検出範囲が部分的であるということから，SD01・02の先後関係は直ちに断定はしかねる。

出土遺物（Fig. 40, PL21） 上中下3層に分け遺物を取り上げた。上層は1～4層，中層は5～9層，下層は11～12層に相当する。出土遺物は各層より弥生式土器，古墳時代の土師器・須恵器，瓦質土器，土師質土器，瓦，鉄滓，炭化物，焼土ブロックなどが多数出土した。量としては上層が一番多い。大半が細片で図示出来るものは少ない。

163～166は白磁である。163・164は皿。164は白磁類である。165～166は玉縁口縁の白磁碗片である。167は青磁で，碁筒底状の底部片である。見込みには3ヶ所の胎土目痕がある。二次加熱を受けている。168は青磁の瓶で，外面には青味がかった灰褐色釉がかかっている。169は陶器盤の口縁部片で，口縁部には部分的に砂が付着し，淡い緑がかった釉がかかる。170～173は土師器皿で口径は復元で6.8～9.4cm，器高は0.8～1.3cmを測る。174は土師質土器火舎の口縁部片である。外面には雷文が連続してスタンプされている。175～182の遺物は溝に関連する時期のものではない。175は須恵器の甕口縁部片であろうか。176～182は土師器である。176は壺か甕の底部片，器壁は厚く平底である。177は甕形土器の口縁部片と思われる。178・179は高坏の脚部片である。SD01は南側でSC05を破壊しており，176～179はSC05に伴う遺物かもしれない。180は須恵器の脚部片で，脚端部はコ字状におさめ，浅い凹線が巡る。178は土師器の坏身で，須恵器を模倣した器形である。182は土師器の盤口縁部片である。183は管状土錘の破片で，外面は指おさえ調査。184は鞴羽口片で，指おさえ仕上げで，部分的には煤が付着している。185

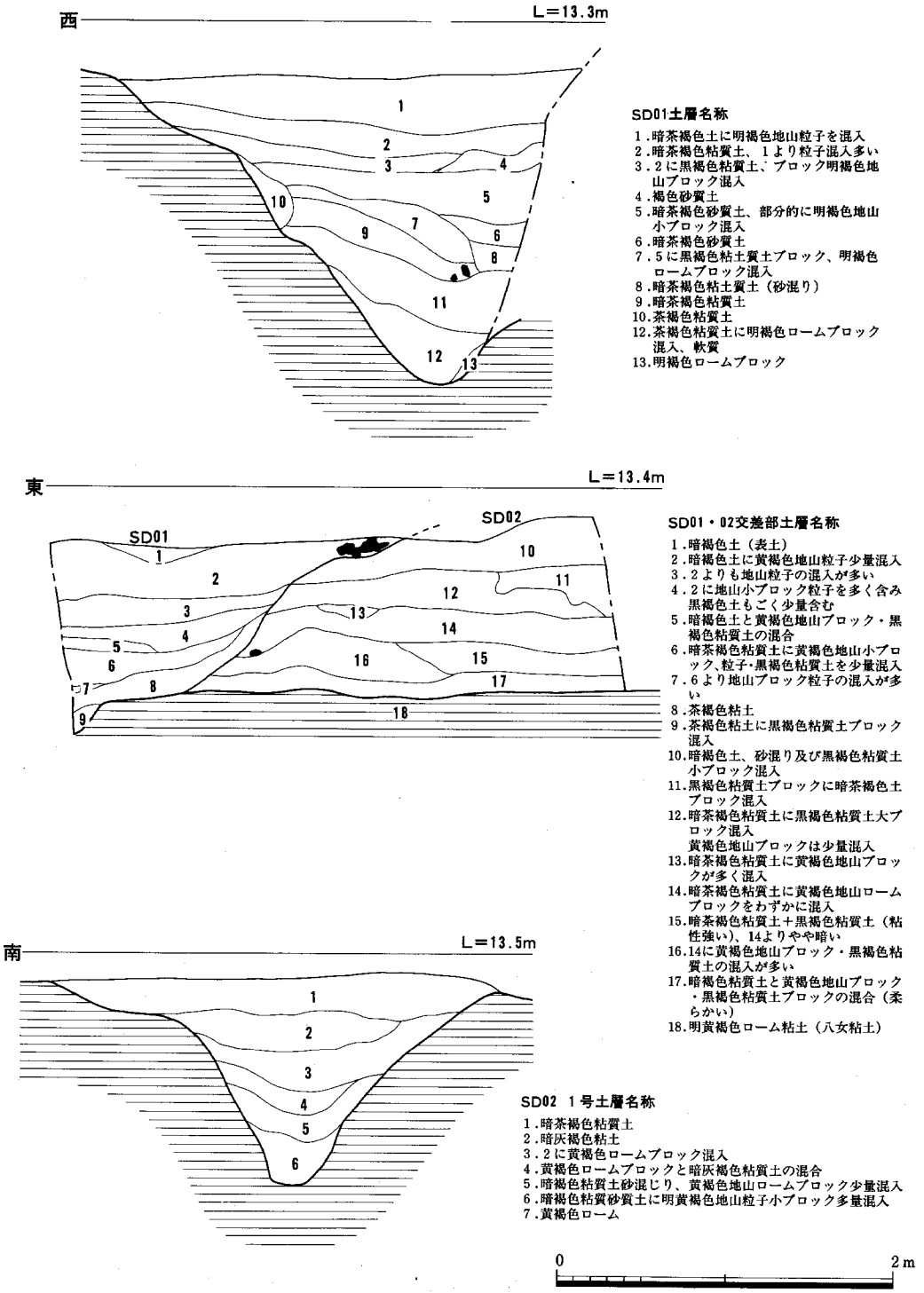


Fig. 39 SD01・02土層（1/40）

は石剣の未製品の破片と思われる。186は黒曜石の石鏃である。

出土状況は上層が163・164・168・169・171・172・174～176・179・180・183，中層が165・173・174・177・178，下層が167・181・182・184である。

SD02（Fig. 39，PL 8）

調査区南側で検出した東西方向の溝で，SC01・02を切る。確認長は21.5m，溝幅は2.7m，深さ1.25mを測る。溝断面はV字形で，南側は2段掘りで，一段テラス面の平坦面を持つ。埋土はレンズ状堆積をなし，上層の方は暗褐色粘質土を主体とし，中層から下は黄褐色ロームブロックの混入が多くなる。

出土遺物（Fig. 41・42，PL21）　遺物は中央土層ベルトの西を1区，東を2区とし，上中下の3層で取り上げた。対照層は大体，上層は1～2層，中層は3～5層，下層は6層にあたる。出土遺物は弥生式土器，古墳時代土師器・須恵器，中世土師器，瓦質土器，土師質土器，瓦類，明の染付・青磁・白磁などの輸入陶磁器鉄滓4点などが多数出土したが，大半は細片である。上層からの出土が一番多い。

187～190は明代の染付である。187～189は碗で，呉須により文様が描かれている。187は見込に魚文，外面に唐草が描かれる。190は皿である。191～194は白磁碗である。191・192の口縁部は端反りする。193・194は底部片である。195・196は青磁碗である。195は青磁碗の底部片で，見込みに印花がある。196は李朝磁器で，見込みに3ヶ所砂目痕が残る。197は長沙窯系の青磁褐彩水注の貼花部分の破片である。198～202は土師器皿である。底部はいずれも糸切り。198～200は口径が6.5～7.2cmと小型，201・202はそれより大型である。203は土師質土器で方形の火舎の破片である。四隅に脚が付く。使用による熱変化を受けている。204は瓦質土器の足鍋の支脚である。205は鉄器片であるが，器種は不明。206～208は土師質土器である。206は鍋である。外面は全体に煤が付着する。207・208は湯釜の体部片である。207の体部中央には鍔が1条巡り，下の方は煤が付着する。208には断面三角形の小さな突帯が巡る。209～213は古墳時代の土師器。209・210は甕形土器で，209は口縁部が外側にやや膨む。210は二重口縁状の口縁を持つ。211は脚台付鉢の脚台部片で，円形透孔が入る。212・213は高坏の脚筒部片で，エンタシス状の膨みを持つ。212は筒部下半に直径8㎜の円形透孔が入る。215は黒曜石のスクレーパーと思われる。

出土状況は上層が187～189・191～194・198～205・207・209～215，中層が190・208，下層は206である。209・210・212・213はSC05に近い位置からの出土で，SC05に伴う可能性がある。

SD03（Fig. 43，PL 9）

調査区東側，SD01にほぼ平行し南北に延びる溝で，SD04・SB06を切っている。SD04の南で立上り，完結する。溝の確認長は24m，幅は1.15m，深さは0.85mを測り，溝断面形は逆梯形を呈す。埋土は3及び4層に分かれるが暗褐色土，又は粘質土を主体とし，下層の方はローム

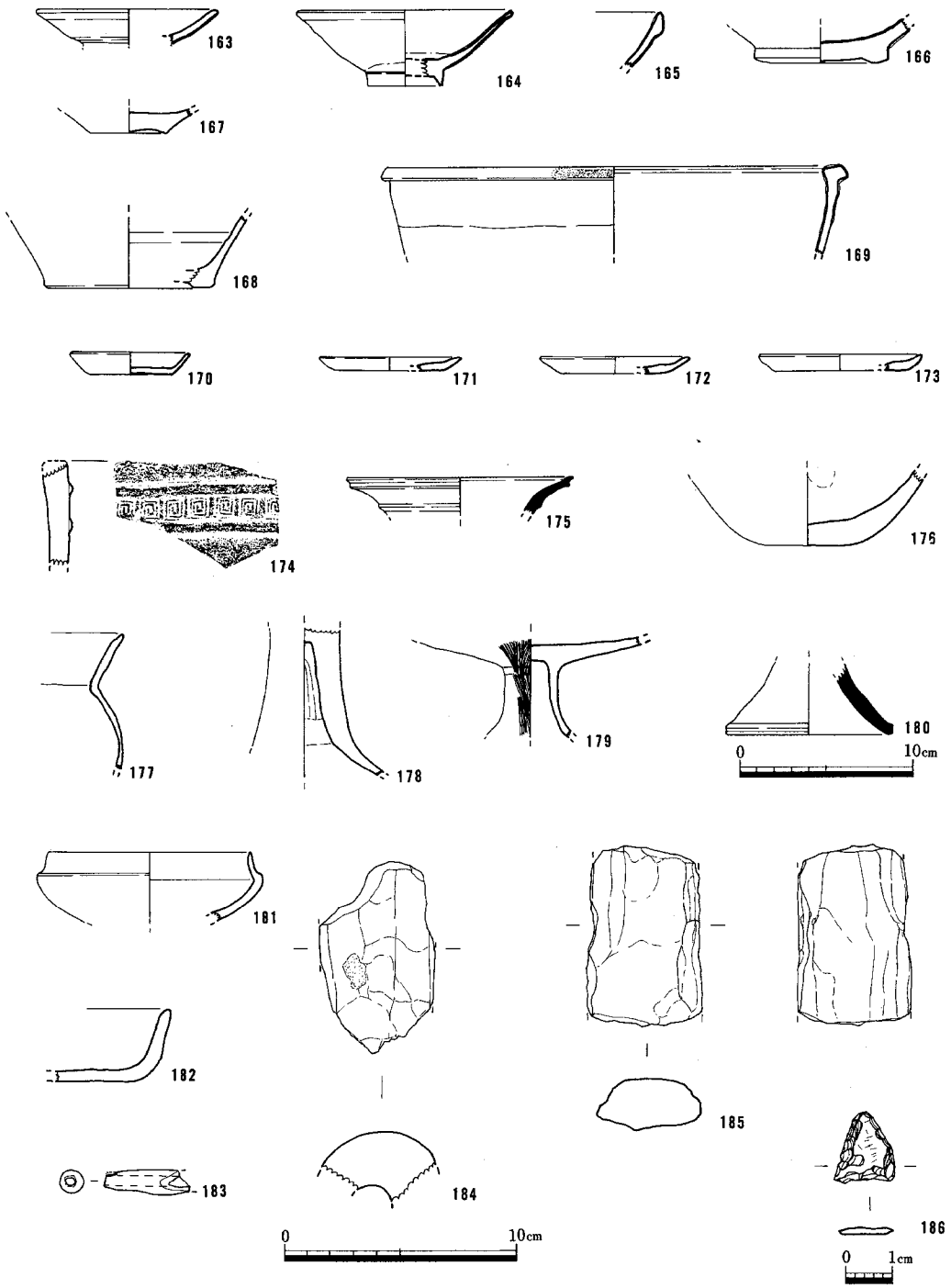


Fig. 40 SD01出土遺物（1/4・1/3・2/3）

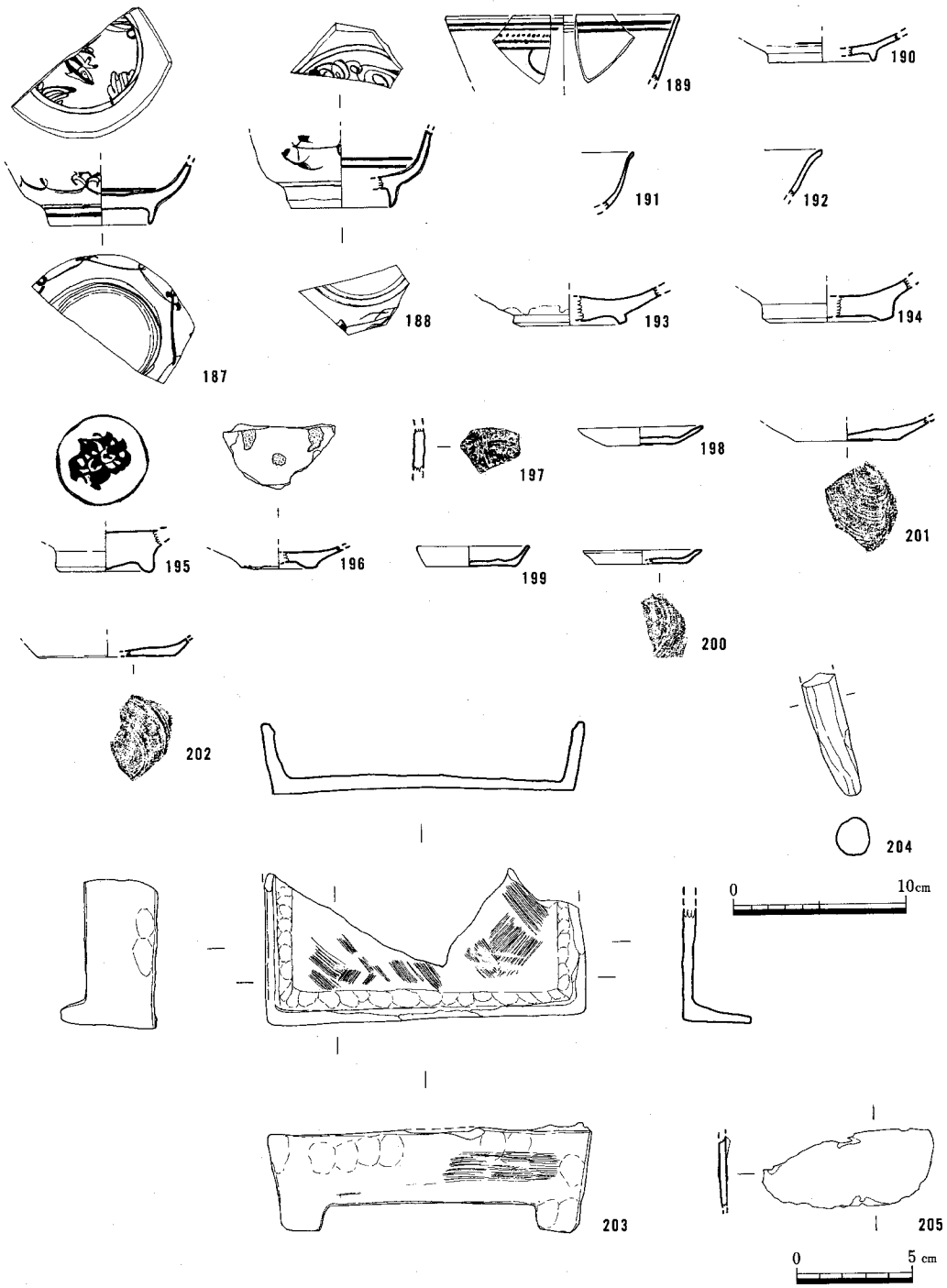


Fig. 41 SD02出土遺物Ⅰ (1/4・1/3)

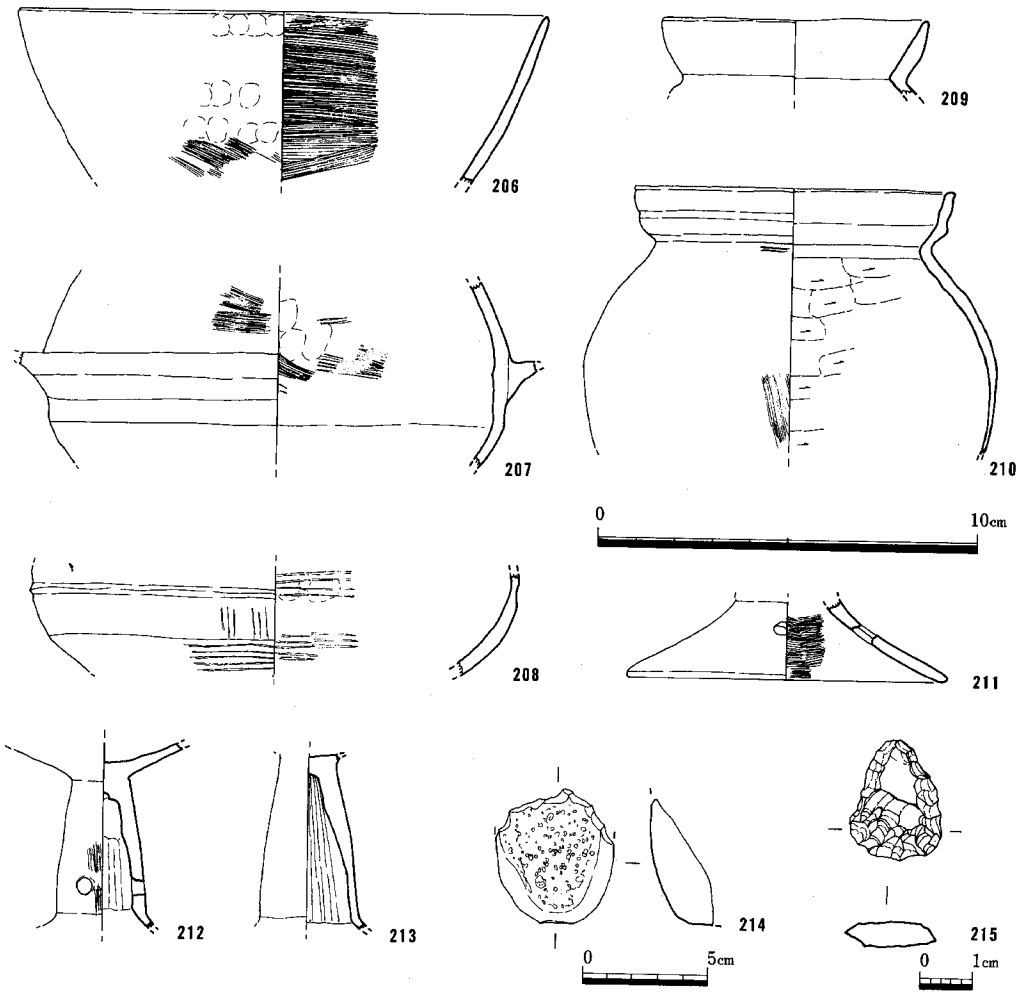


Fig. 42 SD02出土遺物II (1/4・1/3・2/3)

ブロックを混入する。この溝は当調査区以外繁がる部分が検出されていない。

出土遺物(Fig. 42, PL22) 土層ベルトを基準に南から1～3区とし，土層に合せて上中下3層に分けた。出土遺物は弥生式土器，古墳時代土師器・須恵器，中世の土師器，土師質土器，瓦質土器，瓦，鉄滓5，砥石片らしきものが総数250点近くあるが，大半が細片である。上層からの出土が一番多く，下層は少ない。

216～218は白磁である。216は小型の水注の注口部で，体外面には蓮弁状の印文が入る。217は玉縁口縁碗で，218はその底部片，220は瓶の体部片，219は褐釉陶器の瓶で人物像の貼付部分片である。221～229は土師器の皿で，221～227は口径6.5～9.0cm，器高1.4～1.8cmを測り，221・222は器高が比較的高い。229は復元口径11.4cmと前述のものより大きく，体外面は水引痕が残

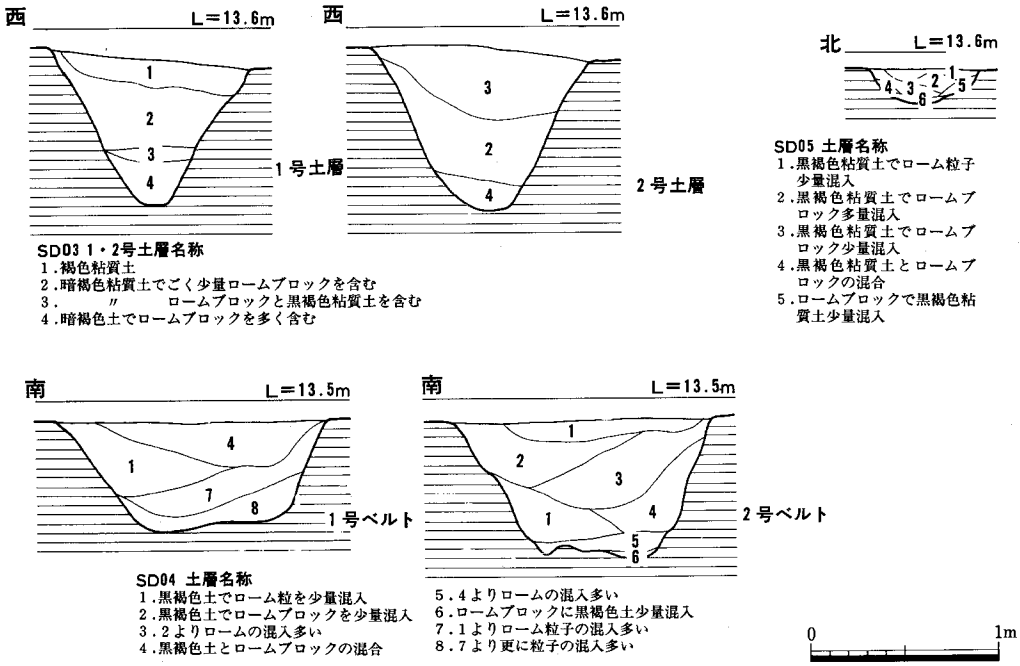


Fig. 43 SD03～05土層 (1/40)

る。230は土師質土器の摺鉢片で内面に5条の深い条線が入る。231は土師器の飯蛸壺の口縁部片である。232は鉄製の鋤先片で南ベルト上層から出土した。

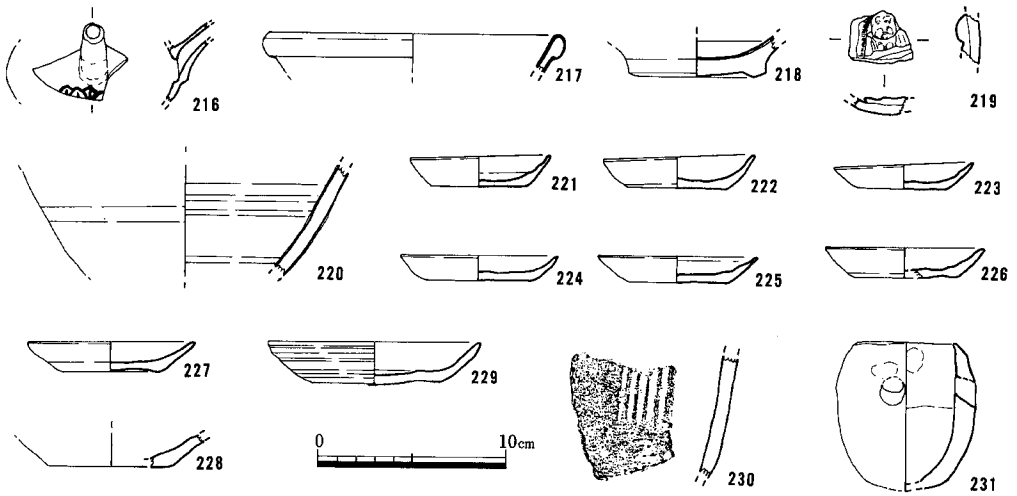
出土状況は上層が216・218・220・222，中層が217・219・221・230，下層は222～227・231である。

SD04（Fig. 43，PL 9）

東西方向に延びる溝で，東端はSD01・03に切られる。西側ではSB09・SC02を切っている。確認長24.5m，幅は1.4m，深さは0.6～0.75mを測り，西側の方が深くなっている。溝断面形は逆梯形を呈し，底面は少し凹凸がある。埋土は黒褐色土を主体とし，下の方ほどロームブロックを多く混入する。

出土遺物(Fig. 44，PL22) 出土遺物は上中下の3層に分けて取上げた。上層は東ベルトの1～3層にかけて，中層は3～5層，下層は6・7層である。遺物には弥生式土器，古墳時代の土師器・須恵器が200点近く出土したが，大半が細片である。上層からの出土が多い。

233～241は須恵器。233は坏で短く外反する高台が付く。234は皿または盤で，底部はやや上げ底で，口縁部は外湾気味に直立する。235は坏身の受部から底部片，須恵III b期位であろう。236は高坏脚部片で，裾端部は直立し，三角状におさめる。237は壺の口縁部片で，口端部に浅



い凹線が巡る。238は大型器台の破片である。外面には三角突帯が2条巡り，その上下に波状文が入る。239は甕の口縁部片である。口縁下には三角突帯が1条巡る。240は壺の口縁部片で，く字状に外反し，口端部は上方に少しつまみ上げる。241は大型器台の脚裾部片と思われる。復元脚裾径29.6cmを測り，外面には三角突帯が2条あり，その間に1.7cm間隔で方形透孔が入る。242は土師器の把手である。243・244は土師器の蛸壺形土器で，244には直径2cm，幅1.4cmの長楕円形の孔が1ヶ所あけられている。

出土状況は上層が233・234・236～241，中層は235・

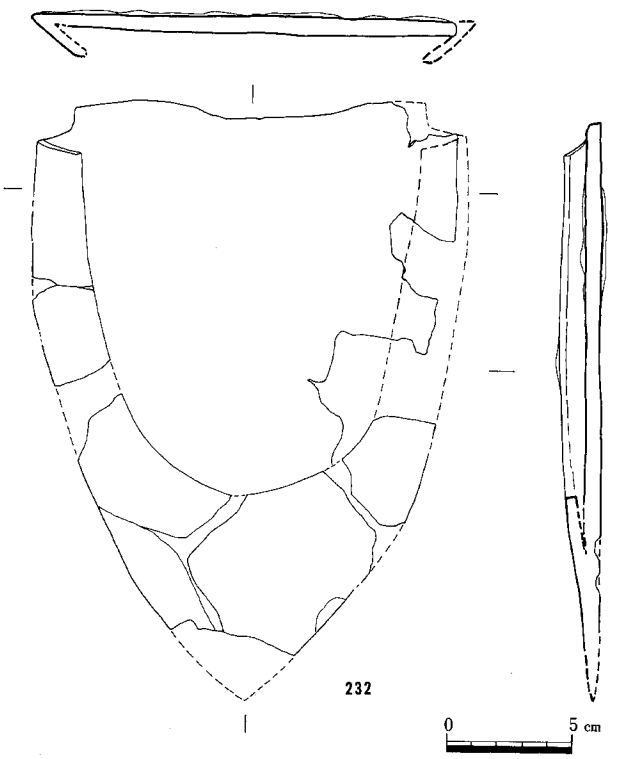


Fig. 44 SD03出土遺物 (1/4・1/3)

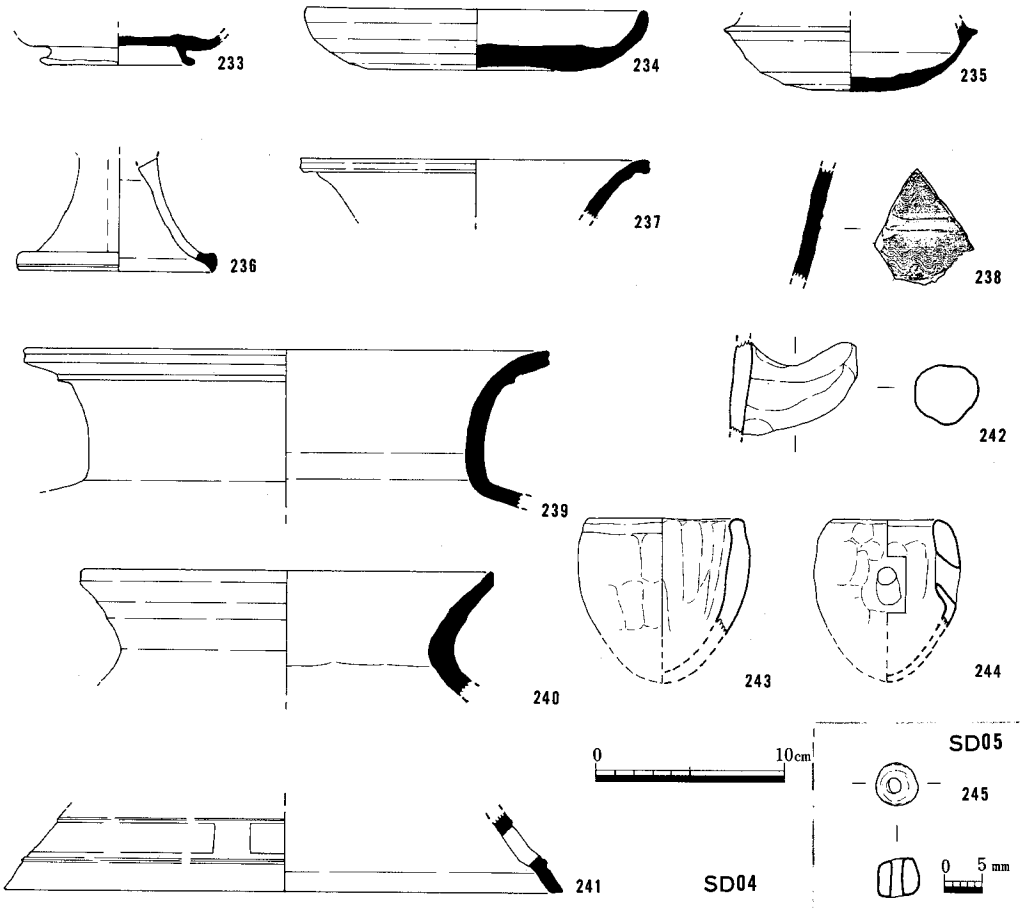


Fig. 45 SD04・05出土遺物 (1/4・1/1)

244，下層は242である。

SD05（Fig. 43）

調査区中央のSC05を切る小溝である。長さ3.43m，幅0.63m，深さ18cmを測り，溝断面形は丸味を持った逆台形で，中央がやや深くなる。埋土は黒褐色粘質土でロームブロックを混入する。底面には5個の浅いピットがあった。

出土遺物（Fig. 45，PL 9） 古墳時代の土師器・須恵器などの破片が115点出土したが，大半が細片で図示は出来なかった。また中世の土師器皿の底部片が2点出土した。

245はガラス製の小玉で，色調は緑青色を呈す。土層ベルト中出土である。

SD06（PL 9）

調査区中央東寄で検出した小溝である。全長3.6m，幅0.75m，深さ10cmを測り，溝断面形は

逆梯形状を呈す。埋土は暗褐色粘質土で地山ローム，黒褐色粘質土ブロックを混入する。

出土遺物　量は少なく，古墳時代の土師器・須恵器の細片合せて15点出土した。

ピット出土遺物（Fig. 46）

246～250は須恵器である。246は坏蓋で天井部は平坦である。247は坏で短い高台がつく。248は坏で外傾する口縁部を持つ。249は扁平な形状のつまみである。250は坏身片で，口縁部は内傾する。251は土師器皿で，底部糸切りである。252は須恵器の坏身受部片で，立上りの内傾具合は弱い。253～255は土師器で，253は椀形の鉢型土器で，口縁部は直立し，底部は丸底である。254は甕形土器である。口縁部はく字状に屈折する。内外面は斜めハケ。255は土師器皿で，底部は糸切りである。256は須恵器で，体部外面に把手の付いた痕跡があり，把手付小鉢と思われる。体部最大径は5.6cmと小さい。257は砂岩製の砥石で，上下左右の4面とも使用面となっている。258は小形の片刃石斧である。粘板岩製でかなり磨り減っている。259は抉りの深い黒曜石の石鏃で縄文時代のものと思われる。260は銅銭。中国は北宋時代の『太平通寶』である。初鋳年は太平興国元年，976年である。261は滑石製の臼玉である。246～248は SP 7，249は SP34，250は SP126，251は SP135，252は SP149，253は SP254，254は SP247，255は SP271，256は

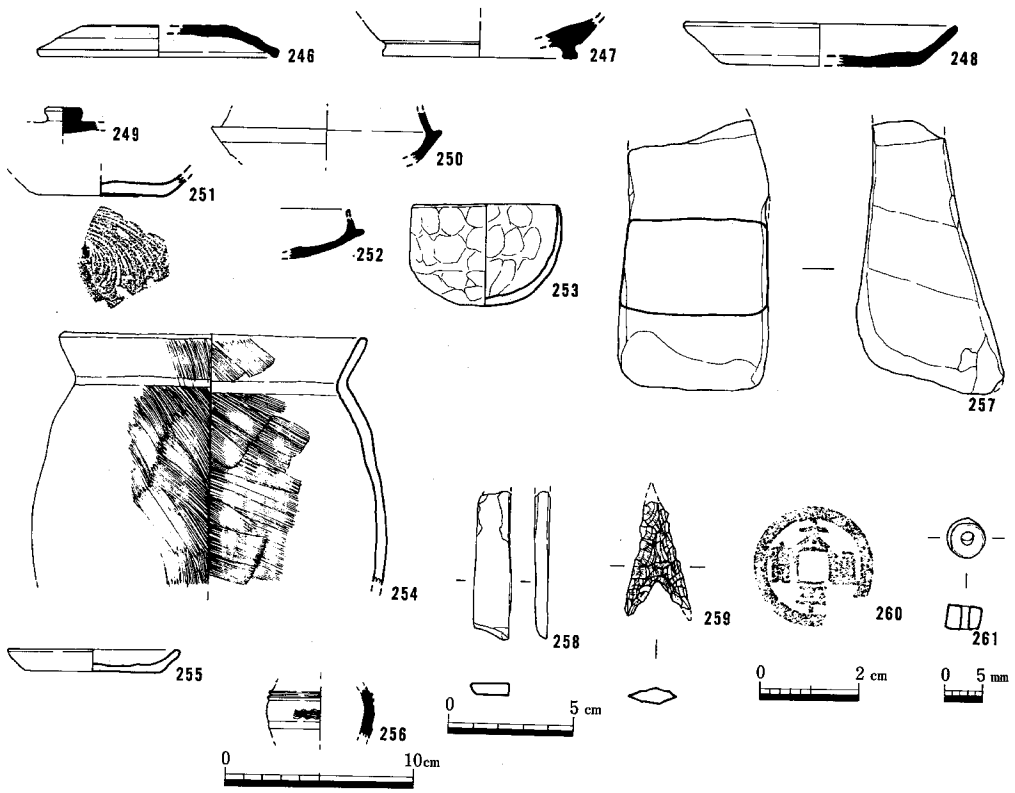


Fig. 46　ピット出土遺物（1/4・1/3・2/3・1/1）

SP320，257はSP 8，258はSP261，260はSP41，261はSP112出土。

攪乱土坑出土遺物（Fig. 47）

1・2号攪乱土坑より大量の陶磁器が出土したが，今回の紙面の都合もあって，文字が書かれていた4点について報告する。

262～265はいずれも白磁の小坏である。262は見込みに金文字が書かれているが，意味は不明。263は上棟式に使われていたもので，金文字で『上棟式　坂口』と書かれ，旗に四菱の家文が描かれている。264は金文字で『褌振　泉仁子　開矢』とある。265は『褌振××松』とある。以上は1号攪乱出土である。

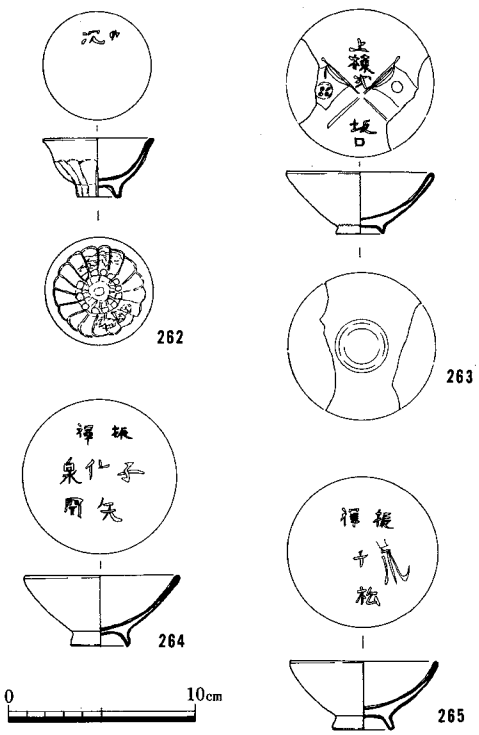


Fig. 47　攪乱土坑出土遺物（1/4）

旧石器時代の調査（Fig. 5）

各遺構から旧石器時代の遺物が出土したので，調査の最終段階に，比較的遺構の薄い部分を中心に2×2mの方形トレンチを6ヶ所設定し，旧石器の調査を行った。黄褐色粘質ロームの地山を15～30cm程掘り下げたが，旧石器時代頃と思われる黒曜石の剝片が3点出土したのみである。明確な遺物乞含層は発見することは出来なかった。

旧石器時代の遺物（Fig. 48，PL22）

各遺構の覆土から出土した黒曜石のなかに旧石器時代の石器が含まれていたので報告しておく。

剝片(1)　やや飴色をした小型の剝片である。打面は平坦で無調整。頭部調整あり。19.8×19.4×4.7mm。SK-36より出土した。

台形様石器(2)　黒曜石製の横長剝片を利用した製品である。左側辺の上半部と左側辺の下半部にブランティングを施し，他は剝辺のエッジを残している。旧打面側は切断の可能性がある。基部付近の両面（図網点部）に稜の潰れや磨耗の痕跡が観察され，装着痕であろうか。32.4×21.0×5.2mm。SD-01上層より出土。

両面加工品(3)　板状の大型剝片を利用した両面加工品である。背面は一部素材の礫面を残して，求心的な入念な調整剝離を加えている。腹面側は，大きな剝離痕をとどめており，調整剝離も顕著ではない。側辺と下端部に細かい剝離が加えられ，上面は大きな剝離面（2ないし3）で

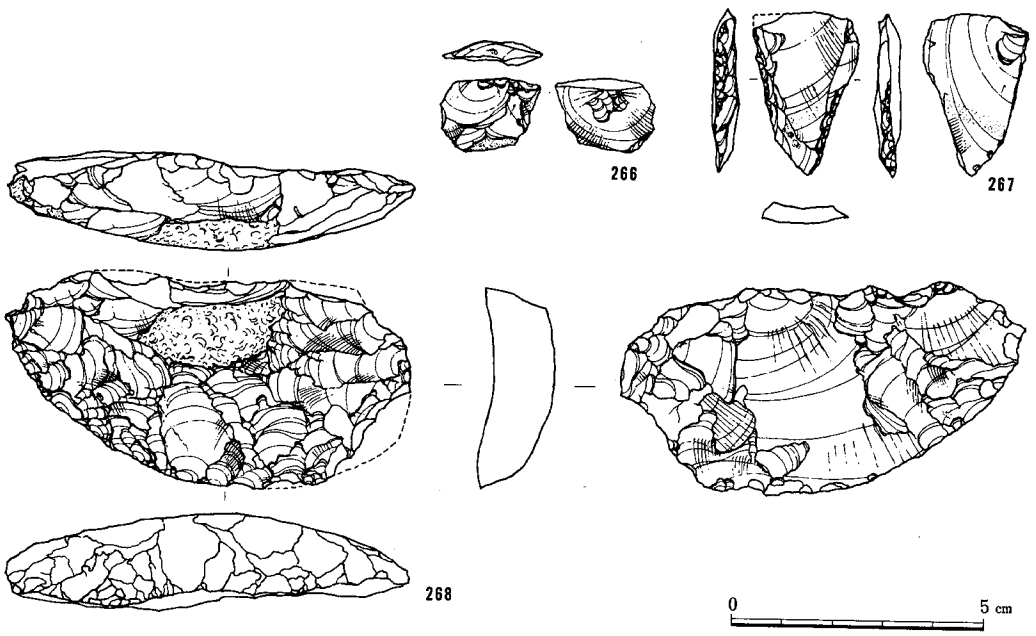


Fig. 48 旧石器時代遺物 (2/3)

構成されることから，残核を利用したスクレイパーと考えられる。82.1×41.8×16.4mm。SC-02上層より出土した。(小畑)

3） 小 結

以上調査の概要について述べたが，ここではそれらを総括し，主な遺構毎に若干のまとめを行ないたい。

住居跡は全部で5棟検出した。内訳は古墳時代前期のもの3棟，後期のもの2棟である。前期はSC01・02・05で出土遺物，特に甕形土器の形態的特徴から布留式土器の古段階のものと考える。SC05は他遺構に切られ一部しか残っていないが，切っている溝出土のものや，遺構出土の遺物などから，ほぼ同時期であろう。SC02出土の48はSC01出土のものと接合した。またSC02から水晶が1点出土した。SC03・04は平面形態が方形で後期のものと考える。時期を決めうる遺物は少ないが，SC03出土の64は張りの弱い肩部から外傾気味に開く口縁部の形態から6世紀代のものと思われる。古墳時代の住居跡は有田地区台地ではほぼ全域で検出されている。弥生時代終末から古墳時代前期にかけては台地上の高所部を中心に分布し，中期は第57次・141次周辺，後期には谷を臨む斜面上の第108次・124次地点に多く分布する。ただ有田地区台地は過去度重なる地形改変を受けており，この傾向が本来的なものかは断定しがたい。Fig.49で前期の住居跡の分布状況を示したので，少し説明する。弥生時代終末から古墳時代初頭の住居跡は一般

に長辺が6～7mと他時期のものより大きく，主軸方向を南西から北東に取り，入口とされる屋内土坑が南壁側に付く傾向がある。しかし前期の布留期になると，主軸方向は東西に取るものが多くなるが，依然入口は南側に付く状況を示す。早良平野は冬季北から西方向の季節風が強く，寒風が直接入るのを避けたものかもしれない。

溝状遺構は全部で6条検出した。内訳は奈良時代を中心とするもの3条，中世後半代のもの3条である。前者はSD04～06，後者はSD01～03である。SD04は東側第77次地点の溝に連なり，そこで北へ直角に曲がる。北側の第55次地点の3号溝[注1]，北の第32次地点の2号溝[注2]と共に約80～95m前後の方形の区画を形成する。この溝は他地点では奈良時代に位置ずけられている。当地点では233・234がほぼ時期を代表するものと思われ，7世紀末から8世紀前半が考えられ，他地点と概ね一致する。SD05・06は時期を決めうる遺物はないが，SD04とほぼ平行しており，近い時期であろう。SD01～03は当地一帯で検出されている曲輪状に巡る空濠状遺構である。SD01と02は一見コーナ部分に見えるが，SD01の方が幅が広く，深い。SD02は明代の染付や，李朝の青磁，瓦質土器三足支脚片などを含み，16世紀代のものである。SD01もSD02との切合関係や埋土の状況，李朝陶器167や土師器皿170が第70次調査区出土[注3]のものに法量的にほぼ一致することからほぼ同時期のものである。いずれにしてもSD01と02は比較的短期間に埋没したものであろう。SD03もSD01と平行し，土師器皿の形態などから同時期のものと思われる。

掘立柱建物・柵は全部で17棟と5列検出した。それらは主軸方位・切合関係から大きく7類型に分類出来る。

Ⅰ類はSB16で主軸方位をN－29°－Eに取る。

Ⅱ類はSA02・04，SB04で，SB04と柵は重複するが，主軸方向はほぼ同じ。布掘り建物の出方からしてSB04がSA02・04より後出するかもしれない。

Ⅲ類はSB03・05・SA01・03で，SB03・05は柵に囲まれた総柱の倉庫である。

Ⅳ類はSB02である。Ⅴ類より主軸が少し北に振れる。

Ⅴ類はSB06と09で，SB09は布掘建物。柱筋はほぼ通り，いずれも柱痕跡は50cm前後である。掘方は深く，しっかりしている。

Ⅵ類はSB01・07でSD04に囲まれた建物群。SB01・07は東側妻側の柱筋が一致する。

Ⅶ類はSB12～15・17・18の時期で，SB17・18が重複しており細分出来そうである。

他地点との比較をすればⅠ類は主軸方向がやや異なるが，2×2間の総柱建物の規模で第101次地点の4号建物とほぼ同じか，Ⅱ類の柵は当地点以外延長が確認されておらず，詳細は不明。Ⅲ類のSA01は北側の第101次地点に連なり，同地点の1・3号建物と共に，SA01に囲まれた倉庫群を形成する可能性がある。Ⅳ類は主軸方向がⅤ類に近く，Ⅵ類より南へやや振っている。第82次地点の2号建物や3・4号建物，第29次地点のSB01に概ね主軸方向が一致する。Ⅴ類はⅣ類に主軸方向が近い。Ⅵ類は第82次地点の1号建物，未報告で断定はしがたいが，第77次地

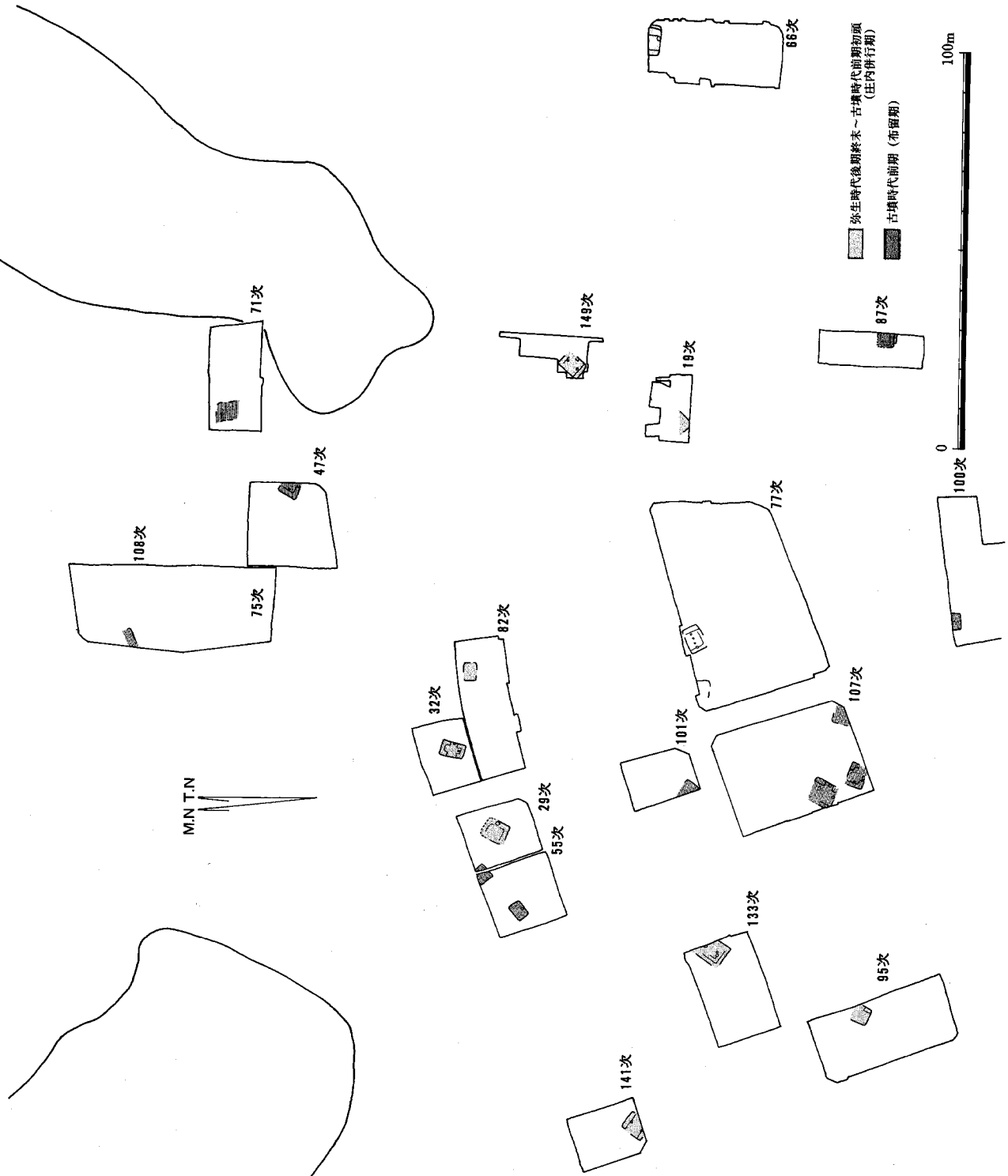


Fig. 49 有田地区台地古墳時代前期住居跡分布状況（1/1500）

点の南北方向の側柱建物と関連すると考える。第82次地点の1号建物は4個の柱穴から土師器皿，白磁，青磁片が出土[注4]している事から，時期を12～13世紀としている。当地点のSB01柱穴からも若干の中世の遺物が出土している。しかし，遺構配置図に見るように，中世のピットが多々切り合い，中世の建物が6棟検出されている。いずれも柱穴は深く，切り合った場合，下層の方に遺物が混入する可能性はある。全体的に見れば，第82次地点の1号建物も方形区画の中の一つの建物と考えた方が良いのではないか。Ⅶ類は2×3間を基準とする建物で，遺物が少ない為，時期は明確に出来ないが，SB18出土の土師器皿の形態，法量がSD01～03出土のものと近い。現在中世後期の曲輪状遺構に伴う建物群は不明であるが，第107次地点の建物群は，第100次地点の建物群と共に，それらに伴う可能性がある。SB08・11，SA05は以上の類型に少し入りにくく，保留した。

各類型の時期であるが，出土遺物が少なく，また他時期の遺構と重複し，遺物の混入の可能性が強く，時期は決めにくい。先後関係で言えばⅠ類→Ⅱ類→Ⅲ類→Ⅳ/Ⅴ類→Ⅵ類→Ⅶ類であろう。Ⅰ類のSB16は須恵Ⅲb期のSK05～07を切り，それ以降の時期，Ⅱ類はSB04出土の113が須恵Ⅴ期に近く7世紀前半以降，Ⅲ類が平底の坏やSA03出土の付高台の坏と思われる159などから，同器形が現われる7世紀後半代以降のもの。Ⅳ類・Ⅴ類はⅤ類のSB06抜跡出土の115から8世紀前半から中頃に取り壊されたと考え，それ以前，Ⅵ類は同類のSD04がⅤ類のSB09を切る事から，8世紀前半から中頃と考える。Ⅶ類は前述したように15～16世紀頃と考え，曲輪状遺構内の屋敷地の可能性がある。

以上調査のまとめについて述べたが，浅学な為，充分な検討は出来なかった。今後機会があれば，再度検討してみたい。

尚，墨書土器の鑑定にあたっては，九州歴史資料館の倉住靖彦氏にお忙しい中，御迷惑をおかけした。心からお礼を申し上げたい。

（山崎）

注1　「有田・小田部第5集」1984

注2　「有田・小田部第4集」1983

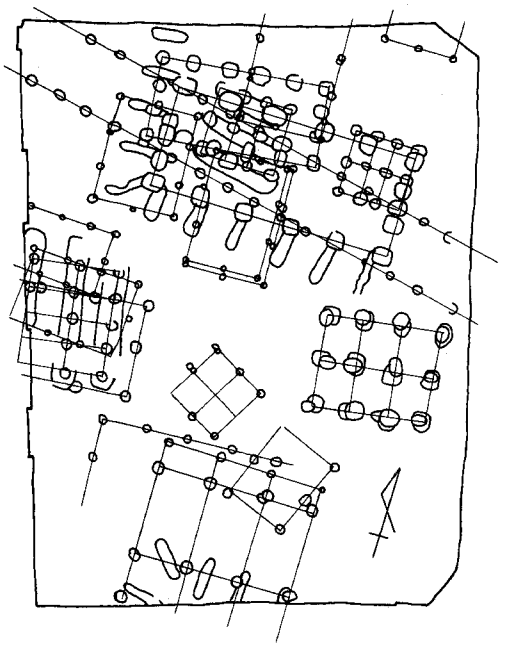
注3　「有田・小田部第9集」1988

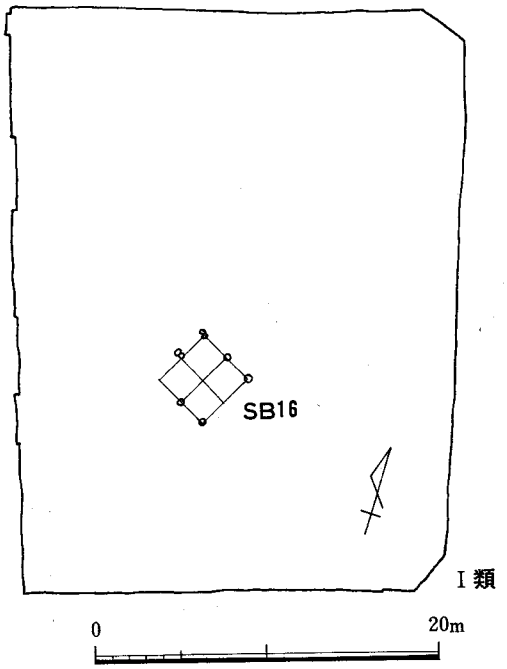
注4　昭和58年調査，現在整理中

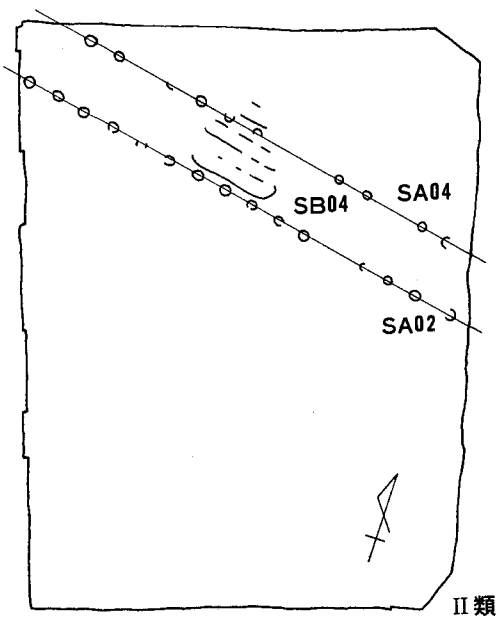
Tab. 6　有田地区台地大型建物跡一覧表

調査地点	遺構名	規模	梁間方向 (m)	桁行方向 (m)	(m²) 床面積	① 主軸方向	時　期	備　考	
第29次地点	SB01	3×4	6.90	9.75	67.28	東西N83°E	8世紀中頃	第55次 1号建物と同一	②
第30次地点	17号建物	2×3	3.90	4.50	17.55	東西N88°30′W	8世紀	第53次にかかる	〃
第55次地点	2号建物	3×4	6.75	8.25	55.69	南北N6°W	8世紀中頃		〃
第56次地点	1号建物	2		4.20		南北？N1°30′W	奈良時代		〃
〃	2号建物	1×2	2.04	3.00		南北？N4°E	〃		〃
第66次地点	1号建物	2×5	4.30	13.00	55.90	南北N7°50′E	8世紀中頃		〃
〃	2号建物	2×6	4.30	15.60	67.08	南北N7°50′E	〃		〃
〃	3号建物	1×2？	1.95	3.90		南北？N6°10′W	〃		〃
第82次地点	1号建物	3×9	7.32	21.88	159.59	東西N87°W	12世紀後半～13世紀		④
〃	2号建物	3×4	6.48	9.30	60.26	東西N84°E	7世紀後半～8世紀		④
〃	3号建物	2×3	4.20	6.42		東西？N85°E	〃	第32次にかかる	〃
〃	4号建物	1×3	2.10	7.02		東西？N84°E	〃	〃	〃
第87次地点	1号建物	2×5 以上	5.20	8.00以上		南北磁北	奈良時代	〃	〃
第101次地点	1号建物	2×3	3.36	4.26	14.31	東西N84°W	奈良時代	布掘り建物	〃
〃	2号建物	2×5	5.10	12.24	62.42	南北N5°W	〃		〃
〃	3号建物	2×1+α	3.60	1.50+α		東西N85°W	〃		〃
第107次地点	SB01	3×5	6.00	14.10	84.60	東西N90°E		Ⅵ類	⑤
	SB02	3×5	4.80	9.75	46.80	東西N84°E		Ⅳ類	〃
	SB03	2×3	3.65	3.75	13.70	東西N89°W		Ⅲ類	〃
	SB04	2×α						Ⅰ類 布掘り建物	〃
	SB05	2×3	4.15	4.20	17.43	東西N87°W		Ⅲ類	〃
	SB06	2×3	5.40	6.30	34.02	東西N80°E		Ⅴ類	〃
	SB07	1+α×3	7.70	9.45	49.61+α	東西N87°E		Ⅵ類	〃
	SB09	2×4	5.10+α	6.30	32.13	南北N11°W		Ⅴ類 布掘り建物	〃

注①　主軸は建物の長軸方行を基本とし，その方位は磁北よりの偏差である。
②　有田・小田部第5集　1984
③　有田・小田部第6集　1985
④　有田・小田部第7集　1986
⑤　本報告書掲載







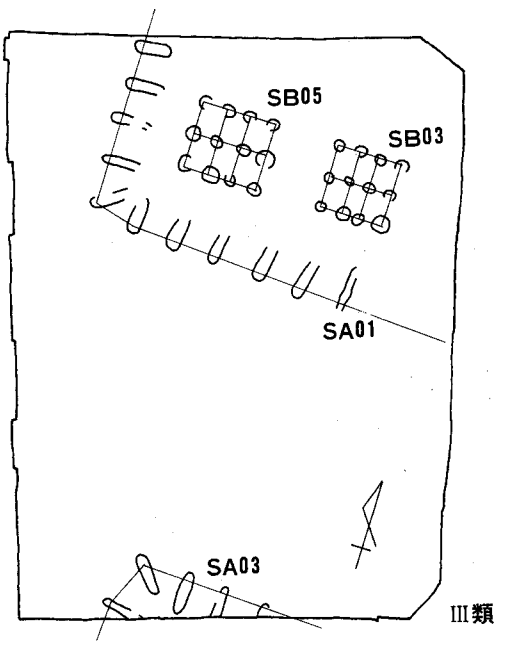


Fig. 50 第107次建物類型図(1) (1/450)

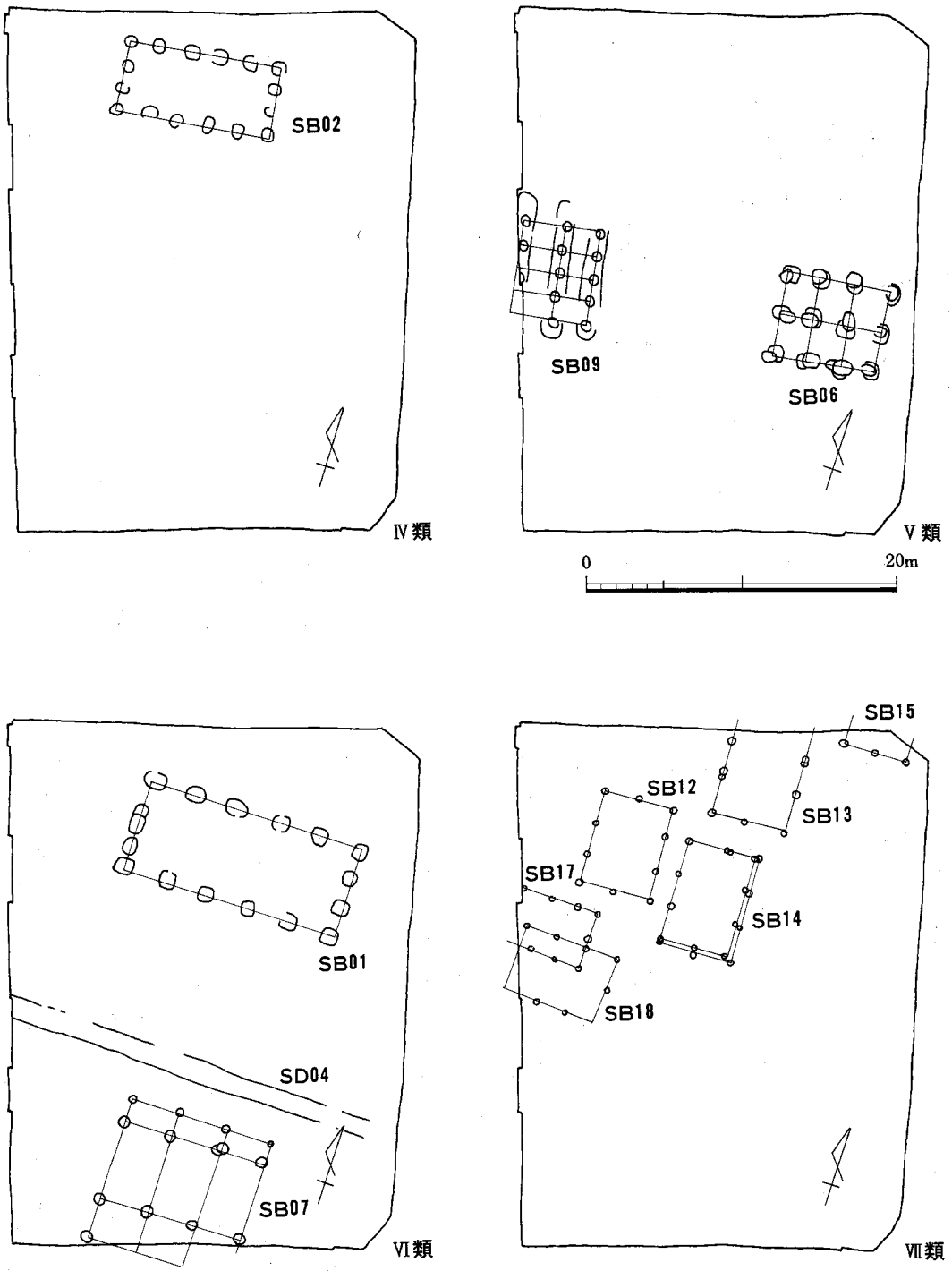


Fig. 51 第107次建物類型図(2) (1/450)

2．第113次調査（調査番号8646）

1）調査地区の地形と概要

調査地は有田1丁目28番9号に所在する。対象面積は166m²，調査面積は138m²を測る。

有田台地最高所の北側に位置し，標高約11.5mの北向き緩斜面上に立地する。周辺では東側隣接地の第47次，北側の第17次調査を始め，多くの調査が行なわれており，当該地では中世の濠や建物の検出が予想された。

発掘調査は専用住宅建設のため，昭和61年11月5日から11月29日まで行なった。遺構面は橙色ロームで，表土下60～75cmで検出した。検出した遺構は溝状遺構3条とピット小数のみで，かなり削平を受けているものと考えられる。溝状遺構のうち2条は小田部城に伴なう濠である。このほか南側の第77次調査から奈良時代の溝が当該地に伸びていると思われるが，第77次からの延長線がSD02内に収まってしまうことから，すでにSD02の開削時に破壊したものと考えられ，検出できなかった。

2）遺構と遺物

溝状遺構（SD）

SD01（Fig. 53，PL24）

調査区東端で検出した南北方向の溝で，第47次調査で東側の立ち上がりが検出されている。溝の北側は溜り状に大きくなっており，この部分の幅約6m，深さ2.2m，溝中央部分の深さ1.2m，南端部分で幅約4m，深さ1.0mを測る。土層は溜り状部分の下半部が黒色粘質土で，湧水が激しい。その他の部分は暗茶褐色粘質土を主体とする。溜り状部分（黒色粘質土層）には，長さ15～20cm程度の礫が密集している。

いままでのところこの溝の続きは他の調査区では確認されていない。

出土遺物（Fig. 54～58，PL26）　溜り状遺構の黒色粘質土層を除く溝の暗茶褐色粘質土層からは，中世末頃の土器・陶磁器・瓦類・石製品が出土し，黒色粘質土層内からはそれらに加えて木製品や自然遺物が出土した。出土総量は，木製品と自然遺物が約10点，瓦類がパンコンテナ約4箱，それ以外の遺物が約100点である。ここでは溜り状遺構内の黒色粘質土層（下層）出土遺物と，溝全体で検出した暗茶褐色粘質土層（上層）出土遺物に分けて述べる。なお，遺物取り上げ時は，前者を下層・礫群，後者を上層・中層として取り上げた。

1～27は上層出土遺物。1～4は磁器で，1～3は青磁の碗である。1は見込みに草花文を施した底部片で，畳付けと外底部以外に灰緑色釉を施す。2と3は口縁部片で，ともに口縁端が外反する。3の外面には牡丹らしき文様を描いている。2は淡緑色，3は緑色釉を施す。4

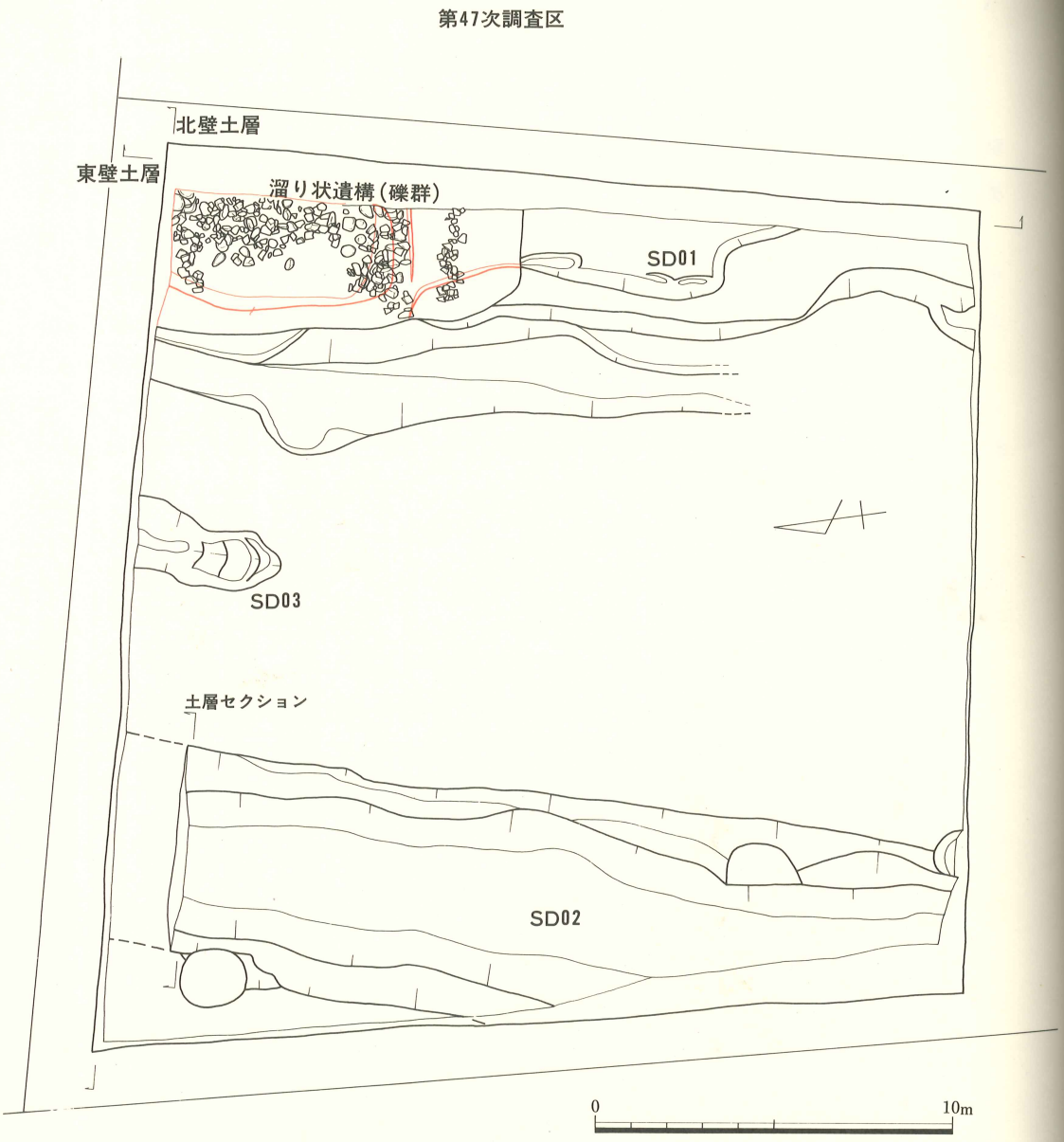


Fig. 52　第113次調査区遺構配置図（1/100）

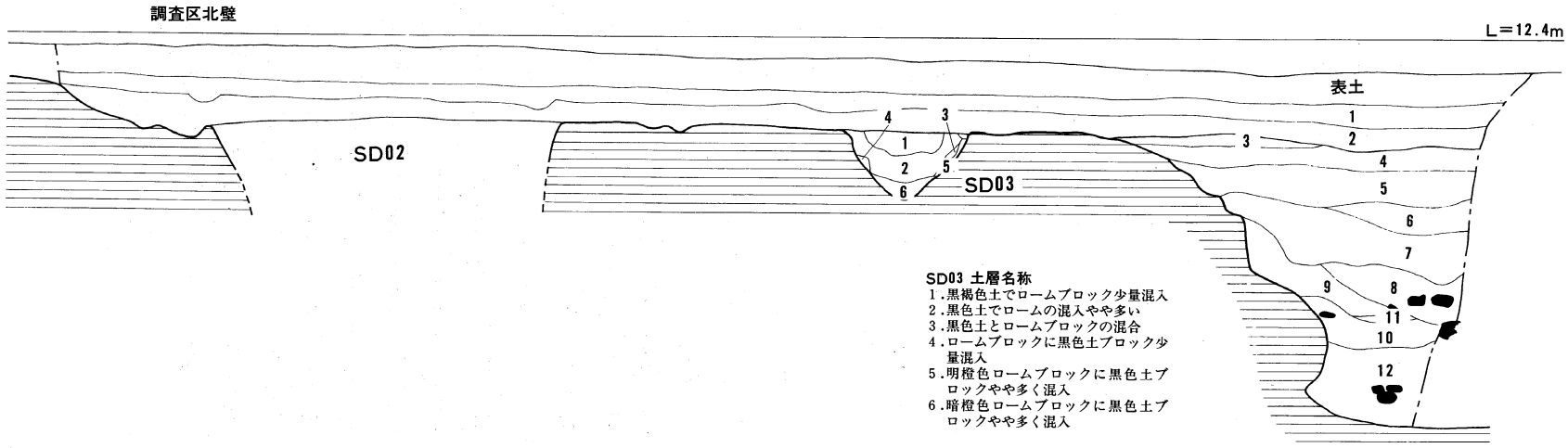
は染付の碗で，高台を高く作っている。内面に圏線を２本，外面の高台部から体部最下部にかけて圏線を３本と体部に文様を描く。文様部分の呉須は紺色に近く，圏線は青緑色に近い。見込みには輪状の掻き取りが認められる。古伊万里であろう。

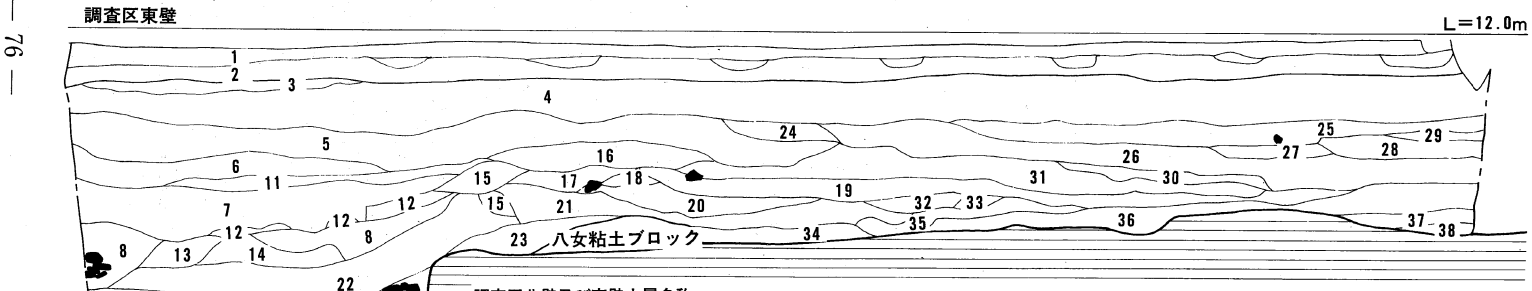
５・９・10は陶器である。５は体部が直線的に開く皿で，淡い緑灰色釉を薄く施す。見込みと体部下半は釉が薄すぎるため，素地の橙色が透けて見える。外底部と体部最下部の一部には釉がかかっていない。高台は粗くけずり出している。唐津焼であろう。９，10は口縁端部を逆くの字状に内側に屈折させた備前系の摺鉢である。９は全面赤味を帯びて，やや軟質である。内面に８条を１単位とする条線を施している。胎土には白色の５㎜前後の粗子を多く含み，やや粗い。10は片口部分の口縁部片で，９に比べ硬質。暗赤褐色を呈する。口縁端部を中心に自然釉が多くかかっている。６＋α本を１単位とする条線を内面に施している。胎土，焼成ともに９より良い。

６～８は土師器で，６・7は皿，８は坏。いずれも底部系切りである。板目痕はない。６が底部の立ち上がりを丸く収めるのに対し，7・8は立ち上がりに明瞭な稜をつける。6は底径8.3cm，7は6.5cm，８は9.1cmを測る。11・12は土師質の土器である。11は鉢で，黄白色に近い色を呈する。口縁端部はやや肥厚し，口唇部は少し丸味をもたせる。こね鉢の類であろうか。12は鍋である。くの字状に曲がる口縁部片で，磨滅のため調整は明確ではないが，内面にヨコ方向のハケ目がわずかに認められる。13～15は瓦器で，火舎である。13は口縁内部を内面に突出させ，口唇部を広く平坦に作る。口縁部外面に四直違文のスタンプを施している。方形の火舎である。14は胴部片で，胴部最大径40cmを測る。最大径よりやや上位に三巴文のスタンプを連続的に施している。15は内傾する口縁部片で，外面に凸帯を２条と，凸帯間に渦文のスタンプを連続して施している。いずれも外面はミガキ，内面はナデ調整である。

16は土錘で，長さ3.8cm，幅1.7cmを測る。17は全形は不明であるが，全面を研磨していることから，砥石であろう。厚さ４㎜を測る。砂岩系の石材。18は小形の石鏃で，両面とも自然面を多く残し，剝離も粗いことから失敗品であろう。黒曜石製。

19～27は瓦である。瓦は多く出土したが，その多くは小片で，全形がわかるものはほとんどない。19は平瓦で，幅21cm，厚さ1.7cmを測る。調整は不明確であるが，両側辺と小口はヘラによる面取りを行なっている。谷面と両側辺の稜は削り落としている。淡黄橙色を呈する。20～22は丸瓦である。筒部の前幅12～12.5cm，後幅11cm前後を測る。玉縁部の先端幅は5.5～6.5cmを測る。玉縁部はヘラケズリというよりヘラナデに近く，筒部外面も縄目タタキの後にケズリに近いナデを加えている。23・24は軒平瓦で，23は瓦当復元幅23.5cm，瓦当厚５cmを測る。中心飾は宝珠形で，左右に均正唐草文を配している。顎は曲線を成す。谷面は布目の上からヘラナデ，他はケズリに近いヘラナデを施す。焼成は悪く黄色味を帯びている。24は瓦当厚が３cmと小さい。１本の蔓から派生する均当唐草文を配している。顎はヘラケズリにより途中で段を成





調査区北壁及び東壁土層名称

1.黒褐色土で黒色土・ロームブロック混入 ｝表土
2.暗褐色土でロームブロック少量混入 ｝表土
3.暗褐色土
4.3でローム粒子多量混入
5.4より黒味を帯びる
6.黒褐色土でローム粒子混入
7.暗褐色土と黒褐色土とロームの混合
8.暗褐色土でロームブロック多量混
9.8よりロームの混入少ない
10.黒色土とロームブロックの混合
11.暗淡黄灰褐色粘質土
12.暗青灰色粘土でマンガン混入
13.暗黄褐色ロームブロックと暗褐色土の混合
14.暗黄褐色砂質ロームブロック
15.暗灰褐色粘質土（12よりやや砂質）
16.暗褐色粘質土
17.16に14混入
18.白灰色八女粘土と16の混合
19.灰褐色粘土に灰白色八女粘土混入
20.16に八女粘土混入
21.16にロームブロック，黒褐色粘質土ブロック混
22.15よりロームブロック混入
23.15より八女粘土の混入多い
24.淡黒灰褐色粘質土
25.16で老化物，地山ブロック少量混
26.25より明るい
27.暗灰褐色粘質土14を混入
28.八女粘土ブロックに14の混入
29.灰褐色粘土に八女粘土わずかに混入
30.灰褐色粘土（軟らかい）
31.30に14をわずかに混入
32.31より14の混入多い
33.27に14の小ブロックを少量混入
34.25より暗く，ロームを混入しない
35.やや明るい暗褐色粘質土
36.25で14を多量混入
37.暗褐色粘土
38.37に14を混入

0　2m

Fig. 53　調査区北壁・東壁土層（1/60）

している。須恵質で，焼成も良い。25は軒丸瓦で，瓦当径10.5～11cmを測る。巴文は左回りで，巴の尾は細くて長い。珠文は20個を数える。巴文と珠文の間には圏線を1本配している。いぶしがかって黒色を呈する。26・27は鬼瓦の一部と思われる。26は顔の側面部分のどこかであろう。3条の弧状凸帯を有する。27は中央に径約2.2cmの穴を有する小片で，目の部分か。

28～51は下層出土遺物。28～30は青磁で，28・29は碗，30は皿である。28は外面に鎬蓮弁を有する。釉調はオリーブ灰緑色を呈し，一部畳付けにも付く。釉は厚く施している。29は器壁が全体に厚く，釉もやや厚く塗り，シャープさに欠ける碗である。釉調は灰オリーブ色で，釉の中に白色の点が無数にある。全面に釉を厚く塗った後に外底部のみふきとっているが，完全に取れていない。30は口縁部が強く外反する皿で，口縁端は輪花を成している。内面に文様が一条認められるが，全体の構成はわからない。釉調は緑が強く暗緑灰色を呈し，釉は厚くぬる。

32・33は陶器である。32は耳を有する長胴の壺で，類例から四耳壺と考えられる。両面に暗褐色の釉を薄く施す。素地はきめが細かく，2㎜前後の赤色鉱物を含む。素地や釉調から中国産と考えられるが，口縁部がくの字状に急激に外反する形態はあまり知られていない。33は摺鉢である。須恵質であるが，全体に赤味を帯び，にぶい赤褐色を呈する。条線はやや不明確であるが，6本であると思われる。頸部外面の張り出しはあまり強くなく，内面もほぼ直線状である。備前産であろう。

31は土師器の坏で，底部からの立ち上がりの稜は明瞭である。板目痕はない。推定口径11.4cmを測る。34，35は瓦質土器で，火舎である。ともに口縁部が直立し，外面に凸帯2条を貼りつける。34は凸帯間に雷文のスタンプを連続して，35は縦方向の短い沈線を0.5cmおきに施している。35の口唇部には鍋支えの突起を貼りつけており，おそらく三カ所あるものと考えられる。外面の調整はともにミガキで，内面は34がハケ，35がナデである。

36～43は瓦である。39～42は丸瓦で，ほぼ同じ形態を成す。筒部の前幅12.0～12.5cm，玉縁部先端の推定幅は7cm前後である。内面の筒部から玉縁部への移行はゆるやかで，玉縁部の先端は外面がほぼ水平で，内面はやや上を向いている。また両側縁内面の稜はヘラで削り落としている。筒部外面は縄目タタキの後にケズリに近いヘラナデ，内面は布目で，指頭痕，糸切り痕が認められる。42には径1.4cmの目釘穴がある。43は平瓦で，長さ30.0cm，幅20.0cm，厚さ1.8cmを測る。両側辺と小口はヘラによる面取りを行ない，谷面と両側辺の境の稜は削り落としている。

36は軒平瓦で，瓦当幅21.5cm，瓦当厚4.9cmを測る。中心飾は欠損しているが宝珠形と思われ，左右に三回転する均正唐草文を配している。一部に離れ砂の痕跡が残る。いぶし瓦である。37・38は軒丸瓦で，ともに½の破片である。巴文は左回りで，巴の尾は細く長い。珠文はともに20個と思われるが，37は珠文が小さく，38は大きい。37は瓦当径約11cm，38は11.0cmを測る。

44～51は木製品である。44は径13.2cm，厚さ0.5cmの円形板で，現形は2つに割れている。

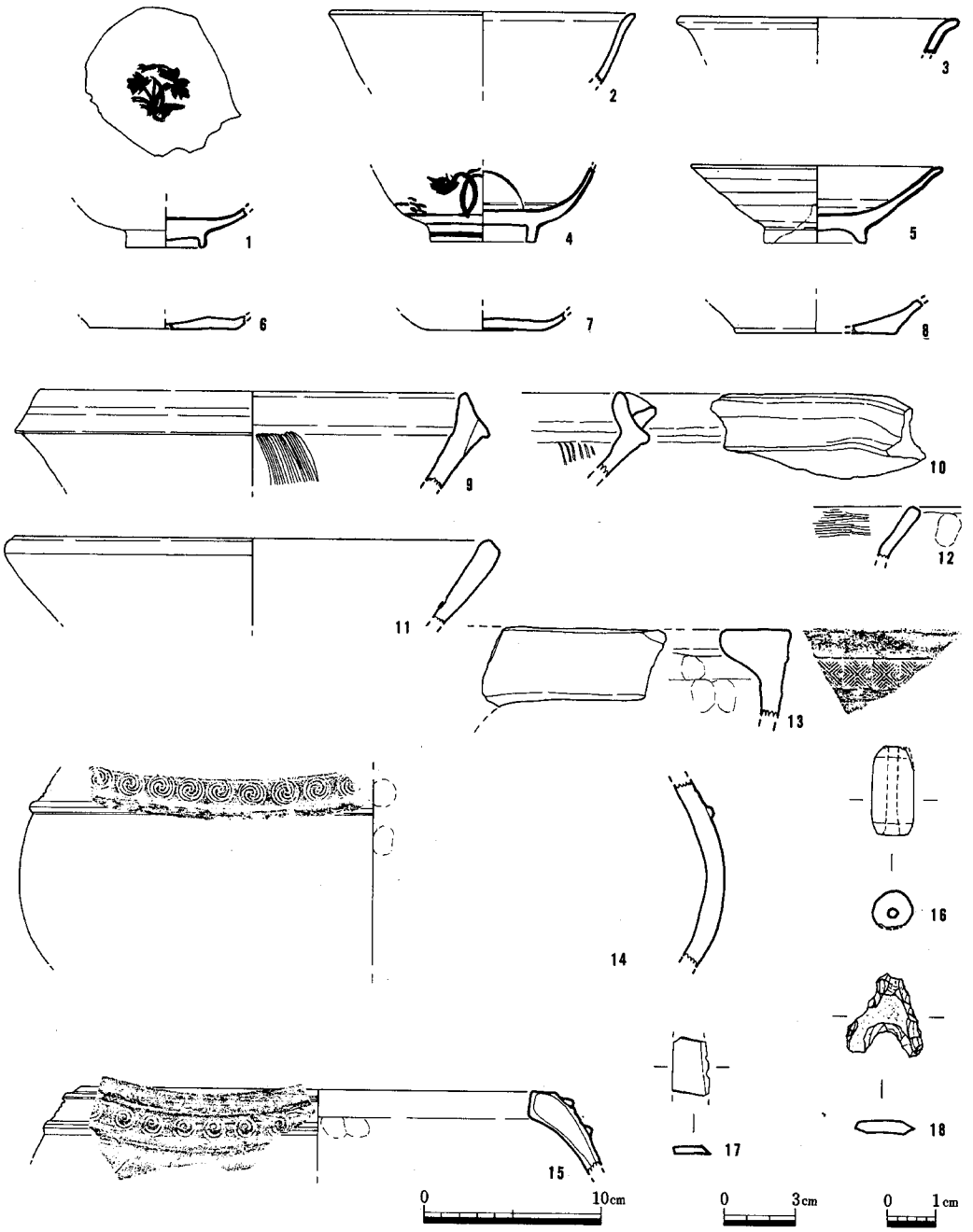


Fig. 54 SD01上・中層出土遺物Ⅰ (1/4・1/3・2/3)

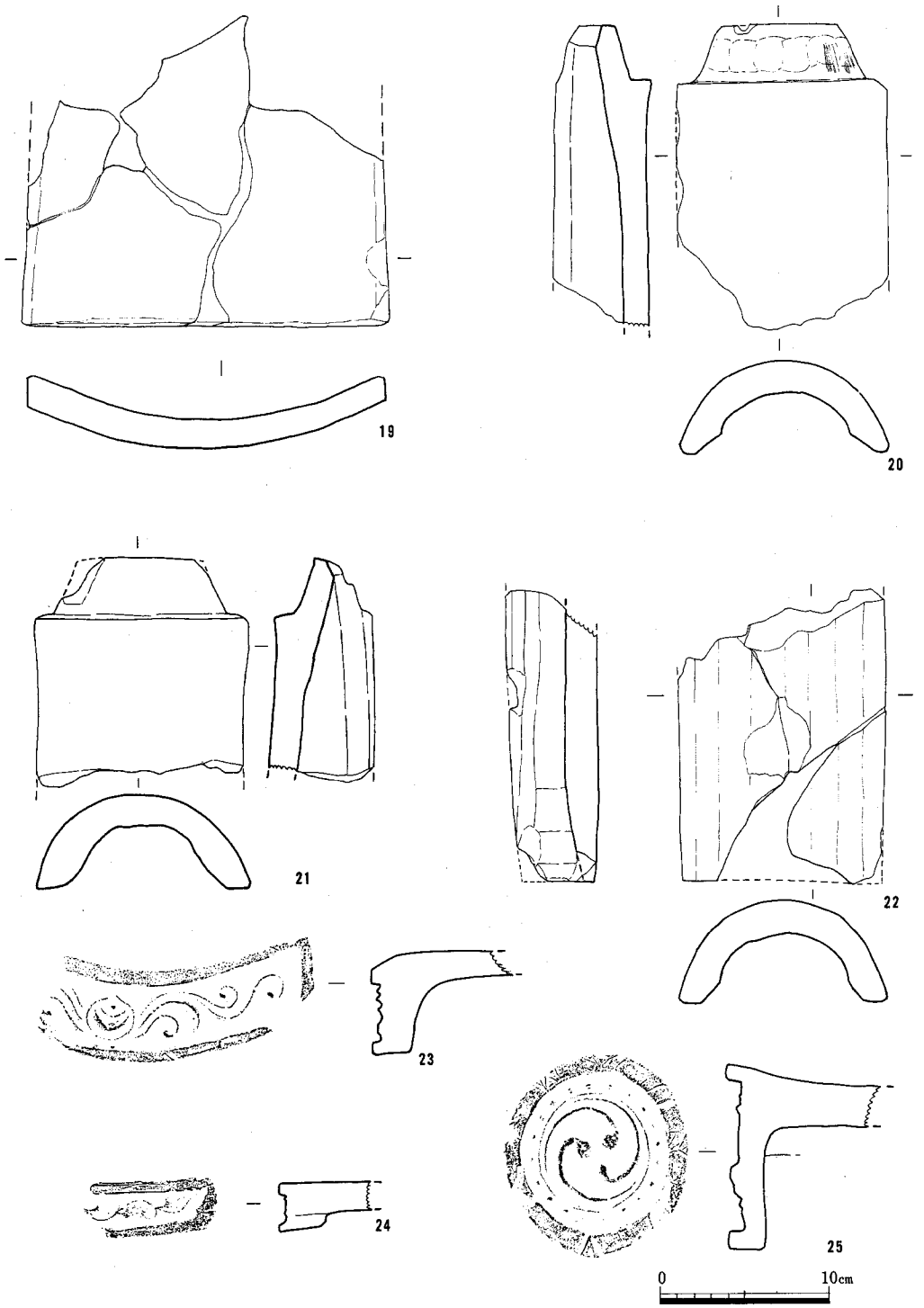


Fig. 55 SD01上・中層出土遺物II (1/4)

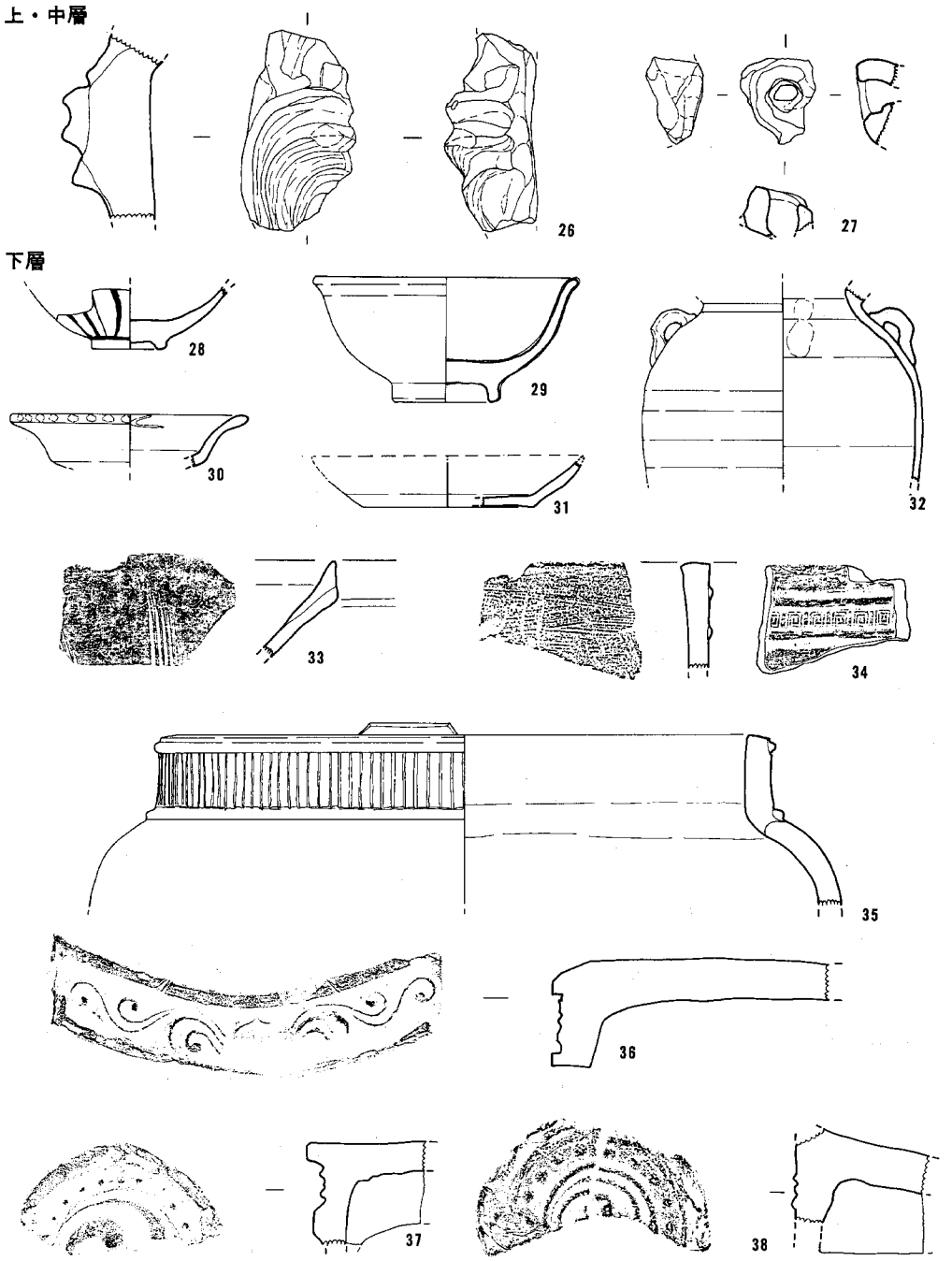


Fig. 56 SD01上・中層・下層（礫群）出土遺物Ⅰ（1/4）

0 10cm

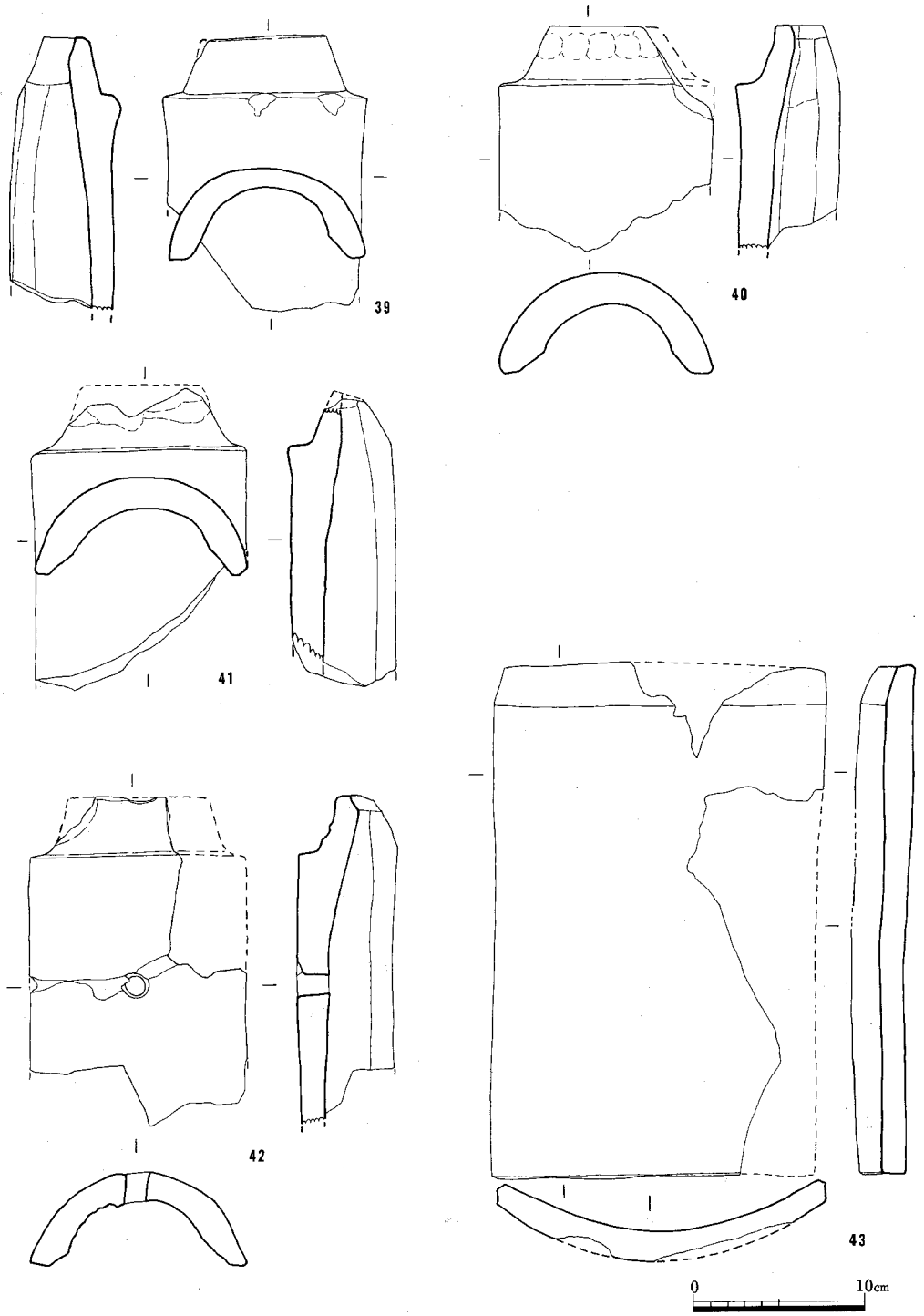


Fig. 57 SD01下層（礫群）出土遺物II（1/4）

45～50は略長方形の板で，中央付近の幅が両端部の幅よりやや大きい。またすべての板が少し反っている。長さは14.1～14.2cmとほぼ均一であるが，中央部分で1.8～3.2cmと幅の差が大きい。また片側先端を鉋状に尖らせている。44が桶の底板，45～50が側板と考えたが，側板の幅が一定していないことから確定はできない。また側板中央幅が大きいことと，反っていることから桶というよりは樽に近い形状であろう。51は長さ19.1cmで，一見電話の受話器のような形をしている。桶の取手と考えられないだろうか。これらの木製品の材質は杉系と思われるが，鑑定を受けていないため不明である。

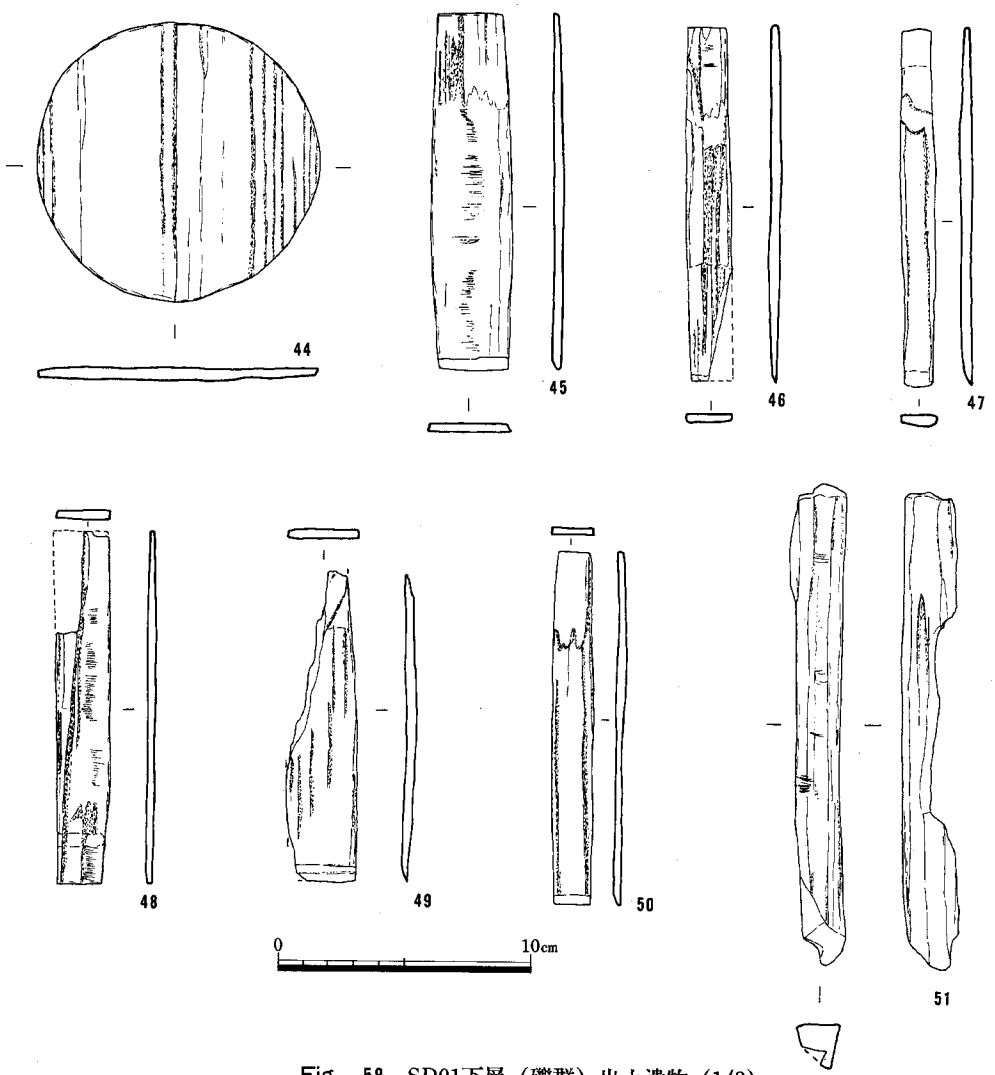


Fig. 58 SD01下層（礫群）出土遺物（1/3）

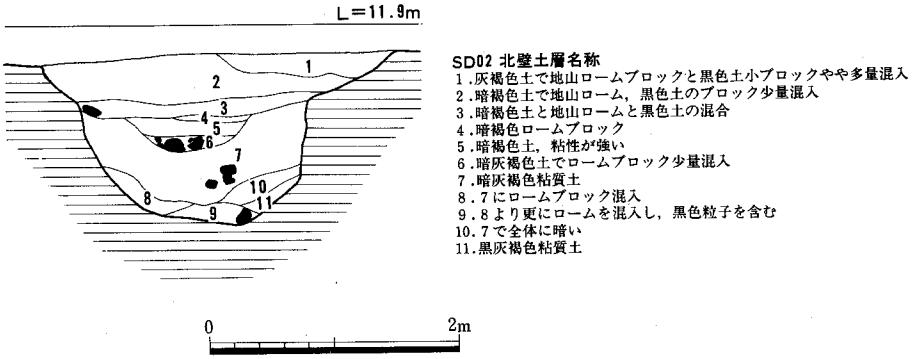


Fig. 59 SD02北壁土層（1/60）

SD02（Fig. 59, PL23）

調査区西側で検出した南北方向の溝で，北側の第17次調査につながる。幅約2.8mを測る。二段掘りで，段部分の幅約1.8mを測り，段から下の断面形はU字形を呈する。全体の深さ約1.4m，段から下の深さ約1.0mを測る。埋土は段から上が各種の土の混合土で，これらの層の最下部から拳大の礫が多く出土した。段から下は暗茶褐色粘質土ないしは暗灰褐色粘質土を主体とする。これらの状況から，この溝は一度埋めた後に掘り直して幅を広げたものと考えられる。これは第17次調査の溝と同じ状況である。

出土遺物（Fig. 60～62, PL27）　遺物はSD01と同様に土器，陶磁器，瓦などがパンコンテナ約3箱出土した。遺物は上，中，下層でとりあげたが，上，中層が前述の段から上の層，下層が段から下の層にあたる。

52～56は磁器で，52・55は青磁の碗である。52は畳付けの外側が丸味を帯びた高台を持つ。釉調は緑灰色を呈する。55は外反する口縁部片で，釉調は明緑灰色を呈する。いずれも中層出土。56は青磁の鉢で，にぶい黄緑色で，黒色の細かい斑点状の釉調である。見込みに目跡が7カ所ある。外面に気孔が多く認められ，全体として作りが悪い。中層出土。53・54は白磁の碗で，53は低くて厚い削り出しの高台を持つ。遺存部の外面はすべて露胎である。体部と見込みの境に圏線を1本施す。下層出土。54は畳付け全体が丸味を帯びている。高台は一部を除いて露胎で，外底部はケズリのままである。体部内面に文様があるが，全形はわからない。また見込みに渦状の掘り込みを施している。釉調はオリーブ灰色を呈す。

57・58は土師器の皿である。ともに底部系切りで，板目痕はない。57は立ち上がりの稜が明確であるが，58は丸味を帯びている。57は坏かもしれない。中層出土。59～61は土師質土器である。59・60は全形はわからないが，鍋の可能性が高い。59は内弯ぎみに外傾する口縁部を持つ。60はほぼ直立し，口唇部が肥厚する。また60は口縁下に高さ1.6cmの鍔が巡る。ともに中層出土である。61は摺鉢で，やや丸味を帯びた体部を有する。条線は残りが悪く，1単位4本が2カ所で確認できるが不明確である。外面には指押さえ痕が残っている。62・63は瓦質土器で，

火舎である。62は口縁端直下を削りこみ，その部分に四直違文のスタンプを施している。さらにその下にＳ字状文を連続的に施す。63は口縁端部内面及び口縁部と体部の境の内面に鍔をつける。口縁部外面に四直違文を施す。方形火舎である。64は土師質の土製品で，火舎の中に入れるサナであろうか。断面形は隅丸長方形を呈し，現存長7.0cm，最大厚4.9cmを測る。全面指

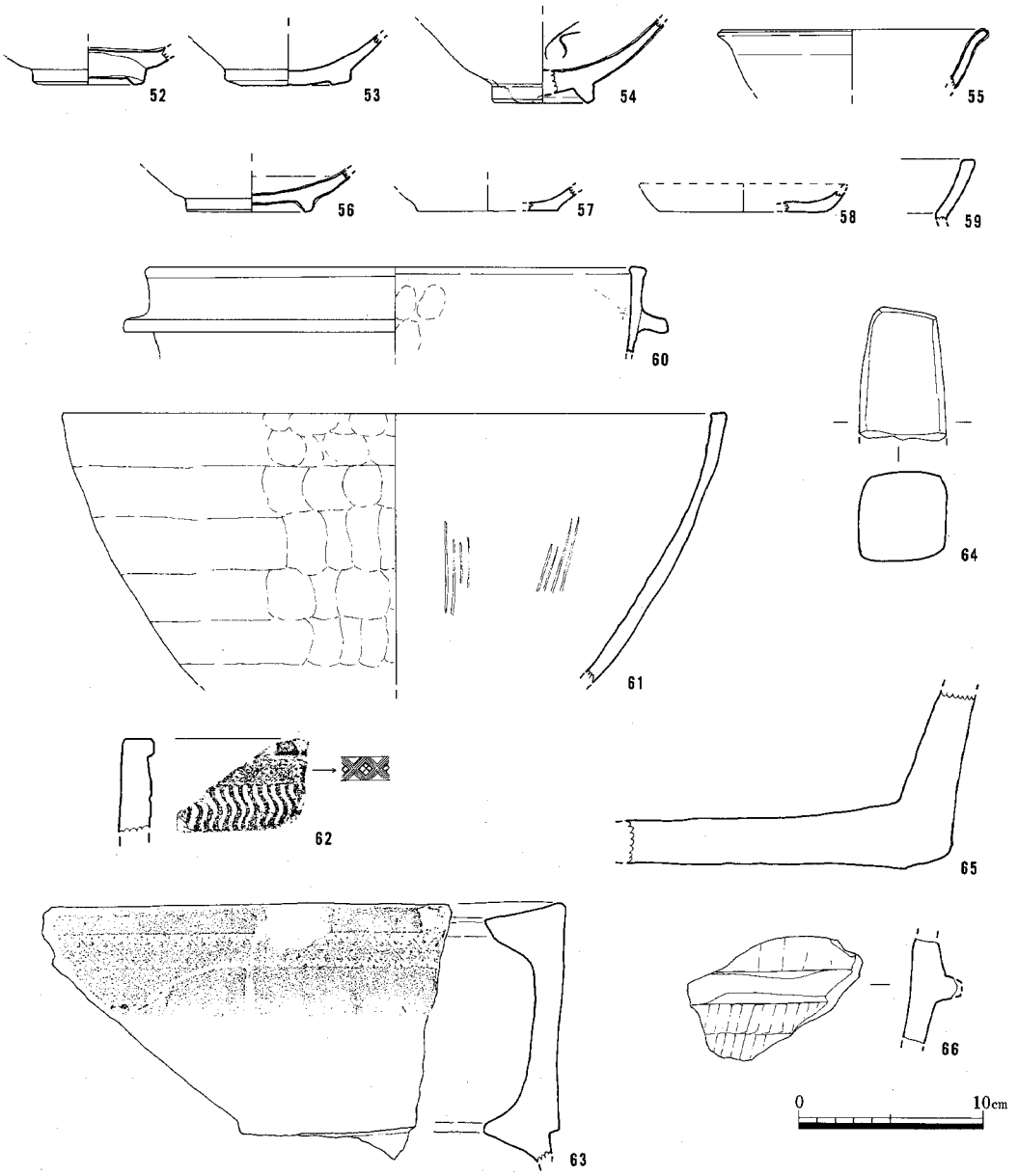


Fig. 60 SD02上・中層出土遺物（1/4）

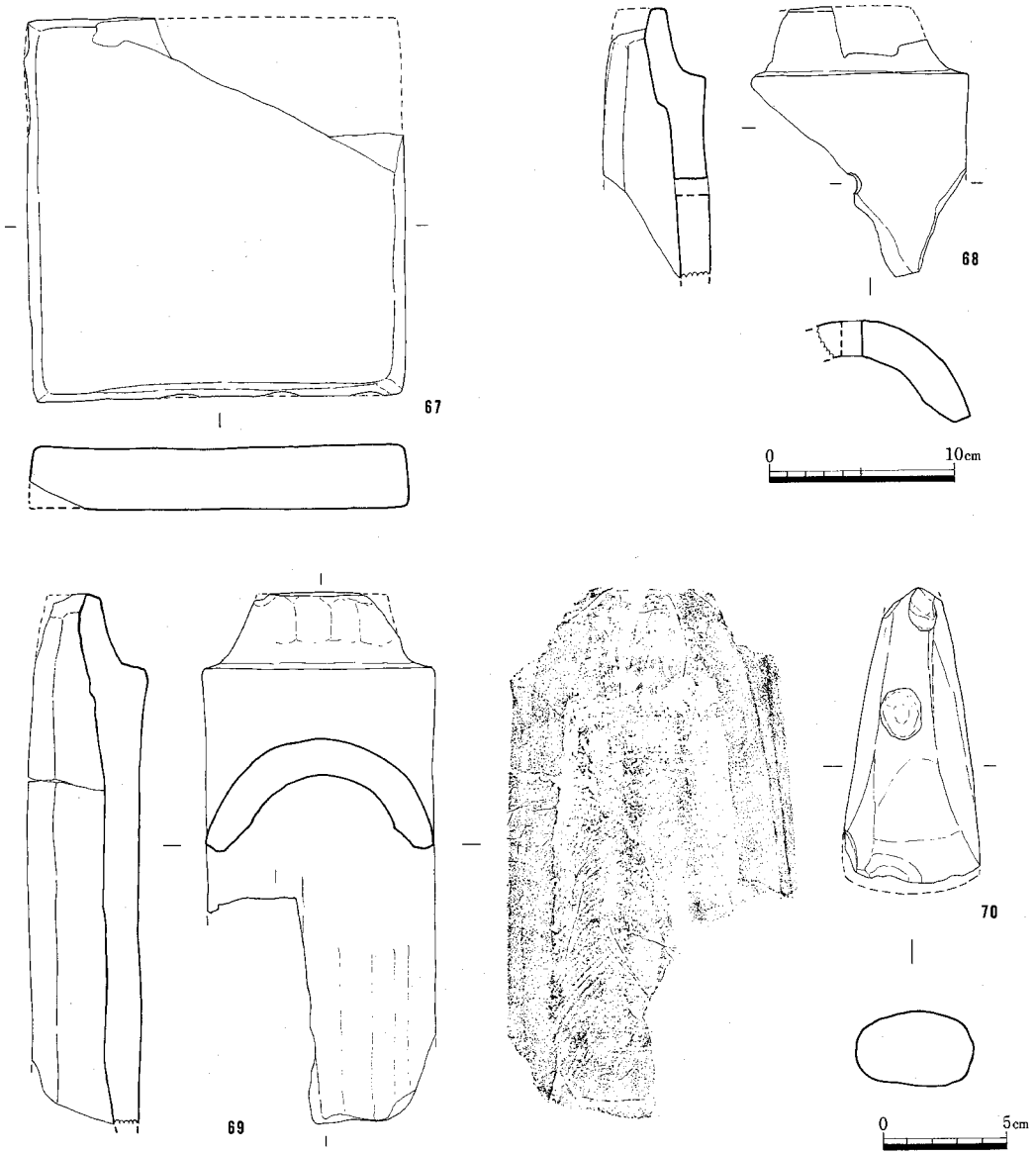


Fig. 61 SD02下層出土遺物（1/4）

ナデ調整で仕上げる。65は須恵質土器で，大甕の底部片である。陶器というべきかもしれない。推定底径55cmを測る。全面ナデ調整で仕上げる。66は滑石製石鍋の小片で，凸帯の幅1.5cmを測る。凸帯の先端は欠失する。

67～69は瓦である。67は瓦塼で，一辺約21cm，厚さ3.2cmを測る。片面に離れ砂がつき，その面の四辺は面取りされている。器面が荒れ，調整は不明である。68・69は丸瓦で，68は筒部の

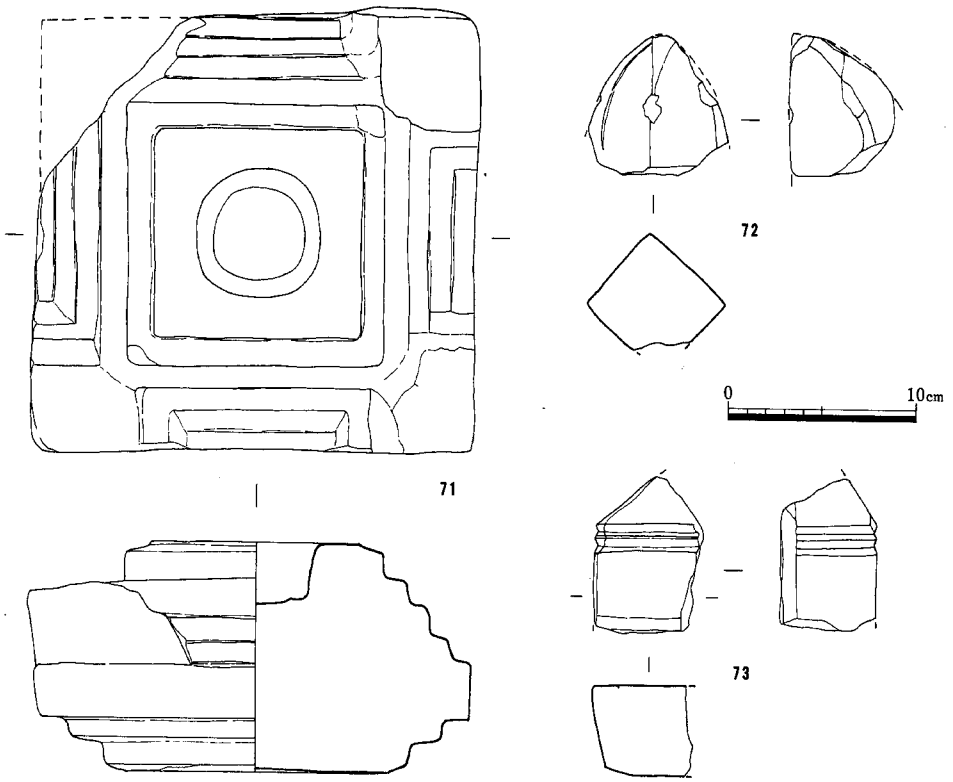


Fig. 62 SD02出土石塔類 (1/4)

推定幅12.5cm，玉縁部先端の推定幅6.8cmを測る。筒部中央に目釘穴がある。筒部内面と玉縁部の境は段を成す。69は現存長28.3cm，筒部幅12.3cm，玉縁部先端幅約7cmを測る。筒部内面と玉縁部はゆるやかに移行し，玉縁部の先端は水平に近い。ともに背面は縄目タタキの後ヘラナデ，谷面は布目痕で，模骨痕が残る。

70は磨製石斧で，刃部先端を欠失する。現存長11.9cm，刃部幅5.4cmを測る。研磨はていねい。石材は玄武岩か。再利用品であろうか。

71・72は宝篋印塔である。71は笠で，隅飾突起は四隅とも先端部が欠失している。露段も五，六段目を欠失している。現存高15.3cm，一辺約29.7cmを測る。72は隅飾突起の一部と考えられる。現存長9.2cm，厚さ5.7cmを測る。ともに花崗岩製である。73は板碑の山形から二条・額部にかけての破片である。身部はほとんど残っていない。現存長10.2cm，厚さ7.2cmを測る。石材は花崗岩系である。

SD03（Fig. 52, PL23）

調査区北壁中央付近で検出した。狭い溝の南側立ち上がり部分と思われる。確認長約２m，最大幅約１mを測る。断面形はV字形に近く，深さ56cmを測る。覆土は黒褐色粘質土を主体にロームブロックがまじる。南側立ち上がり部分は階段状に三段のテラスを成しており，テラス幅18～27cmを測る。現状では何の遺構かはわからない。

出土遺物　遺物は出土しなかった。

３）小結

検出した３基の溝状遺構のうち，SD03は覆土の状況から中世以前と考えられるが，出土遺物がなく時期はわからなかった。SD01・02は中世末の濠状遺構と思われる。SD01で検出した溜状遺構は，一連の濠の最北部に位置する第40・108次調査で似た遺構が検出されており，濠が断続的に途切れていることから城の入口と考えられるが，当調査区周辺については不明である。

本文中で述べた様にSD01・02ともに上下２層に分けられるが，瓦を除く遺物量はさほど多くない。まずSD01溜状遺構内では28の12世紀代の白磁から29の16世紀代の青磁を含む。土師器は少なく，明確なものは31の坏だけで16世紀前半代である。一方溝全体からは４の古伊万里，５の唐津などが下部（中層）から出土しており，深いピットなどのまぎれ込みを考えない限り，17世紀前半の埋没を考えざるを得ない。

SD02では下層遺物がかなり少なく明確な時期は不明である。上層遺物も瓦以外は少なく時期の判断は難しいが，17世紀代の遺物はなく，16世紀代の埋没と考えられようか。

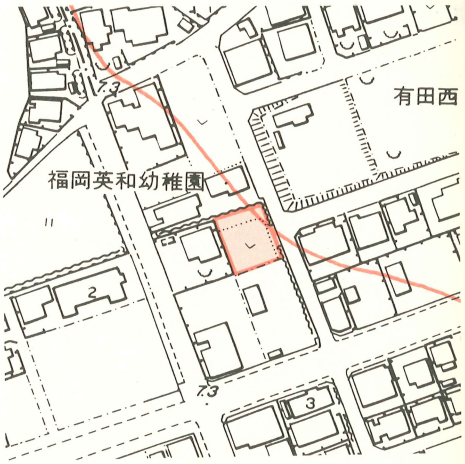
さらに出土瓦を第19次調査の分類にあてはめると，丸瓦はほとんどB類で，C類がSD01上層で１点，SD02下層で２点出土している。軒平瓦はSD01のみの出土で，下層でⅠ類３点，Ⅳ類１点，上層でⅠ類４点，Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ類が各１点である。また軒丸瓦もSD01のみで，下層がⅠ類２点，Ⅲ類３点，上層はⅠ類３点，Ⅲ類２点である。この内特徴的なのはSD01上層でのみ軒平瓦Ⅱ・Ⅴ類が出土している点である。Ⅱ類はⅠ類より文様が退化しており，Ⅴ類は中心飾が梅花文だが蔓はⅡ類に近い。時期的にⅠ類→Ⅱ類となるのは明確で，SD01の上記の出土遺物時期差に対応しないだろうか。

以上からSD01溜状遺構の埋没年代を16世紀中頃～後半，同上層（溝全体）を17世紀前半に，SD02は不明な点が多いが16世紀後半頃におきたい。ただし今までの成果では他の濠状遺構は16世紀代後半には濠が埋没したとされているため，今後の検証が必要である。

（米倉）

3．第120次調査（調査番号8705）

1）調査地区の地形と概要



調査地は有田1丁目38番3号に所在する。対象面積は329m²，調査面積は77m²を測る。

有田台地の西端に位置し，現地表で標高約8.5mを測る。周辺の調査例は少なく，南東側の第109次調査などが行なわれている。第109次では台地端の崖面を検出した。崖はほぼ垂直に落ちるが，崖下は激しい湧水のため深さを確認できなかった。今回の調査でもこの崖線上に位置するのではと当初考えたが，確認できなかった。

遺構検出面は八女粘土層で，表土下1.5〜1.65mで検出した。西に下っている。土層のほとんどは現代埋土で，旧表土が西半でのみ厚さ15cm程残っている。

検出した遺構は土坑3基とピット2基のみで，出土した遺物総量はコンテ1箱程度で，その多くは近世以降の陶磁器である。

2）遺構と遺物

土坑（SK）

SK01（Fig. 65. PL28）

調査区北側中央で検出した。平面形は楕円形で長さ66cm，幅45cmを測る。断面形は逆台形を呈し，深さ34cmを測る。覆土は青黒色粘質土である。

出土遺物（Fig. 66. PL28）

遺物は須恵器の坏蓋1点のみである。

1は須恵器の坏蓋で，先端部に反りをもつ。反り部分の内面は緩かに体部内面につながる。

SK02（Fig. 65, PL28）

SK01の西側で検出した。平面形は卵形を成し，長さ69cm，幅50cmを測る。断面形はほぼ逆台形を呈し，深さ26cmを測る。覆土は青黒色粘質土である。土坑中央で床面から少し浮いたところから拳大の礫2点が出土した。

出土遺物　中世の土師器皿や須恵器甕などの細片が15点程出土した。

SK03（Fig. 65, PL28）

調査区中央付近で検出した。平面形は歪んだ円形に近く，長さ93cm，幅80cmを測る。断面形は一部で床面に凹凸があるが，略箱形を呈し，深さ56cmを測る。覆土は黒色粘質土を主体とし，床面近くから湧水があった。

出土遺物（Fig. 65, PL28）

土器２点が出土し，うち１点は土師器の細片である。

２は土師質土器で，こね鉢と思われる。両面とも浅いハケ状の調整が認められるが，裏面はナデ消している。口唇部にも同様の調整を施している。

遺構面出土遺物（Fig. 65, PL28）

遺構面から近世以降の遺物が多く出土し，弥生，古墳時代などの遺物も小片が少量出土した。

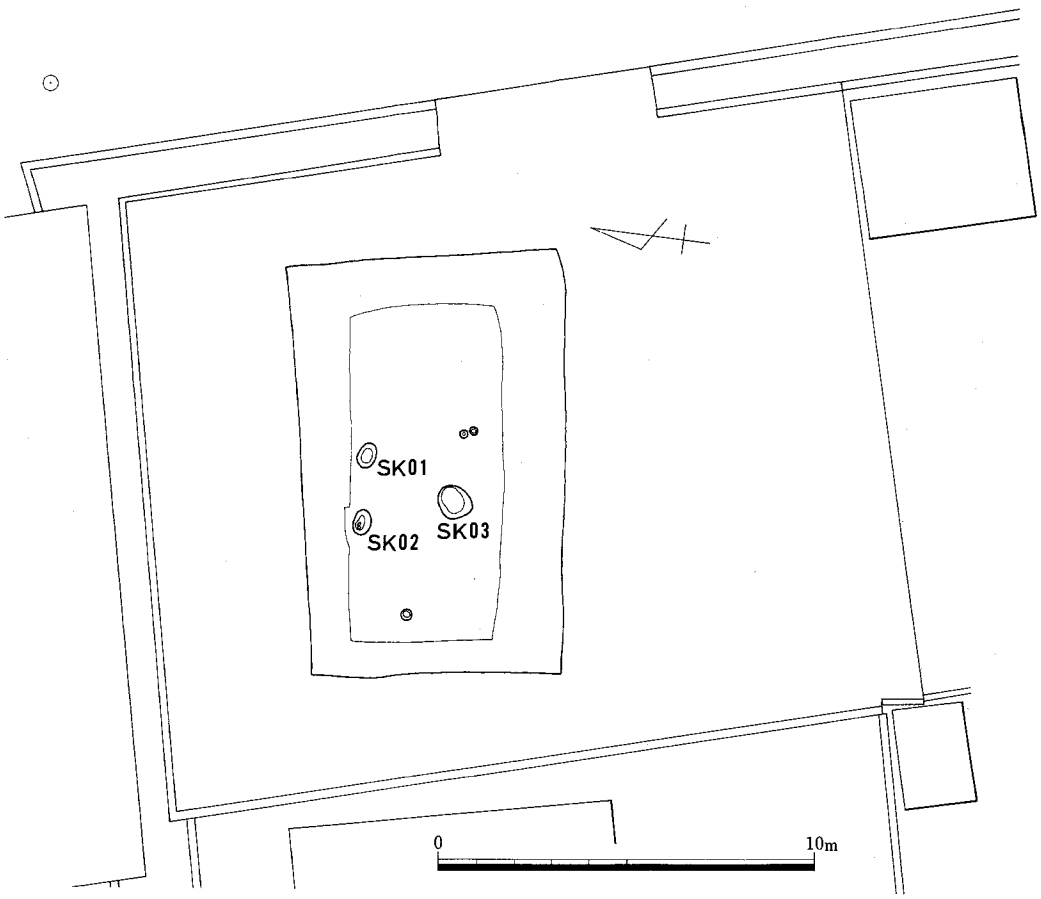


Fig. 64　第120次調査区遺構配置図（1/200）

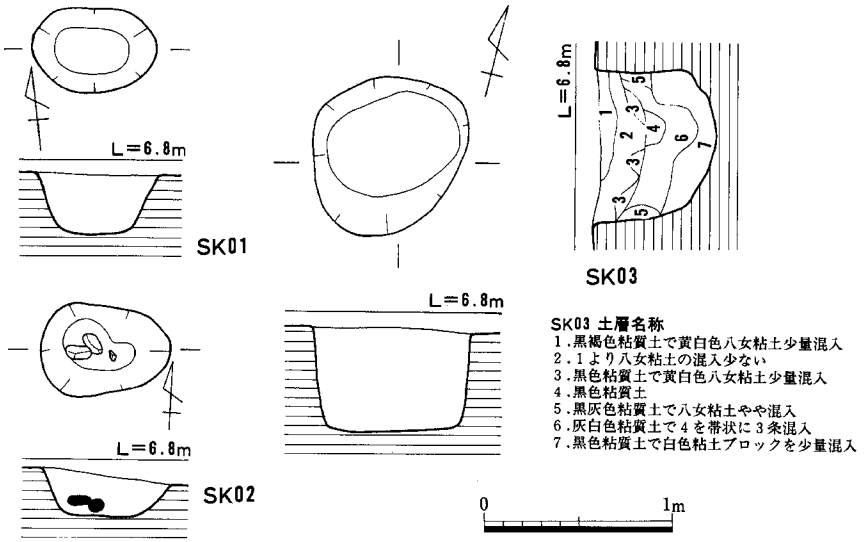


Fig. 65 SK01～03 (1/40)

3は白色の胎土の土製品である。片面は型押しで作られている。中は空洞になっている。全体にていねいなナデで仕上げている。用途不明であるが，博多人形の可能性もある。

3）小結

今回検出した3基の土坑のうち，SK02・03は中世後半代と思われ，SK01も概ねこの時期であろうが，3基とも明確な時期は不明である。このうち，SK03はほぼ垂直に掘り込んだ形態から，明らかに人為的な遺構であるが，この用途は不明である。

遺構面は八女粘土層で，北側の5次・116次地点とはかなりの段差がある。また台地端の崖面を確認した第109次調査の遺構面はローム層であることと異なっている。109次の崖面とその下の湧水が今調査では認められず，この地点の台地端の確認については，今後の調査に期待したい。

（米倉）

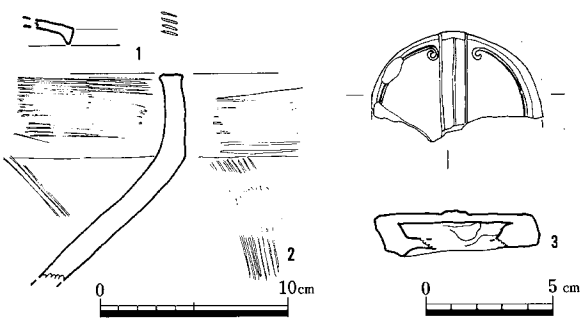


Fig. 66 出土遺物 (1/4・1/3)

4．第131次調査（調査番号8742）

1）調査地区の地形と概要

申請地は早良区小田部２丁目131に所在し，開発申請面積は300.39㎡である。

申請地は北に八手状に広がる小田部地区台地の中央部台地の東側斜面に立地し，標高７～８ｍを測る。調査前は空地であった。事前調査によって台地部に遺構を検出した為，台地部を中心に調査を行った。調査期間は昭和62年12月16日～63年１月６日までで，調査実施面積は118㎡である。

申請地周辺は余り調査が行なわれておらず，谷を挟んで東側に第13次・第129次調査区などがある位で，遺構の分布状況は余り良くわかっていない。

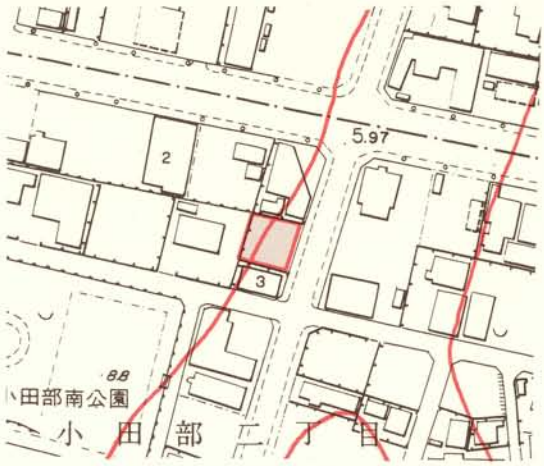


Fig. 67 第131次調査位置図（1/2500）

調査区の遺構面は比較的固い黄白色シルト粘土である。遺構面迄の深さは75～90cmで表土40cmの下に厚さ40cm前後の包含層がある。調査区東側は50cm程段落ちし谷部となる。谷部は東へ向って緩やかに深くなる。谷部は区画整理事に多量の地山ローム土で埋めたてられていた。谷部からは古墳時代から近代迄の様々な遺物が出土した。

検出した遺構は古墳時代後期住居跡１棟，自然流路と考えられる小溝２条，ピットなどで，遺構の分布濃度は余り濃くない。また遺構の埋土中から旧石器時代頃の黒曜石の剝片が出土したため，実測のグリッドに沿って１×１ｍのトレンチを設定し，旧石器の調査を行なった。

2）　遺構と遺物

住居跡（SC）

SC01（Fig. 70，PL29）　調査区南西隅で検出した。一部西側境界地にかかり，全様は確認していないが，北西壁中央にカマドを持つ方形の住居跡である。規模は4.20×4.16m，残存壁高は最大で20cmを測る。埋土は黒褐色粘質土を主体とし，下層には灰白色ロームブロックを多く混入していた。床面は平均５cmの厚さで灰白色の地山ローム土に黒褐色粘質土を混えた土で貼床されており，その下は壁沿を中心に不整形の落込みが見られた。主柱は４本柱で，掘り方

形状は不整円形又は楕円形で，深さは25～46cmを測り，15cmの柱痕跡が残っていた。埋土は黒褐色粘質土であった。カマドは北壁中央に灰白色地山ローム土を用いて作り付けられており，形状はコ字状を呈すが，右袖基部はピットで切られる。右袖先端は当初カマドとわからず破壊してしまった。規模は外幅94cm，内幅54cm，長さ50cmを測る。カマド左袖周辺には炭化物が散布し，カマド内には炭化物・焼土が充満していた。またその中央には高坏を倒立させた支脚があり，その前面が焼土面となっていた。

出土遺物（Fig. 71，PL30）　埋土中，カマド内を中心にコンテナ1箱程出土した。須恵器，土師器，紡錘車1点，鉄滓4点，黒曜石剝片，弥生式土器片などがある。

1～8は須恵器である。1～7は坏蓋で大きく口縁端部内面に段を有さないもの（Ⅰ類），段を有すもの（Ⅱ類）の2つに分ける事が出来る。Ⅰ類は1～3，Ⅱ類は4～7である。2はヘラ記号があり，5は色調は暗赤褐色を呈す。8は坏身である。受部は内傾気味に立ち上がる。

9～13は土師器である。9・10は高坏で，9は坏部片，10はカマド内で支脚として用いられていた。9は体部下方に軽い段を持ち，器壁は11mmと厚く，ボテットした作りである。10は支脚として用いられた割には器壁は荒れておらずしっかりしていた。脚部には直径7mmの円形の

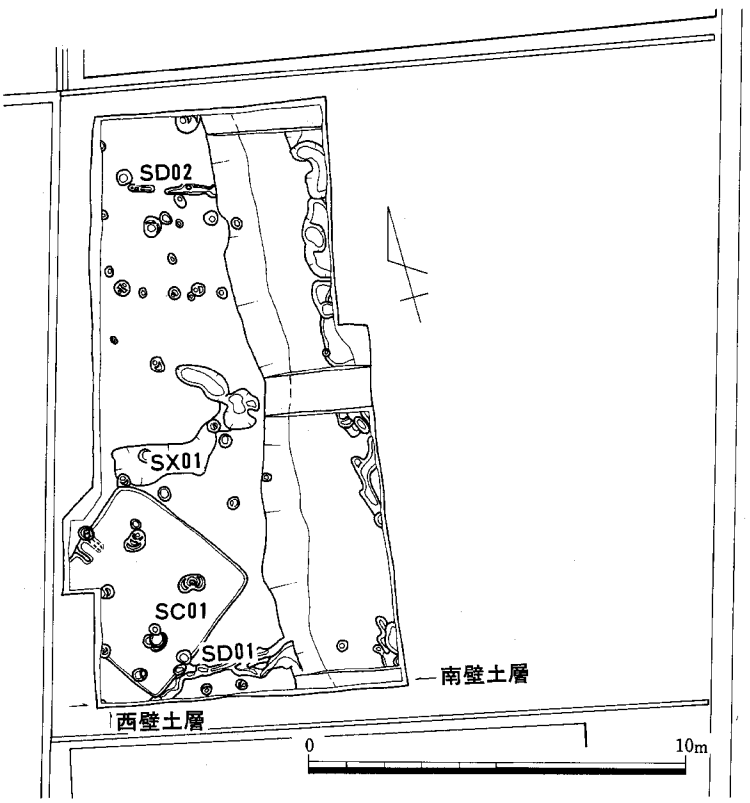


Fig. 68　第131次調査区遺構配置図（1/200）

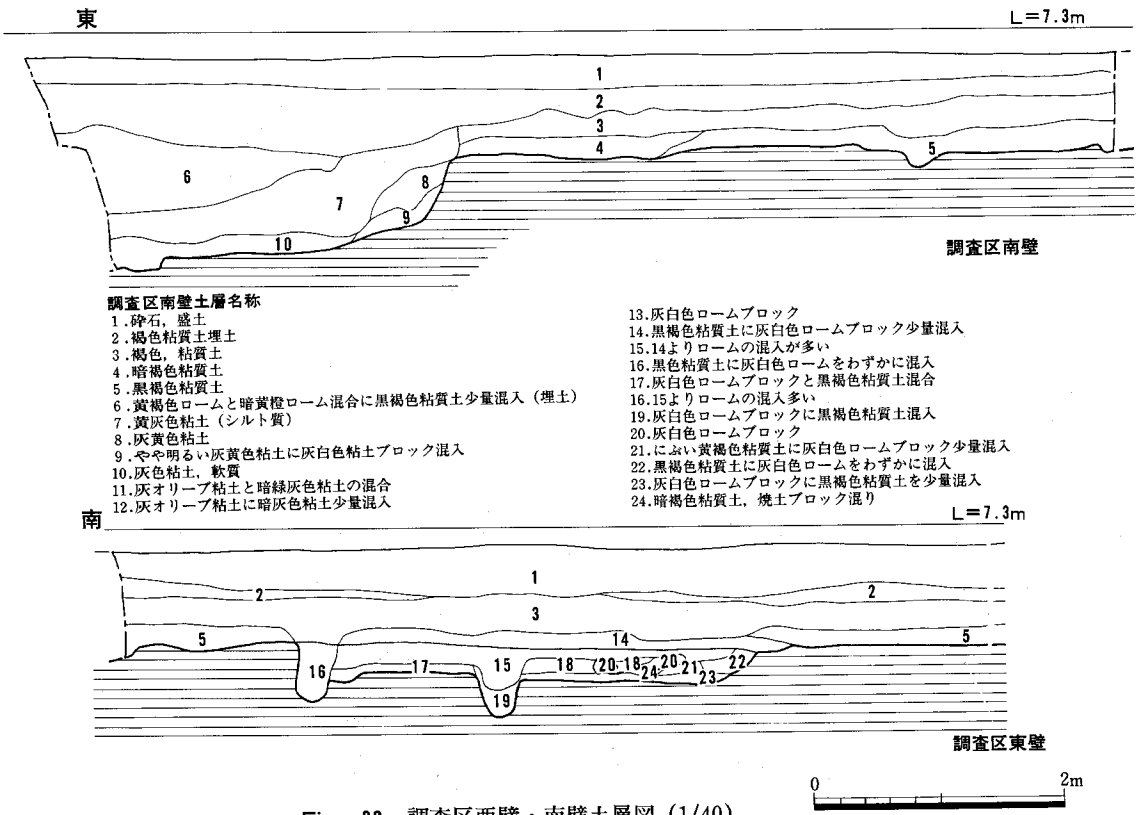


Fig. 69　調査区西壁・南壁土層図（1/40）

孔が推定で4ケ所あけられていた。11～13は甕である。11はカマド内より出土，長胴気味の体部とやや外湾する厚手の口縁部を持つ。12･13は須恵器の甕を模した器形である。14は直径4.5cmを測る載頭円錘形の紡錘車で，全体に削り整形で仕上げられている。調査時誤って一部欠失した。

2・4・7・13は床面，8・10・11はカマド内，6・12は貼床中出土である。

溝状遺構（SD）

SD01

南側で検出した小溝である。溝幅は15～60cmを測る。流路は蛇行し，床面は凹凸が激しい。雨水などが流れた自然流路と考えられる。

出土遺物　大半が細片で，図示しうるものはないが，弥生式土器から土師器，須恵器，瓦，李朝青磁，染付，鉄滓などがある。

SD02

北側で検出した小溝で，全長2.4mを測り，間は途切れる。幅は10～20cmを測る。

出土遺物　細片で非常に少ない。土師器・須恵器合わせて4点である。

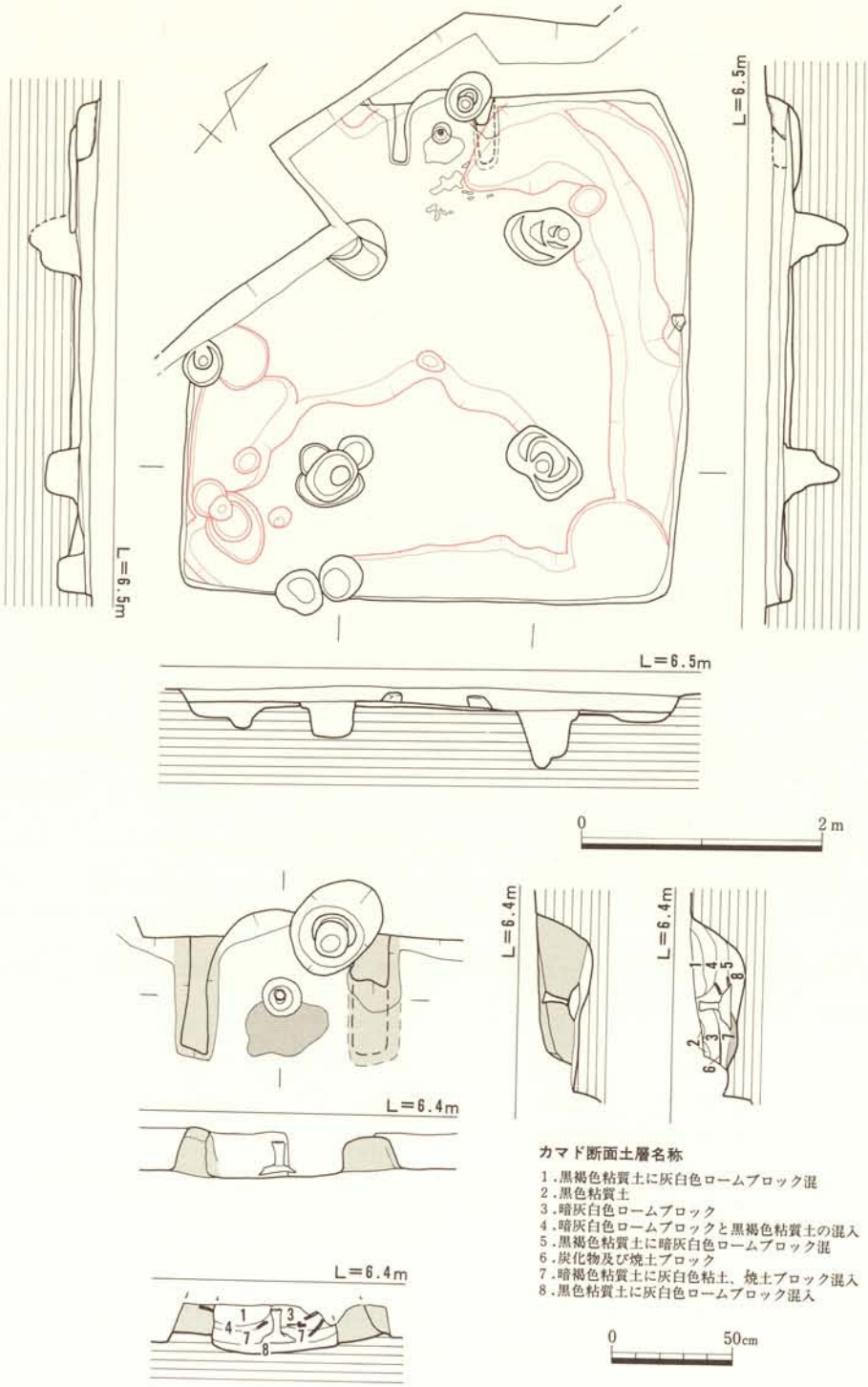


Fig. 70 SC01及びカマド (1/60・1/30)

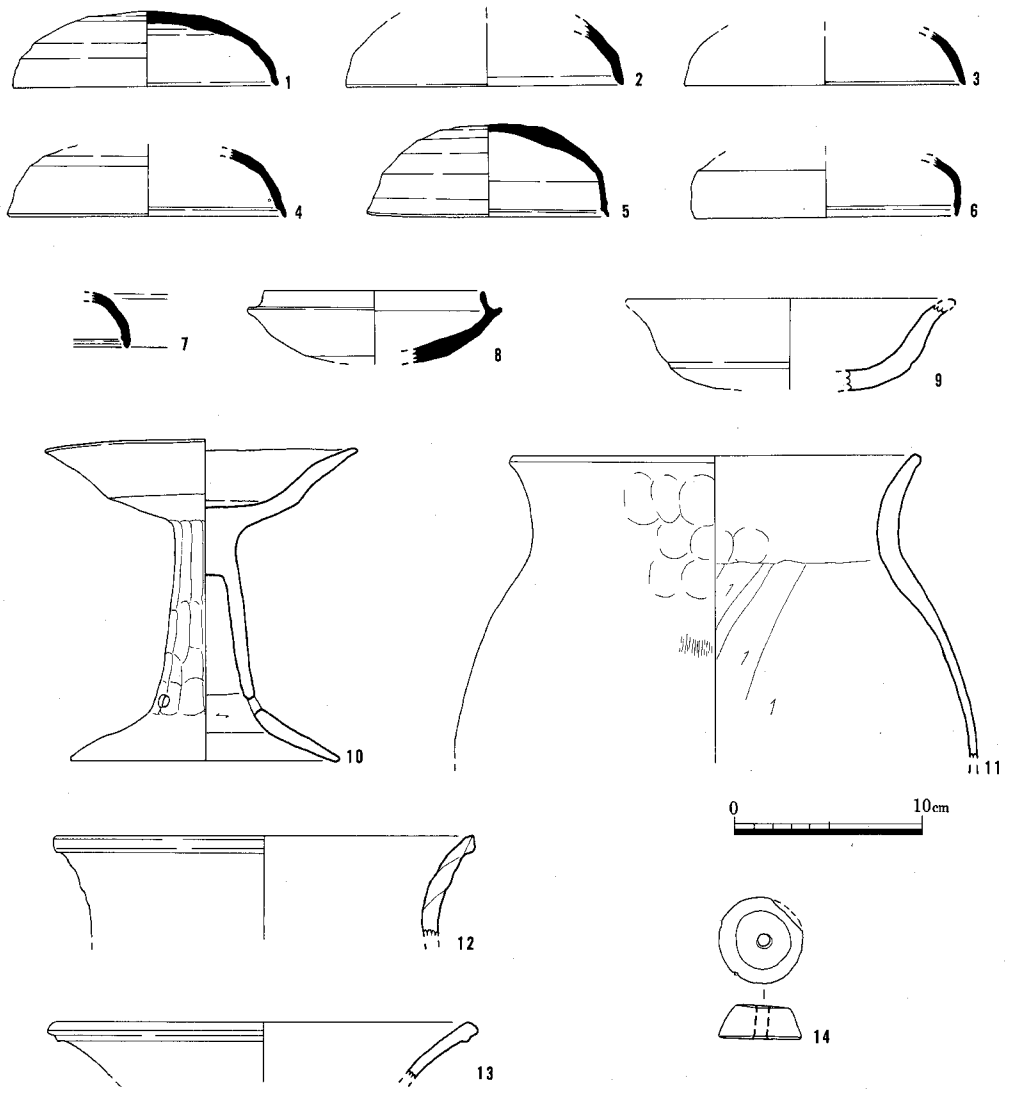


Fig. 71 SC01出土遺物（1/4）

その他の遺構（SX）

SX01

埋土が黒褐色粘質土の不整長方形の土坑である。規模は長辺2.26m×短辺1.11m，深さ7～10cmを測る。

出土遺物 量は少なくいずれも細片である。土師器・須恵器・白磁・黒曜石細片などがある。

（山崎）

3）旧石器時代の調査

発掘担当者より，旧石器時代の調査報告をもとめられたのでここに報告する。なお遺物以外は，調査の記録と調査者からの聞き書きをもとにしている。

遺構の検出面である基盤の黄色味をおびた灰色のローム層および各遺構の覆土から石器が出土したため，調査区内にグリッドを設定し，基盤土の掘り下げを開始した。掘り下げて調査した部分は，調査区の北半を中心として，1×1mのグリッド5箇所の計5m²である[1]。

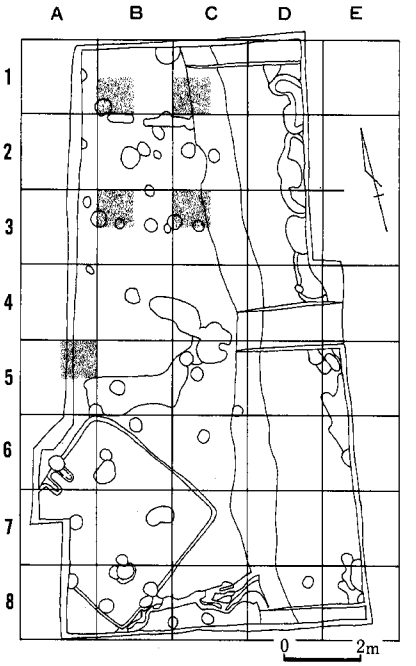


Fig. 72 グリッド配置図（1/200）

基本層序（Fig. 69参照）

旧石器時代の遺物包含層は，先にも述べたように基盤層の灰色ロームの上部である。これは有田などの洪積世台地では，一般にAso 4の火砕流である八女粘土層と考えられている。この付近では，降下火山灰の堆積物である鳥栖ロームが顕著に認められない。これは調査地点が台地縁辺部にあたるため，土壌が流失している可能性が高い。土壌の分析が行われていないため明確には言えないが，この八女粘土の上部の黄色味を帯びた部分に遺物包含層（生活面）を想定して，プライマリーな出土状況とみなしてよいであろう。

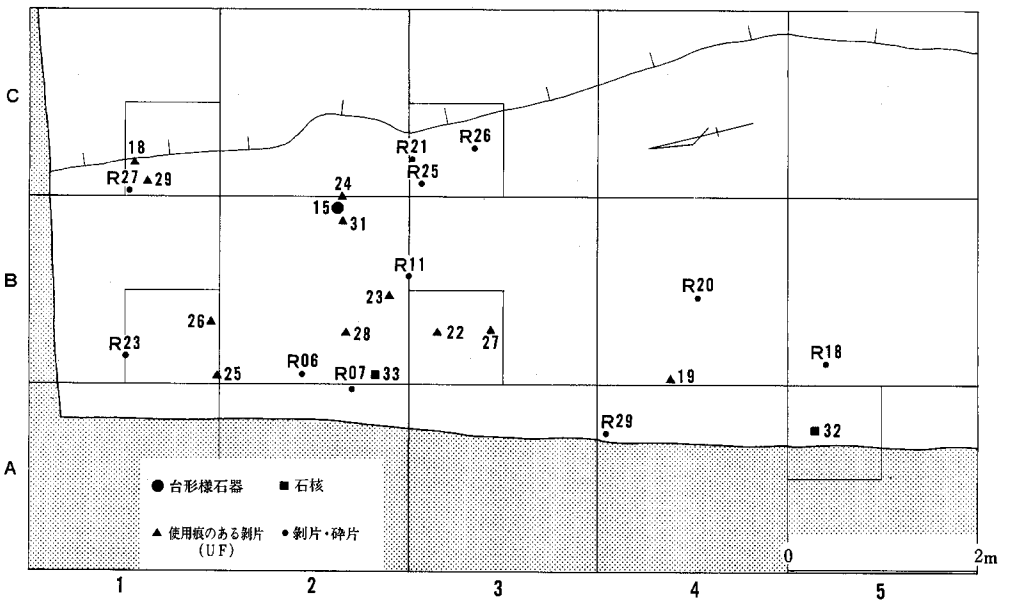


Fig. 73 石器出土状況図（1/80） ※Rは旧番号，それ以外は図版番号

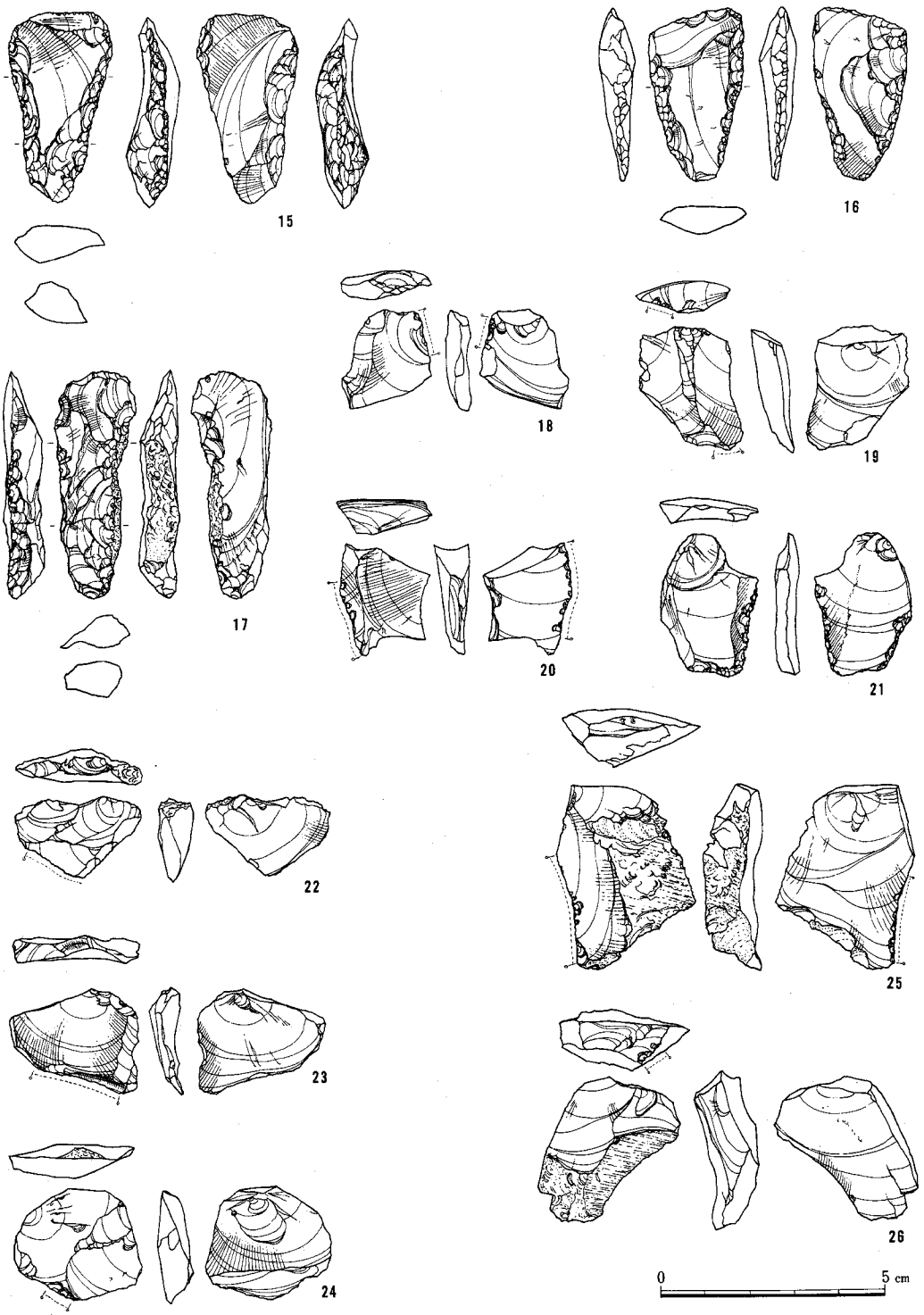


Fig. 74 出土遺物Ⅰ (2/3)

出土状況（Fig. 72）

平面的な出土の状況は，後世の遺構によって破壊されていることや調査区が限られていることなどから，全体像を把握できていない。ただし，Fig. 72に示すようにB・C－1～3区に集中部分が認められる。また，SX－01やSC－01など遺構からも相当数の石器が出土しており，南半部にも別の集中部が存在したようである。包含層以外の出土数は，SX－01が9点，SC－01が8点，SP－02が1点，その他6点である。場の使用については，機種別の分布に片寄りが認められないことから明言は避けておく。

出土遺物（Fig. 74・75，PL31）

調査によって出土した石器の総数は50点で，その内訳は台形様石器3点，使用痕のある剥片16点，剥片15点，砕片13点，石核3点である。石材はすべて黒曜石で，3個前後の母岩に分れそうである。

15～17は台形様石器である。いずれも横長の剥片を縦位に使用し，両側辺にブランティングおよび平坦剥離を加えて整形している。15と17の刃部には使用痕と思われる微細な刃こぼれが認められる。16の刃部の⅔には両面からの連続する剥離痕がある。

18～31は使用痕のある剥片である。いずれも頻度の差はあるが，そのエッジに使用の痕跡が認められる。出土石器総数の32％を占め，剥片では51％と使用された頻度の高さを示している。

32と33は石核であるが，いずれも3～4cmと小型で，残核もしくはそれを利用した加工途上のものと考えられる。打面は自然面や作業面を利用し，転移が行われている。

この石器群の特徴は，機種として台形様石器と使用痕のある剥片という単純な石器組成であることや剥片の使用の頻度が高いことがあげられる。これは，この場における石器の加工や使用が頻繁に行われたことを示している。剥片剥離技術に関しては，接合資料よりの復元ではなく明確ではないが，石核や石器，剥片に残された痕跡から復元すると，打面は自然面もしくは剥離面および分割面で，打面調整は行わない。打面は頻繁に転移される。打角は60～90度。この結果，生産される剥片は背面に90～180度方向の剥離面をもつ幅広で横長の形状をとる。これは，この石器群に縦長剥片剥離の痕跡をもつ石器が存在せず，横長（不定形）剥片剥離技術の痕跡のみが看取されることから，台形様石器を主体とする石器群のなかでも風無台遺跡や松木台II遺跡の石器群[2]に類似している。層位学的な再検討を経ていないが，編年的には石器群の特徴からAT以前でも古い時期に属する可能性がある。

この石器群の性格を語るうえで，今回の調査成果は充分とは言えない。調査の段階で充分な検討や資料採取が実施されなかったことは残念なことである。今回未解決の問題点については隣接地の調査に期待したい。しかし，有田・小田部地区においては，第6次調査に次いで質・両ともにまとまった石器群であり[3]同地域含めた北部九州の旧石器時代の変遷を語る上で重要な役割を果たすであろう。

（小畑）

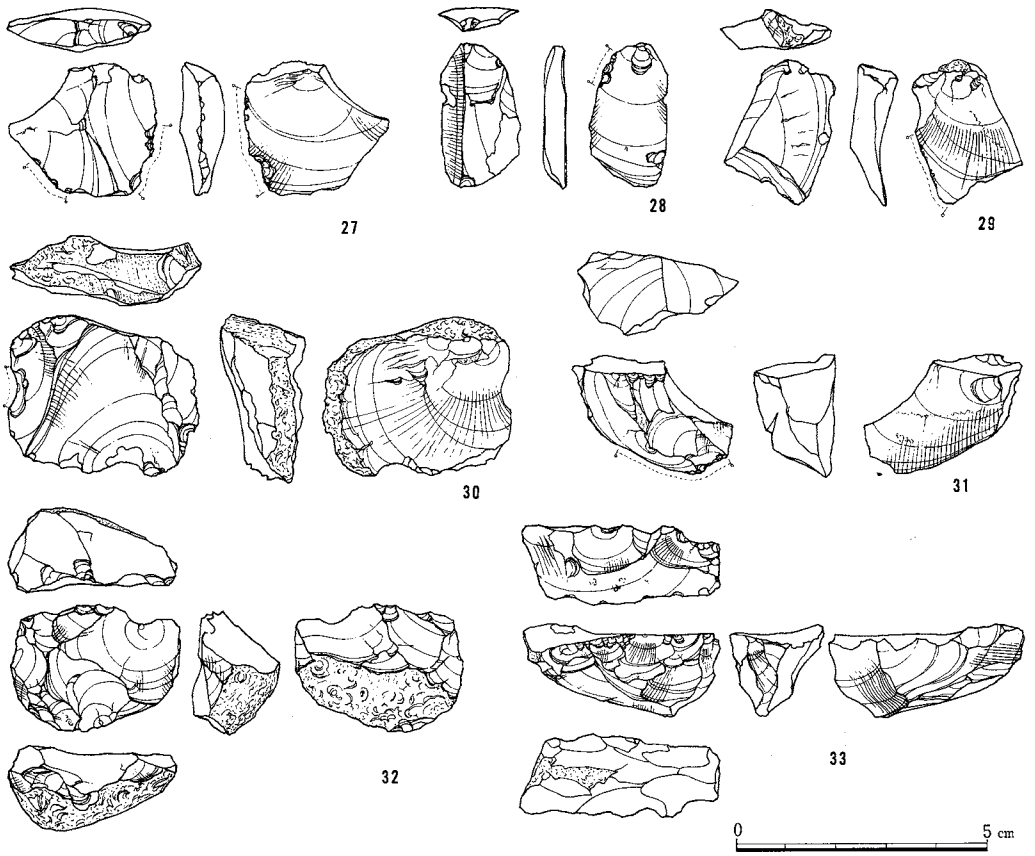


Fig. 75 出土遺物II (2/3)

No.	Fig, No.	種　類	石材	長さ	幅	厚さ	出土部位	旧No.	備　考
1	−15	台形様石器	ob	42.8	22.2	8.1	B-2区	R-28	
2	−16	台形様石器	ob	38.7	21.1	6.3	SX-01		
3	−17	台形様石器	ob	58.1	18.5	7.6	SC-01		
4	−18	UF	ob	22.7	19.5	4.8	C-1区	R-22	
5	−19	UF	ob	27.6	23.3	6.7	B-4区	R-19	
6	−20	UF	ob	25.4	20.1	6.5	包含層		
7	−21	UF	ob	32.3	22.2	4.2	包含層		
8	−22	UF	ob	18.1	29.6	6.9	B-3区	R-12	
9	−23	UF	ob	23.0	31.0	4.5	B-2区	R-10	
10	−24	UF	ob	24.6	27.9	6.9	C-2区	R-15	
11	−25	UF	ob	41.7	29.7	10.3	B-1区	R-05	ピット内か？
12	−26	UF	ob	34.9	25.7	11.2	B-1区	R-17	
13	−27	UF	ob	27.6	29.6	8.4	B-3区	R-13	
14	−28	UF	ob	28.7	16.0	4.3	B-2区	R-08	
15	−29	UF	ob	26.8	26.6	6.2	C-1区	R-16	
16	−30	UF	ob	32.4	39.8	16.6	包含層		
17	−31	UF	ob	25.9	33.4	16.1	B-2区	R-14	
18	−32	石　核	ob	33.6	25.2	16.8	A-5区	R-24	
19	−33	石　核	ob	16.4	40.0	16.7	B-2区	R-09	

法量の単位は㎜　　※包含層は出土位置の特定できないもの

Tab. 7 出土石器属性表（実測分に限る）

1）Fig. 71中の旧石器調査グリッド以外の石器は，遺構検出時に地山面で発見したものである。
2）秋田県教育委員会　1986『七曲台遺跡群発掘調査報告書』
　秋田県教育委員会　1986「松木台II遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書』
3）未報告。剝片尖頭器，ナイフ形石器などが出土している。これ以外に有田・小田部地区で4か所の旧石器を出土した地点（5次，100次，107次，115次）があるが，いずれも1～3点で，まとまったものはない。

4）小結

以上調査の概要について述べた。ここではそれらを整理して若干のまとめとしたい。

今回の調査で，遺構は大きく3時期に分ける事が出来る。I期は旧石器時代，II期はSC01の時期，III期は包含層とSD01・02の時期である。

II期のSC01については，須恵器の形式が小田富士雄氏の須恵器編年のIIIb期頃に相当し，6世紀後半代と考える。III期の包含層とSD01・02の時期については，掲載していないがSD01から中世後半代の15・16世紀頃の土師質土器の鍋片が出土しており，その時期頃が考えられる。

I期の旧石器時代については，今回の調査は昭和52年に実施された第6次調査について良好な資料を得た。資料の考察については本文中に述べているので，ここでは有田・小田部台地における旧石器時代遺物の分布（Fig. 75）を述べておく。当台地上では現在9ケ所の出土地点が知られている。しかし大部分は後世の遺構からの出土で，旧石器時代の包含層を検出したのは第6次・第131次の2ケ所だけである。分布状況を見ると第131次周辺と第6次・77次・100次・107次周辺の2ケ所に旧石器時代遺物の集中する部分がある。但，離れてはいるが南端の第115次・北端の第86次地点にも旧石器時代遺物が出土している。立地条件を見ると台地の斜面や，台地に切り込んだ谷頭部分に近く，比較的水の得やすいと思われる地域に集中している。ただ全体に有田・小田部台地は中世末頃の小田部城の築造や昭和40年代の区画整理事業により大規模な地形改変を受けており，旧石器時代の包含層の残りは極めて悪いものと考えられる。

（山崎）

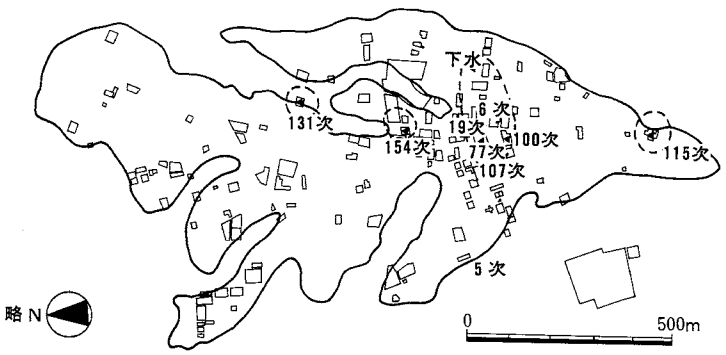


Fig. 76　有田・小田部台地旧石器出土地点

5．第133次調査（調査番号8750）

1）調査地区の地形と概要

申請地は早良区有田1丁目32—4地内に所在し，開発申請面積は480m²である。

申請地に地権者より，専用住宅建設の開発申請が出された為事前調査を行なった。その結果埋蔵文化財が検出されたので，調査を実施した。調査期間は昭和63年1月26日～3月31日迄で，調査実施面積は443m²である。

調査区周辺は有田遺跡群内で最も調査が行なわれている地域で，弥生時代初頭から中世末頃の遺構が重層して検出されている。同遺跡群内においては遺構密度の濃い地域の一つである。当調査区の遺構面は鳥栖ロームであり，約10cmの表土を除去すると，すぐ検出出来た。遺構は西側が区画整理時の削平によるものか，ほとんどなく，東側部分に遺構は集中していた。西側には畑の凹凸の激しい畝跡が見られた。当地特産の小田部大根の栽培跡と考えられる。検出した主な遺構は弥生時代初頭頃のV字溝1条，中世後期溝2条，古墳時代初頭住居跡1棟，古墳時代後期頃柵1列，掘立柱建物1棟，古墳時代～中世土坑4基，井戸1基である。当調査区から東側一帯では古墳時代末～古代律令期の掘立柱建物群が多く検出されているが，当地点では検出出来なかった。ただ調査区東側境界地に大型のピットが数個あるが，それらは建物の柱穴の可能性がある。しかしいずれにせよ当地点の東側に建物群の境界があると考えられる。出土遺物は各時期の遺構から各時期の遺物が出土している。SC01では古墳時代初頭の土師器群が一括で多量に出土した。

2）遺構と遺物

住居跡（SC）

SC01（Fig. 78，PL33）　調査区東側で検出した平面形態が長方形を呈す住居跡である。弥生時代初頭の溝SD03上に作られ，柵SA01やピット群，中世の井戸SE01，溝SD02などに切られる。この住居跡は大型で確認規模は長辺6.96m以上，短辺6.40m，壁高は最大で50cmを測る。埋土は黒色粘質土を主体とし，下層には橙色ロームブロックを含んでいた。各壁下には幅10～20cm，深さ8cm前後の小溝が廻っていた。また床面は不安定な地盤を補強する為に，黄色ローム粘土を貼って地固めしていたが，床面自体V字溝にかかる部分は沈下していた。

また住居跡より主柱穴が3個，炉が2ケ所検出された。主柱は対応状況から2本柱のものと考えられ，建て替え拡張された状況を表わしている。古い方をSC01(古)，新しい方をSC01(新)とする。SC01（古）は（新）より一回り小さく，規模は長辺6.0m以上，短辺5.30mを測る。床面の北西側に幅10～14cm，深さ1～4cmの浅い溝がL字状に廻っており，その溝と壁に囲まれ

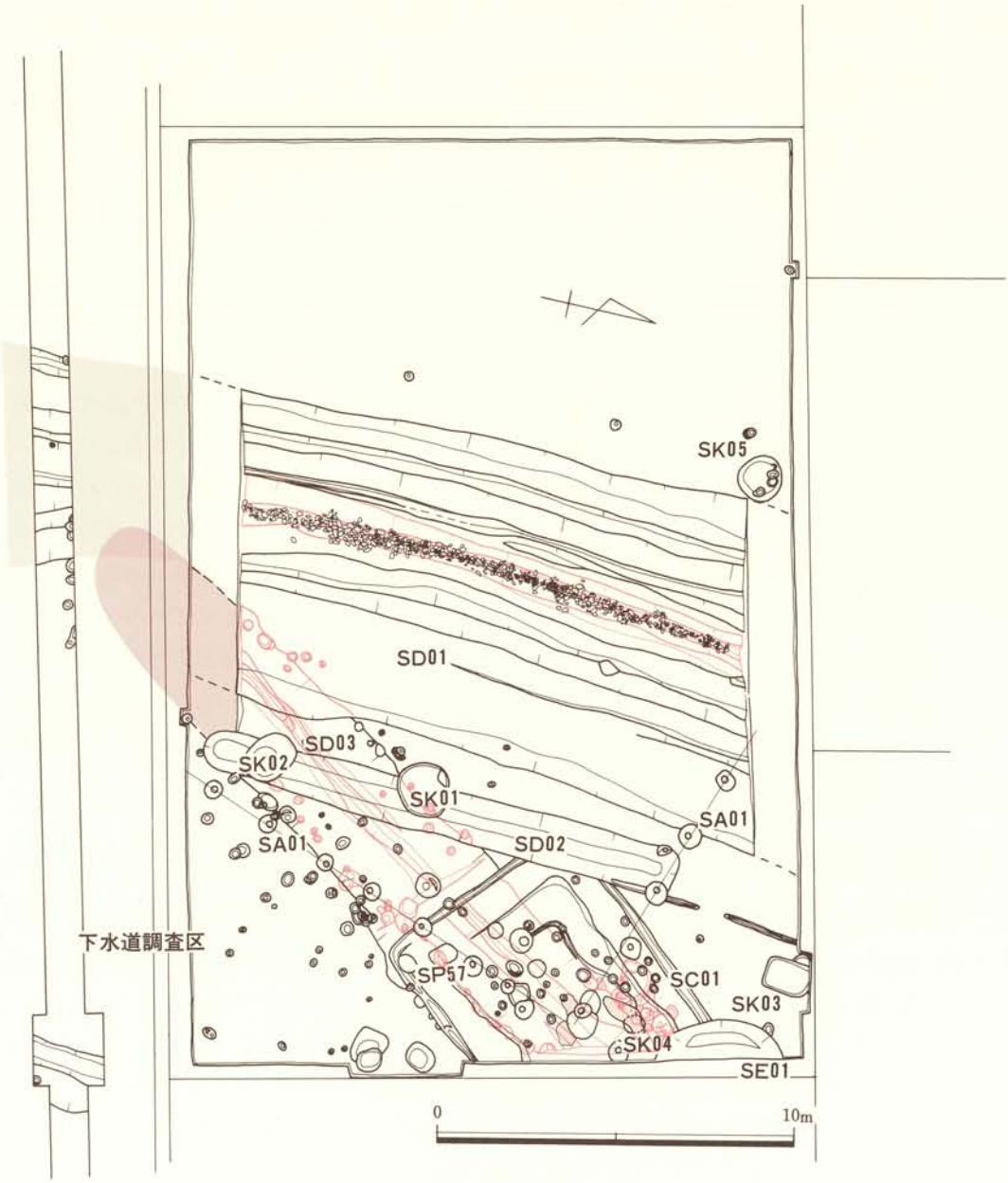


Fig. 77 第133次調査区遺構配置図（1/200）

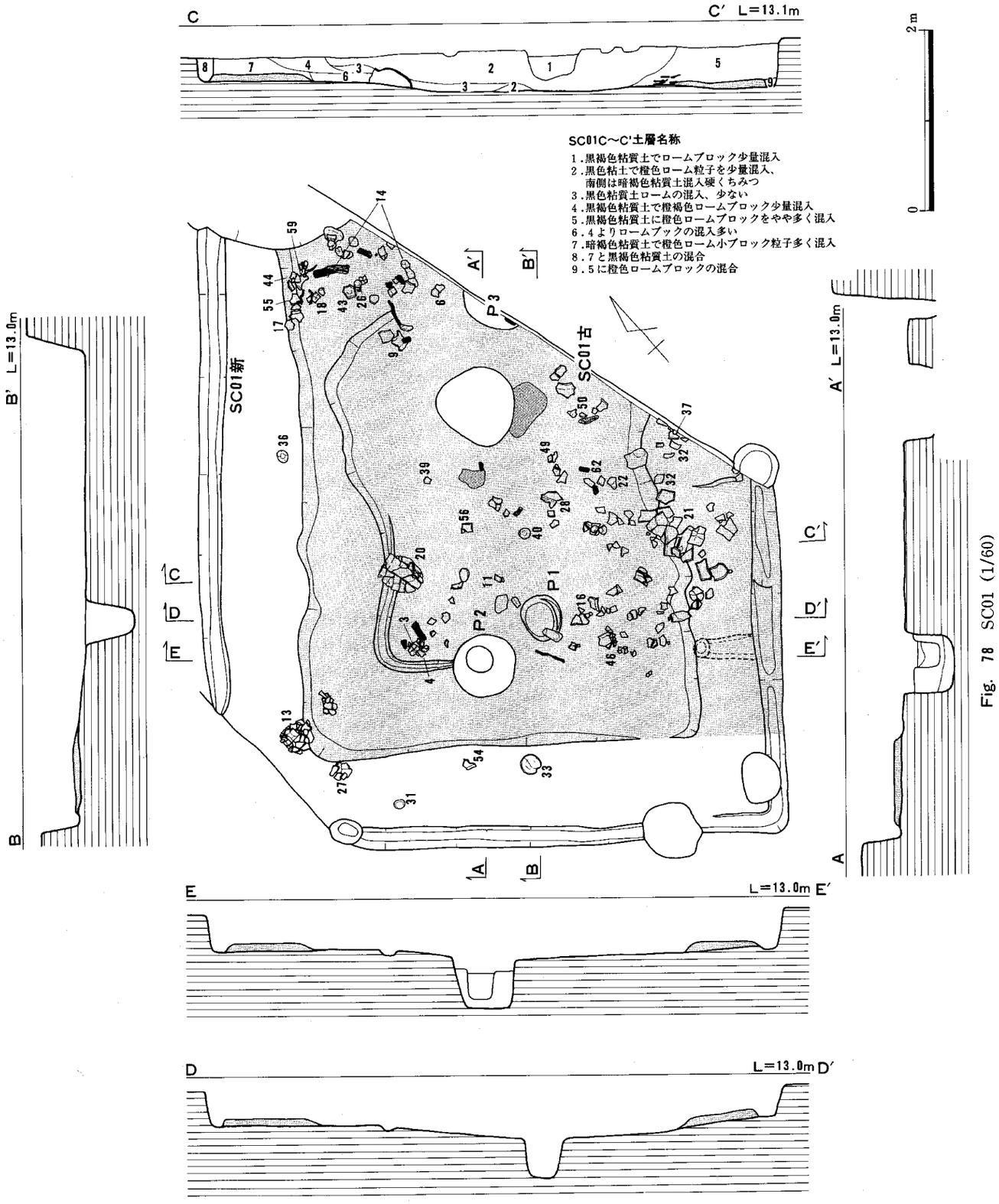


Fig. 78 SC01 (1/60)

た幅0.7～0.8m部分がベッド状遺構と考えられる。主柱は先に述べたように2本柱であるが，確認したのはＰ１のみである。Ｐ１は40×50cm，深さ40cmの楕円形の柱穴で，上層は黄色ロームブロックで埋められていた。柱穴は西壁から1.4m，南北両壁から2.65mと丁度中央にある。SC01(新)は長辺6.96m以上，短辺6.4mである。主柱はＰ２，Ｐ３である。Ｐ３は調査区東壁にかかり半分のみを確認した。柱穴の規模はＰ２が直径75cm，深さ50cm，Ｐ３が東壁断面で70cm，深さ50cmを測る。Ｐ２は西壁から2.1m，南壁から3.3m，北壁からは3.0mの位置にあり，やや北へずれている。SC01（新）のベッド状遺構は西側と北側にあり，SC01（古）の壁からSC01（新）周溝に狭まれた幅0.8～1.0mの部分で，黄色粘土を貼付けて作られていた。以上の事からSC01（新）はSC01（古）から西北両側へベッド状遺構分幅１m程拡張したものと考える。当住居跡からは床面・下層を中心に多量の土師器が出土した。また埋土中からは縄文時代最終末の夜臼式土器や石器類，上層には須恵器なども混入していた。

出土遺物（Fig. 79～85，PL38･39）　床面及び床よりやや浮いた状態で多量の土師器や炭化物が出土した。

１～22は土師器の甕形土器である。大・中・小３種類に分ける。１～５は小型甕で，１はやや外湾する口縁を持つが，他は外へ直に開く。６～20は中型甕である。胴部外面にハケを施すもの６～10，ヨコの平行叩きを施すもの11～13がある。15はタテの叩きで異質のものである。上層より出土。16～18は胴底部片である。19・20は器高35.6cm，34.5cmを測り，中型甕の中でも大きい。20は頸部に三角突帯状の段が付く。21･22は大型甕で口径は復元で41.5cm，66.3cm，器高54.1cm，78.5cmを測り，22が１回り大きい。21は頸部と胴部中央，胴部下半に突帯が１条づつ廻る。22は胴部最大径が頸部下にある。

23～28は壺形土器である。23・24は小型壺で，口縁は外へ開き気味に伸びる。23は内面ヘラケズリ。25は大きな球形の胴部に口径が小さく，短く外へ開く口縁が付く。26は口縁部片で二重口縁をなす。27は底部片で，底部は小さく不安定な平底をなす外来系のものであろう。28は内湾して外へ大きく開く口縁部片で，外面はハケ調整である。29～46は鉢型土器である。29・30は小型鉢で，底も浅い。31・32は底がやや尖り，口縁部は立上り鋭い。33は器壁は肉厚で，底部は平底である。35・36はほぼ同様の器形である。35は不安定な平底に外湾気味に直立する口縁部を持つ。36は胴部片。37･38の口縁部は内傾する。38の口端部には浅い凹縁が入る。39･40は脚台付鉢の脚台部片である。41～46は深鉢である。41・42は短く外反する口縁部が付く。43～46は42・43よりは長く直立もしくは軽くく字状に外反する口縁部を持つ。45の胴外面下半はヘラケズリ，他はハケ目調整である。45・46は鉢としたが甕の可能性もある。47・48は高坏の脚部片である。49・50は沓形状の支脚であるが，49は口嘴状に突起があり，上部には円孔が１ケ所ある。51～62は器台である。51～54は外来系のもので，52・53は鼓形器台であるが，52は器壁が厚く，二重口縁壺の口縁部の可能性がある。54は筒部に長方形の透しが４ケ所入り，

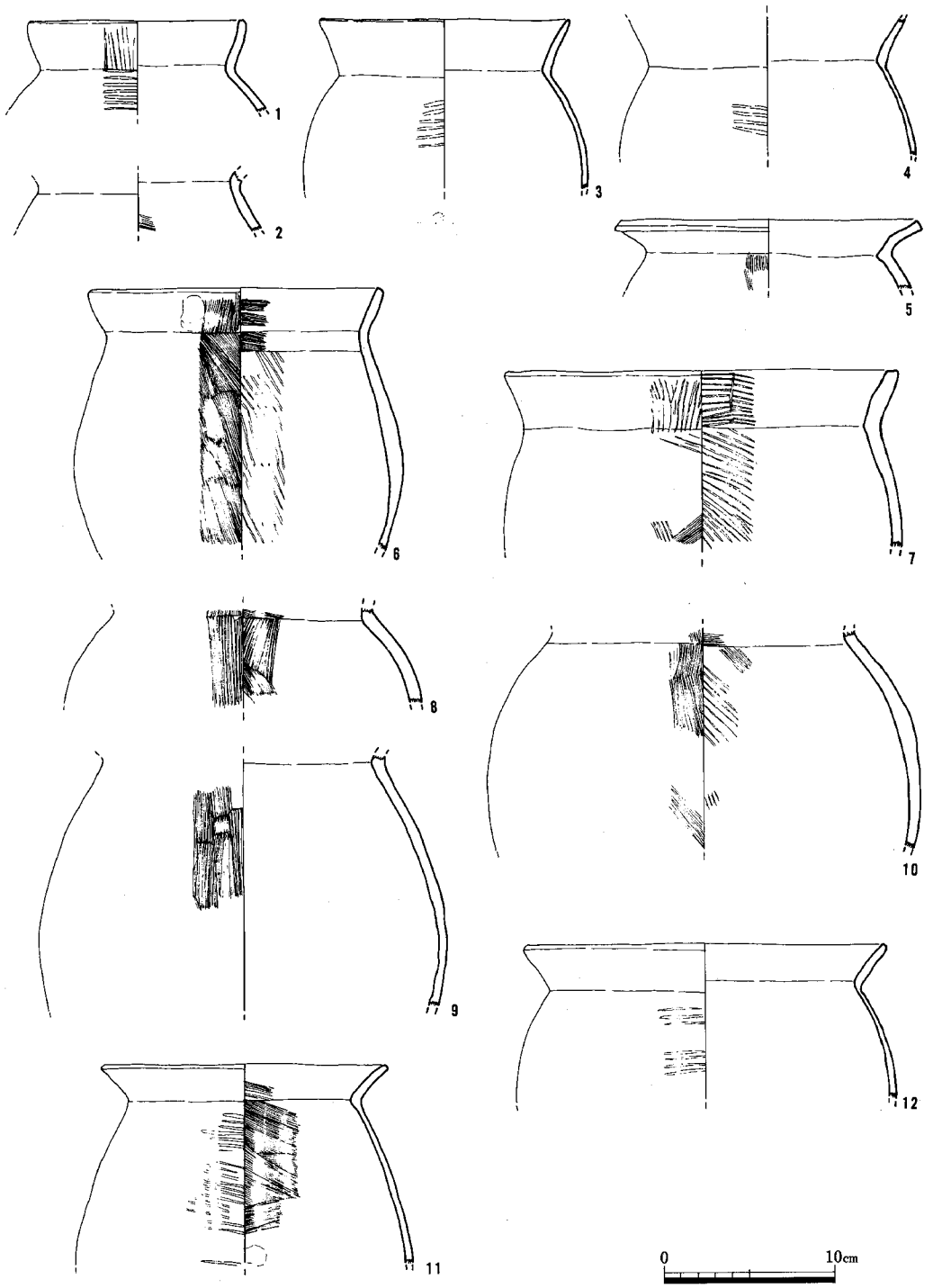


Fig. 79 SC01出土遺物Ⅰ (1/4)

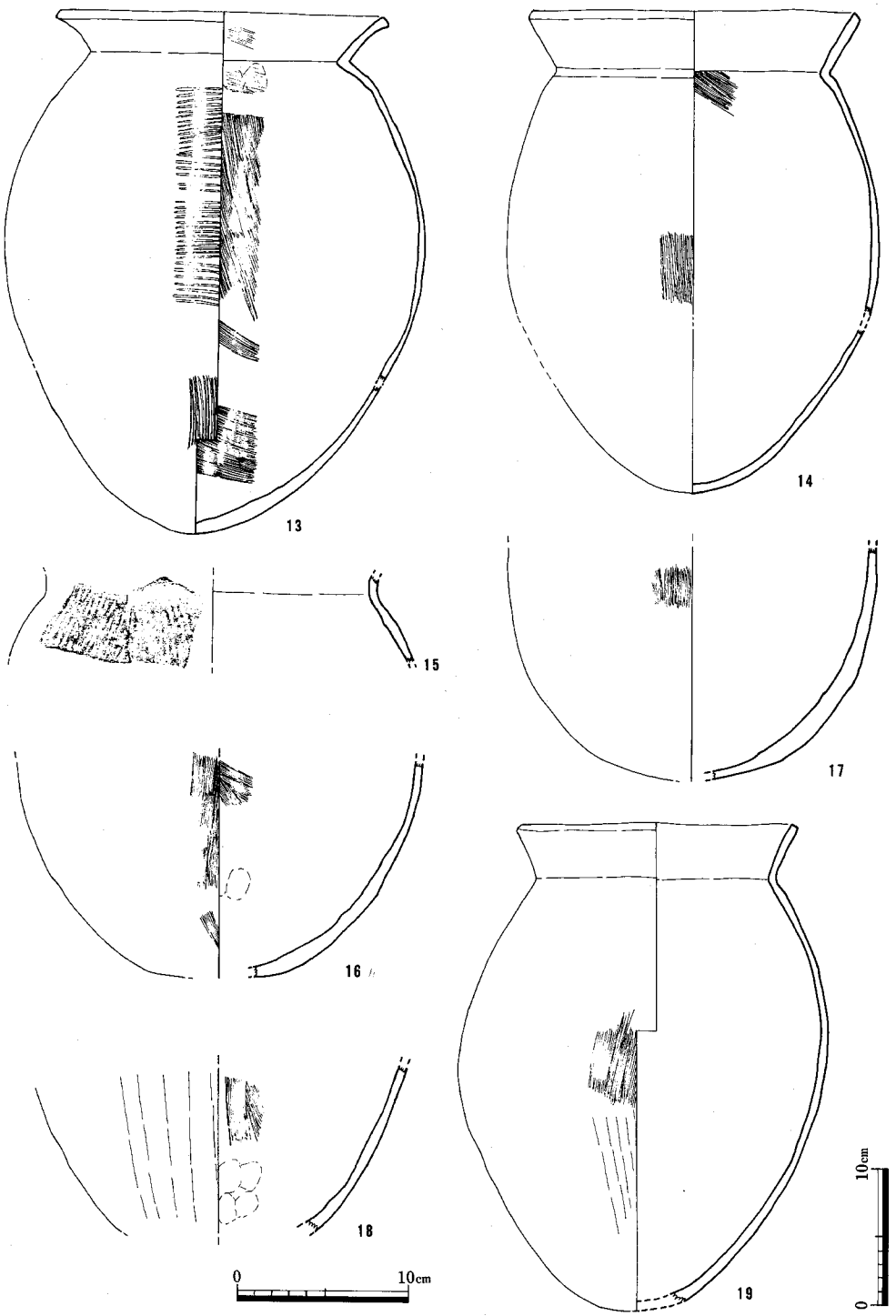


Fig. 80 SC01出土遺物II (1/4)

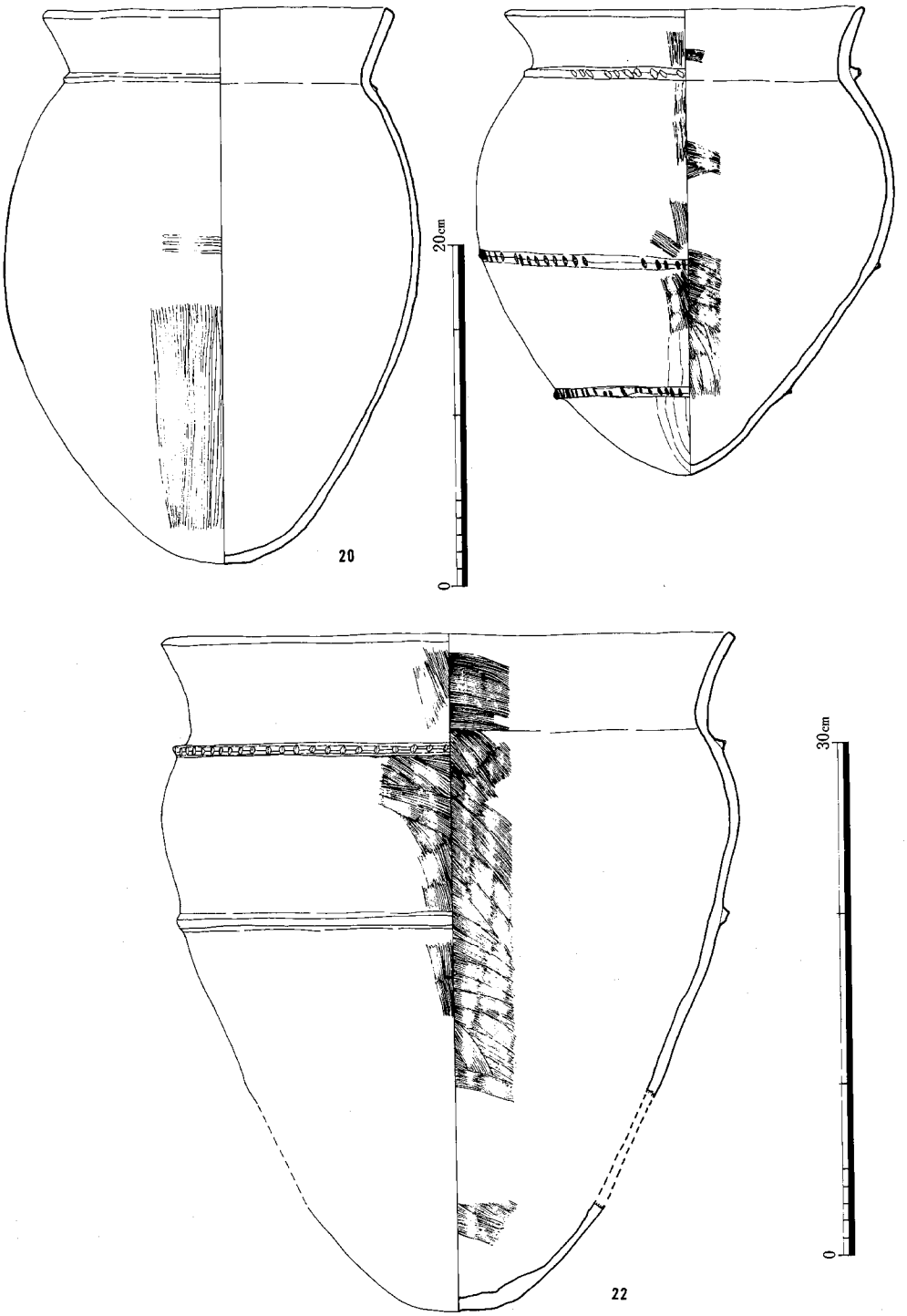


Fig. 81 SC01出土遺物Ⅲ (1/5・1/6)

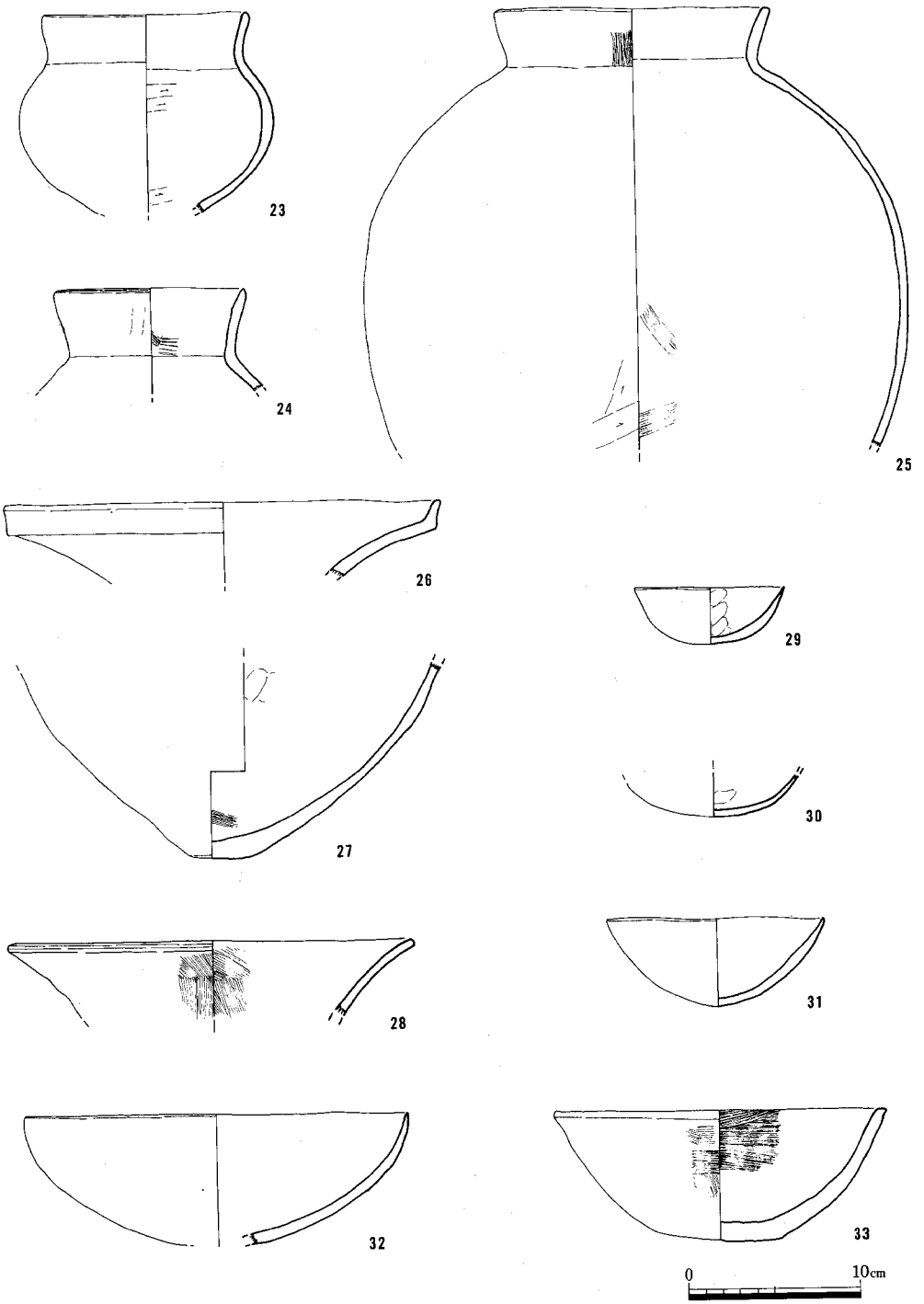


Fig. 82 SC01出土遺物IV (1/4)

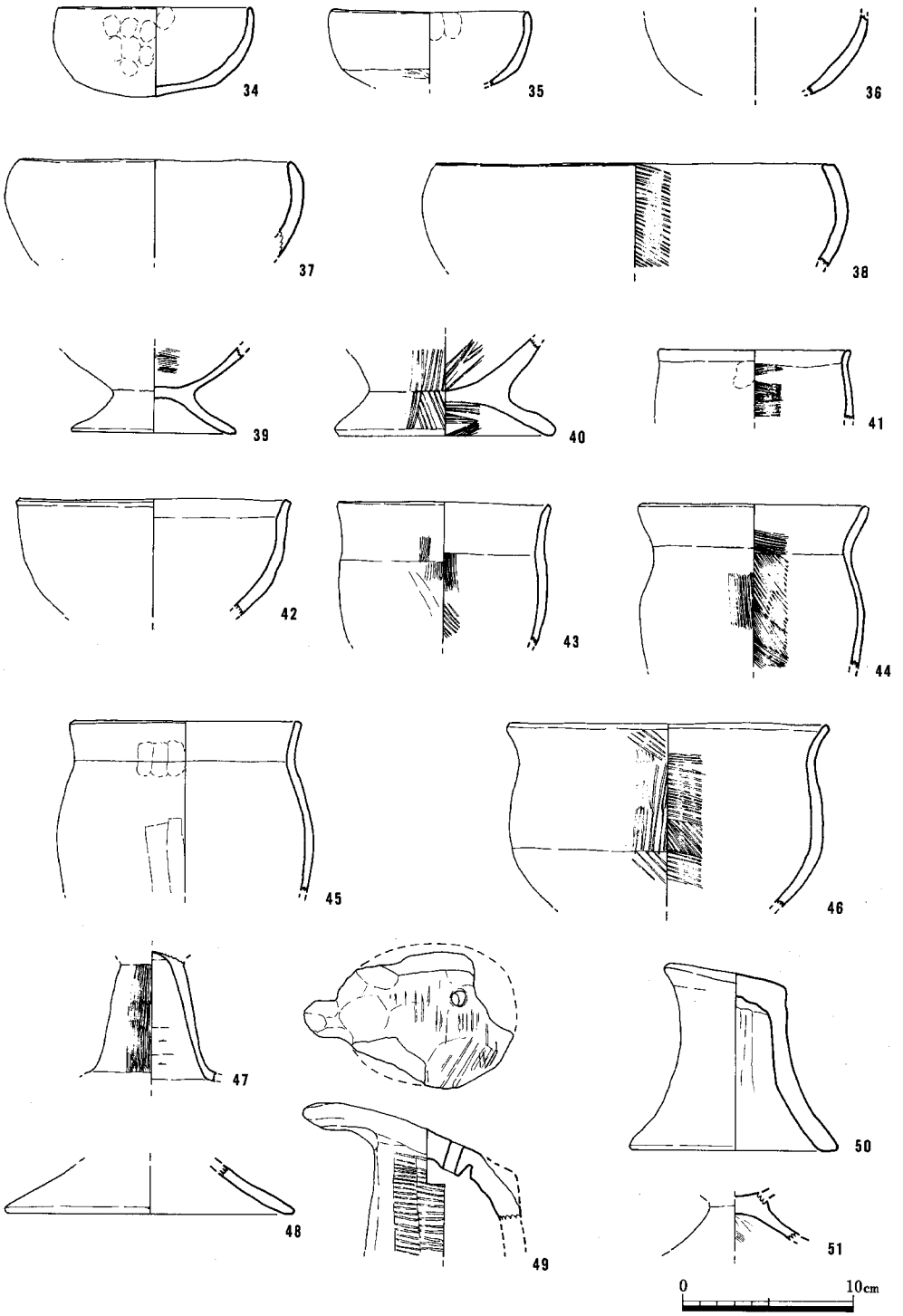


Fig. 83 SC01出土遺物V (1/4)

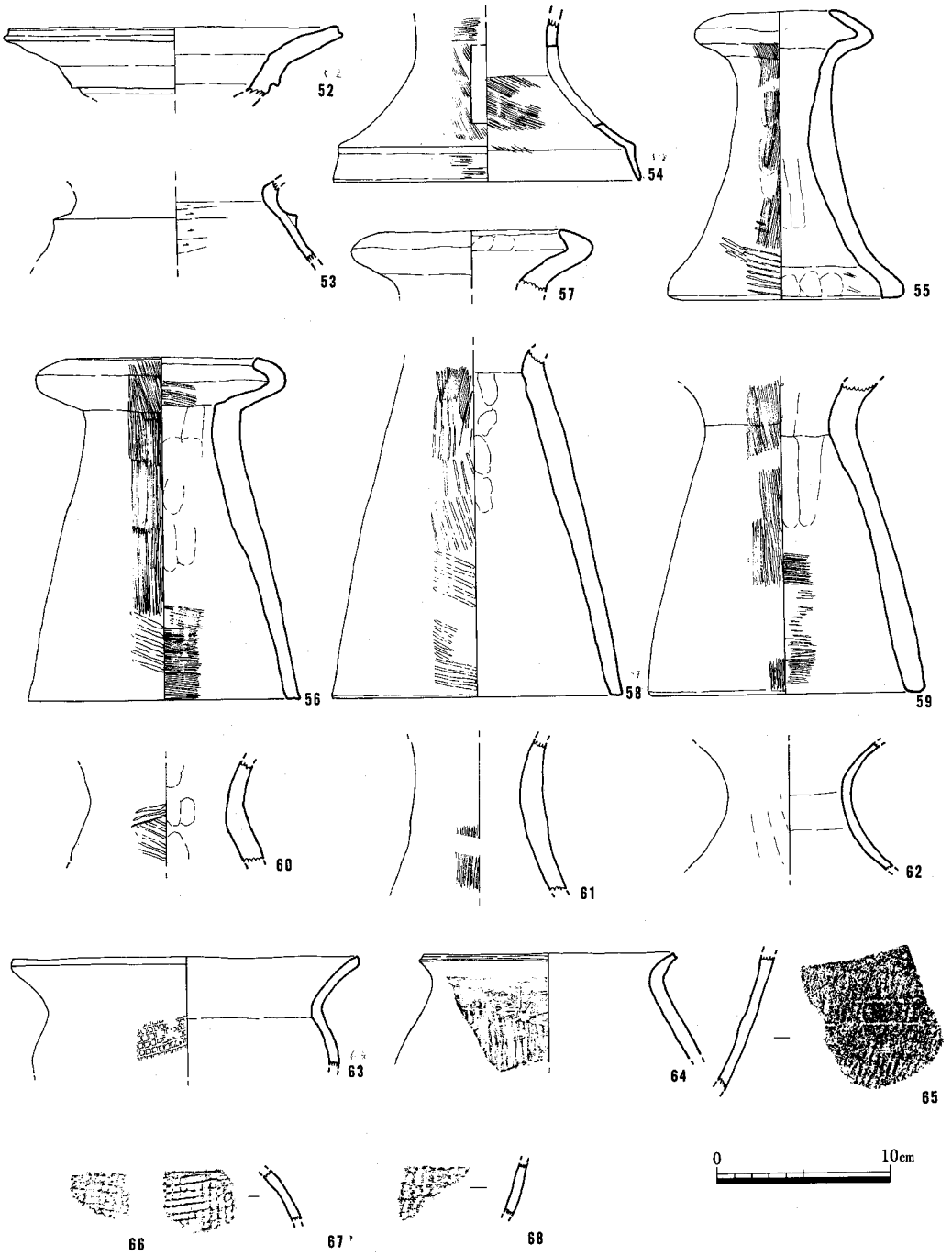


Fig. 84 SC01出土遺物VI (1/4)

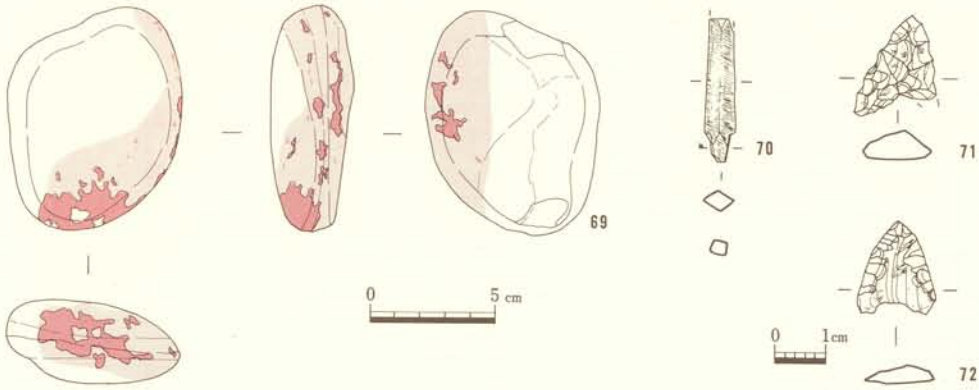


Fig. 85 SC01出土遺物Ⅶ (1/3・2/3)

こちらでは類を見ない器種である。55～62は在地系の器台である。55～59は頸部のしまりが強い筒形の器台で，55～57は受部が袋状をなす。59～62は筒部片である。

63～68は赤焼土器と呼ばれる朝鮮半島系の軟質土器片である。63・64は甕である。格子目叩きのもの63・66～68，平行叩き65，縄席文65の3種がある。65が下層以外は上層からの出土である。

69は赤色顔料が付着した磨石である。付論で詳細な考察は述べる。70～72は石鏃で，遺構には伴わないもの。70は大陸系の磨製石鏃である。他に図示していないが今山型石斧片がある。

188・189（Fig. 101）は滑石製の臼玉である。

土坑（SK）

全部で5基検出した。3基が中世，1基が古墳時代後期である。

SK01（Fig. 86，PL34）

SD02・03を切る平面形態が略円形を呈し，規模は直径1.54m，深さは最大14cmを測る土坑である。断面形を皿状で，ほぼ平坦である。埋土は黒灰色土に黒色土・地山ロームブロックをわずかに含む。出土遺物は土師器・須恵器・青磁・瓦質土器片が32点出土したが，細片で図示出来ない。

SK02（Fig. 86，PL34）

SD02・03を切り，平面形状が略楕円形を呈し，規模は長径1.54m，短径は1.16m，深さ14cmを測る浅い土坑である。床は少し掘りすぎたが，床面はほぼ水平である。埋土は黒灰色土で，黄褐色ロームブロック，黒色土を混入している。

出土遺物（Fig. 87，PL37）　須恵器・土師器・土師器皿・白磁・青磁片など64点出土したが，

細片で図示出来るものは1点である。

73は管状土錘の破片で，現存長3.4cm，直径1.2m，孔径0.4cmを測る。

SK03（Fig. 86，PL35）

調査区北東境界地で検出したが，一部境界外にかかる。平面形状は隅丸長方形で，規模は長辺1.34m，短辺0.94m，深さ26cmを測る。床面は水平である。埋土は褐色土を主体とし，下層には明橙色ロームブロックを混入する。床面の南側には5cm内外の小礫が分布していた。また南壁際に石庖丁を転用した紡錘車と思われる石製品が1点あった。この土坑は形態から見て土坑墓の可能性がある。

出土遺物（Fig. 87，PL37）　須恵器・土師器・陶器・白磁・瓦・焼土ブロックなどが少量出土したが，大半が細片である。

74は石庖丁片を再利用した紡錘車と思われる。縁辺は雑に打ち欠いている。

SK04（Fig. 85，PL35）

SC01上面で検出した焼土坑である。削平によって床面しか残っていない。長辺が1.6m，短辺が0.76m，残存壁高8cmを測る。床面は厚さ2cm前後固く焼けており，西側には炭化物が一部残っていた。出土遺物は少なく，弥生式土器・土師器・瓦質土器・炭化物などが出土した。図示出来るものはない。

SK05（Fig. 86，PL35）

SD01の西側で検出した平面形態が略円形を呈し，規模が長径1.34m，短径1.26m，深さ10cmを測る土坑で，床面は南側に向ってやや深くなり，北側は凹凸が著しい。埋土は黒褐色粘質土に橙色ロームブロックを混える。西側壁際にコシキの破片があった。

出土遺物（Fig. 87，PL37）　土師器の甕片など11点出土したが，いずれも細片である。75はコシキの胴部片で，胴部には先端部が丸い把手がつく。

井戸（SE）

検出したのは1基である。

SE01（Fig. 88，PL35）

調査区東境界地で検出した井戸で，半分以上が調査区外にかかり，完掘していない。平面形態は円形と思われ，確認規模は長径3.6m，短径で1.1mを測る。深さ3.2m迄掘り下げたが，底まで届かなかった。井筒等の内部施設は未完掘の為不明。埋土は暗褐色土や黒褐色粘質土や地山ロームブロックなどを主体とするが，断面観察によれば，2段階で埋ったと思われる。これは一度部分的に掘り直して，再度埋めたのか，また2時期にわたって埋めたのか，詳しいことは判らない。二度目の掘方内の埋土中には10～20cmの礫が上・下2ブロックに分かれて廃棄されていた。井戸下層土は粘性が強く，湧水があった。

出土遺物（Fig. 88，PL37）

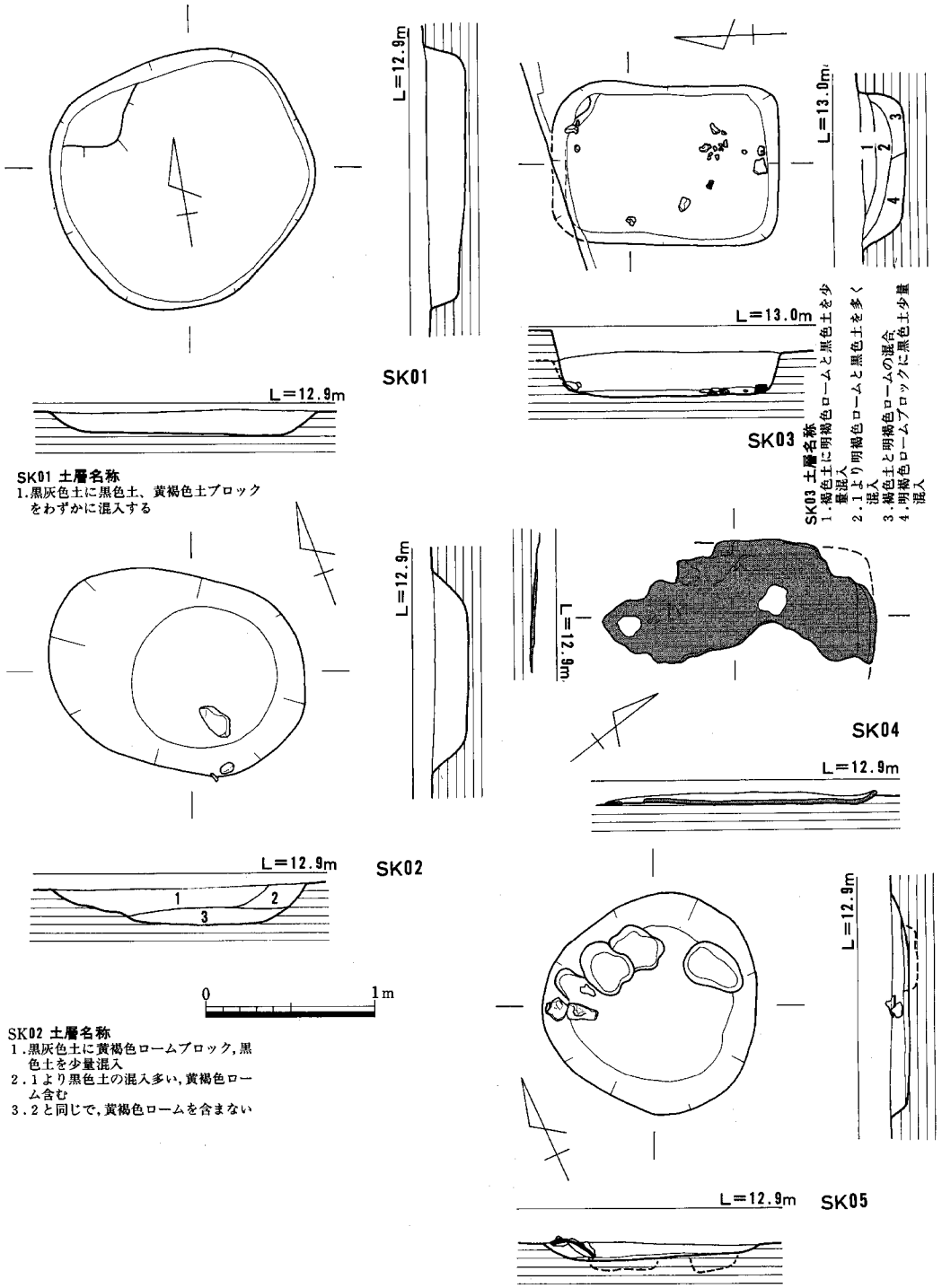


Fig. 86 SK01～05 (1/40)

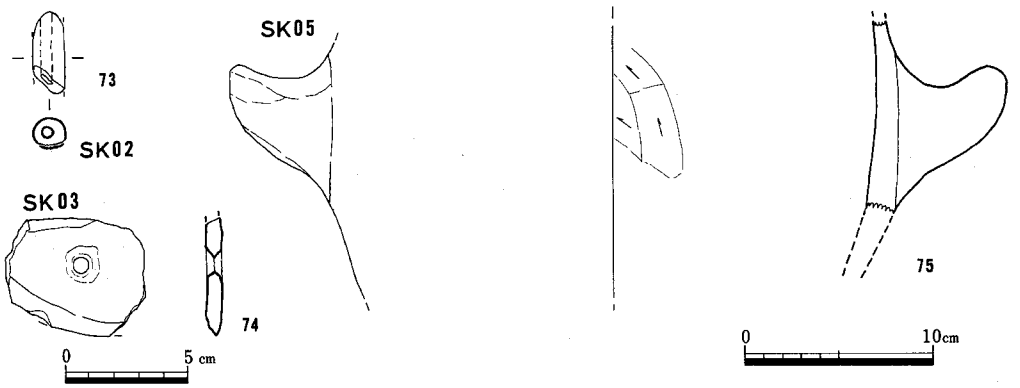


Fig. 87 SK02・03・05出土遺物（1/3・1/4）

土師器皿・須恵器・瓦質土器・白磁・青磁などの細片が37点出土した。図示しうるものは1点である。

76は瓦質土器の湯釜片である。体部上面に1条の鍔が付く。鍔から下には煤が付着する。

柵　(SA)

SA01（Fig. 88, PL32）

SC01・SD03上を北東から北西へ鍵型に伸びるが，コーナー部は横方向，縦方向うまく柱筋が通らないため，それぞれ別の柵の可能性を残す。確認柱穴は南北方向7間，東南方向4間分，確認長は南北11.85m，東西7.7mを測り，主軸方位は南北方向でN－21°30′－Wに取る。柱穴掘方は円形で平均50～60cm，深さ30～80cm，柱径は痕跡より15cm前後を測る。

出土遺物（Fig. 89, PL37）　各柱穴から弥生式土器・土師器・須恵器・中世土師質土器・土師器皿・白磁などを含むが，大半は細片である。

77は須恵器の坏蓋口縁部片。口縁部と天井部の境に明瞭な段を有す。78は土師器の甕形土器口縁部片。79は器台である。根石のかわりに転用されていた。77・78はＰ５，79はＰ10出土。

溝状遺構（SD）

３条検出した。内２条は中世のもの，１条は弥生時代初頭頃のもの。

SD01（Fig. 90・91, PL36）

調査区中央で検出した磁北方向に延びる幅8.5～９m，最大深2.1mを測る大溝である。２段掘りで両側特に東側に幅広いテラス面があり，そこからＶ字状の深い薬研堀となる。底から30～50cm上の所に10～20cm位の自然礫や割石が敷き詰められていた。この溝は南側の第95次調査区で検出した３号溝と，北側の第55次調査の１号溝に繋がるが，第95次調査で検出した道路状遺溝は確認出来なかった。埋土は上より一段目（テラス迄，第１層～４層）が褐色又は灰褐色土を主体とし，２段目は薬研堀部分で，その上層（第５～11層）が褐色土に橙色ロームを混入，下層（第12～17層）は地山ローム土の混入が多くなり，粘性が強くなる。一段目の埋土は

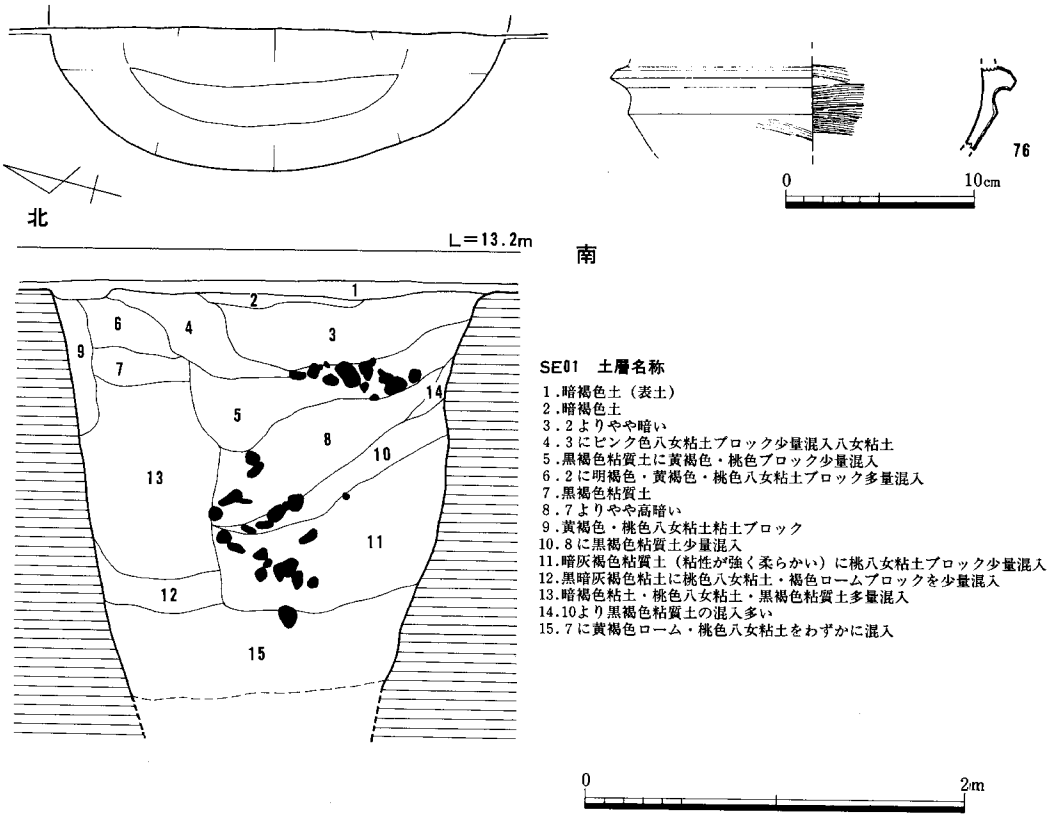


Fig. 88 SE01と出土遺物（1/60・1/4）

近世の土に近く，下段の薬研堀が埋没した後，上段は窪みとして残り，農道などに利用されていたものと考える。

出土遺物(Fig. 92, PL40) 上層から下層迄遺物の質に変化はない。出土量は上中層が少なく，下層～礫群中の出土が多い。遺物は主に上・中・下層・礫群・礫下の5段階で取り上げた。層位は埋土の項で述べたのと一致する。弥生式土器・須恵器・土師器・土師質土器・瓦質土器・青磁・白磁・陶器・瓦類・石鍋片などがある。

80～85は上・中層出土。80～82は白磁碗片である。83は須恵質土器の摺鉢と思われる底部片である。84は瓦質土器の足鍋支脚である。85は備前焼の摺鉢の口縁部片である。

86～102は礫群中及び礫下出土である。86･87は白磁碗底部片，88～92は青磁碗底部片である。89は他と釉調，胎土が異なっており李朝青磁と思われる。92は龍泉窯系の劃花文碗で，内底見込みに草花がヘラ切りされている。93は土師器の小さな蓋である。天井部には小さな突起状のつまみが付き，底部は糸切り痕が残る。94～96は瓦質土器の足鍋口縁部片である。94は格子目叩き痕が残り，95は外面に煤が付着する。97は土師質土器の鍋である。98は瓦質土器の摺鉢体

部片である。99・100は備前焼の摺鉢である。101は陶器甕の口縁部片で，口縁部は丸い玉縁状を呈す。内外面うすい褐色釉がかかる。102は軒平瓦の瓦当部で内区に均正唐草文様が入る。103は縄文時代後期中葉頃の深鉢の口縁部片である。104は磨石である。使用により全体に磨滅する。105は頁岩製と思われる小型の砥石で仕上砥である。106・107は石臼の上臼片である。いずれも展部は磨り減っている。106は礫岩？，107は凝灰岩である。

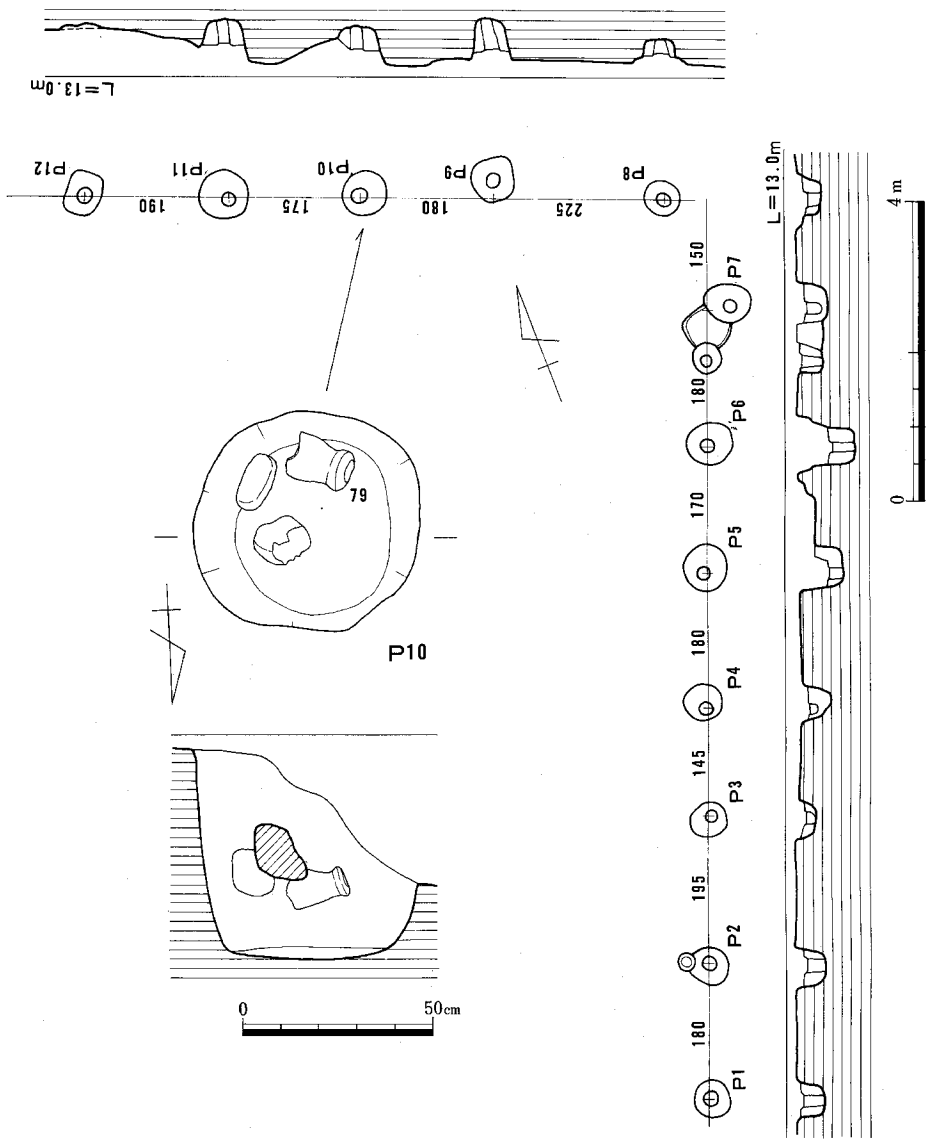


Fig. 89 SA01 (1/100・1/20)

SD02 (Fig. 91・92, PL36)

SD01とほぼ平行する溝で，調査区内で完結する。全長13.7m，幅1.4m，深さ50cm前後を測り，比較的浅く，壁の立上りは緩やかである。埋土は褐色粘質土と黒褐色粘質土を主体とし，下層の方には黒褐色砂質土の混入がある。

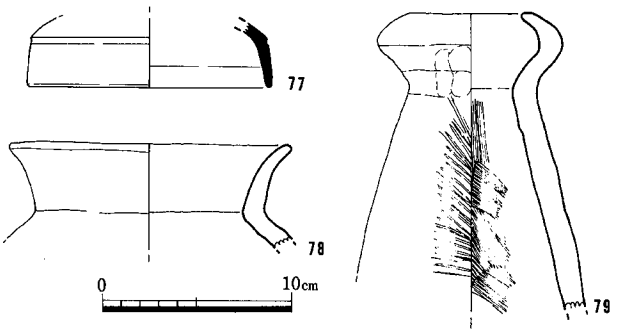


Fig. 90 SA01出土遺物 (1/4)

出土遺物(Fig. 94, PL40) 量はそれ程多くない。弥生式土器・土師器・須恵器・中世土師器皿・土師質土器・白磁・青磁・陶器・瓦質土器・瓦器・染付・石鍋・鉄滓などがある。いずれも細片で，図示出来るものは少ない。

108は土師器の皿で完形品である。底部は糸切り，口唇部に黒いタール状の付着物がある。灯明皿として使われたものか。109は石臼の上臼の受皿部片と思われる。砂岩製である。

SD03 (Fig. 91・96, PL36・37)

調査区南東側で検出した北東方向に延びる溝で，SC01，SD01・02，SA01他多数のピットが重なっており，それらの遺構を調査後完掘した。確認長は15.5m，溝幅は3.9m，深さは1.8m前後を測る。この溝は南西側の第95次，北東側の第56次・18次，東側の第77次・87次調査区で検出されている溝に連なるものであり，それらの溝は有田地区台地高所部を楕円形状に巡る環溝をなすと予想されている。

SD03の溝断面形は逆台形状を呈し，底は幅の狭い平坦面をなすが，西側は更に1段溝状に落ち込む。溝底のレベルは南から北へ次第に低くなる。また両側壁上面には不定形なピット状の落込みが不規則に並んでいた。溝埋土は上層の方が黒褐色粘質土を主体とし，下層の方が暗褐色粘質土を主体とするが，下層の方は黄褐色の砂質ロームブロックを多く混入する。

南壁土層ベルト，中央土層ベルトの断面観察によれば，V字溝が逆台形の溝を切る状況を示し，新期のV字溝が逆台形の溝より深く切り込んでおり，溝底の西北側が一段深くなる状況と一致している。しかしこの状況は東壁土層では明確でない。溝の掘り直しという状況も考えたいが，南壁土層が溝を斜めに切る土層であり，しかも古期の逆台形溝の土層が自然堆積を示すようなレンズ状の堆積でない事，また溝出土の遺物が調査の仕方にもよるか時期差で明確に区別出来なく(調査時上から機械的に掘り下げている)，また調査時に確認出来なかった。というような理由から可能性を残すが断定は出来ない。しかし，第87次調査区の例では，昭和41年度に九州大学の調査した溝を，昭和58年に再調査を行ない報告している。報告では九州大学の調

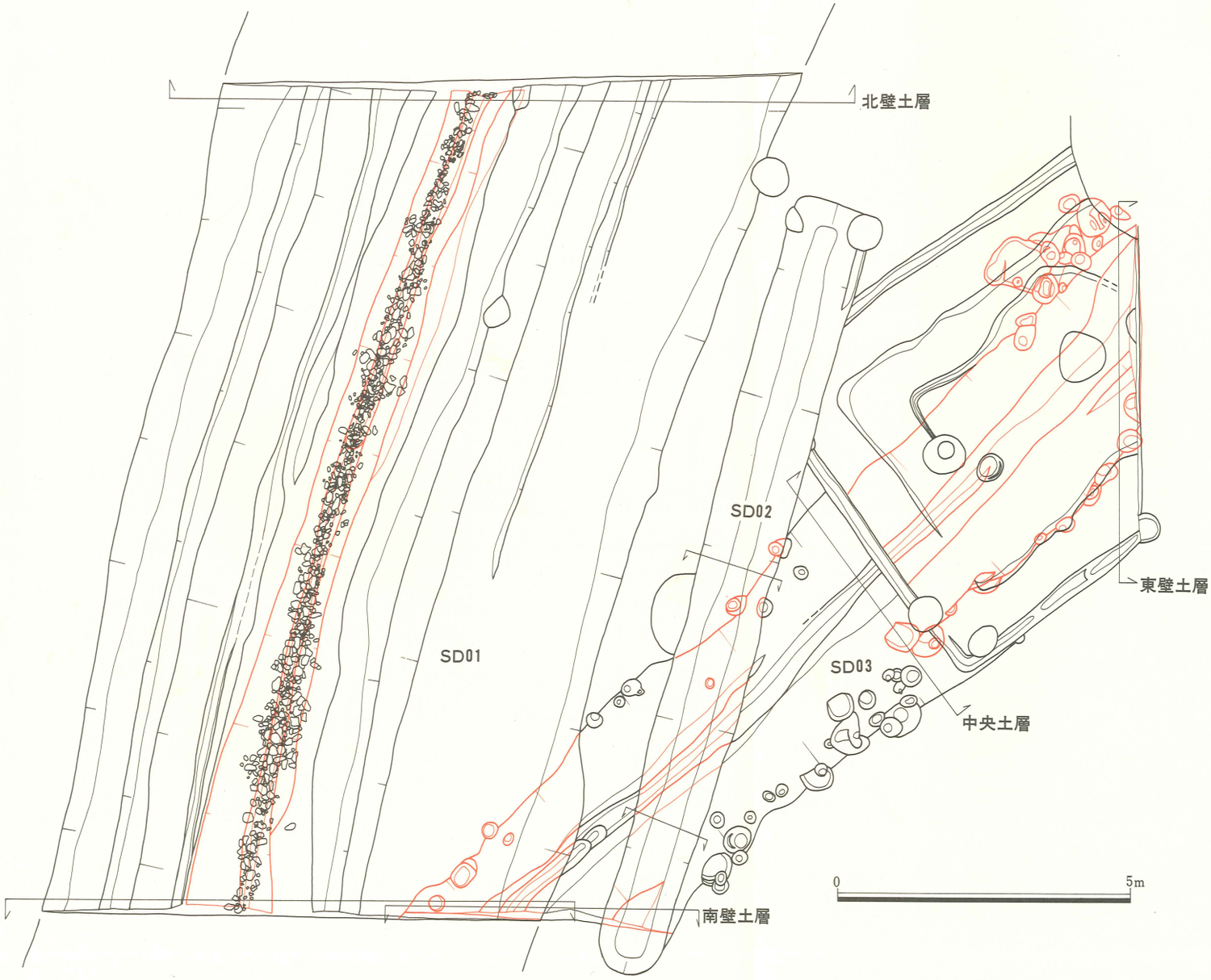
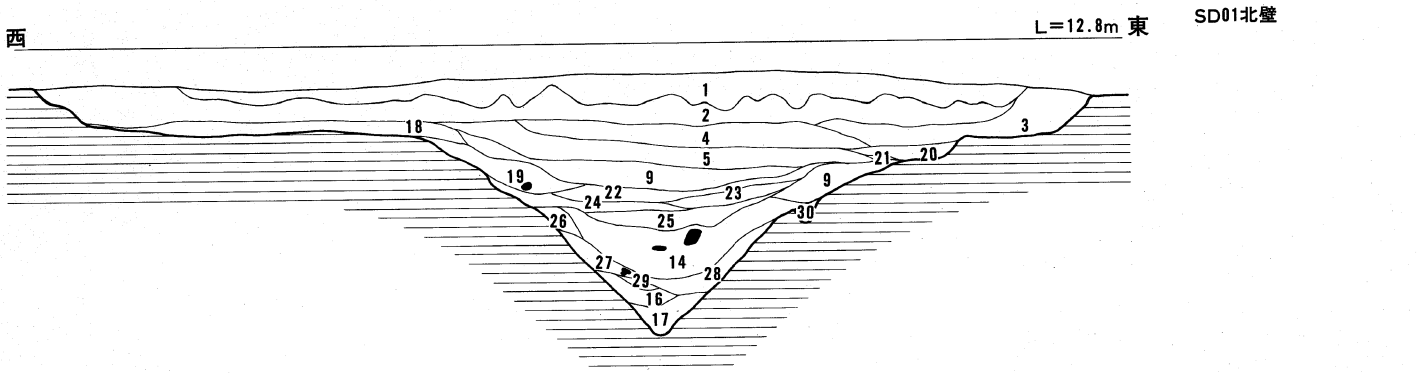
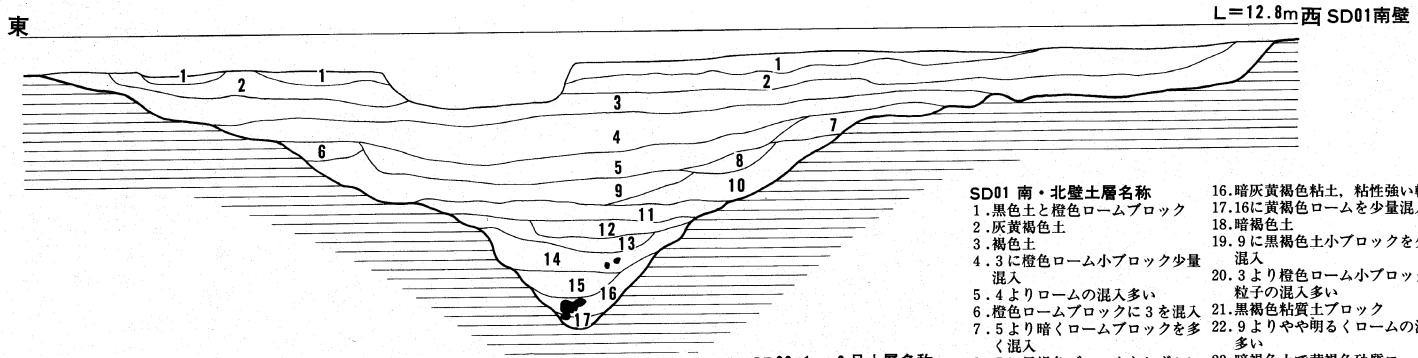
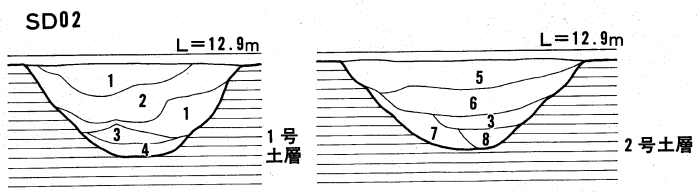


Fig. 91 SD01～03 (1/100)







SD02 1・2号土層名称

1.黒褐色粘質土と褐色粘質土の混合，硬くしまる
2.褐色粘質土に黒褐色粘質土少量混入、硬くしまる
3.黒褐色砂質土，粘性がある
4.3より暗い黒褐色粘質土，ちみつ
5.2に橙色ロームを少量混入
6.2で橙色ロームをわずかに混入
7.暗褐色土で橙色ローム粒混入，柔らかく粘性あり
8.7より暗く軟質

SD01 南・北壁土層名称

1.黒色土と橙色ロームブロック
2.灰黄褐色土
3.褐色土
4.3に橙色ローム小ブロック少量混入
5.4よりロームの混入多い
6.橙色ロームブロックに3を混入
7.5より暗くロームブロックを多く混入
8.5に黒褐色ブロックをわずかに混入
9.3より暗くて橙色ローム小ブロックを多く混入
10.9よりロームブロックが大きい
11.明褐色ロームブロックと褐色土混入
12.11よりロームの混入少ない
13.褐色土でわずかに黄褐色ローム混入，軟質粘性強い
14.褐色粘質土，軟質
15.暗灰黄褐色土・マンガンを混入，黄褐色ローム少量混入
16.暗灰黄褐色粘土，粘性強い軟質
17.16に黄褐色ロームを少量混入
18.暗褐色土
19.9に黒褐色土小ブロックを少し混入
20.3より橙色ローム小ブロック，粒子の混入多い
21.黒褐色粘質土ブロック
22.9よりやや明るくロームの混入多い
23.暗褐色土で黄褐色砂質ロームをわずかに混入
24.23に橙色ロームを多量混入
25.暗褐色土で明黄褐色砂質ロームをわずかに混入
26.黒褐色土で明黄褐色砂質ロームをわずかに混入
27.27より暗く，粘性土
28.14に明黄褐色ロームブロックをわずかに混入
29.16に明黄褐色ロームブロックをやや混入
30.26よりロームの混入少ない

0 2m

Fig. 92 SD01・02土層（1/60）

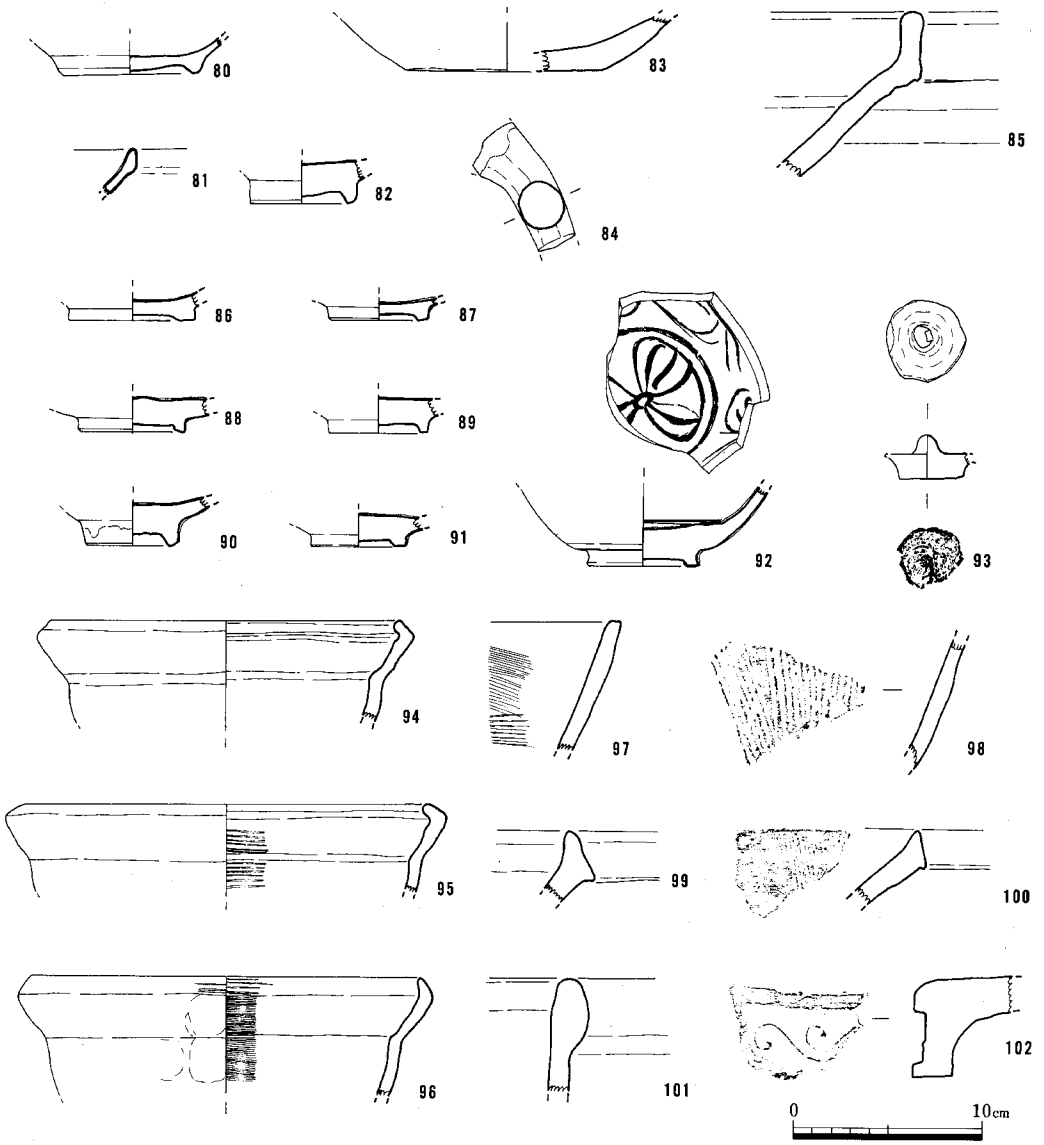


Fig. 93 SD01出土遺物Ⅰ (1/4)

査ではV字溝とした溝を，V字溝ではなく箱薬研堀として報告している。しかし掲載された土層断面図を見ると溝底には達していないものの，V字溝状の掘り込みが認められる。この環溝遺構については調査例が少なく，調査範囲も狭いことから，まだまだ不明な点も多い。今回はこういう事実もあるという事を報告しておく。また遺物は上から上・中・下の3段階で取り上

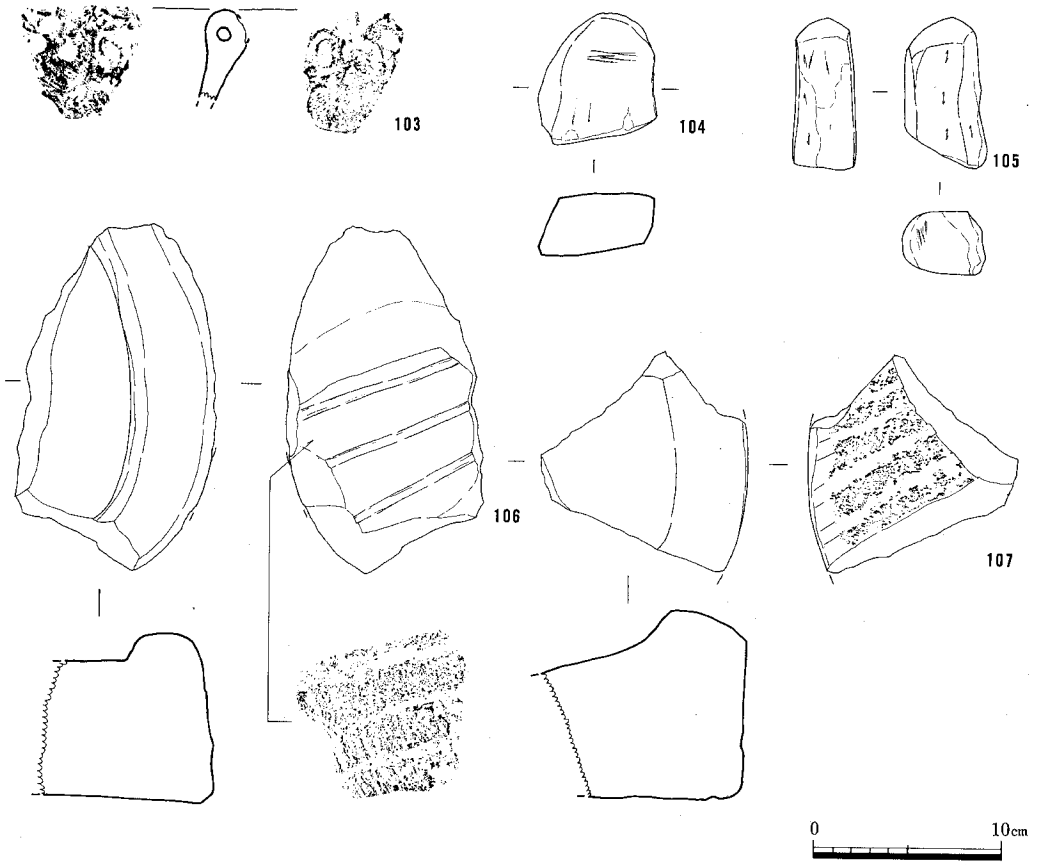


Fig. 94 SD01出土遺物II (1/4)

げた。上層は上面より50cm迄で，層しては中央ベルトの第1・2層，中層は1m迄の深さで中央ベルトの3・4層，下層はそれ以下である。

出土遺物(Fig. 97～99, PL41) 各層を通して多くの遺物が出土した。主なものとして，夜臼式土器や板付I式土器の甕形土器や壺形土器，高坏形土器，鉢形土器，石斧，石鏃などで，量としては夜臼式土器の方が多い。また上層では後世の遺構と重複してる為か，土師器・須恵器・瓦質土器片などが混入している。

110～128は上層出土。110～116は夜臼式土器の甕形土器の口縁部片である。いずれも口縁部に刻目突帯がつく。口縁部が内傾するものI類（110・112），直立するものII類（115・116），外傾するものIII類（111・113・114）に分ける事が出来る。117は板付I式土器の甕形土器の口縁部片である。口縁部が外反し如意形を呈し，口縁下は粘土を貼り付けて肥厚させている。118は夜臼式土器の壺形土器の頸部片で，三角突帯が一条廻る。119は板付I式土器の壺形土器の胴

部片である。肩に軽い段を有し，重弧文様を施す。120～128は底部片である。120～124迄は夜臼式土器の底部片で，120・121は甕形土器，122～124は壺形土器である。125～128は板付Ⅰ式土器の底部片と思われる。

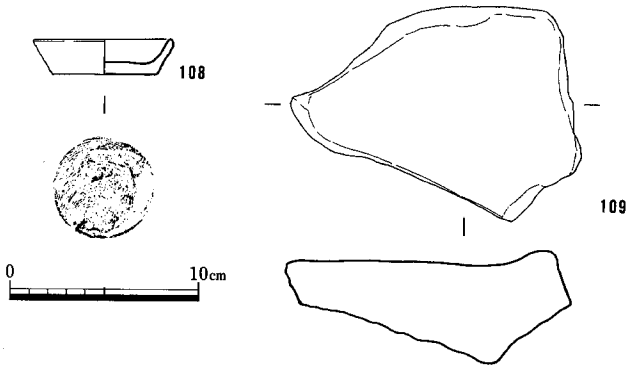


Fig. 95 SD02出土遺物 (1/4)

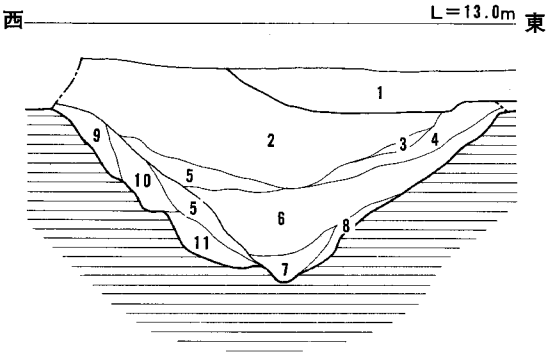
129～147迄は中層である。129～137迄は夜臼式土器の甕形土器片の口縁部片である。いずれも口縁部に突帯がつく。Ⅰ類は130，Ⅱ類は129・131・134・137，Ⅲ類は133・136である。132は縄文時代晩期の浅鉢と考えられる。138・140は夜臼式土器の鉢型土器で，138は浅鉢，140は深鉢である。140・141・142は壺形土器で，140・142は板付Ⅰ式土器の口縁・胴部片，141は夜臼式土器で胴部片である。143～145は夜臼式土器の甕底部片，146は弥生式土器の甕底部片，147は高坏の脚筒部辺である。

148～157は下層出土である。148・149は夜臼式土器の甕形土器の口頸部片である。148は口縁部を欠失するが，やや内傾すると思われる。149はやや外傾する。150・151は板付Ⅰ式土器の壺形土器片で，151は重弧文が付く。152～157は夜臼式土器の底部片である。

158～166は各層から出土した土製品及び石器類である。158は土製投弾で，一部欠失している。159は頁岩の柱状片刃石斧片，160は扁平片刃石斧片で頁岩製，161は玄武岩製の乳棒状石斧。162は块入片刃石斧の未製品，玄武岩製。163は半球状の磨石で，底面が使用で磨滅している。石質は164は砂岩製の砥石で，右側辺下部を除いて，砥面としている。使用痕が明瞭に残る。165・166は黒曜石の石鏃で166は基部の一部，167は先端が欠損する。

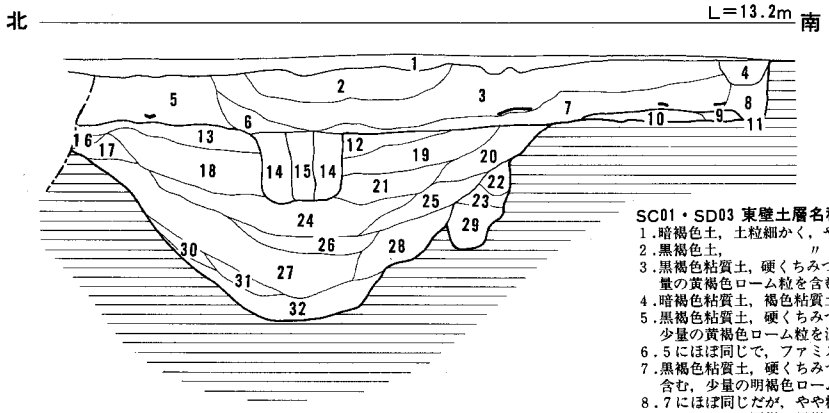
ピット出土遺物 (Fig. 100, PL41)

168はSP19出土。石庖丁の破片で復元形態は三角形を呈すと思われる。169はSP21出土で，土師器の甕形土器の口縁部片。170はSP26の蛸壺形土器口縁部片。171はSP28出土で，須恵器坏蓋のつまみである。扁平な円形で天井は中窪む。172～175はSP34出土。172は鉢型土器の口縁部片で，口縁部は外方へ水平に開く。173～175は高坏の脚筒部片。173・174は土師器で，174は円形の透し孔が入る。175は須恵器で円形の透し孔が3ケ所入る。176・177はSP49出土。いずれも須恵器の坏身で，176は受部の立上りが直，177は内傾するが，口端部の作りはいずれも平坦である。両方とも須恵器としては古式のものである。178はSP57出土。須恵器の坏蓋で，口端部は直立し，天井部との境に明瞭な段を持つ。口縁部は平坦。179・180はSP58出土。いず



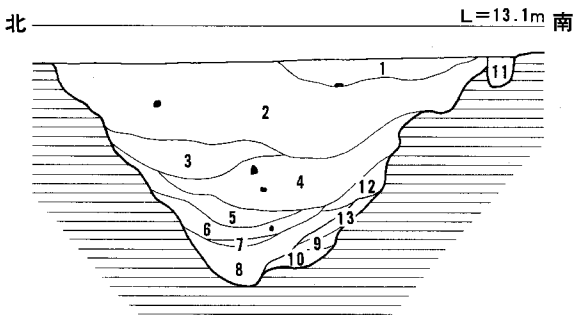
SD03 中央土層名称

1.黒色粘質土で橙色ローム粘子を混入，硬く締まる
2.黒褐色粘質土で橙色ローム粒子を多量混入，硬く締まる
3.2に1をわずかに混入
4.2より明るくローム粒子を多く混入
5.4に橙色ロームブロック，黒色粘質土を混入
6.4に明黄褐色ロームブロックを多く混入
7.暗灰黄色粘質土，鉄分わずかに含む，ローム粒を多量混入
8.暗褐色粘質土，軟質でローム粒子を多量混入
9.黄褐色砂質ロームブロックに8を混入
10.8より黄褐色ローム小ブロック粒子を多量混入
11.黒褐色粘質土に黄褐色ロームブロック混入
12.暗褐色粘質土に明黄褐色ロームブロック粒子多量混入
13.8より黄褐色砂質ロームの混入多い，やや砂質



SC01・SD03 東壁土層名称

1.暗褐色土，土粒細かく，やや砂質で均一(表土)
2.黒褐色土，　〃　，土器片包含
3.黒褐色粘質土，硬くちみつで，土器片・木炭を包含，微量の黄褐色ローム粒を含む
4.暗褐色粘質土，褐色粘質土混入
5.黒褐色粘質土，硬くちみつで締まる。土器片を包含，少量の黄褐色ローム粒を混入
6.5にほぼ同じで，ファミスを含む。土器片包含
7.黒褐色粘質土，硬くちみつ，土器・木炭等遺物を多く含む，少量の明褐色ローム粒含む
8.7にほぼ同じだが，やや粒子粗い，遺物なし
9.7・8とほぼ同様の黒褐色土に褐色粘質土を多量混入
10.明褐色粘土，粘性強く締まる，均質で粒子細かい
11.褐色粘質土
12.7にほぼ同じだが遺物の包含なし，ローム粒やや少ない，硬く締まる
13.黒褐色粘質土，粒子細かい，硬く締まる
14.黒褐色土に少量の黄褐色ローム粒を含む，土器・木炭の細粒を交える
15.14にほぼ同じ（柱穴芯）
16.黒褐色土に褐色粘土粒を含む
17.16より粒子がやや粗い
18.13にほぼ同じ，粒子は細かい
19.17にほぼ同じだが，やや暗色・黄褐色ローム粒を含む，土器片包含，硬く締まる
20.暗褐色粘質土
21.19に似るがやや明褐色ローム粒が多い，硬く締まる
22.暗褐色粘質土，やや粒子粗く脆い
23.暗褐色粘質土，明褐色ローム粒混入
24.黒褐色粘質土に少量のローム粒混入
25.24よりやや暗い
26.24にほぼ同じ
27.黒褐色粘質土に褐色ローム粒混入
28.27よりやや暗い
29.黒褐色土にローム粒を少量含む，やや砂質，粒子均一，細かい
30.褐色粘質土，粘質で粒子は細かい
31.30にほぼ同じ
32.黒褐色粘質土で，粒子は細かい



SD03 南壁土層名称

1.SD01 土層と同じ
2.黒褐色粘質土で橙色ローム粒子や炭化物を少量混入
3.2よりローム粒子の混入が少し多い
4.黒色粘質土，橙色ロームを少量混入
5.2より橙色ロームの混入多い
6.暗褐色粘質土で橙色ローム粒子を多量に混入
7.黒褐色粘土で橙色ロームブロックを少量混入
8.6よりやや暗く，粒子の混入が少なく砂質
9.2に橙色ブロックを少し混入
10.2より暗い。橙色ローム粒子をやや多く混入，粘性強い
11.5より橙色ロームの混入少ない

0　2m

Fig. 96 SD03 土層 (1/60)

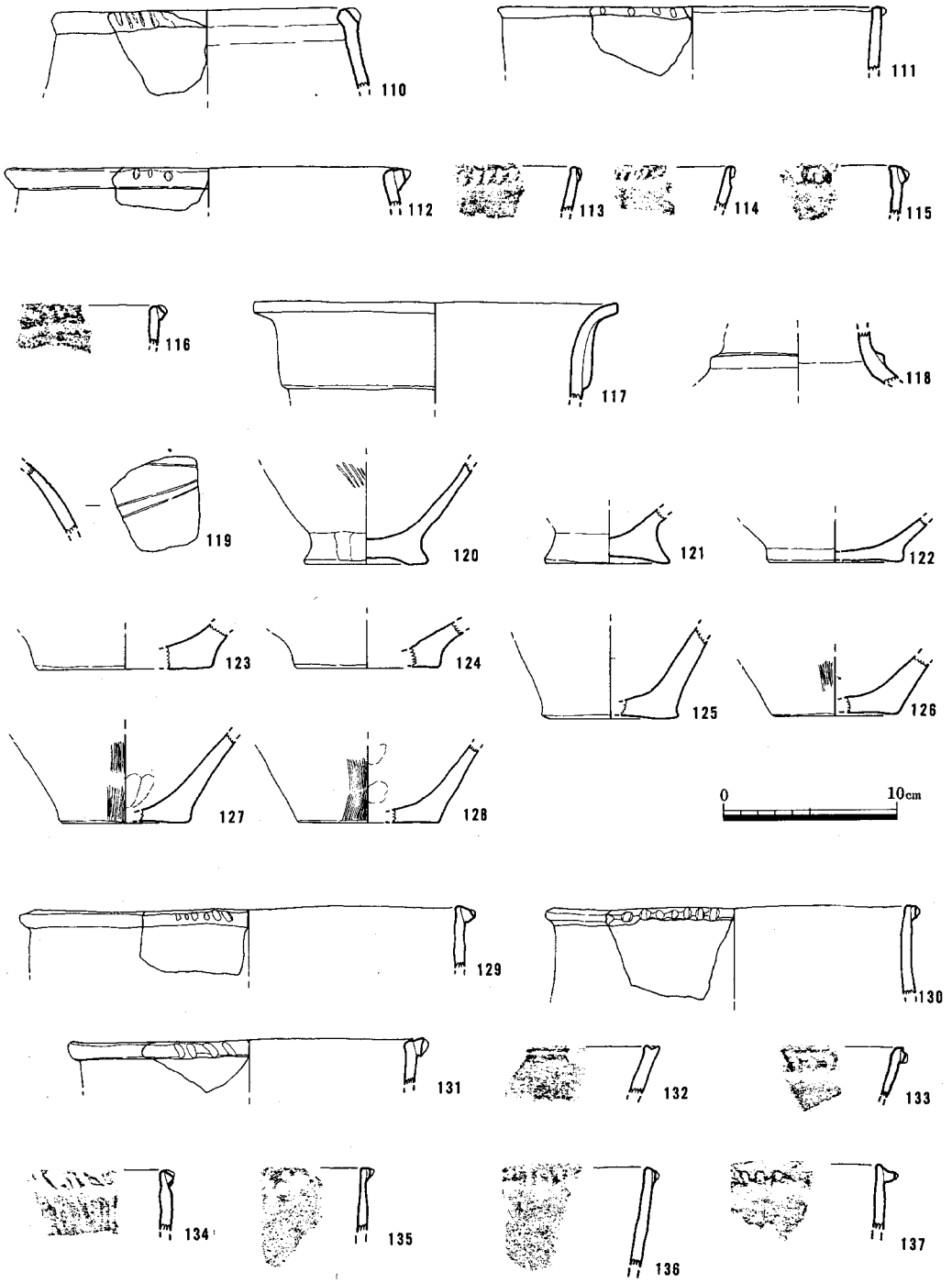


Fig. 97 SD03上・中層出土遺物（1/4）

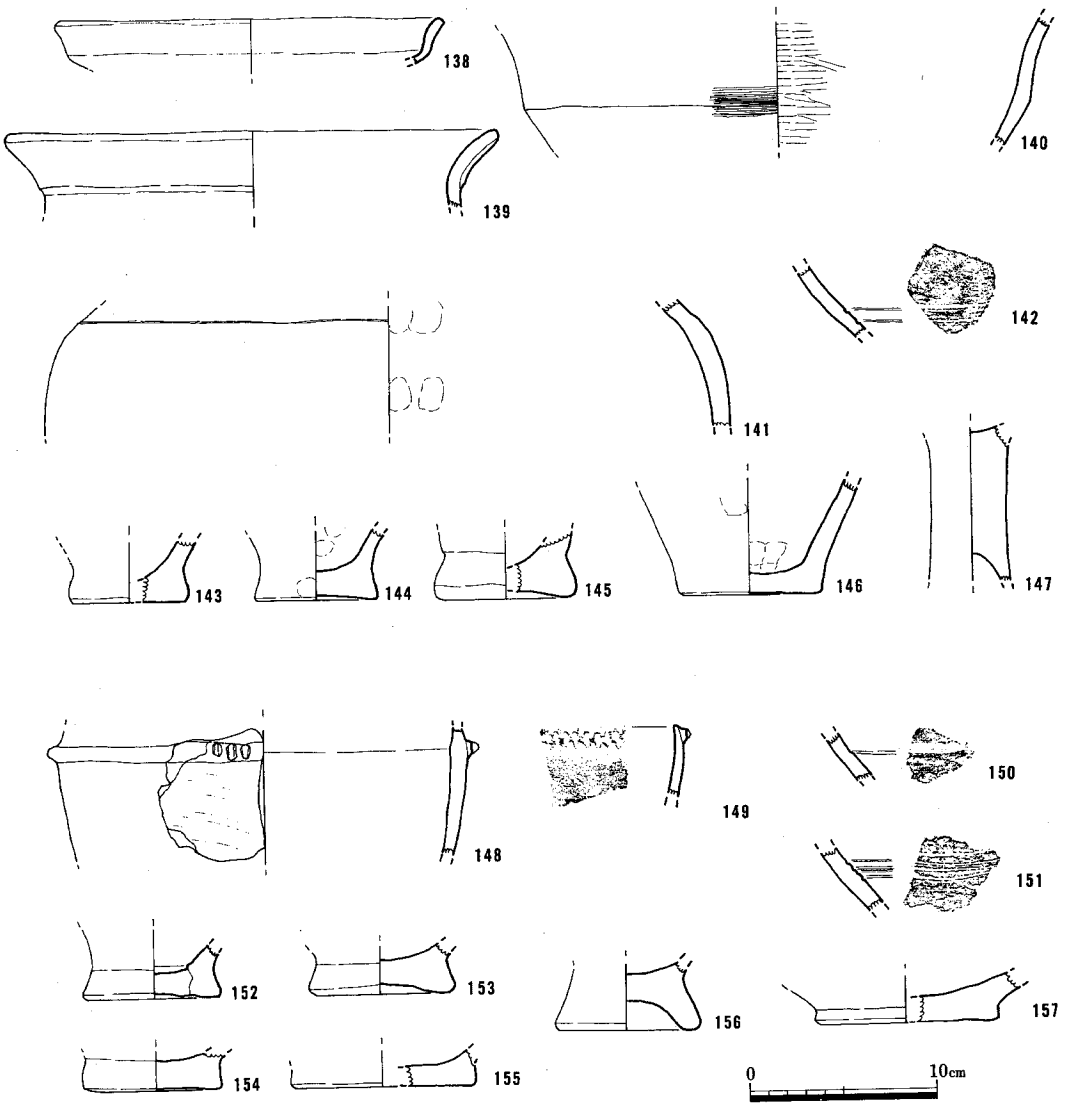


Fig. 98 SD03下層出土遺物 (1/4)

れも須恵器。179は坏蓋で，天井部の境に明瞭な段を持ち，天井部は比較的平坦，口縁内面に段がつく。180はつまみで171と同形のものである。181はSP65出土。夜臼式土器の高坏形土器の脚筒部片である。182はSP68出土で土師器の小型丸底壺の口縁部片，183・184はSP70出土。183は土師器の甕形土器の口縁部片，184は鉢形土器である。185はSP80出土で，須恵器の椀又は坩と思われる。体部に櫛描波状文が巡る。小片である。186・187はSP81出土。いずれも須恵器。186は甕の頸部片で，頸部はよくしまる。187は坏身の口縁部片で，受部の立上りは長く，内傾

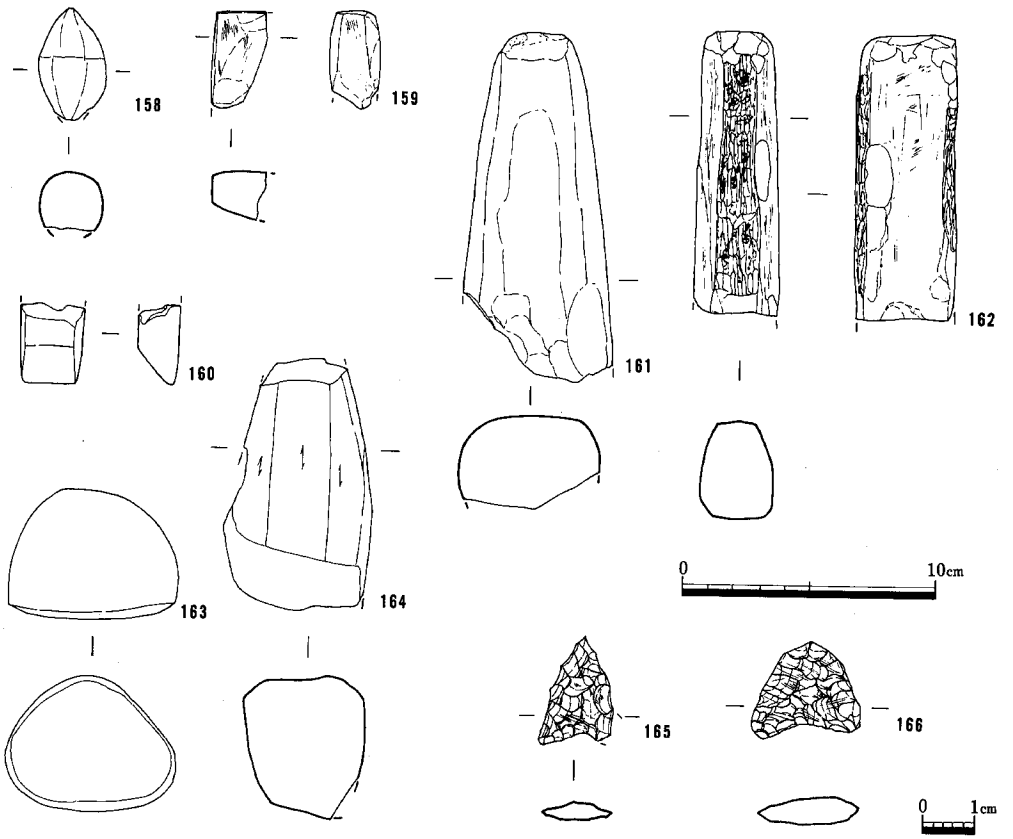


Fig. 99 SD03出土遺物（1/3・2/3）

する。188はSP57出土の勾玉である。材質は不明で，分析調査を行なった。その結果を付論に記す。

3） 小 結

以上調査の概要について述べたが，ここではそれらを整理して若干のまとめをしたい。

まず当調査区の遺構は大きく4時期に分ける事が出来る。I期はSD03の時期。II期はSC01の時期，III期はSA01，SK05の時期，IV期はSD01・02，SE01などの時期である。I期のSD01は縄文時代終末から弥生時代初頭頃の時期で，縄文時代最終末とされる夜臼式土器と前期の板付I式土器が混在している。ただ出土量の比率は夜臼式土器の方が多い。この溝は有田台地高所部を楕円形状に巡ると思われるが，当調査区南側の下水道調査区ではその続きが確認出来ず，その部分が陸橋部となる可能性が強い。丁度西側方向に開口しており，西方の室見川を意識しているものと思われる。

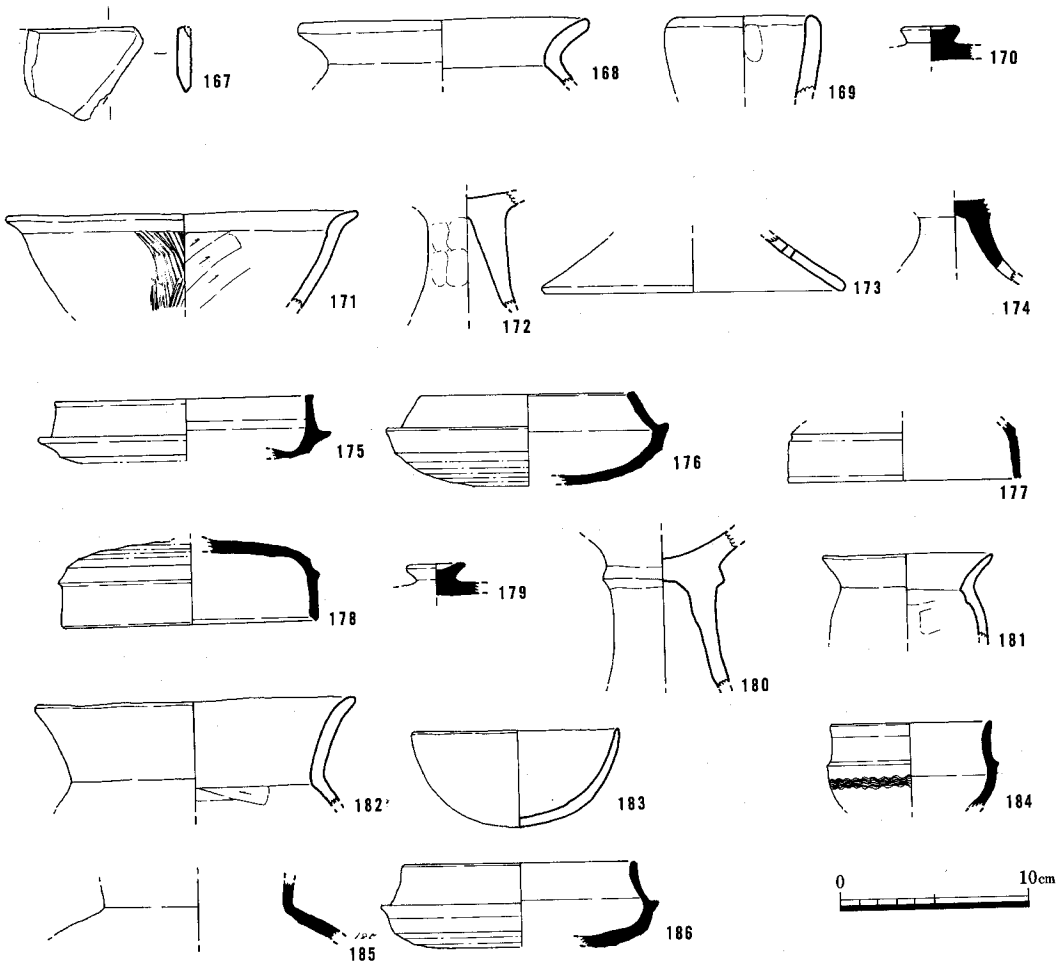


Fig. 100 ピット出土遺物（1/4）

II期はSC01の時期で，古墳時代前期初頭頃である。当住居跡は残存壁高が50cmと良好で，建て直しが確認出来た。出土した遺物は図化しえたもので92点と多い。床直上のものが多く，良好な資料となる。器種は甕形土器・鉢形土器が比較的多く，壺形土器は少ない。外来系の器種は27～29・33～35など多くない。特に28は幾内系の二重口縁壺のものと思われる。22・23の大形甕は柳田康雄氏の編年によるＩｂ期に相当し，甕形土器なども氏のＩａ期にほぼ相当するものであろう。[注1] 第133次周辺で弥生時代終末から古墳時代初頭の住居跡は第19次・32次・82次・95次・107次・141次・149次地点で検出されている。第107次・19次・149次・32次・82次で近接して２棟あるほかは，いずれも建て替えられた状況で検出された。各住居跡は距離が比較的離れており，散在する傾向が強い。布留期の住居が４～５棟単位でまとまるのと対照的である。

III期はSA01・SK05の時期である。SA01の南北方向の主軸は磁北からN—21°30′—Wと，第

146次地点の柵と平行しており，同時期のものと推定出来る。時期的には柱穴掘方出土の須恵器がIIIa期位に位置ずけられる事から6世紀中頃と推定出来る。

IV期はSD01・02・SE01の時期で，中世後期頃である。SD01・02は平行しており，ほぼ同時期のものと考える。SD01は最大幅9m，深さ2m以上を測る大溝である。この溝は第95次から第55次調査区へ直角に曲って続くものである。2段掘りの形態を持つか，この種の溝は，有田台地高所部の西側と小田部5丁目の第142次，第143次地点で検出されている。時期は第55次・95次調査区では中後半代の16世紀前半代に位置ずけられている。当調査区の溝も遺物から見て，同時期と考える。しかし第95次では上層に近世初期の礫敷の道路状遺構があるが，当地点では検出出来なかった。

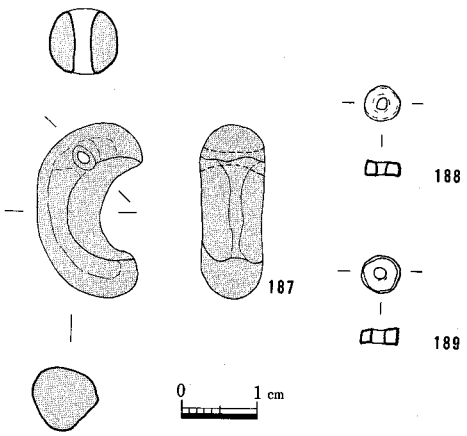


Fig. 101 玉類実測図（1/1）

有田・小田部台地は南北に細長く延びる独立台地で，西側を室見川，東側を金屑川に挾まれ，北側は海岸砂丘背後の低湿地帯であり，さながら平野の中に島状にそびえたっており，城砦を築くのに非常に適した条件を持っている。小田部城は小田部氏の里城で，現在台地の南端ほぼ方1町の範囲に推定されているが，今迄の調査成果から見れば，南端部だけでなく，更に台地中央部迄城郭の拡がりを持たせた方がよいのではないか。南端部には南方への備えとして櫓を築き，当調査区周辺では西方への備えとして，溝幅を広くし，また北西方向の第142次・143次地点では北西方向への備えとして空濠を掘り切ったのではないだろうか。やや飛躍した論になったが，今後機会があれば，更に検討を行いたい。

（山崎）

注1　柳田康雄「三・四世紀の土器と鏡」『森貞二郎先生古稀記念古文化論集』

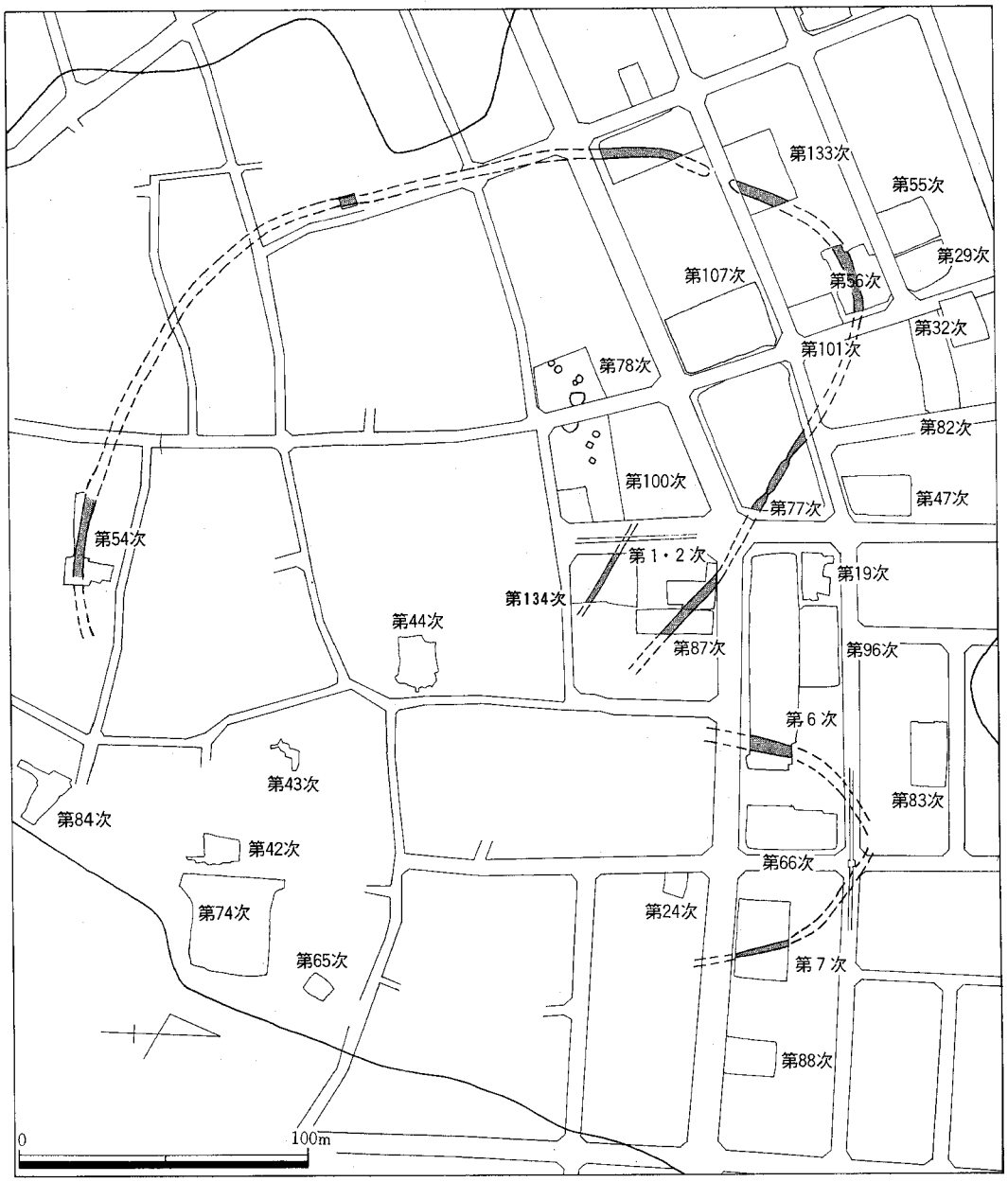


Fig. 102 弥生時代の遺構配置図（縮尺1/2,500）

付論1　有田遺跡133次調査出土の磨石に付着した赤色顔料について

1号住居跡出土の石器(Fig. 85, P139)には赤色顔料が厚く付着している。今回，赤色顔料とその付着状況について以下のような調査を行った。光学顕微鏡による観察と蛍光X線分析及びX線回折により，赤色顔料はベンガラであることがわかった。又，実体顕微鏡での観察により，ベンガラは石に塗布されたのではなく，顔料製造・調整作業に使用したために付着残存したものと見受けられた。

実体顕微鏡による観察

肉眼で見た限り，赤色顔料の付着している部分は石のほぼ片側半分の表裏にわたる。さらに，表裏共その半分の面積に厚く顔料が残っているのだが，表と裏では位置が逆である。今，この石の窪みに指を置いて左手で持つと，赤色顔料の付着していない部分がちょうど掌に納まる。肉眼で見て顔料の「ある」部分と「ない」部分を各々に検鏡すると，「ない」部分にはまったく顔料が認められなかった。一般に，塗布あるいは付着したものがその後に剝落した場合は，肉眼では見えなくとも検鏡により確認できるのが普通である。よって，この石は当初から赤色顔料が塗布されたものではなく，又，単に付着したものでもないことがわかる。顔料が「ある」部分には，磨った面を中心に磨り痕がある。

光学顕微鏡による観察

赤色顔料としてはベンガラ（Fe_2O_3），朱（HgS），鉛丹（Pb_3O_4）が考えられる。これらは，特に微粒のものが混在しない限り，検鏡による識別が容易である。

石に付着している赤色顔料を針で採りプレパラートを作成し，透過光・反射光40　400倍で検鏡した。赤色顔料としてはベンガラだけが認められ，朱は見いだせなかった。ベンガラ粒子には種々の形状が知られているが，その中で産地あるいは製造方法の違いを示すかも知れないと考えられている，いわゆるパイプ状粒子は今回の試料には含まれていなかった。

蛍光X線分析

試料は採取せずにそのままの状態で，赤色顔料の付着部分の測定を行った。測定条件は，装置；理学電機KK製蛍光X線装置，X線管球；クロム対陰極，分光結晶；フッ化リチウム，検出器；シンチレーションカウンター，印加電圧—印加電流；40KV—20mA，走査速度；2θ　4°/分，時定数；0.5秒である。

赤色顔料の主成分元素としては，Feが検出されHg，Pbは検出されなかった。

X線回折

試料は採取せずにそのままの状態で，赤色顔料の付着部分の測定を行った。測定条件は，装置；理学電機KK製文化財測定用X線回折装置，X線管球；クロム対陰極，フイルター；バナジウム，検出器；シンチレーションカウンター，印加電圧—電流；25KV—10mmA，発散スリット；0.34°，受光スリット；0.34°，走査速度；2θ　4°/分，時定数；2秒である。

赤色の由来となる主成分鉱物としては Fe_2O_3 が同定された。

まとめ

以上の結果から，本石器に付着している赤色顔料はベンガラであり，本石器はベンガラの製造・調整作業に用いられた磨石である。

本出土例の場合，ベンガラが特に厚く付着残存している位置を見ると，ある一定の磨り方を想定することができるかも知れない。磨面の中央を支点にして左右半回転を繰り返す動作が考えられないこともないのである。しかし，「磨る」という動作には「相手」が必要であり，普通は石臼あるいは石皿などがそれと考えられている。ところが，赤色顔料用の磨石と共伴する石臼や石皿は今のところ縄文時代の出土例以外は案外知られていない。赤色顔料の一つである朱に限れば，石臼や石皿を共伴する磨石とそうでない磨石はわかれており，その器形が異なり出土遺構もちがう。前者は棒状で庄内併行期の朱生産遺跡からの出土，後者はＬ字状で弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡出土である。これに対して，ベンガラ用の磨石についてはつかみどころがないというのが現状である。本例のように，はっきりベンガラ用と特定できる確実な出土例は貴重であり，類例に期待したい。

Ｘ線分析の測定をお引き受け下さった宮内庁正倉院事務所の成瀬正和氏に，心から感謝申し上げます。

文献

徳島県立博物館・徳島県教育委員会「若杉山遺跡発掘調査概報」
戸高真知子「赤い供物・朱玉」エトノス，31号，1986
見城　敏子「古代の赤色顔料について」考古学雑誌73-3　1988
本田　光子「弥生時代の墳墓出土赤色顔料」
八戸市博物館「縄文の美」是川中居遺跡出土品図録　第２集　1988

（本田　光子）

付論2　有田遺跡第133次調査出土の勾玉の材質について

SP—57出土の勾玉は当初，黒色の石製品とも思われたが，重さの軽いこと，しわのよった表面状態等から，他の材質であることが懸念された。しかし，肉眼観察からだけではその材質を見極めることができなかった。そこで，重量と比重の測定，実体顕微鏡，光学顕微鏡による観察・実験の他に今回は諸機関諸氏の御厚意により軟X線透過写真撮影・蛍光X線分析等の非破壊的方法による調査を行った。その結果，勾玉の材質を特定することはできなかったが，琥珀のような硬質の天然樹脂を熱で成形した物である可能性があるかもしれないことがわかった。

肉眼的観察

表面は漆黒色で滑らかであり，紫檀や黒檀等唐木の肌を連想させるが，一部にしわがある。このしわは，勾玉の内湾部をちょうど指で摘んだ痕のように見える。奈良国立文化財研究所の肥塚隆保氏からは，このしわが，ある種の樹脂，例えば琥珀を熱で軟らかくした後で成形した痕によく似ているとの御教示をいただいた。

曲折部背面に縦方向の大きな亀裂が入っている。出土後はやや湿った状態を保つようにしていたが，少し乾燥すると亀裂が大きくなるようであった。

重量・比重

重量は約1.15gであった。比重は，水の入ったビーカーに勾玉を入れ，増えた水の体積を計り求めた所，約1.02であった。

実体顕微鏡・光学顕微鏡下での観察と実験

1　表面状態

細かい亀裂が全面にわたって縦横無数に走る。表面は非常によく磨かれており，それは硬質樹脂を研磨した状態によく似ている。

京都市埋蔵文化財研究所の岡田文男氏によれば，表面を検鏡した限り樹木の組織は認められなかった，との後教示をいただいた。

2　熱・溶剤による変化

勾玉の穿孔内には土砂が残っていたので，これを針先で採り，次の3枚のプレパラートを作成した。

a．水による一時プレパラート

b．エチルアルコール→アセトンによる一時プレパラート

c．エチルアルコール→キシレン→オイキットで封入した永久プレパラート

反射光・透過光により40～400倍で検鏡した所，何れの試料にも勾玉の微小な細片が認められた。これらは，茶褐色半透明であり，割れ口は貝殻状を呈していた。

aを恒温器内で150°C～300°Cまで徐々に温度を上げた。3時間経過後わずかに一部が軟化したようにも見受けられた。bは溶剤を補いながら1，3，5，8時間経過後を検鏡した。エチ

ルアルコール，アセトンとも特に変化は認められなかった。cも同様に変化がなかった。

軟X線透過写真撮影

奈良国立文化財研究所の肥塚隆保氏に勾玉の軟X線透過写真を撮影していただいた。撮影条件は以下の通りである。電圧；30KV，電流；2 mA，照射時間1分。

P1　にこの軟X線像を見ると無数の細かい亀裂が入っていることがわかる。樹木の組織はない。「すさ」のような混和材もまったく認められない。もし仮に漆のような樹脂で作ったとすれば，当然「すさ」が混ぜられているはずである。

蛍光X線分析

宮内庁正倉院事務所の成瀬正和氏に勾玉の蛍光X線分析をしていただいた。測定条件は以下の通りである。装置；理学電機工業KK製蛍光X線分析装置，X線管球；Cr対陰極，分光結晶；LiF，検出器；S.C.，印加電圧—印加電流；40KV—20mA。測定の結果，勾玉の材質を推定するような主成分元素は検出されなかった。遺物の性質上，測定の雰囲気を真空にしていないため軽元素の検出はできないので，その点については不明である。

まとめ

以上の結果から次のようなことが考えられる。

蛍光X線分析により主成分として重金属が検出されていないので，重金属を主成分とする鉱物ではないことがわかった。また，肉眼および顕微鏡による表面観察からいわゆる石ではないことがわかる。まず，この二点から本資料が一般的な意味での石製品ではないことが推定される。さらに，光学顕微鏡による観察と軟X線透過写真撮影の結果から本資料が木製品ではないことがわかる。骨角あるいは金属で作られた物ではない。とすると，残された可能性としては「ねりもの」が考えられる。

「ねりもの」としては種々の天然樹脂が考えられる。軟X線透過写真を見る限り混和材が含まれていないので，漆等の樹脂にすさを混ぜた物でないことは先に述べた通りである。混和材を使わずに成形できる天然樹脂としては，琥珀等の硬質樹脂が考えられる。

琥珀は地質時代に植物の樹脂が埋もれてできた化石である。成分は$C_{40}H_{64}O_4$で，非晶質の有機化合物である。貝殻状の割れ目を示し，もろい。硬度2～2.5，比重1内外。透明から半透明，脂肪光沢。熱すれば150°Cで軟化し初め250°C～300°Cで溶け，琥珀酸がでる。硬度は遺物の性質上，測定していないが，熱による変化以外はよく似た状態とも思われる。何れにしても，今回の調査からだけでは本資料の材質を特定することはできなかったが，琥珀である可能性が強いかもしれない。

御協力いただいた肥塚隆保氏，岡田文男氏，成瀬正和氏，に心から感謝いたします。

（本田　光子）

6．第146次調査（調査番号8853）

1）調査地区の地形と概要

申請地は早良区有田１丁目32―6に所在し，開発申請面積は237m²である。

申請地は有田地区台地の最高所の西側に立地し，標高は約13mを測り，調査前は畑地であった。事前調査で全域に遺構を検出したが，協議の結果，全体に盛土し，車庫・出入口など削平部分のみ調査することとなり，発掘調査を実施した。調査期間は平成元年１月24日～２月３日までで，調査実施面積は80m²である。

申請地周辺は第31次・55次・56次・133次・141次調査区を始め多くの調査が行なわれ，重要な遺構群が検出されている。検出されている主な遺構は，弥生時代初頭の環濠，古墳時代の住居跡群，古墳時代後期から奈良時代にかけての大型建物群，中世末期の濠状遺構などである。

調査区の遺構面は橙色の鳥栖ロームで，表土下15～30cmで検出した。検出した主な遺構は柵１列，区画整理以前の農道と思われる溝１条と畑の畝跡である。遺物の出土は非常に少なかっ

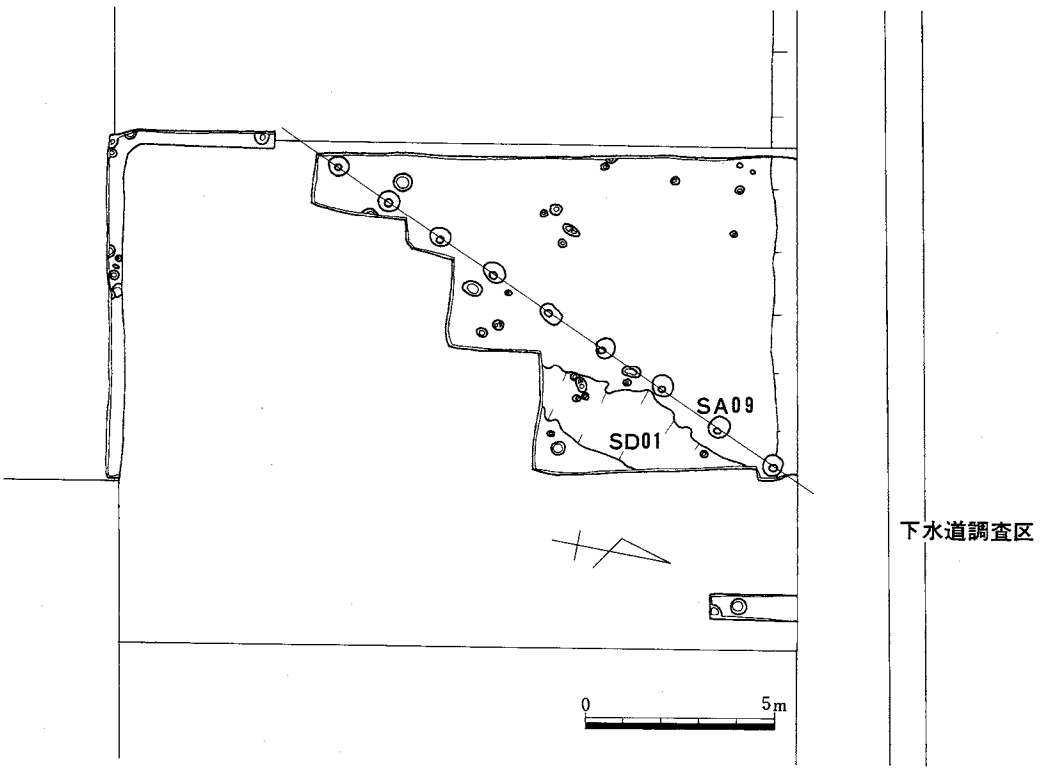


Fig. 103　第146次調査区遺構配置図（1/200）

た。

2）遺構と遺物

柵（SA）

SA09（Fig. 105，PL42）　主軸をN－23°－Eに取る柵である。柱穴9個，計8間分確認した。確認長14.09mを測り柱間隔は平均1.76mを測る。柱穴掘方の平面形は円形で，深さは17cm～33cmと浅く，北へ向って少しずつ深くなっていく。柱径は痕跡から20cm位である。埋土は全体に黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物（Fig. 106，PL42）　量は少なく，古墳時代の土師器・須恵器片がある。大半が細片で図示出来るものは少ない。

1は土師器の高坏脚部片である。5は滑石製の臼玉である。上面が斜めに切られており，作りは余り良くない。

溝状遺構（SD）

SD01（Fig. 105）　北東に延びる幅1.76m，深さ0.24mを測る，断面は浅い皿状を呈する溝である。埋土は灰味を帯びた黒褐色粘質土を主体としている。底面は凹凸が激しく，おそらく雑草などが繁茂していたものと考えられる。この溝の西側には直交するように畝状遺構が並行して幾筋も並んでおり，農道と考えた方が良いようである。

出土遺物（Fig. 106）　少量出土している。図化しえたものを示す。

2は玉縁口縁を持つ白磁碗の小片である。3は陶器で急須の口縁部片である。関西系の焼物と考えられる。SX03（畝状遺構）出土の破片と接合している。溝の時期を示すものであろう。

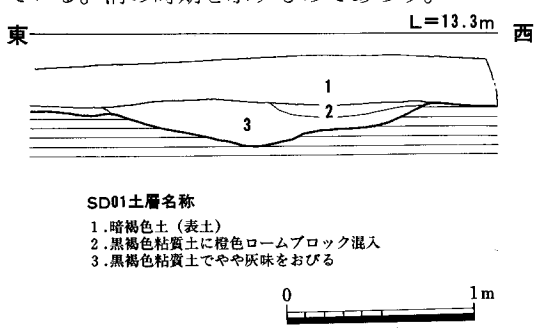


Fig. 105　SD01南壁土層図（1/40）

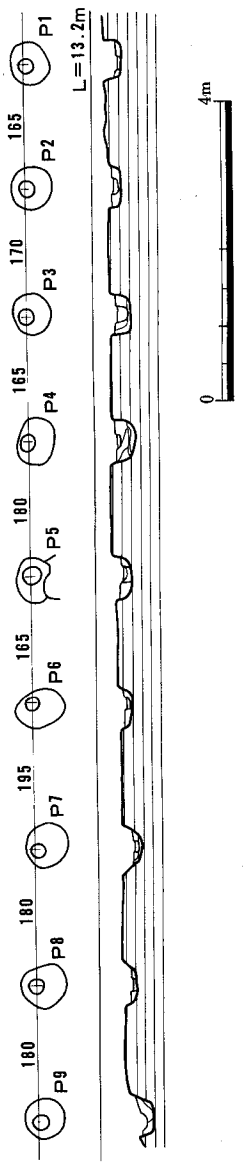


Fig. 104　SA09（1/100）

ピット出土遺物（Fig. 106）

4はSP01より出土した須恵器の高坏脚部片である。脚端部は屈折し，端部を三角状に鋭くおさめる。上方に一段稜を有する。

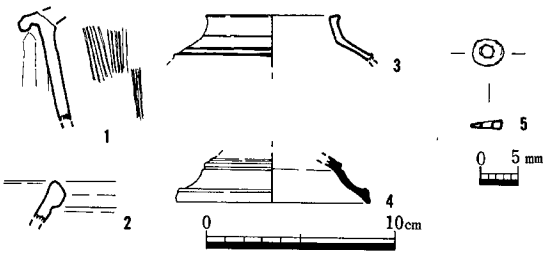


Fig. 106 出土遺物（1/4・1/1）

3）小　結

以上調査の概要について述べたが，次にそれらを整理して若干のまとめとしたい。

今回の調査は最小限の調査の為，十分な成果は得られなかった。しかし，配水管部分やブロック壁部分の調査区でも遺構が検出されている事から，申請地全域に遺構は分布する事がわかった。更に柵SA09の検出は今回の大きな成果であった。

この柵は主軸方位をN－23°－Eに取るが，丁度南東側の第133次調査区で検出したSA01の南北方向の柵列方位N－21°30′－Eとほぼ平行する。第133次調査区のSA01は西方向に直角に曲がり第146次調査区方向に延びているが，SA09とどのように交差するかは調査区外の為，不明である。しかし，両柱穴の規模，形態，埋土などが良く似かよっている為，ほぼ同時期と考える。時期については時期を確定しうる遺物が少ない為，確定しがたいが，第133次調査区のSA01P5出土の須恵器の形態が北部九州における小田氏編年のIIIa期頃にあたり，6世紀中頃以降頃と考えたい。この柵は他の調査区では確認されておらず，周辺の今後の調査に期待したい。

（山崎）

7．第149次調査（調査番号8905）

1）調査地区の地形と概要

申請地は早良区有田１丁目21—3に所在し，開発申請面積は368.22m²である。

申請地は有田地区台地の最高所の東側に立地し，北東から谷が入り込む，つけ根の部分にあたる。標高は地表面で12m前後を測り，台地の最高所よりは１m以上低くなっている。調査前は畑地であった。

事前調査で全域に遺構を検出したが，申請者と協議の結果，設計変更を行ない，やむをえず地下げせざるをえない車庫，入口部分を中心に調査を行なった。調査期間は平成元年４月13日～５月２日迄で，調査実施面積は145m²である。

調査区周辺では北側が第61次調査，南側が第19次・96次調査が実施され，古墳時代初頭の住居跡や中世末期の溝状遺構が検出されている。当調査区の遺構面は鳥栖ロームであり，表土20～30cmで検出した。検出した主な遺構は古墳時代初頭住居跡１棟，中世後期頃の土坑などである。掘立柱建物跡については調査区が狭いため確認出来なかった。また申請地北西部には南側の第19次調査区から北側の第61次調査区に延びる溝がかかると予想されるが，今回の調査区にはかからなかった。出土遺物は主に住居跡から古墳時代前期の一括遺物が出土した。

2）遺構と遺物

住居跡（SC）

SC05（Fig. 108，PL44・43）

南側で検出した長軸を北東方向に取る長辺6.09m，短辺4.40m，最大壁高40cmを測る長方形の住居跡である。北西側の一部を攪乱とSK06，北東コーナーをSK04で切られている。埋土は黒褐色粘質土を主体とし，橙色ロームブロックを少量含んでいた。また南北両側には地山ローム粘土を貼って一段高くしたベッド状遺構がある。規模は南側が幅1.0m，高さ10cm，北側が0.85m，高さ13cmを測り，南側が幅が少し広い。周壁沿いには幅10cm前後の周壁溝が巡っていた。床面中央には直径60cm，深さ10cmの炉があり，炭化物と焼土塊が詰っていたが，固く焼きしまった焼土面はなかった。主柱は２本柱でこの炉を挟んで対峙している。主柱間距離は3.13mを測り，両柱穴とも壁から1.25m離れている。柱穴掘方規模はＰ1が直径44cm，深さ68cm，Ｐ2が直径43cm，深さ60cmを測り，Ｐ1が少し深い。柱径は痕跡から推定で15cm位である。また東壁中央には0.85×0.43m，深さ8cmを測る長方形の土坑(SK17)が付設されており，土坑の西壁中央には直径30cmのピットが西壁から突出してある。有田遺跡ではこの時期の住居跡に良く見られる入口部を表わす遺構と考えられる。北側ベッド上にはSC05の屋内土坑と考えられるSK14が

る。また南側ベッド上及びその下の南西部側には多量の黄褐色粘土塊があり，東南壁沿いに炭化物が若干残っていた。

出土遺物（Fig. 109～113, PL46・47）　南側ベッド状遺構上と主柱穴西側を中心に土師器の一括遺物が出土した。出土状況は床面直上である。上層には近代の瓦片，床面には石鏃未製品などがあった.

1～35迄は土師器。1～9は甕形土器で大・中・小3種類に分類出来る。1～4は小形甕である。1はやや直立気味の口縁と比較的丸い胴部を持つ。2は長胴気味の胴部で，口頸部と胴部下位に幅1cmの粘土帯が指で貼り付けられる。3は口縁部が大きく外反し，胴部径が口径より小さく，底部は細くすぼまる器形である。4はやや丸味を持った長胴気味の胴部を持つ。5～7は中形甕である。5・6は胴部及び口縁部片，7は口径18.2cm，器高33.3cmを測る。いずれもく字状に外折する口縁部を持ち，口端部は平坦におさめ，胴部は倒卵形を呈す。8・9は口縁部が複合口縁状の大形甕であるが，全体は復元出来なかった。口径は復元で8が44cm，9が52cmを測る。いずれも口頸部と胴部に1条の突帯がつく。口縁部には二枚貝系の貝殻を用いて，8にはX字状の9には右下りの斜めの刻目が付けられている。口縁部外面から胴部上半にはハケ，下半は叩き調整である。

10～17壺形土器で甕と同様大きさで3種に分ける。10～14は小型のものである。10は外方に

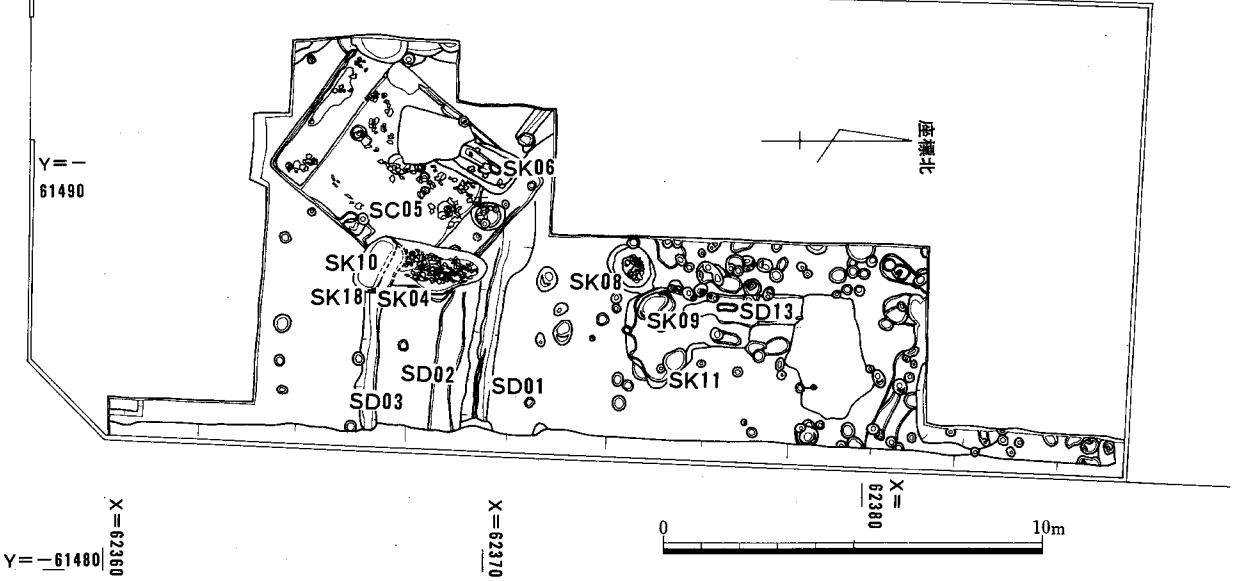


Fig. 107　第149次調査区遺構配置図（1/200）

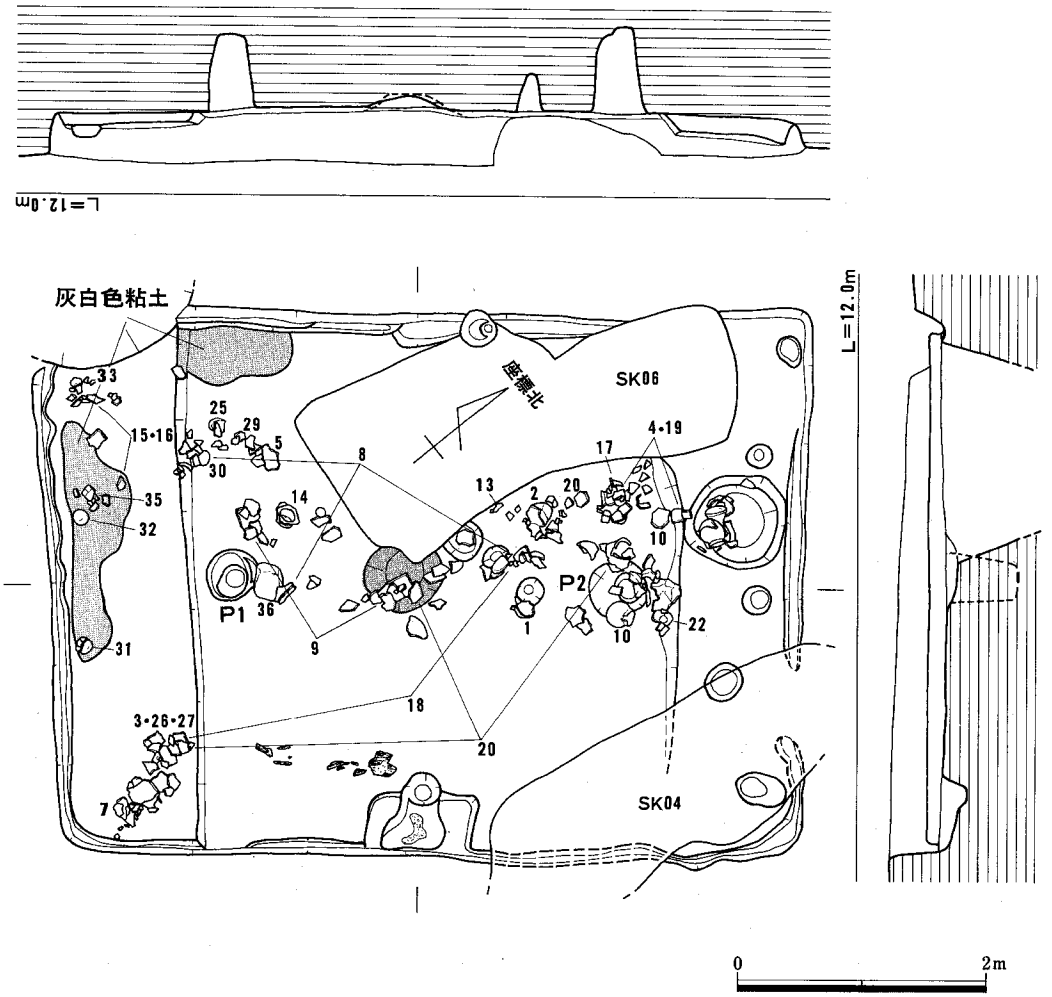


Fig. 108 SC05 (1/60)

わずかに開く広めの口縁部を持ち，胴部最大径は上半にある。底部はやや尖り気味である。11・12は口縁部及び体部片である。12は甕形土器の可能性もある。13は口縁部が大きく外反し，口端部を鋭くおさめる。14～17は大形のもので，いずれも丸味を持った大きな胴部の割には頸部がしまる口縁部を持つ。14はやや強く外弯し，口端部は平坦である。15・16は胴部片と底部片である。17は口縁部が外方へ開き気味に直立する。18・19は胴底部片である。壺か甕か判断は難しい。

20～22は高坏である。20は坏部下半に明瞭な段を持ち，口縁部が内弯気味に大きく開き，また脚部は低く大きく外へ開く器形である。脚筒部中間には直径1.4cmの透し孔が4ケ所入る。21

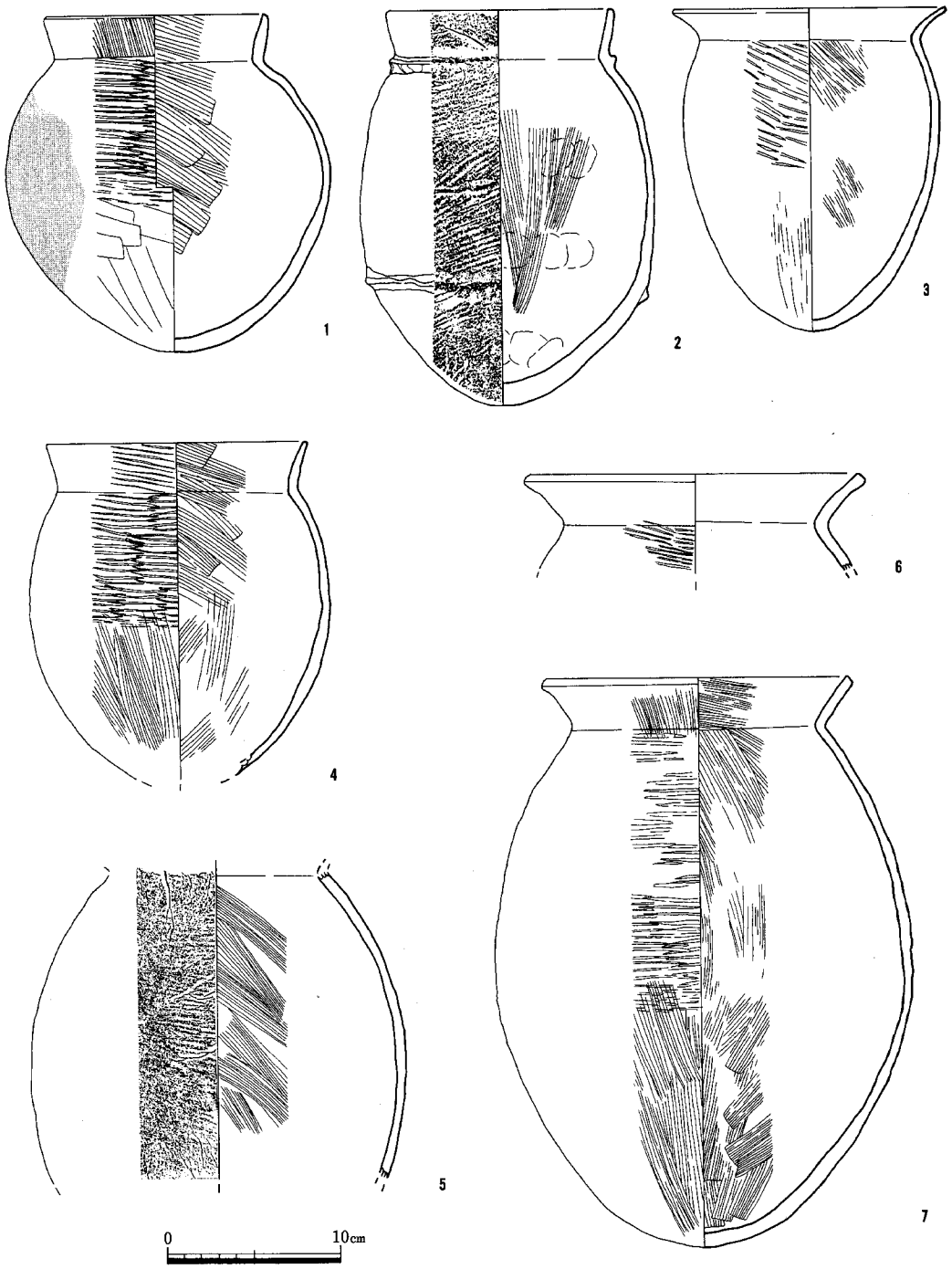


Fig. 109 SC05出土遺物Ⅰ (1/4)

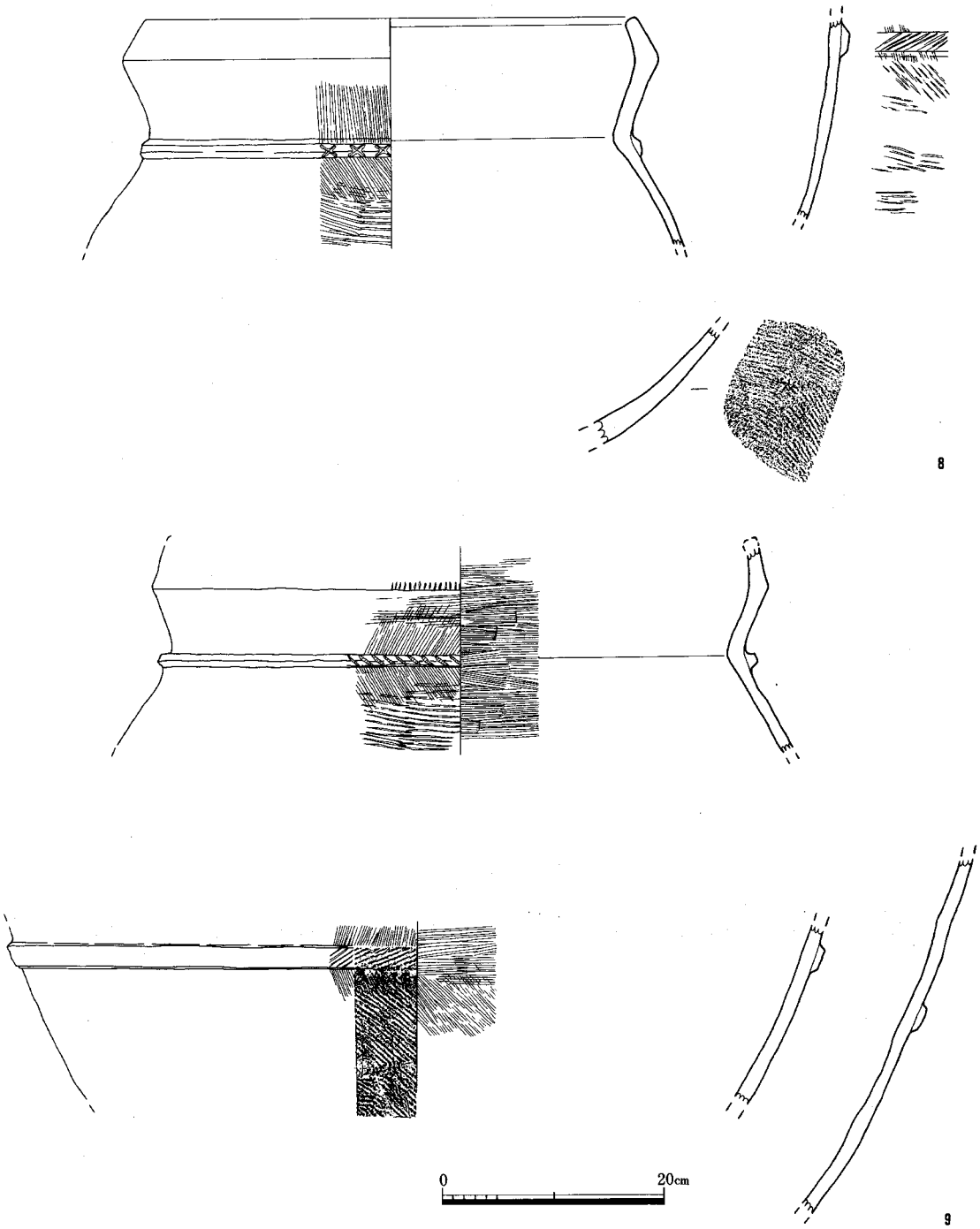


Fig. 110 SC05出土遺物II (1/6)

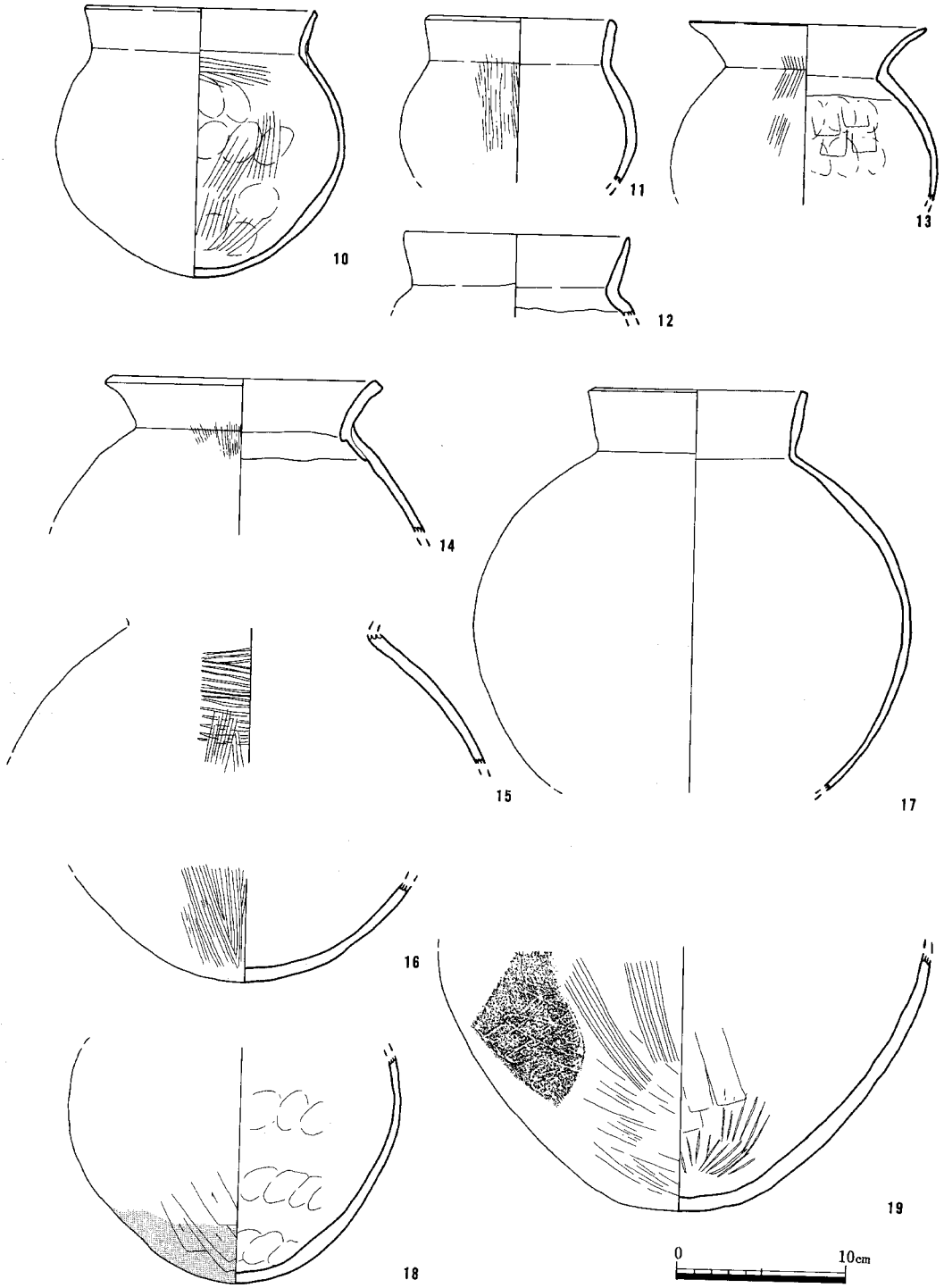


Fig. 111 SC05出土遺物Ⅲ (1/4)

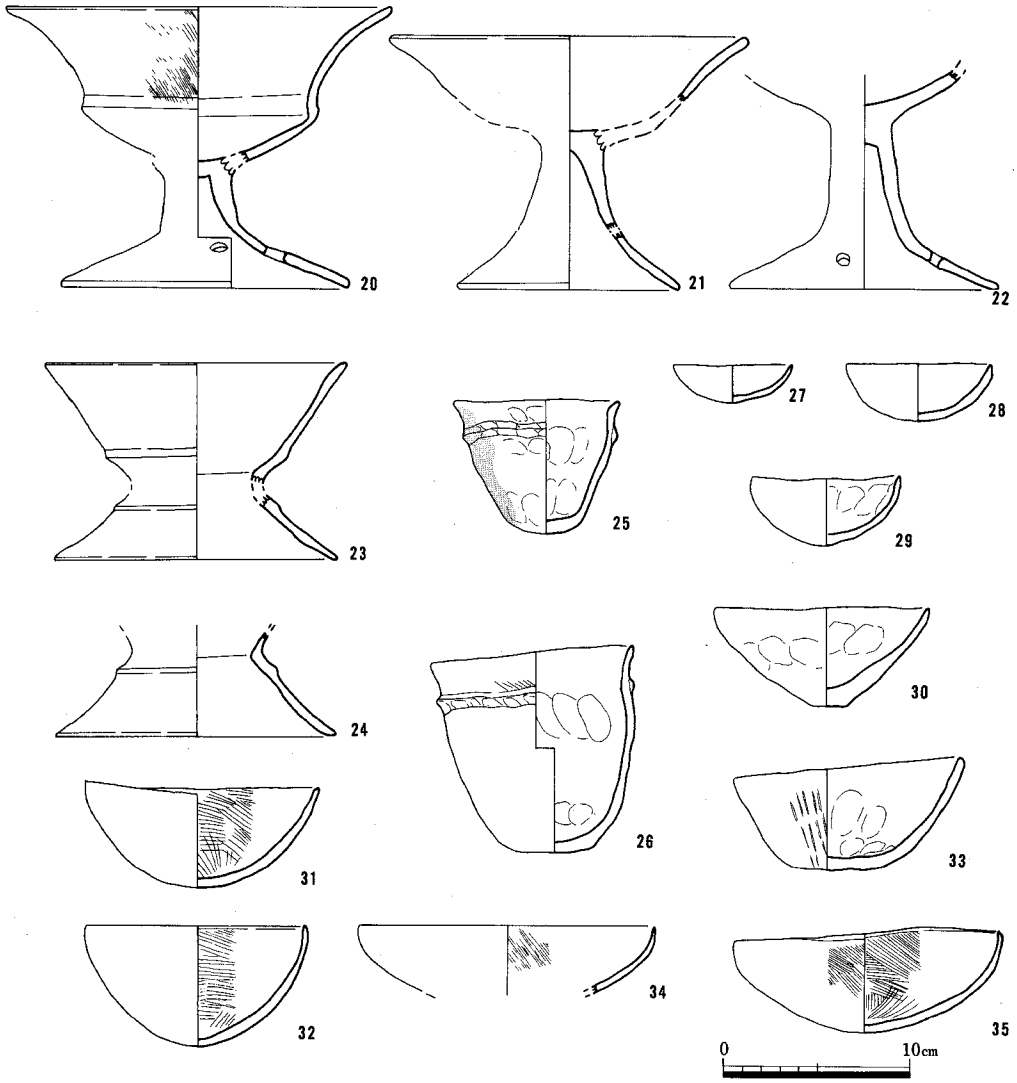


Fig. 112　SC05出土遺物Ⅳ (1/4)

は坏部に明瞭な段を持たず，また脚裾部はラッパ状に開く。22は坏部は欠失するが，高い脚部を持ち，屈折し大きく開く。屈折部に直径6㎜の透し孔が3ケ所入る。23・24は鼓形器台である。

25～35は鉢形土器である。25・26は平底でコップ状の形態を呈す。口縁下に一条の貼付突帯がある。27～29は口径6.4～8.0cmを測り，小型で口径の割には底が浅い。25～29いずれも手捏土器である。30は口径が11.5cmとやや大きい。底部は不安定な平底で，器壁は真すぐ外へ開くが，口縁部は直立する。31は30より安定した平底を持つ。32・33は口径も12.5cm，11.9cmと大きく，深さは5.5cm，6.4cmと深く，33は底がやや尖る。34・35は口縁部片で，復元口径は15.9

cmと大きく，口縁部が外弯気味に直立する器形である。35は34とほぼ同様の器形で，底部はやや尖る。

36は工作台と思われる石製品。長さ28.5cm，幅21.4cm，厚さ11.8cmを測り，平面形態は隅丸長方形を呈す。P 1の横にあった。

SK14（Fig. 114，PL44）

SC05の貯蔵庫と考えられる不整円形の土坑で，中間に段が入る。規模は上面で直径78～80cm，深さは最大で58cmを測る。底面はほぼ平坦である。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は底より20cm程浮いた所から出土したが，出土状態は南側から落込んだ状況を示している。

出土遺物（Fig. 115，PL47）　土師器の壺形土器1，甕形土器4，器台1が出土した。

37は壺形土器である。直口壺の類で大きな球形の胴部から短く直立する口縁部が付く。調整は内外面ハケである。38～41は甕形土器である。38は頸部と胴部下半に突帯が1条づつ貼付けられる。2と同じ形態である。39は口縁部片で斜メヨコの叩き調整。40は完形品で長胴気味の胴部にやや開き気味の口縁が付く。41は40より膨れた丸い胴部に外へ開く短い口縁部が付く。口端部は平坦におさめられる。42は器台で，受部は袋状をなす。全体に厚手で，筒部内面にはしぼり痕が残る。

土坑（SK）

SK04（Fig. 116，PL44）

SC05を切る土坑である。南側はSK10・18に切られ全容は不明である。長軸を略南北方向に取り，平面形態は不整円形を呈す。全長は2.20m以上，最大幅は1.15m，深さ27cmを測る。底面は北から南へ緩やかに深くなる。底より10cm余り上の所に5～20cm位の大きさの花崗岩，砂岩の転石や割石

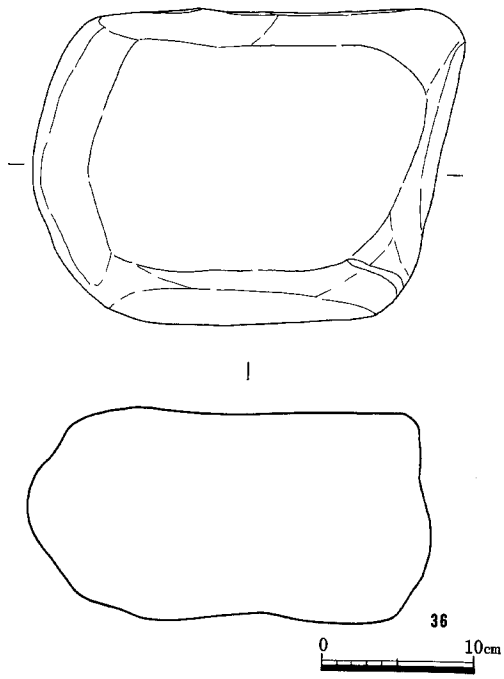


Fig. 113　SC05出土遺物V（1/4）

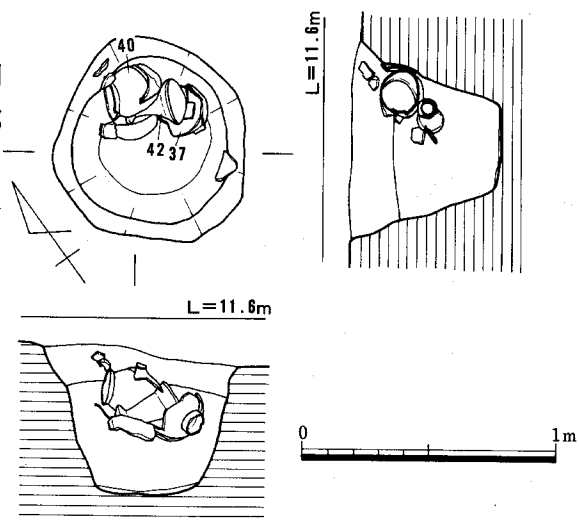


Fig. 114　SK14（1/40）

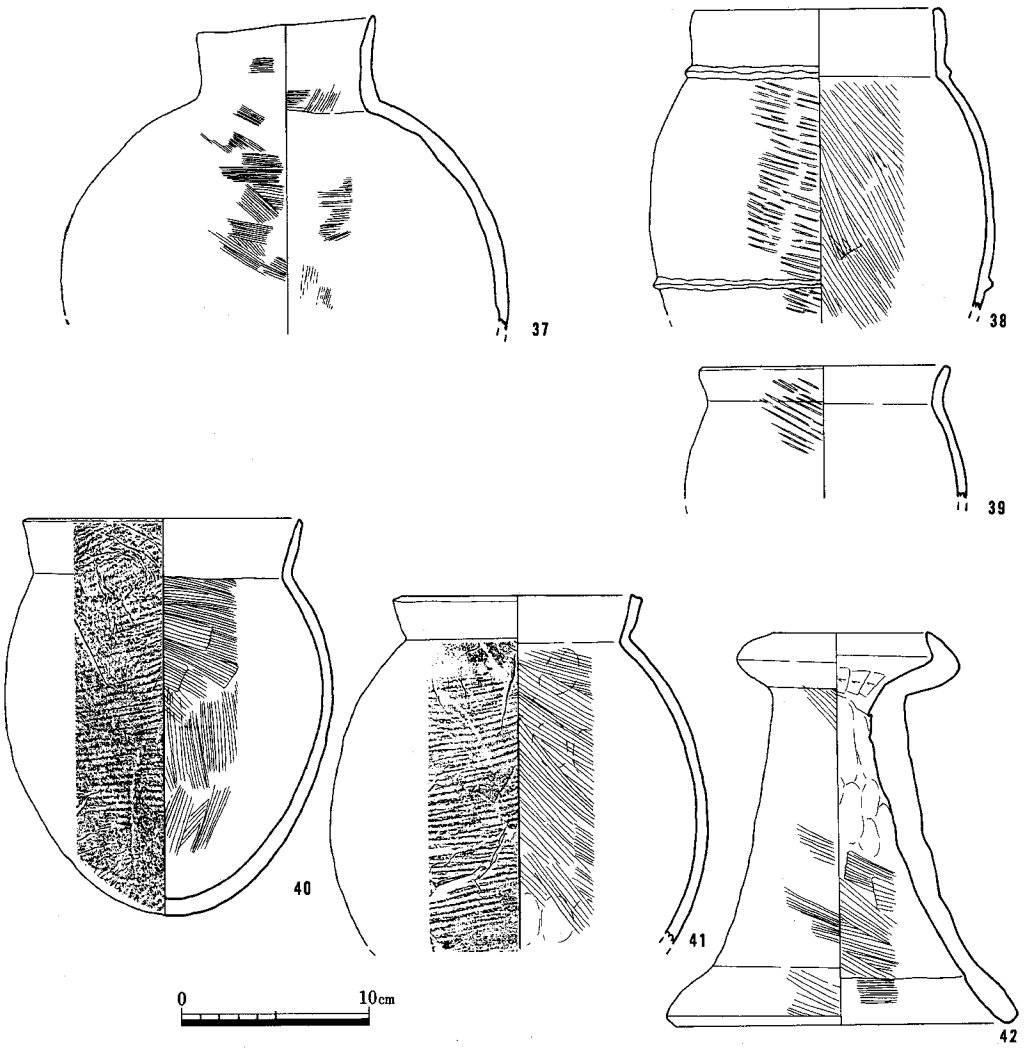


Fig. 115 SK14出土遺物 (1/4)

が厚さ15cm位の幅で割と密に積み重なっていた。礫中には焼石なども混っていた。埋土は暗褐色土である。

出土遺物 (Fig. 117, PL47) 礫群を中心に須恵器・土師器・瓦質土器・瓦類などが出土。

43は青磁碗底部片である。44は口縁部が端返りする白磁碗の細片である。45・46は瓦質土器の火舎口縁部片で，46の斜格子文が連続してスタンプされる。47・48は石錘。47は滑石製で長辺方向に紐かけ用の為に幅6㎜，深さ3㎜程の範囲で溝が切られている。48は花崗の扁平円礫の一部を打ち欠いて石錘としている。49は板碑小片である。50は砂岩製の砥石で，砥面は上下・左右の4面であり，永年の使用により磨り減っている。51・52は軒丸瓦の玉縁部片である。外

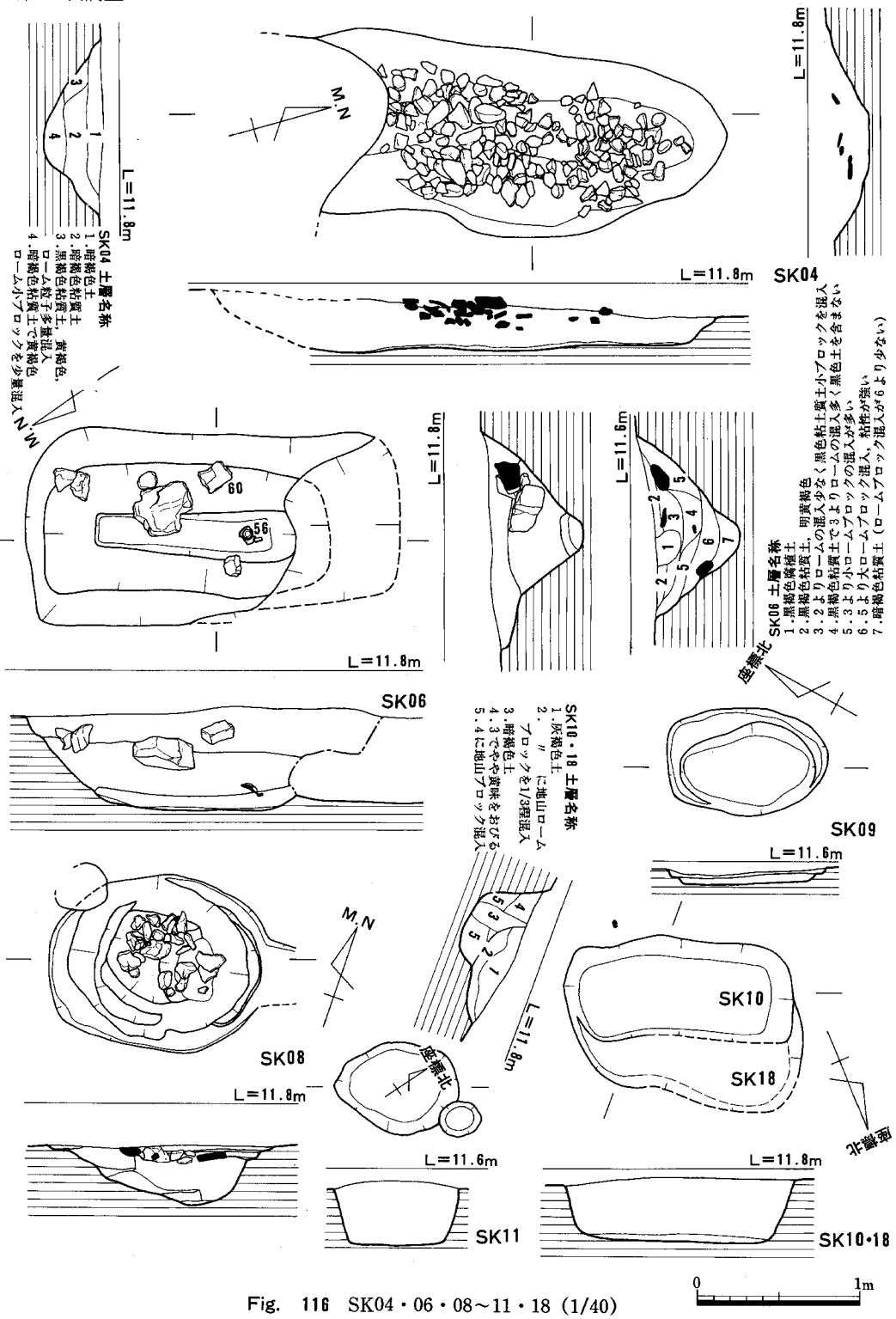


Fig. 116 SK04・06・08～11・18 (1/40)

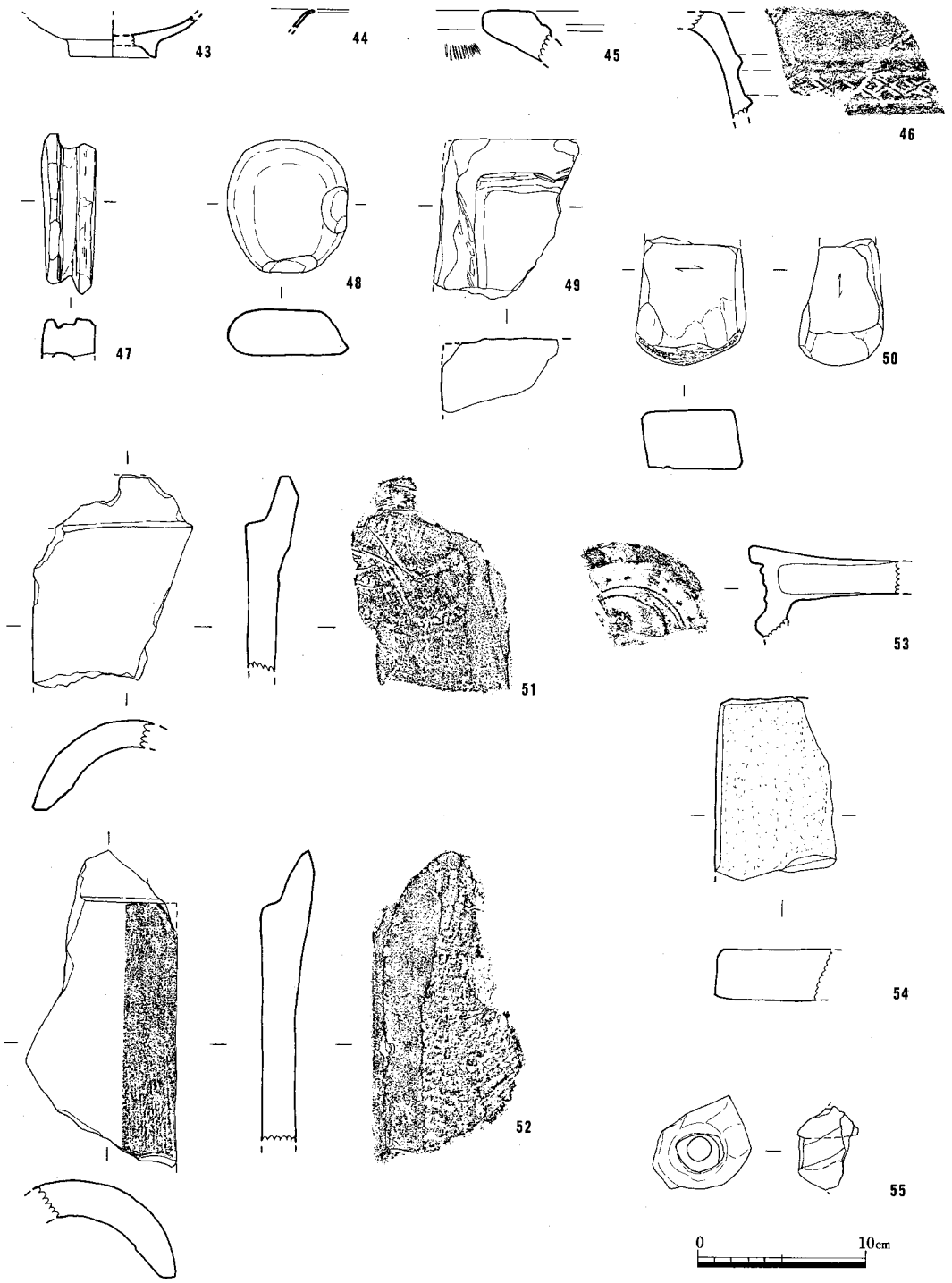


Fig. 117 SK04出土遺物（1/4）

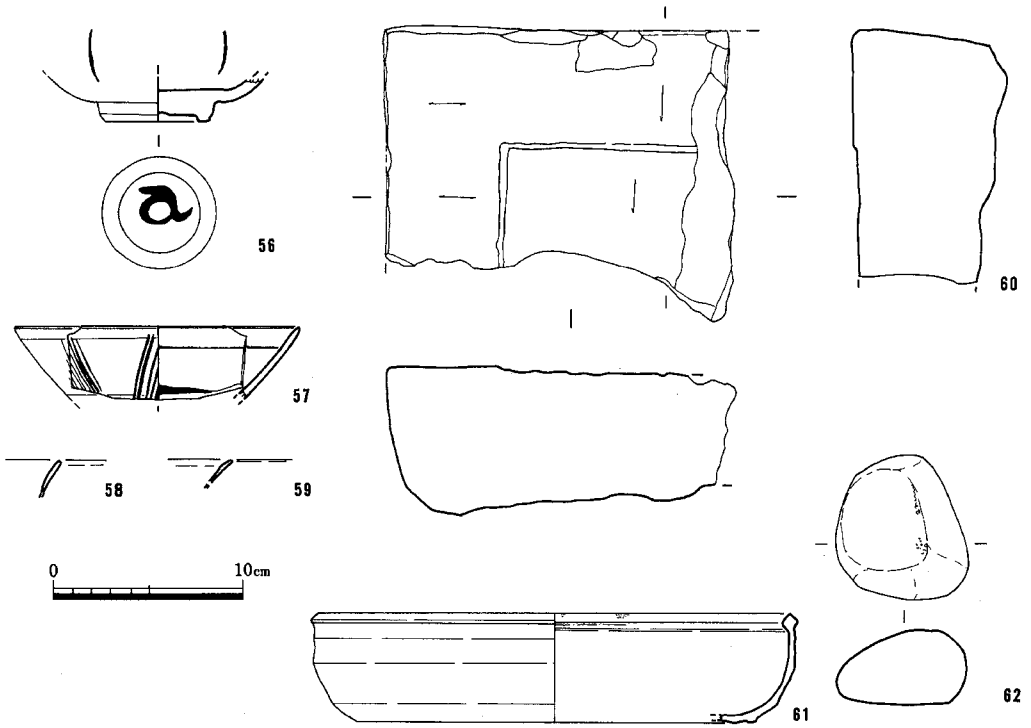


Fig. 118 SK06・08・10出土遺物 (1/4)

面には縄目の叩き痕，内面には糸切痕が残る。53は軒丸瓦で巴文の瓦当部片である。54は方形磚の一部で，上面には砂粒が付着する。側辺は面取りされている。55は鬼瓦の一部で目か鼻のあたりと考える。

SK06 (Fig. 118, PL45)

SC05を切る土坑で長軸を北東方向に取る。南側は攪乱によって破壊されるが，平面形態は隅丸長方形を呈すと思われる。規模は確認長で2.16m，幅1.24m，深さ0.63mを測る。底は長さ1.25m，幅0.2～0.3mの長方形状に1段落ち平坦面を形成する。断面形はV字形状を呈す。埋土は上層が黒褐色粘質土，下層が暗褐色粘質土を主体とする。北東側には15～35cm位の角礫や板碑片が底より25cm浮いたところに落ち込んでいた。

出土遺物 (Fig. 118, PL47)　出土遺物は少ない。土師器・平瓦・磚・青磁・板碑片などがある。

56・57は青磁碗である。56は龍泉窯系の鎬蓮弁碗底部片で，高台内面には花押と思われる墨書がある。57は同安窯系の口縁部片である。60は板碑のコーナー部片である。石質は砂岩である。表面はノミによって丁寧に仕上げるが，裏面はノミ・タガネによる雑な仕上である。

SK08（Fig. 116, PL45）

調査区中央部で検出した平面形態が楕円形の土坑である。規模は長径1.31m，短径1.09m，深さ0.38mを測る。底は東側寄りにあり，0.4×0.25mの楕円形状に平坦面をなし，上面の割には狭い。埋土は黒褐色粘質土である。上部に10～20cmの花崗岩転礫に玄武岩割石，砂岩礫などを混えた礫群が水平にひきつめたように検出された。

出土遺物（Fig. 118, PL47）　土師器・中国産陶器・石斧片・磨石・焼土ブロックなどが少量出土した。

61は陶製の盤で，灰白色～黄橙色の薄い透明釉が内面にかかる。外面は露胎である。62は磨石で玄武岩製である。全面使用により磨滅し，ツルツルするが一部敲打調整痕が残っている。

SK09（Fig. 116, PL45）

SK08の東側にある土坑で，平面形状は不整円形を呈す。規模は長径0.96m，短径0.67m，深さ10cmを測り浅い。底面はほぼ平坦であるが，北東側が一部テラスを持つ。埋土は黒褐色粘質土に黄橙色ロームブロックを混入する。出土遺物はなかった。

SK10（Fig. 116, PL45）　SK04を切り，SK18に切られる土坑である。当初SK04との切り合関係がわからず掘りすぎたため，全体の形状はわからない。確認長は1.42m，深さ40cmを測り，底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色土である。形態から土坑墓の可能性がある。

出土遺物（Fig. 118）　土師器皿，中国産輸入磁器，瓦，鉄滓3点などが出土した。

58は青磁，59は白磁でいずれも口縁部細片である。

SK11（Fig, 116）

平面形態が不整楕円形の土坑で，規模は長径0.76，短径0.58m，深さ40cmを測る。底面はほぼ平坦である。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は少なく，土師器細片が1点出土した。

SK18（Fig. 116）

SK10を切る土坑であるが全容はわからない。埋土は灰褐色土である。

溝状遺構（SD）

SD01～03

調査区南側で検出した。東から延びSC05上で消滅する。いずれも幅が0.5～0.7m，深さ3～5cmと浅く，埋土は暗灰褐色土である。近世以降の農道または畑の地割に伴う溝と考える。出土遺物は少なく，青磁，陶器，須恵器，土師器の細片合わせて8点出土した。

SD13は調査区北側で検出した浅い落込みである。遺物は土師器の細片が8点出土した。

ピット出土遺物（Fig. 119, PL47）

63～65はSP01, 66はSP09出土である。63は明代の染付碗の口縁部片である。64は白磁碗（？）の口縁部細片である。65は瓦器の皿と思われる口縁部片である。66は大型の石鏃でサヌカイト製と思われる。

3）小　結

以上調査の概要について述べたが，ここではこれらをまとめ若干の整理を行ないたい。

当調査区の遺構の時期は大きく2時期に分ける事が出来る。第Ⅰ期はSC05の時期。第Ⅱ期はSK04・06などの時期である。Ⅰ期のSC05は40個体以上の土器の出土を見たが，大半は在地系のもので，外来系のものは，山陰系の鼓形器台23・24などわずかしかない。しかし在地系の甕形土器は庄内式土器の影響を受けた横方向の平行叩きが見られるが，基本的には西新町式土器の流れをもつものであり，全体的に見るならば西新町遺跡で行なわれている編年のⅡ式土器に大体当てる事が出来，弥生時代後期終末という時期を当てる事が出来る。しかし[注1]，竹末氏のいう新たな外来系器種の登場を持って土師器として扱うならば，当住居跡は古墳時代初頭と位置ずける事が出来よう。一応今報告では，当住居跡を古墳時代初頭の早い段階，終末期との接点頃の時期としておく。

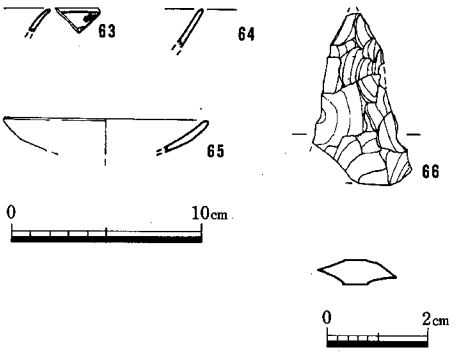


Fig. 119　ピット出土遺物（1/4・2/3）

有田遺跡群では，弥生時代終末期から古墳時代初頭頃の住居跡は，後の布留式併行期の住居跡が台地全域に広く分布するのに対し，数が少なく，その分布も有田台地高所部周辺，小田部5丁目の第64次調査区周辺に偏っている。また住居規模も長辺が6～7mと，布留期のものより一まわり大きく，第133次・141次・95次調査のように，建て直されたものもある。また一般的に遺物量が布留期のものに比べて多く，住居の廃絶形態に異常を感じる。今報告書では第107次・133次調査でそれぞれ同時期の住居跡を報告しているが，それぞれの先後関係は第149次SC05→第133次SC01（SC01が若干新しいか）→第107次SC01・02という関係が成り立つ。いずれにせよ，有田遺跡群において弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての土器編年を行う上で，重要な資料となる。

Ⅱ期は中世後半期で，SK04出土の瓦類や瓦質土器の火舎などから16世紀前半代と思われる。SK06は青磁などから見ると12～3世紀の時期と思われるが，上層で出土した板碑片は有田遺跡群では15～16世紀代の遺構からしか出土しないので，ほぼ同時期に下る可能性がある。

（山崎）

注1　福岡市教育委員会「西新町遺跡」福岡市埋蔵文化財報告書第79集　1982

Tab. 8　各調査地点出土遺物一覧表　（但し第107次地点・第131次地点の旧石器遺物は除く）

第107次調査

（単位cm）

遺物番号	挿図	図版	出土遺横	遺物種類	口径	底径（脚）	器高	調　　整	包調(外面)	その他の特調	登録番号
001	7	17	SC01	土師器・甕	(14.0)			内面ヘラケズリ，外面器面荒れ不明	淡黄色	1/2片	00076
002	7	17	SC01	土師器・甕	15.0			口縁ヨコ方向ナデ，内面ヘラケズリ，外面マメツで不明	淡橙黄色		00077
003	7		SC01床面	土師器・甕	(14.6)			口縁マメツで不明	淡橙黄色	1/2片	00071
004	7	17	SC01	土師器・甕	15.0			内面ヘラケズリ，口縁外面マメツで不明	淡橙黄色		00083
005	7	17	SC01	土師器・甕	14.3			口縁，内外面ナデ 胴部内面ヘラケズリ，胴部外不明	淡黄色	底部欠損	00070
006	7	17	SC01	土師器・甕	(15.5)			口縁内外面ヨコ方面のナデ 胴部内面ヘラケズリ外面ハケ	灰黄色		00082
007	7	17	SC01	土師器・甕	16.2			器面荒れ調整不明	淡橙黄色		00079
008	7	17	SC01	土師器・甕	(15.8)			器面荒れ調整不明	淡橙黄色		00069
009	7	17	SC01	土師器・甕	15.6			胴部内面ヘラケズリ，口縁胴部外面マメツで不明	灰橙黄色		00080
010	8	17	SC01	土師器・甕	15.0			口縁内外ナデ，胴部内面ヘラケズリ，他マメツで不明	淡橙色	外面はハケが残る	00072
011	8	17	SC01	土師器・甕	(19.0)			胴部内面ヘラケズリ，他マメツで不明 口縁外面ヨコ方向のナデ，胴部外面ヨコ方向のハケ	橙黄色	石英粒多量混	00074
012	8	17	SC01	土師器・甕	17.0			胴部外面ハケ 口縁内外ヨコ方向のナデ，胴部内面ヘラケズリ	淡灰黄色	胎土，金雲母若干混	00073
013	8	17	SC01	土師器・甕	12.0		12.5	胴部外面タタキ→ハケ 口縁内外面ハケ→ナデ，胴部内面ハケ，ユビオサエ	灰黄色	ほぼ完形	00084
014	8	17	SC01	土師器・甕	(11.8)		15.0	胴部内面ユビオサエ，外面口縁不明	淡黄色	口縁部一部欠	00068
015	8	18	SC01内 西側焼土の pit	土師器・壺	13.8			内縁内面ハケ，外面不明	橙黄色	胎土，精良	00095
016	8	18	SC01 ピット内	土師器・壺	16.2			口縁内外面ハケ，内面ヘラケズリ	橙黄色		00096
017	8		SC01	土師器・壺	(13.4)			口縁内外面マメツで不明，体部内面ヘラケズリ	淡灰黄色	1/3片	00108
018	9	18	SC01 土器集中部	土師器・壺	(16.8)			口縁内外面ハリツケ→ヨコナデ	淡橙色	1/8片	00101
019	9	18	SC01	土師器・壺	(16.6)			マメツで不明	淡灰黄色		00075
020	9	18	SC01	土師器・壺	11.8			口縁タタキ→ハケ，胴部ハケ	淡橙黄色		00081
021	9	18	SC01	土師器・壺	(16.0)			胴部内面ユビオサエ 口縁内外面体部外面タタキ右上へ向う	淡橙黄色		00078
022	9	18	SC01	土師器・壺	(14.8)		26.1	口縁内外面ハケ，胴部内面ハケ，外面タタキ，ハケ	橙褐色	ほぼ完形	00067
023	9	18	SC01	土師器・高坏	15.0			脚部内面ユビオサエ他不明	淡橙色		00087
024	9		SC01	土師器・高坏				脚部内面ナデ外面ハケ	橙色	脚部片，胎土，精良	00102
025	9		SC01	土師器・高坏	(22.4)			全体マメツで不明	橙黄色		00107
026	9	18	SC01	土師器・高坏	11.0			脚部内面しぼり，他マメツで不明	淡橙黄色		00085
027	10	18	SC01	土師器・高坏	(25.6)			受け部，内面ヨコ方向のナデ外面ユビオサエ	橙褐色	胎土，精良	00093
028	10		SC01	土師器・高坏	(24.4)			受け部内外面マメツで不明	橙黄色		00106
029	10	18	SC01	土師器・高坏	(26.4)			受け部内面ヨコ方向のナデ，外面ハケ	橙黄色	1/2片	00089
030	10	18	SC01床面	土師器・高坏	脚径8.4	14.5		脚部内外面ユビオサエ	淡橙黄色		00088
031	10	18	SC01	土師器・高坏		15.4		受け部内面ナデ，脚部内面ユビナデ，他不明	橙黄色	3ケ所透孔あり	00092
032	10	18	SC01	土師器・高坏	20.0			全体マメツで不明	橙色		00086
033	10	18	SC01 フク土	土師器・高坏				全体マメツで不明	橙色		00090
034	10	18	SC01	土師器・高坏				脚部内面ユビナデ，外面ケズリ	橙褐色	脚部片	00091
035	10	18	SC01	土師器・支脚		(11.0)	11.0	脚部内面ユビオサエ→しぼり外面タタキ	橙色	ほぼ完形	00066

（単位cm）

遺物番号	挿図	図版	出土遺構	遺物種類	口径	底径(脚)	器高	調　　整	包調(外面)	その他の特調	登録番号
036	10	18	SC01	土師器・高坏		(17.0)		脚部内面ヘラケズリ外面不明	橙黄色		00094
037	10	19	SC01	土師器・器台	14.0	14.0	16.0	脚部内面ユビオサエ，ハケ，受け部内面ハケ 受け部外面ユビオサエ，脚部外面ユビオサエ	橙黄色	ほぼ完形	00064
038	10	19	SC01	土師器・器台	12.5	14.0	16.0	受け部内外面ハケ，脚部内面ユビナデしぼり 脚部外面タタキ板相直交	橙黄色	ほぼ完形	00065
039	11	19	SC01床面	土師器・鉢		9.6		受け部内面ハケ→ナデ，脚部内面ハケ→ナデクシ 受け部外面，脚部外面不明	橙褐色	脚部透孔あり	00105
040	11	19	SC01	土師器・鉢	(14.6)		4.5	内外面マメツで不明	淡橙色	1/3片	00098
041	11	19	SC01	土師器・鉢	15.2		6.0	内面ユビオサエ→ナデ，外面ハケ	淡黄色	ほぼ完形	00097
042	11	19	SC01	土師器・鉢	(32.0)		13.5	内面ハケ，外面タタキ→ナデヘラケズリ	橙黄色	1/2かなり歪む	00099
043	11		SC01 埋土	石器・砥石	現在長6.1	最大幅3.1	厚2.3		暗青灰色	粘板岩	00103
044	11	19	SC01	石器・工作台							
045	11	19	SC01	石器・砥石							
046	11		SC01内 SK44	土師器・甕	15.5			胴部内外面ハケ	暗黄色	1/2片，胎土 金雲母若干混	00100
047	11	19	SC01内 SK44	土師器・甕	(18.0)			口縁内外面ヨコナデ 体部内面ヘラケズリ外面ハケ	淡黄色		00268
048	13	19	SC01床面 SC02	土師器・甕	(20.0)			口縁内面ヘラケズリ，口縁外面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ，胴部外面ハケ	淡橙黄色	1/2片	00104
049	13	19	SC02 上層一括	土師器・鉢	(13.2)		2.8	全体にナデ	淡橙色	胎土精良	00120
050	13	19	SC02 上層一括	土師器・鉢	(13.7)		4.2	内面ナデ，外面マメツで不明	淡橙黄色		00109
051	13	19	SC02 SC02周溝内	土師器・鉢	(12.6)		4.0	内面強いナデ，ハケ，外面ナデ	淡橙色	脚欠損	00110
052	13		SC02	土師器・鉢	(16.0)		5.2	内面ユビオサエ，外面不明	暗灰橙色	1/6片	00116
053	13		SC02 付近検出面	土師器・飯蛸壺				内面ナデ，オシコミ，外面不明	橙黄色	1/3片，胎土 石英粒多量混	00126
054	13		SC02上層	土師器・飯蛸壺	(8.2)			内面ヘラケズリ，外面ユビオサエ	灰橙色	1/8片，胎土 石英粒多量混	00125
055	13	19	SC02 SC02中層 SC02上層	土師器・鉢		(4.0)		内面ナデ，外面不明	暗橙色		00119
056	13	19	SC02	土師器・高坏		(14.5)		脚部内面ユビナデ，外面不明	橙色	円形透孔あり	00115
057	13	19	SC02	土師器・高坏	(13.2)			脚部内面ナデ，外面ケズリ，ハケ目	橙黄色	3ケ所円形透孔あり	00111
058	13	19	SC02	土師器・高坏				脚部内面ヘラナデ，外面ハケ，内底ナデ	暗橙色	脚部片	00112
059	13	19	SC02上層	土師器・高坏				脚部内面ユビナデ，外面不明	橙色	脚部片	00113
060	13		SC02柱穴 pit230	土師器・高坏		13.8		脚部内面ナデ，外面ヨコハケのちナデ	明黄褐色	脚部片	00121
061	13	19	SC02中層	水晶	全長2.1	幅0.6		重量1.06g			00122
062	13	19	SC02ベッド上	石器・石鏃	現存長1.2	最大幅 1.3		重量0.44g		黒曜石	00123
063	13	19	SC02上層	石器・石鏃	現存長2.3	最大幅 2.1	最大厚 0.4			黒曜石	00124
064	15		SC03床面	土師器・甕	(12.4)			胴部内面ナデ，他不明	淡灰黄色		00127
065	15	20	SC05床面	土師器・鉢	(15.2)		5.0	内面ユビオサエ，外面ハケ→ナデ	暗灰黄色		00150
066	15	20	SC04床面	玉・臼玉	直径0.6	孔径0.1	0.3			滑石	00128
067	15	20	SC04床面	玉・臼玉	直径0.55	孔径0.1	0.25			滑石	00129
068	15	20	SC04床面	玉・臼玉	直径0.55	孔径0.15	0.2			滑石	00130
069	15	20	SC04床面	玉・臼玉	直径0.55	孔径0.1	0.2			滑石	00131
070	15	20	SC04床面	玉・臼玉	直径0.55	孔径0.15	0.1			滑石	00132

（単位cm）

遺物番号	挿図	図版	出土遺構	遺物種類	口径	底径（脚）	器高	調　整	包調(外面)	その他の特調	登録番号
071	15	20	SC04床面	玉・臼玉	直径0.55	孔径0.2	0.15			滑石	00133
072	15	20	SC04床面	玉・臼玉	直径0.55	孔径0.2	0.15			滑石	00134
073	15	20	SC04床面	玉・臼玉	直径0.55	孔径0.15	0.15			滑石	00135
074	15	20	SC04床面	玉・臼玉	直径0.6	孔径0.2	0.1			滑石	00136
075	15	20	SC04床面	玉・臼玉	直径0.55	孔径0.2	0.3			滑石	00137
076	15	20	SC04床面	玉・臼玉	直径0.5	孔径0.1	0.1			滑石	00138
077	15	20	SC04床面	玉・臼玉	直径0.5	孔径0.2	0.15			滑石	00144
078	15	20	SC04床面	玉・臼玉	直径0.5	孔径0.2	0.1			滑石	00145
079	15	20	SC04床面	玉・臼玉	直径0.5	孔径0.2	0.2			滑石	00146
080	15	20	SC04床面	玉・臼玉	直径0.55	孔径0.2	0.1			滑石	00147
081	15	20	SC04床面	玉・臼玉	直径0.55	孔径0.25	0.15			滑石	00148
082	15	20	SC04床面	玉・臼玉	直径0.55	孔径0.2	0.1			滑石	00149
083	19	20	SK01	土師器・把手				内ヘラナデ，外ユビオサエ	淡橙黄色		00243
084	19		SK01	石器・凹石	全長11.7	重量376 g					00242
085	19	20	SK03	須恵器・坏		9.8		底部脚ハリツケ→ヨコナデ 内面ナデヨコナデ，外面ヨコナデ，回転ヘラケズリ	暗青灰色	1／6片	00245
086	19	20	SK03	土師器・皿		(11.8)		器面荒れ調整不明	淡橙黄色	胎土精良	00244
087	19	20	SK03	石器・石鏃	全長2.2	最大幅1.5		最大厚0.3		黒曜石	00246
088	21		SK06	土師器・甕	(16.0)			全体にヨコナデ	淡橙黄色	1／4片	00251
089	21		SK06	土師器・甕	(19.5)			全体にヨコナデ	淡橙色	1／4片	00271
090	21		SK61	土師器・高坏	(19.0)			内底ヨコ方向のナデ，他マメツ不明	灰橙色	1／4片	00270
091	21		SK06	土師器・鉢	(9.6)			口縁内面，外面ユビオサエ，胴部内面ユビオサエ 外面ケズリ	淡橙黄色		00252
092	21		SK06	土師器・鉢	(13.0)			口縁内外面調整不明，体部外面調整不明 体部内面ユビオサエ	淡橙黄色	1／6片	00272
093	21	20	SK06	土師器・鉢		(8.2)		外面不明，内面ユビオサエ→ナデ，外底ユビオサエ	灰黄色	マンガン付着する	00248
094	21	20	SK05	玉・臼玉	直径0.4	孔径0.1	0.25			滑石	00247
095	21	20	SK06	玉・臼玉	直径0.43		0.25			滑石	00250
096	21	20	SK06	石器・石鏃	全長2.5	最大高0.8		最大幅2.1，重量3.88 g		サヌカイト	00249
097	21	20	SK06	鉄器 鉄刀又は刀子	現存長7.6					腐蝕がひどい	00422
098	21	20	SK07	須恵器・高坏	(12.0)			受け部内外面ヨコナデ，他マメツ不明	暗灰色	1／2弱	00254
099	21	20	SK07	土師器・高坏		(12.6)		内面ユビオサエ，外面ヨコ方向のナデ	橙黄色		00253
100	21		SK20	須恵器・坏身	(15.0)			外面ナデ，ケズリ	暗青灰色	胎土精良	00257
101	21		SK40	須恵器・坏蓋					青灰色		00267
102	21	20	SK20上層	石器 石庖丁	現存長4.8				淡灰褐色		00256
103	30		SB01—2	須恵器・坏身				口縁〈内面外面ヨコナデ，外面回転ヘラケズリ	明灰色	細片旧P146	00007
104	30		SB01—4	須恵器・坏蓋	(12.8)			口縁〈内面外面ヨコナデ，外面回転ヘラケズリ	灰色	1／10片旧P137	00010
105	30	20	SB01—4	須恵器・高坏	受け部径13.3			受け部内，外面ヨコナデ，内面ヨコナデ 外面回転ヘラケズリ	淡青灰色	1／2片SK11 旧P137	00009

(単位cm)

遺物番号	挿図	図版	出土遺構	遺物種類	口径	底径(脚)	器高	調整	包調(外面)	その他の特調	登録番号
106	30		SB01—8 柱芯	須恵器・坏蓋				ツマミハリツケ→ヨコナデ，外面ヨコナデ 内天井ヨコナデ，外天井回転ヘラケズリ	青灰色	1/4片旧P60	00013
107	30		SB01—12 P117	須恵器・坏蓋				不明	淡赤褐色	旧P117	00019
108	30	20	SB01 P10	須恵器・甕?	体部 (15.2)			内・外面ヨコナデ，回転ヘラケズリ	青灰色	1/6片旧P63	00017
109	30	20	P11柱芯	土師器・把手				内面不明，外面ユビナデ	灰黄色		00015
110	30		SB02—4	須恵器・高坏	受け部径 (14.6)			全体ヘラケズリ	青灰色	1/8片旧P143	00024
111	30		SB03—3	土師器・甕	(16.0)			体部内面ユビオサエ，口縁内面ハケ 口縁外面ハケ→ヨコナデ，体部外面ハケ→ヨコナデ	橙黄色	1/6片旧P87	00028
112	30		SB04	須恵器・甕				内・外面ヨコナデ，格子タタキ	淡青灰色	1/10片旧SK35	00265
113	30		SB04	須恵器・坏蓋				内面ヨコナデ，外面回転ヘラケズリ，ヨコナデ	灰色	1/8以下旧SK34	00263
114	30		SB04	土師器・坏				マメツ不明	茶黄色	1/8片旧SK33	00262
115	30	20	SB06—4	須恵器・坏	(12.0)		3.6	内底ユビオサエ，内面外面外底ヨコナデ	灰色	1/4片旧P22	00033
116	30		SB06—10	須恵器・坏身	(11.0)			外面ヨコナデ	灰黒色	枝跡，旧P311	00042
117	30		SB06—9	須恵器・坏身				外面ヨコナデ，ケズリ	灰色	旧P236	00041
118	30	20	SB06—8	須恵器・坏蓋	(11.5)			内外面ヨコナデ，外天井回転ヘラケズリ	明灰色	旧SP26	00039
119	30	20	SB06—5	須恵器・坏蓋	(122)		4.0	内面ヨコナデ，外面自然釉	灰黒色	1/3片，旧SP21	00036
120	30		SB06—1 (P31)	土師器・甕	(21.2)			マメツで不明	淡黄色	1/8片，旧SP31	00030
121	30	20	SB06—8 4 5	土師器・高坏		14.4		内面指押え→シボリ	橙黄色	1/2片，旧SP 22 21 233	00032
122	30		SB07—3	須恵器・坏蓋				外面ヨコナデ	灰色	小片，旧SP183	00044
123	30		SB07—4	土師器・甕	(13.2)			マメツ不明	暗橙色	1/8片，旧SP74	00045
124	30	20	SB08—5柱芯	須恵器・高坏				内面押え，ヨコナデ	明灰色		00048
125	30		SB11—3	須恵器・甕				内天井タタキ，ヨコナデ，外面ナデタタキ	灰色	小片，SP193	00059
126	34		SB09	須恵器・坏身	受け部径 12.0			内面ヨコナデ，外面回転ヘラケズリ	淡灰黄色	1/6片，SK22	00258
127	34		SB09	須恵器・坏身	受け部径 (13.8)			内外面ヨコナデ，外面回転ヘラケズリ	灰色	1/6片，旧SK23	00054
128	34		SB09	土師器・鉢?		(4.0)		内面指押え→ナデ，外面マメツ不明	橙色	底部片，旧SK21	00260
129	34		SB09	土師器・高坏				内面指ナデ，外面マメツ不明	淡橙黄色	旧SK22	00259
130	34	20	SB09	土師器・鉢	(20.0)			口縁内面ハケメヨコナデ，内面細い目のハケ	橙褐色	旧SK21出土	00051
131	34	20	SB09	須恵器・甕				内面指押え，外面相直交縦位タタキ→ナデ	灰色	旧SK23，SK30出土	00055
132	34	21	SB18—1	土師器・皿	8.4		1.3	外面マメツ不明，外底回転糸切り	橙色	ほぼ完形，旧SP194	00063
133	34	21	SB18—4	土師器・皿	8.6		2.1	内面ヨコナデ，外面マメツ不明	橙色	ほぼ完形 内面墨書あり	00287
134	35		SB01—7	陶質小片				内面ナデ，外面縄蓆文タタキ	赤豆色	旧SP81	00012
135	35		SB01	陶質土器				内面ナデ，外面縄蓆文タタキ	褐色	旧SP166	00022
136	35		SB04	陶質土器				内面ナデ，外面縄蓆文タタキ→沈線	灰赤色	旧SK340	00264
137	35		SB01—14	土師器・飯蛸壺	(7.0)			内面，外面マメツ不明	橙黄色	旧SP221	00020
138	35		SB09	土師器・飯蛸壺	(7.0)			マメツで不明	淡橙黄色	旧SK21	00053
139	35		SB01	石器・石庖丁				マメツで不明		粘板岩，旧SP117	00018
140	35	21	SB06—8 (P233)柱穴	石器・不明石製品	残存長 6.2					頁岩，旧SP233	00040

（単位cm）

遺物番号	挿図	図版	出土遺構	遺物種類	口径	底径（脚）	器高	調　　整	包調（外面）	その他の特調	登録番号
141	35		SB06—5（P 21）	石器・石斧	残存長6.8					今山製玄武岩 旧SP21	00034
142	35		SB09	石器・石鎌	残存長10.2	最大幅4.7	最大厚4.0			スレート？，旧SK21	00050
143	35		SB08—4	石器・叩石	残存長9.0	最大幅5.9	最大厚4.6	外面研磨		旧SP70	00047
144	35	21	SB09	石器 扁平片刃石斧	残存長7.0	最大幅1.1	重量57g		暗青灰色	頁岩，旧SP178	00049
145	35	20	SB03—4	鉄器・鉄鏃	残存長9.3	最大幅1.0	最大厚0.5			旧SP85	00423
146	35		SB01—1	石器・石鏃	残存長1.4	最大幅1.5	0.3			黒曜石，旧SP215	00005
147	35		SB06—3	石器・石鏃	残存長1.9	最大幅1.1	最大厚0.4			黒曜石，旧SP28	00031
148	35	21	SB01—12	玉・臼玉	直径0.5		0.3			滑石，旧SP12	00140
149	35	21	SB01—13	玉・臼玉	直径0.5		0.3			滑石，旧SP13	00139
150	35	21	SB02—10	玉・臼玉	直径0.45		0.2			滑石，旧SP111	00026
151	35	21	SB02—10	玉・臼玉	直径0.4		0.2			滑石，旧SP111	00027
152	35	21	SB06—5	玉・臼玉	直径0.4		0.2			滑石，旧SP20	00141
153	35	21	SB06—5	玉・臼玉	直径0.45		0.2			滑石，旧SP21	00142
154	35	21	SB07—10	玉・臼玉	直径0.5		0.2			滑石，旧SP10	00046
155	35	21	SA03	玉・臼玉	直径0.4		0.25			滑石，旧SK09	00143
156	35		SA01—2	土師器・把手				外面指押え	淡橙黄色	旧SK32	00261
157	37	21	SA02—5	土師器・把手				内面ナデ，外面指押え	橙色	上面に切り込みあり 旧SP116	00002
158	37		SA02—8	縄文式土器 深鉢				内面削り	暗橙色	旧SP150	00003
159	37		SA03—3	須恵器・坏身				外面ミズヒキヨコナデ	灰白色	1／4片，旧SP315	00004
160	37		SA04	土師器・把手				マメツ不明	橙黄色	旧SP99	00278
161	37		SA01—3	石器・石鏃				不明		スレート，旧SK46	00269
162	37	21	SA04	土製品・沈子				マメツ不明	黄色	旧SP58	00277
163	40		SD01上層	白磁・皿	(10.4)			内外面施釉	灰白色	1／6片	00160
164	40	21	SD01上層	白磁・皿	(12.6)	(4.4)		口縁外面施釉	灰白色	1／3片	00157
165	40		SD01中層	白磁・碗				内・外面施釉	くすんだ乳白色	細片	00151
166	40	21	SD01東側	白磁・碗	復元高台径(7.8)			内・外面施釉，外底ケズリ	淡オリーブ色	高台周辺はすって面取りしている	00159
167	40	21	SD01下層	陶器・碗		4.2		内面胎土目，外面施釉，外底ケズリ	灰白色	底部片で李朝系か 2次加熱をうける	00166
168	40		SD01東側上層	青磁・瓶		9.8		内外面施釉，外底ケズリ	青みかかった灰褐色釉	底部片	00153
169	40		SD01東側上層 SD01(1区)上層	陶器・盤	27.0			口縁外面砂目アト，内外施釉	釉・白色	小片	00162
170	40	21	SD01南端	土師器・皿	(6.8)		1.3	マメツ不明	淡橙色	2／7片	00172
171	40		SD01上層	土師器・皿	(8.0)	(6.0)	(0.8)	マメツ不明	淡橙黄色	1／6片	00168
172	40		SD01 東側上層	土師器・皿	(8.6)	(5.8)	(1.0)	マメツ不明	橙色	1／4片	00167
173	40	21	SD01中層	土師器・皿	(9.4)	(7.5)	(1.0)	内面ヨコナデ，外面マメツ不明	淡橙黄色		00163
174	40	21	SD01中層	土師質火舎				内面ハケ，外面ナデ雷文	暗褐色		00176
175	40		SD01 東側上層	須恵器・甕	(13.0)			口縁外面ヨコナデ	灰黒色	1／8片	00165

（単位cm）

遺物番号	挿図	図版	出土遺構	遺物種類	口径	底径（脚）	器高	調　　整	包調(外面)	その他の特調	登録番号
176	40		SD01（？区）上層	土師器・甕		(5.0)		内面指押え，外面ハケ	橙黄色	底部片	00173
177	40		SD01 1区底II区II層	土師器・甕				内面ヘラケズリ	橙色	小片	00155
178	40	21	SD01 中層	土師器・高坏				マメツし不明	橙黄色		00170
179	40	21	SD01 東側上層	土師器・高坏				内面ナデ，外面ハケ	橙色		00169
180	40		SD01 東側上層	須恵器・高坏		(9.6)		不明	青灰色	脚部片	00164
181	40		SD01 2区底	土師器・坏身	(11.4)			マメツ不明	淡黄褐色	1／4片金雲母多量混入	00171
182	40		SD01 底３層	土師器・盤？				内・外面ヨコ方向のナデ，外底ナデ	灰橙色	小片	00174
183	40		SD01 上層	土製品・錘	残存長 3.6	最大径 1.1		外面指押え	淡橙色		00175
184	40	21	SD01床	フイゴ羽口	残存長 8.6	最大幅 4.5		マメツ不明	淡黄褐色		00154
185	40		SD01 東側上層	石器・石剣の未製品				マメツがひどい		玄武岩？	00158
186	40	21	SD01 上層	石器・石鏃	全長1.5	最大幅 1.3	重量 0.36g			黒曜石	00156
187	41	21	SD02 1区上層	梁付・碗		高台径 (6.0)		内・外面施釉，外底露胎	くすんだ青白色	底部1／2片明代？	00199
188	41	21	SD02 2区上層	梁付・碗		復元高台径(6.0)		内・外面施釉，外底露胎	淡青白色	明代？	00200
189	41	21	SD02 2区上層	梁付・碗		13.6		内・外くすんだ透明釉がかかる	灰色 うすい透明	釉，明代？	00189
190	41		SD02 2区中層	梁付・皿？		復元高台径(6.2)		内面露胎，外面施釉，外底露胎でケズリ	明灰褐色		00207
191	41		SD02 1区上層	白磁埦				外面薄い乳白色釉	薄い乳白色		00205
192	41		SD02 2区上層	白磁？埦				外面厚めに灰色釉	くすんだ灰褐色釉		00206
193	41		SD02 2区上層	白磁・埦		復元高台径(6.4)		内面施釉，外面釉垂れ，外底ケズリ	淡青白色	1／3片	00180
194	41		SD02 上層	白磁				内面施釉，外面，外底ケズリ出し	淡黄色	1／3片	00179
195	41	21	SD02 2区中層	青磁		高台径 5.5		内外面施釉	オリーブ色		00201
196	41	21	SD022区	青磁・碗		4.4		外底胎土目，内面胎土目，外面薄施釉	くすんだ灰緑色	李朝	00190
197	41	21	SD02 フク土	長沙窯系水注	全長3.5			内面露胎，外面施釉	暗褐色 黒褐色	貼花部分	00192
198	41	21	SD02 1区上層	土師器・皿	6.5	5.0	1.2	外面ナデ，外底面回転糸切り	淡灰黄色	ほぼ完形	00197
199	41	21	SD02 1区上層	土師器・皿	(7.2)	(4.0)	(1.0)	マメツ不明	橙黄色		00193
200	41		SD02 1区上層	土師器・皿	(6.8)	(0.8)	(0.8)	内面指押え，外面ナデ，外底回転糸切り	灰黄色	1／3片	00196
201	41		SD02 1区上層	土師器・皿		(6.0)		外面ナデ，外底回転糸切り	淡灰橙色	1／3片	00194
202	41		SD02 1区上層	土師器・皿		(7.6)		内・外面ナデ，外底回転糸切り	淡灰黄色	1／3片	00195
203	41	21	SD02 7区上層	土師質土器火舎	18.5	17.3	4.2	口縁内面指押えのちナデ，外面ナデ，ナデグシ	橙黄色		00186
204	41		SD02 1区上層	瓦質土器足鍋				外面指押え	明灰色	支脚片	00204
205	41	21	SD02 1区上層	不明鉄器片	現存長7.6	最大幅	3.3				00421
206	42	21	SD02 2区下層	土師質土器鍋	(28.0)			内面ハケ，外面指押え，ハケ，ナデグシ	暗橙褐色	1／8片	00187
207	42		SD02 7区上層	土師質土器湯釜				内面指押え，外面ハケ，ナデ	淡灰橙色	小片	00188
208	42	22	SD02 1区中層	土師質土器湯釜	胴部口径 (26.0)			内面指押え，ヨコハケ，外面タテ，ヨコハケ	灰橙黄色	1／10片	00198
209	42		SD01南端 SD022区中層	土師器・甕	(14.0)			口縁内面ヘラケズり，外面ヨコナデ	暗橙色		00177
210	42		SD02上層	土師器・甕	(17.0)			内面ヘラケズり，口縁外面ヨコ方向のナデ	橙色		00181

（単位cm）

遺物番号	挿図	図版	出土遺構	遺物種類	口径	底径(脚)	器高	調整	包調(外面)	その他の特調	登録番号
211	42		SD02 1区上層	土師器・高坏		(17.0)		内面ハケ，外面ハケ，ナデグシ	橙色		00184
212	42	22	SD02 2区中層	土師器・高坏				受部内面ナデ，脚部 外面ハケ，ナデグシ 内面けずりぎみのナデ	橙褐色		00182
213	42		SD02 2区中層	土師器・高坏				内面しぼり，外面マメツ不明	橙黄色	透孔あり	00183
214	42		SD02 2区中層	石器・敲石片				外面研磨，敲打痕	暗青灰色	火成岩系	00208
215	42	22	SD02	石器・スクレーパー	全長2.4	最大幅(1.9)		重量2.24g	黒曜石		00191
216	44	22	SD03 2区中層	白磁・水注				内面白色の透明釉	乳白色	体部片	00215
217	44		SD03 3区上層	白磁・碗	(15.2)			口縁外面施釉	緑がかった灰白色	口縁部細片	00226
218	44		SD03 2区中層	白磁・碗		7.2		内面施釉，底部削り出し	淡橙黄色	釉の発色不良	00210
219	44	22	SD03 2区上層	陶磁・瓶？				外面施釉	褐色釉		00216
220	44		SD03 2区中層	白磁・壷？				内・外面施釉	白ぽいオリーブ色		00211
221	44	22	SD03(2区) 下層一括	土師器・皿	6.5	5.0	1.7	内面指押え，外底回転糸切り	淡橙色	歪み金雲母多量混	00218
222	44	22	SD03(2区) 下層一括	土師器・皿	8.0	5.2	1.8	内面指押え，ナデ，外面ナデ，外底ヘラ切り	淡橙色	完形	00217
223	44	22	SD03(2区) 下層一括	土師器・皿	7.5	4.5	1.5	マメツ不明	淡橙黄色	歪み金雲母多量混	00219
224	44	22	SD03(2区) 下層一括	土師器・皿	(8.2)	(5.5)	(1.4)	マメツ不明	淡橙黄色	1/2片	00221
225	44		SD03(2区) 下層一括	土師器・皿	(8.4)	(5.2)	(1.4)	外面ナデ	淡橙色	金雲母多量混	00220
226	44		SD03(2区) 下層一括	土師器・皿	(8.4)		1.6	マメツ不明	淡橙色	1/3片	00222
227	44	22	SD03(2区) 下層一括	土師器・皿	(9.0)	(5.0)	(1.6)	内面マメツ不明，外面ヨコ方向のナデ	淡橙黄色	金雲母多量混入	00223
228	44		SD03 北ベッド中層	土師器・皿				内面ヨコナデ，器面荒れ調整不明	橙色		00213
229	44	22	SD03(2区)	土師器・皿	(11.4)	(6.7)	(2.3)	外面ミズビキヨコナデ，外底回転糸切り	橙色		00209
230	44	22	SD03 2区中層	土師質摺鉢				内面5本の条線，外面ハケ	橙黄色		00224
231	44		SD03(2区) 下層	土師器・飯蛸壺	(5.2)			内面指押え	橙黄色		00225
232	44	22	SD03 上層南ベッド	鉄製品・鋤先	残存長22.0	最大幅16.8		不明			00424
233	45	22	SD04 上層	須恵器・坏		(8.2)		内面ナデヨコハケ，外面ヨコハケ，外底ヨコナデ	灰色		00235
234	45	22	SD04 1区上層	須恵器・盤	(18.0)		3.0	内面指押え→ナデ外面ヨコナデ 外面底指押え回転ヘラケズリ	淡灰色	1/2片	00229
235	45		SD04(SK02) 交差部中層	須恵器・坏身	受け部径(13.6)			口縁外面ヨコナデ，外底回転ヘラケズリ	白灰色		00238
236	45	22	SD04上層 1区	須恵器・高坏		(10.6)		脚部外面ヨコナデ	暗灰色	透し孔は4ケ所	00236
237	45		SD04上層 1区	須恵器・壷	(18.4)			口縁外面ヨコナデ	灰色		00237
238	45		SD04上層 1区	須恵器・器台？				内面ヨコナデ，外面クシカキ，ハリツケ→ヨコナデ	灰色		00240
239	45	22	SD04上層 1区	須恵器・甕	(28.0)			口縁外面ヨコ方向のナデ	灰黒色	1/2片	00227
240	45		SD04(SK02) 交差部上層	須恵器・甕	(22.0)			口縁外面ヨコ方向のナデ	灰黒色	1/3片	00228
241	45	22	SD04上層	須恵器・器台？		(29.6)		脚部外面回転ナデ	暗青灰色	硯の脚の可能性あり	00234
242	45	22	SD04下層 1区	土師器・把手				外面指押え	黄色		00230
243	45		SD04 トレンチ上層	土師器・蝋壷	(8.0)			内面は指ナデか？外面指押え痕	淡橙黄色		00231
244	45		SD04中層	土師器・蝋壷	(6.4)	最大胴径7.8		内面指押え，外面指押え仕上？	淡橙色	円孔がある	00233
245	45	22	SD05ベルト	玉・小玉？	直径(0.55)	孔径0.15	0.5		緑青色	ガラス製	00241

（単位cm）

遺物番号	挿図	図版	出土遺構	遺物種類	口径	底径（脚）	器高	調　　整	包調(外面)	その他の特調	登録番号
246	46		SP7	須恵器・坏蓋	(12.2)			外天井回転ヘラケズリ→ナデ，外面ヨコナデ	青灰色	小片	00056
247	46		SP7	須恵器・坏		10.0		マメツ不明	橙色	1／4片，赤焼色	00058
248	46		SP7	須恵器・坏身	(12.4)		(2.2)	内面ヨコナデ，内底ナデ 外面ナデ，外底ナデ	明灰色	1／4片	00057
249	46		SP34	須恵器・ツマミ				内外面ナデ	暗青灰色		00275
250	46		SP126	須恵器・坏身	受け部径(12.2)			外面ヨコナデ	明灰色	1／6片	00280
251	46	22	SP135	土師器・皿		(6.6)		内・外面ナデ，外底回転糸切り	淡橙黄色	1／3片	00281
252	46		SP149	須恵器・坏身				内・外面ヨコナデ，外底回転ヘラケズリ	灰色	小片	00282
253	46	22	SP254	土師器	7.6		5.5	内・外面ユビオサエ	橙色		00284
254	46		SP247	土師器・甕	(16.0)			口縁内外面ハケ→ナデ，体部内外面ハケ	橙褐色	1／3片	00283
255	46	22	SP271	土師器・皿	9.0		1.2	外面ナデ，外底回転ヘラケズリ	橙色	ほぼ完形	00286
256	46		SP320	須恵器・把手付き小鉢？				内外面ナデ	明灰色		00288
257	46	22	SP8	石器・砥石	残存長14.4	最大幅	8.0			砂岩	00273
258	46		P26上層	石器 片刃石斧	残存長5.8	最大幅1.5	最大厚0.5		黒灰色	粘板岩	00274
259	46	22	SP261	石器・石鏃	現存長2.3	最大幅1.3				黒曜石 縄文時代か	00285
260	46	22	SP41	銅銭	直径2.4					銘文「太平通寶」	00276」
261	46	22	SP112	玉・臼玉	直径0.45		0.3		灰色	滑石	00279
262	47		1号カクラン	磁器・盃	6.0		3.2	外面施釉	淡青白色		00359
263	47		1号カクラン	磁器・盃	6.0		3.2	外面施釉	白色		00355
264	47		1号カクラン	磁器・盃	8.0		3.8	外面施釉	青白色		00351
265	47		1号カクラン	磁器・盃	8.0		3.7	外面施釉	青白色		00352

第113次調査

001	54	25	SD01上層	青磁・碗		4.6		内外面施釉，外底ケズリ	灰緑色釉	底部完形，見込草花文	00004
002	54		SD01下層	青磁・碗	17.2			両面施釉	淡緑色	1／10片	00013
003	54	25	SD01中層	青磁・碗	16			両面施釉	緑色	1／10片，外面に文様	00011
004	54	25	SD01中層	染付・碗		6		両面施釉	淡黄白色	1／4外面に文様 内面に圏線	00010
005	54	25	SD01中層	陶器・皿	14.3	5.7	4.5	外底ケズリ，外面施釉	淡緑灰色	底部完形 全体の3／4片	00003
006	54		SD01上層	土師器・皿		8.3		摩滅で不明	淡黄橙色	1／2片	00006
007	54		SD01上層	土師器・皿		6.5		外底糸切り	淡橙色	1／2片	00005
008	54		SD01中層	土師器・坏		9.1		外底糸切り	淡黄橙色	1／3片	00012
009	54	25	SD01中層	陶器・摺鉢	24			口縁両面とも横ナデ	暗赤褐色	1／6片	00009
010	54	25	SD01下層	陶器・摺鉢				口縁両面横ナデ	暗赤褐色	1／10片	00016
011	54		SD01下層	土師質土器鉢	26.8			摩滅のため不明	黄白色	1／8片	00079
012	54		SD01下層	土師質土器鍋				内面横方向ハケ目	暗橙色	細片	00015
013	54	25	SD01	瓦質土器火舎				口縁内面ヘラナデ，体部外面ミガキ内面	黒色	小片，外面四直違文	00002
014	54	25	SD01上層	瓦質土器火舎	胴部径40			体部内面指ナデ，外面ミガキ	黒色＋暗黄橙色	1／6片，外面巴文	00007

（単位cm）

遺物番号	挿図	図版	出土遺構	遺物種類	口径	底径（脚）	器高	調　　整	包調(外面)	その他の特調	登録番号
015	54	25	SD01	瓦質土器火舎	24．6			口縁内面指ナデ	黒色	1／8片，外面巴文	00001
016	54	25	SD01中層	土製品・土錘	長3.8	幅1.7	孔0.4	摩滅で不明	明橙色	4／5片	00084
017	54		SD01下層	石器・砥石	長2.5	幅1.6	厚0.4	全面研磨		砂岩製	00080
018	54	25	SD01中層	石器・石鏃	長1.7	幅1.6	厚0.3	未製品		黒曜石製	00085
019	55	25	SD01	瓦・平瓦		幅21	厚1.7	摩滅のため不明	淡黄橙色	1／2片	00064
020	55		SD01	瓦・丸瓦		幅12.5	厚2	谷面模骨痕，布目外面縄目のちナデ	淡黄橙色	2／3片	00062
021	55		SD01中層	瓦・丸瓦		幅12.5	厚2	内面布目，外面縄目	灰黒色	1／2片	00058
022	55		SD01	瓦・丸瓦		幅11.2	厚2	内面布目・ヘラ，外面縄目・ヘラ	淡黄橙色	2／3片	00060
023	55	25	SD01中層	瓦・軒平瓦		瓦当厚	5	内面布目ヘラナデ，外面ヘラ	灰黄色	1／3片	00054
024	55	25	SD01中層	瓦・軒平瓦		瓦当厚	1.7	両面ともナデ	灰色	1／4片	00055
025	55	26	SD01中層	瓦・軒丸瓦	径11			内面ナデ，外面ケズリ	灰黒色	1／3片	00053
026	56		SD01	瓦・鬼瓦				内面ヘラケズリ，外面ハケ目・ケズリ	灰黄橙色	小片	00067
027	56		SD01	瓦・鬼瓦				ケズリ	灰褐色	小片	00081
028	56	26	SD01溜状	青磁・碗		4.4		両面施釉，外底ケズリ	オリーブ灰緑色	底部1／2片，外面に蓮弁	00020
029	56	26	SD01溜状	青磁・碗	15.2	7.2	6.2	両面施釉	灰オリーブ色	底部1／2片	00023
030	56	26	SD01溜状	青磁・皿	13.5			両面施釉	暗緑灰色	1／4片，内面に文様	00022
031	56		SD01溜状	土師器・坏	15.5	9.6		底部糸切り	淡橙色	1／3片	00017
032	56	26	SD01溜状	陶器・壺	胴部径16			両面施釉，内面ナデ	暗褐色	1／4片	00021
033	56	26	SD01溜状	陶器擂鉢				横ナデ	にぶい赤褐色	小片	00019
034	56	26	SD01溜状	瓦質土器火舎				内面ハケ目	黄灰色	小片	00018
035	56	26	SD01溜状	瓦質土器火舎	32			口縁ナデ，外面ミガキ	暗黄橙色	1／3片，短状線	00024
036	56	26	SD01溜状	瓦・軒平瓦		幅21.5	厚4.9	内面布目，外面ヘラケズリ	灰黒色	2／3片	00050
037	56	26	SD01溜状	瓦・軒丸瓦	瓦当径	約11		両面ナデ	淡灰黄色	1／4片	00066
038	56	26	SD01溜状	瓦・軒丸瓦	瓦当径	11.0		外面ナデ	灰色	1／3片	00051
039	57	26	SD01溜状	瓦・丸瓦		幅12.0	厚1.7	外面縄目のちナデ，内面布目，糸切り痕，模骨痕	黄橙色	1／3片	00042
040	57		SD01溜状	瓦・丸瓦		幅12.5	厚2.0	外面縄目のちナデ，内面布目，模骨痕	黄橙色 黒斑アリ	1／3片	00043
041	57		SD01溜状	瓦・丸瓦		幅12.3	厚2.5	外面縄目のちナデ，内面布目，糸切り痕，模骨痕	黄橙色 黒斑アリ	1／3片	00044
042	57	26	SD01溜状	瓦・丸瓦		幅12.5	厚1.8	外面縄目のちナデ，内面ケズリ	灰色，黄橙色	1／2片，目釘穴アリ	00052
043	57	26	SD01溜状	瓦・平瓦	長30.0	幅20.0	厚1.8	外面縄目のちナデ，内面ナデ	黄灰色	4／5片	00046
044	58	26	SD01溜状	木器・桶底	径13.2		厚0.5				00086
045	58	26	SD01溜状	木器・桶側	長14.2	幅3.2	厚0.4				00087
046	58		SD01溜状	木器・桶側	長14.2	幅1.8	厚0.4				00091
047	58		SD01溜状	木器・桶側	長14.2	幅1.4	厚0.5				00089
048	58		SD01溜状	木器・桶側	長14.1	幅2.1	厚0.4				00090
049	58		SD01溜状	木器・桶側	長12.4	幅2.8	厚0.4				00092

（単位cm）

遺物番号	挿図	図版	出土遺構	遺物種類	口径	底径（脚）	器高	調　　整	包調(外面)	その他の特調	登録番号
050	58	26	SD01溜状	木器・桶側	長14.1	幅1.7	厚0.4				00088
051	58	26	SD01溜状	木器・不明	長19.1	幅2.1	厚2.1				00093
052	60		SD02	青磁・碗		6.1		両面施釉，外底ケズリ	緑灰色	底部1／2片	00025
053	60	27	SD02下層	白磁・碗		7		内面施釉，外面露胎	淡灰白色	底部1／2片	00037
054	60		SD02中層	白磁・碗		5.6		両面施釉，外底ケズリ	オリーブ灰色	底部1／2片	00032
055	60		SD02	青磁・碗	14.8			両面施釉	明緑灰色	小片	00074
056	60	27	SD02中層	青磁・鉢		7		両面施釉	にぶい黄緑色	全体2／3	00031
057	60		SD02中層	土師器・皿		7.7		外底回転糸切り，両面ナデ	暗橙色	1／6片	00034
058	60		SD02下層	土師器・皿	(11.4)	9		外底回転糸切り，両面ナデ	橙色	1／6片	00035
059	60		SD02中層	土師質土器鍋				両面ヨコナデ	暗黄灰褐色	小片，外面スス付着	00033
060	60		SD02中層	土師質土器鍋	27			口縁内面ナデ，指おさえ，外面ナデ	外)黒色 内)黄白色	1／8片	00028
061	60	27	SD02下層	土師質土器摺鉢	36.2			両面ナデ，外面指おさえ痕	灰黄褐色	1/4，1単位千本の条線	00036
062	60		SD02下層	瓦質土器火舎				両面ナデ	灰黒色	小片外面S字状文	00038
063	60		SD02中層	瓦質土器火舎				不明	黄色味の黒色	？外面四直違文	00029
064	60	27	SD02	土製品・サナ？		厚4.9	×4.7	ナデ，指おさえ	淡黄色	？	00026
065	60	27	SD02	須恵質土器甕				ナデ	青灰色 外灰黄橙色	1／10片	00027
066	60	27	SD02中層	石製品・鍋				両面ケズリ		小片	00030
067	61	27	SD02中層	瓦・塼		幅21.5	厚3.1	ナデ	淡黄褐色	4／5片	00068
068	61		SD02中層	瓦・丸瓦			厚2	内面布目，模骨痕，外面ヘラナデ	黒色	1／4片	00072
069	61	27	SD02下層	瓦・丸瓦		幅12.3	厚2	内面布目，外面ヘラナデ	黄褐色	4／5片	00073
070	61	27	SD02中層	石器・石斧	長11.9	幅5.4	厚3	研磨		4／5片，玄武岩？	00083
071	62	26	SD02	石製品・宝篋印塔	29.7×29.4		高15.3			堆積岩質	00082
072	62		SD02下層	石製品・宝篋印塔	長9.2						
073	62		SD02	石製品・板碑	長10.2	幅7.2					

第120次調査

001	66		SK01	須恵器・坏蓋				内・外面横ナデ	淡青灰色		00001
002	66	28	SK03	土師質土器こね鉢				外面ハケ，ナナメハケ，板ハケ，内面指押えハケ，ケズリ	淡橙黄色		00002
003	66	28	遺構面	土製品	長4.4	幅6.8	厚1.5	外面ナデ，内面指ナデ，指紋	灰白色		00003

第131次調査

001	71	30	SC01上中層	須恵器・坏蓋	(14.1)			天井回転ヘラケズリ，全体ミズビキヨコナデ	灰色	1／3片	00003
002	71		SC01床面	須恵器・坏蓋	(14.8)			全体ミズビキヨコナデ	灰色	1／6片ヘラ記号有り	00005
003	71		SC01中下層	須恵器・坏蓋	(15.0)			内，外面ミズビキナデ，自然釉	灰色	1／2片ろくろ回転時計回り	00007
004	71		SC01床面	須恵器・坏蓋	(14.8)			上部回転ヘラケズリ，全体ミズビキナデ	灰色	1／6片ろくろ回転時計回り	00004
005	71	30	SC01	須恵器・坏蓋	(12.9)		4.95	天井回転ヘラケズリ，全体ミズビキナデ	明赤褐色	2／3片ろくろ回転時計回り	00001
006	71	30	SC01貼付粘土	須恵器・坏蓋	(14.0)			上部回転ヘラケズリ，全体ミズビキナデ	灰色	1／3片	00002

（単位cm）

遺物番号	挿図	図版	出土遺横	遺物種類	口径	底径（脚）	器高	調　　整	包調(外面)	その他の特調	登録番号
007	71		SC01床面	須恵器・坏蓋				全体ミズビキナデ	灰色	1/8片	00008
008	71	30	SC01 カマド内	須恵器・坏身	(11.6)		(39)	全体ミズビキナデ	褐灰色	1/3片	00006
009	71		SC01上中層	土師器・高坏				全体にマメツがひどいがナデ	明赤褐色	1/6片，胎土 石英粒多量混	00014
010	71	30	SC01 カマド支脚	土師器・高坏	16.6	14.4	17.1	外面ヘラミガキ，タテヘラナデ 内面ヨコヘラケズリ，のちナデ	橙色	ほぼ完形	00009
011	71	30	SC01 カマド内	土師器・甕	(22.0)			外面ナデ，指押えタテハケ 内面タテヘラケズリ	黄橙色	1/4片，胎土 砂粒多量混	00012
012	71		SC01貼床 粘土中	土師器・甕	(22.2)			内外面ヨコナデ	橙色	1/5片，胎土 砂粒多量混	00010
013	71	30	SC01床面	土師器・壺	(22.8)			内外マメツで不明	明赤褐色	1/6片，焼成やや甘い	00011
014	71	30	SC01	石製品・紡錘車	直径 4.5	孔径 0.7	高さ 1.8	全体にケズリ	灰色	滑石	00013

第133次調査

001	79		SC01 ベルト西	土師器・甕	(12.7)			口縁内面ナデ，外面ハケ，タタキ	暗橙色	1/3片	00071
002	79		SC01 フク土	土師器・甕				内面ハケ，マメツがひどい	淡橙色	1/6片	00061
003	79	38	SC01	土師器・甕	(14.7)			マメツするが外面タタキ	淡橙黄色	1/2片	00020
004	79	38	SC01	土師器・甕				外面タタキ	淡黄色	1/2片	00039
005	79		SC01ベルト東	土師器・甕	(18.0)			口縁内ナデ，外面ハケ，ナデクシ	淡橙黄色	1/8片	00073
006	79		SC01	土師器・甕	(17.4)			内面ハケ，外面指おさえ，ハケ	橙黄色	1/3片黒斑あり	00004
007	79		SC01	土師器・甕	(23.1)			内面ハケ，外面ハケ，ナデクシ	茱灰黄色	1/10片	00066
008	79		SC01土層	土師器・甕				胴部内，外面ハケ	橙色	1/6片	00037
009	79		SC01	土師器・甕		胴部径 (24.0)		外面横ナデ，ハケ	淡灰黄色	1/6片	00016
010	79		SC01埋土	土師器・甕				胴部内，外面ハケ	淡黄色	1/10片	00078
011	79	38	SC01	土師器・甕	16.8			内面指おさえ，ハケ，外面ハケ，タタキ	淡褐黄色	2/3片	00003
012	79		SC01	土師器・甕	(21.3)			外面タタキ	淡灰黄色	1/6片	00207
013	80	38	SC01	土師器・甕	19.3		30.6	内面指おさえ，ハケ，外面タタキ，ハケ	橙黄色		00025
014	80	38	SC01	土師器・甕	19.7		28.1	マメツするが外面タテハケ	淡橙黄色	1/3片	00029
015	80		SC01埋土，ベルト東，下層	土師器・甕				胴部外面タタキ	淡橙色	1/6片	00048
016	80	38	SC01	土師器・甕		胴部径 (23.4)		胴部内面指おさえ，タテハケ外面ハケ	淡橙黄色	胎土 石英粒を多量混	00015
017	80		SC01	土師器・甕		胴部径 (21.5)		内部マメツで不明，外面ハケ	灰黒色	胎土，歪みが多い	00040
018	80		SC01	土師器・甕		胴部径 21.5		胴部内面ハケ指おさえ外面イタナデ	淡橙黄色	1/3片	00014
019	80	38	SC01	土師器・甕	20.5		(35.6)	内面マメツで不明，外面ハケ，イタナデ	暗橙色	ほぼ完形，若干歪む	00002
020	81	38	SC01	土師器・甕	25.4		34.5	外面上タタキ，下ハケ	橙黄色	胎土 石英粒多量混入	00001
021	81	38	SC01	土師器・甕	41.5		54.1	内，外面ハケ	黄色	突帯3条あり	00205
022	81	38	SC01	土師器・甕	66.3		78.5	内，外面ハケ	灰黄色	突帯2条あり	00204
023	82	38	SC01	土師器・壺	(11.8)			内面ヘラケズリ，外面マメツで不明	黄色	1/2片	00017
024	82		SC01上層	土師器・壺	(10.9)			マメツで不明	淡橙黄色	1/6片，胎土 石英粒多く混入	00042
025	82	38	SC01	土師器・壺	(15.8)	胴部径 (31.5)		内面ハケ，外面下半板ナデ	淡橙黄色	1/10片	00202
026	82		SC01	土師器・壺	(24.9)			マメツで不明	黄色	1/10片	00050

（単位cm）

遺物番号	挿図	図版	出土遺構	遺物種類	口径	底径（脚）	器高	調　　整	包調(外面)	その他の特調	登録番号
027	82	38	SC01	土師器・壺		3.0		マメツで不明	橙色	底部片	00026
028	82		SC01	土師器・壺	(23.3)			口縁内，外面ハケ	橙色	1/8片	00027
029	82	38	SC01	土師器・鉢	(8.6)		(3.3)	内面指おさえ，外面マメツで不明	淡橙色	1/2片	00206
030	82		SC01	土師器・鉢				外底指おさえ	灰黒色	胎土 石英粒多量混	00056
031	82	38	SC01	土師器・鉢	12.4		5.0	マメツで不明	黄色	ほぼ完形，胎土 石英粒多量混	00012
032	82		SC01	土師器・鉢	(22.0)			マメツで不明	淡橙黄色	1/6片 石英粒多量混	00011
033	82	38	SC01	土師器・鉢	19.0		7.5	内面指おさえ，ハケ外面ハケ	橙黄色	ほぼ完形	00022
034	83	38	SC01	土師器・鉢	11.3		5.4	マメツするが指おさえ	橙黄色		00023
035	83	39	SC01	土師器・鉢	(11.8)			内外面ナデ	淡橙色	1/3片	00038
036	83		SC01	土師器・鉢				マメツで不明	淡橙黄色	1/4片 石英粒多量混	00052
037	83	38	SC01西ベルト	土師器・鉢	(16.2)			マメツで不明	黄色	1/4片	00069
038	83		SC01	土師器・鉢	(23.4)			内面ハケ，外面ナデ	灰色	1/6片 口唇部は凹む	00033
039	83		SC01	土師器，鉢		(9.6)		内，外ハケ，外面はマメツが著しい	橙色	胎土，石英粒多量混	00031
040	83	39	SC01	土師器・鉢		12.8		内・外面ハケ	淡灰黄色	胎土，石英粒多量混	00030
041	83		SC01	土師器・甕	(11.0)			内面ハケ，外面指おさえ	灰黄色	1/3片	00010
042	83		SC01ベルト西	土師器・鉢	(14.8)			内面ナデ	灰黒色	1/4片，歪みがある	00070
043	83		SC01	土師器・鉢	(12.3)			内，外ハケ	淡灰黄色	1/6片，外面亀甲状 ひび割れ	00013
044	83		SC01	土師器・鉢	(13.5)			内外面ハケ	灰黄色	1/4片，外面亀甲状 ひび割れ	00006
045	83		SC01	土師器・鉢	(14.5)			内，外マメツするが，外面下半板ナデ	淡橙黄色	1/8片	00009
046	83	39	SC01	土師器・鉢	(18.7)			内・外面ハケ	淡橙黄色	1/3片，胎土 石英粒やや混	00005
047	83	39	SC01	土師器・高坏				内面ヘラケズリ，外面ハケ	橙色	脚筒部片	00080
048	83		SC01ベルト東	土師器・高坏		(16.8)		内，外面マメツで不明	淡橙黄色	内面工具痕残る	00065
049	83	39	SC01	土師器・支脚				外面タタキ，指おさえ	橙色	上面焼成前穿孔	00032
050	83	39	SC01	土師器・支脚		12.2	11.0	内面シボリ，外面マメツで不明	淡黄色	1/2片	00024
051	83		SC01	土師器・器台				内面ハケ，外面ナデ	橙黄色		00057
052	84	39	SC01	土師器・器台	(19.5)			内，外横ナデ	淡灰橙色	1/2片	00018
053	84		SC01南北ベルト	土師器・器台				内面ナデ，ハケケズリ	淡灰橙色	胎土精良	00075
054	84	39	SC01	土師器・器台				内，外面ハケ，裾部ナデ	橙色	器面全体かなり 荒れる	00027
055	84	39	SC01	土師器・器台	10.3	12.5	16.8	内面指しぼり，外面ハケ，タタキ	橙黄色	完形，胎土 石英粒多量混	00007
056	84	39	SC01	土師器・器台	(14.3)	15.8	(19.8)	内面指おさえ，ハケ，ナデケシ，外面ハケ	淡灰橙黄色	胎土，石英粒多量混	00021
057	84	39	SC01，SP61	土師器・器台	(13.9)			内面指おさえ，外面マメツで不明	灰橙黄色	SP61と接合	00201
058	84	39	SC01	土師器・器台		(16.8)		内面指おさえ，ナデ，外面ハケ，タタキ	灰黄色		00008
059	84	39	SC01	土師器・器台		16.0		内面指おさえ，シボリ，ハケ，外面ハケ	淡橙黄色	1/4片，胎土 石英粒多量混	00028
060	84		SC01最上層	土師器・器台				内面ナデ，外面ナデ，タタキ	橙黄色	1/8片	00054
061	84		SC01ベルト西	土師器・器台				内面マメツで不明，外面ハケ	淡橙色	1/3片，胎土 石英粒多量混	00072

（単位cm）

遺物番号	挿図	図版	出土遺構	遺物種類	口径	底径（脚）	器高	調　　整	包調(外面)	その他の特調	登録番号
062	84		SC01	土師器・器台		(7.1)		内面横方向ナデ，ヨコナデ外面ナナメ方向ナデ	橙黄色	1／3片，胎土 1㎜石英粒多量混	00019
063	84		SC01上層最上層	土師器・甕	(19.8)			内面横ナデ，外面横ナデ，格子タタキ	橙色	1／4片，胎土，精良 焼成，良好	00034
064	84		SC01上層	土師器・甕	(14.9)			内面横ナデ，外面横ナデ，体部タタキ	淡橙色	胎土，精良，焼成 良好	00035
065	84		SC01ベルト東 下層	陶質土器・甕				内面指おさえ，外面タタキ	淡橙黄色	縄蔑文タタキ	00074
066	84		SC01上層	陶質土器・甕				内面ナデ，外面格子タタキ	橙褐色	67と同一個体か	00041
067	84	39	SC01上層	陶質土器・甕				内面ナデ，外面格子タタキ	淡橙色	格子目タタキ	00041
068	84	39	SC01上層	陶質土器・甕				外面格子タタキ	淡橙色	格子目タタキ	00049
069	85	39	SC01ベルト 東フク土	石器・磨石	全長9.3	幅7.19	厚3.2		灰黄色	石英赤色顔料付着	00227
070	85	39	SC01フク土 上層	石器・磨製石鏃	全長5.6	重量 5.38g		外面研磨		頁岩	00213
071	85	39	SC01ベルト西 上層	石器・石鏃	全長2.2	重量 1.06g				黒曜石	00226
072	85	39	SC01床面	石器・石鏃	全長1.8	重量 0.60g				黒曜石	00225
073	87	37	SK02	土製品・土錘	全長3.4	重量 2.62g			灰橙黄色		00222
074	87	37	SK03	石製品・紡錘車	全長4.8	重量 28.84g				粘板岩石庖丁の 再利用	00223
075	87	37	SK05	土師器・甑				内面ヘラケズリ，外面指おさえ	黄色	体部片，胎土 石英粒多量混	00179
076	88	37	SE01 4 層	瓦質・湯釜	(19.6)			内面ハケ，外面板ナデ，ハケ後ナデクシ	灰黒色	1／10片，胎土，精良 外面煤が付着	00178
077	90	37	SA01-5掘方	須恵器・坏蓋	(12.8)			口縁内，外面横ナデ，体部外面回転ヘラケズリ	灰色	1／6片，胎土，精良 焼成良好	00193
078	90		SA01-5掘方	土師器・甕	(14.8)			口縁内，外面横ナデ体部内，外ヘラケズリ	橙色	1／8片，胎土 石英粒多量混	00194
079	90	37	SA01-10掘方	土師器・器台	6.5			内面，ナデ，ハケ，外面ハケ，指押え，タタキ	淡灰黄色		00208
080	93	40	SD01上中層	白磁・碗		(10.0)		全体施釉，底部ケズリ	淡青白色	底部1／8片，胎土 底部砂粒付着	00084
081	93		SD01上中層	白磁・碗				不明	淡灰緑色		00085
082	93		SD01中層	白磁・碗		高台径 5.6		内面，施釉，外面ケズリ	淡灰色	底部片	00088
083	93		SD01上層	須恵質土器 摺鉢		(15.8)		内，外面ナデ	明灰色	1／6片	00082
084	93	40	SD01上中層	瓦質土器 足鍋				全体ナデ	淡灰白色	支脚片	00087
085	93	40	SD01上中層	陶器・摺鉢				全体ヨコナデ	橙褐色	口縁部片	00086
086	93		SD01溝底	白磁・碗		高台5.4		内，外施釉底部ケズリで露胎	淡灰緑色		00093
087	93		SD01溝底	白磁・碗		(6.6)		内面，施釉底部ケズリ	淡青白色		00095
088	93		SD01礫中	青磁・碗		5.0		内，外，施釉底部ケズリ，露胎	淡灰緑色	李朝？	00097
089	93		SD01溝底	青磁・碗		(5.0)		内，外，施釉底部ケズリ，露胎	明灰色		00094
090	93	40	SD01礫中	青磁・碗		(5.6)		内，外，施釉底部ケズリ	明灰色	全体に摩滅し釉の 発色が悪い	00098
091	93	40	SD01礫中	青磁・碗		(5.4)		内，外，施釉	明灰色		00099
092	93	40	SD01床面	青磁・碗		6.0		内面，ヘラ施釉 外面施釉底部ケズリ露胎	淡緑色		00092
093	93	40	SD01礫中	土師器・蓋		4.0	2.4	内面，回転糸切り 外面，不明	桃色		00106
094	93	40	SD01礫中	瓦質土器 足鍋	(20.0)			内面，ヨコナデ 外面，ヨコナデ，タタキ？	灰色	1／10片以下	00103
095	93	40	SD01礫中	瓦質土器 足鍋	(23.3)			内面粗いヨコハゲ 外面ヨコハゲ，格子目のタタキ？	灰色	1／10以下煤が付着	00102
096	93	40	SD01溝底	瓦質土器 足鍋	(22.0)			口縁ハケ，内面ハケ 外面ユビオサエ	灰黒色	小片	00096

（単位cm）

遺物番号	挿図	図版	出土遺構	遺物種類	口径	底径（脚）	器高	調　　整	包調(外面)	その他の特調	登録番号
097	93		SD01礫中	土師質土器 鍋				内面ハケ 外面指押え，口縁ヨコナデ	暗橙黄色	口縁部小片	00105
098	93	40	SD01礫中	瓦質土器 摺鉢				内面８本単位の条痕が入る 外面ユビオサエナデ	暗紫茶色	体部片	00090
099	93		SD01下層 礫中	陶器・摺鉢				施釉	暗紫赤色	口縁部小片	00101
100	93		SD01礫中 下層	陶器・摺鉢				内面布目，７本半位の条線 外面，指押えナデ	淡灰白色	口縁部小片	00100
101	93		SD01礫中	陶器・甕				内，外面うすい褐色釉がかかる	明褐色	口縁部小片	00089
102	93	40	SD01礫中	瓦・軒平瓦				全体ヘラケズリ	灰色	瓦当部 均正唐草文	00107
103	94	40	SD01溝底	縄文・深鉢				内，外面条痕あり	橙色	胎土，石英 金雲母，多量混	00209
104	94	40	SD01 中層ブロック	石器・磨石	重量200g						00214
105	94	40	SD01礫中	石器・砥石	重量176g					頁岩質	00215
106	94	40	SD01礫中	石器・石臼		幅9.0		全体に雑な仕上	灰褐色	礫岩か？	00109
107	94	40	SD01礫中	石器・石臼		幅10.0		全体に磨滅が著しい	暗灰色	凝灰岩	00110
108	95	40	SD02南ベルト 上層	土師器・灯明 皿？	7.5	5.7		底部回転糸切り，全体ヨコナデ	橙色	口唇部に黒いタール 状の付着物がある	00115
109	95	40	SD02III区下層	石器・石臼片？	最大長 15cm					砂岩	00117
110	97		SD03上層	夜臼・甕	(17.4)			内，外面不明	暗橙色	1／8片，胎土 石英粒多量混	00156
111	97		SD03南壁上層	夜臼・甕	(22.4)			内面指押えナデ 外面ナデ	淡橙黄色	1／10，胎土 以下石英粒多量混	00167
112	97		SD03上層	夜臼・甕	(22.5)			内，外面指押え	灰橙色	1／10片，胎土 石英粒多量混	00157
113	97	41	SD03上層	夜臼・甕				内，外面ナデ	淡橙色	胎土，石英粒多量混	00158
114	97		SD03上層	夜臼・甕				内面，指押え 外面，不明	灰黄色	胎土 石英金雲母粒多量混	00159
115	97		SD03上層	夜臼・甕				内面指押え 外面不明	灰黄色	胎土 石英金雲母粒多量混	00161
116	97		SD03上層	夜臼・甕				内，外面マメツで不明	淡灰黄色	胎土，石英粒少量混	00160
117	97		SD03上層	夜臼・甕	21			内，外面ナデ口縁下貼付け	淡橙黄色	1／8片，胎土，石英 褐色粒子若干混入	00162
118	97		SD03上層	夜臼・壺				内，外面不明突帯貼付け	橙黄色	1／6片，胎土 石英粒多量混	00155
119	97		SD03上層	弥生・壺				内面不明 外面不明	暗橙色	胎土，石英粒若干混	00154
120	97		SD03上層	夜臼・甕		(7.3)		内面ナデ 外面指押え，条痕，底部板ナデ	淡灰黄色	胎土，石英粒多量混	00148
121	97	41	SD03上層ベルト	夜臼・甕		7.2		内面ナデ 外面不明	橙褐色	胎土，石英粒多量混	00164
122	97		SD03上層	夜臼・甕		7.8		全体指押え	灰黒色	胎土，石英粒多量混	00152
123	97		SD03南壁上層	夜臼？・甕		(10.3)		内面ハケのちハデ 外面不明	淡灰橙黄色	1／8片	00166
124	97		SD03上層	夜臼・甕		(8.4)		内，外面ナデ，底部指押え	灰黒色	1／8片，胎土 石英粒多量混	00153
125	97		SD03上層	夜臼・甕		8.0		内面指押え 外面ハケ，底部板ナデ	橙褐色	1／4片，胎土 石英粒若干混	00151
126	97		SD03上層	弥生・少片		(7.3)		外面，ハケのちナデ	淡灰橙色	1／4片，胎土 石英粒多量混	00149
127	97	41	SD03南壁上層	弥生・甕		(7.8)		内面指押え 外面ハケ底部ナデ	淡灰黄色	1／3片，胎土，石英 金雲母を多量混	00165
128	97		SD03上層	弥生・甕		(8.2)		内面指押え 外面ハケ	淡橙黄色	1／3片，胎土 石英粒多量混	00150
129	97	41	SD03中層	夜臼・甕	(26.2)			全体マメツで不明	灰橙黄色	1／10以下，胎土 石英粒多量混	00176
130	97	41	SD03中層	夜臼・甕	21.6			内面指押え，外面条痕	灰橙黄色	1／8片，胎土 石英粒若干混	00129
131	97	41	SD03中層	夜臼・甕				内面板ナデ 外面ナデ	暗橙色	胎土，石英粒若干混	00177

（単位cm）

遺物番号	挿図	図版	出土遺構	遺物種類	口径	底径（脚）	器高	調　　整	包調(外面)	その他の特調	登録番号
132	97		SD03中層	縄文・深鉢				内，外面ナデ	暗灰橙色	胎土，滑石片混入	00144
133	97		SD03中層	夜臼・甕				内面指押えナデ 外面ナデ	淡灰黄色	胎土，石英粒多量混	00131
134	97	41	SD03中層	夜臼・甕				内，外面板ナデ	淡橙黄色	胎土 石英粒若干混入	00133
135	97		SD03中層	夜臼・甕				全体マメツで不明	淡灰黄色	胎土，石英粒多量混	00134
136	97		SD03中層	夜臼・甕				全体マメツで不明	灰黄色	胎土 石英粒若干混入	00130
137	97		SD03中層	夜臼・甕				内，外面指押え，ナデ	茱灰黄色	胎土 石英黒雲母を若干混	00132
138	98		SD03中層	夜臼・鉢	(20.3)			全体マメツで不明	淡灰黄色	1/10片，胎土 石英粒若干混	00142
139	98	41	SD03中層	弥生・壺	(26.0)			口縁内外面マメツで不明	橙黄色	1/10片，胎土 石英粒多量混	00135
140	98		SD03中層	夜臼・深鉢				外面ナデ，ハケ 内面，ヘラミガキ	暗灰橙色	1/10片，胎土 石英雲母粒多量	00141
141	98		SD03南壁中層	夜臼・壺				内面，指押え	茱黄色	1/4片，胎土 石英粒多量混	00128
142	98		SD03中層	弥生・壺				外面，ヘラミガキ 内面，指押え	橙色	胎土，石英粒若干混	00136
143	98		SD03中層	夜臼・甕		6.7		内，外面ナデ	橙黄色	1/3片，胎土 石英粒多量混	00140
144	98		SD03中層	夜臼・甕		(6.7)		全体指押え	橙黄色	胎土，石英粒多量混	00138
145	98		SD03中層	夜臼・甕		7.8		内面ナデ 外面指押え底部板ナデ	暗橙色	1/3片，胎土 石英粒多量混	00139
146	98		SD03中層	弥生・甕		(7.7)		内面指押え 外面指押え，ナデ	橙黄色	1/2片，胎土 石英粒多量混	00137
147	98	41	SD03中層	夜臼・高坏				内面ナデ 外面マメツで不明	淡黄色	胎土，石英 金雲母多量混	00143
148	98		SD03下層	夜臼・甕				全体マメツで不明	淡茱黄色	1/10以上，胎土 石英多量	00126
149	98		SD03下層	夜臼・甕				全体ナデ	灰色	1/10以下，胎土 石英多量混	00127
150	98		SD03下層	弥生・壺				内，外面ナデ	淡橙黄色	1/10以下，胎土 石英多量混	00125
151	98	41	SD03下層	弥生・壺				内，外面ナデ	茶灰黄色	1/10以下，胎土 石英多量混	00124
152	98		SD03下層	夜臼・甕		7.2		内，外面指押え	淡橙黄色	1/2片，胎土 石英多量混	00120
153	98		SD03下層	夜臼・甕		7.7		内面指押え 外ナデ	橙黄色	1/2片，胎土 石英多量混	00122
154	98		SD03下層	夜臼・甕		7.2		内面，ナデ，指押え 外面，ナデ	黄色	1/2片，胎土 石英多量混	00121
155	98		SD03下層	夜臼・鉢？		10.0		内面ナデ 外面マメツで不明	橙黄色	1/4片，胎土 石英多量混	00119
156	98		SD03下層	夜臼・鉢？		7.7		内，外面不明 底部指押え	淡黄色		00123
157	98		SD03下層	夜臼・鉢？		(9.2)		内面ナデ 外面不明	淡灰色	1/4片，胎土 石英粒多量混	00118
158	99	41	SD03	土製品・投弾	最大幅2.6	長さ4.8	重量18g		淡橙黄色	胎土 石英褐粒子若干混	00174
159	99	41	SD03上層ベルト	石器・柱状片刃石斧	浅存長5.2					頁岩	00163
160	99	41	SD03中層	石器 片刃石斧	全長3.2	重量19.06g				頁岩かなり磨滅する	00217
161	99	41	SD03最上層	石器 磨製石斧	全長13.8	重量414g				玄武岩	00218
162	99	41	SD03上層	石器 抉入石斧	全長11.3	重量284g				玄武岩未製品	00219
163	99	41	SD03南壁中層	石器・磨石	最大幅6.7	最大高5.2	重量254g				00221
164	99	41	SD03中層	石器・砥石	全長10	重量475g				砂岩	00175
165	99	41	SD03上層	石器・石鏃	全長2.2	重量0.78g				黒曜石	00220
166	99	41	SD03底層	石器・石鏃	全長2.0	重量1.56				黒曜石	00216

（単位cm）

遺物番号	挿図	図版	出土遺構	遺物種類	口径	底径（脚）	器高	調　　整	包調(外面)	その他の特調	登録番号
167	100		SP—19	石器・石庖丁	最大長4.7	最大幅3.6	重量12g			頁岩	00224
168	100		SP—21	土師器・甕	(15.3)			全体がマメツで不明	淡灰橙黄色	胎土 石英金雲母粒多量混	00180
169	100		SP—26	土師器，飯蛸壺	(8.3)			内面指押え 外面不明	橙色	胎土，石英粒若干混	00181
170	100		SP—28	須恵器・坏蓋				内，外面ナデ	淡灰色		00182
171	100		SP—34	土師器・鉢	(18.5)			口縁ナデ 内面ヘラケズリ外面ハケ	橙色	1／8片	00184
172	100		SP—34掘方	土師器・高坏				全体マメツで不明，指押えかすかに残る	橙色	脚部片，胎土 石英金雲母若干混	00185
173	100		SP—34	土師器・高坏		(16.0)		全体マメツで不明	橙黄色	脚部1／8片	00183
174	100		SP—34	土師器・高坏				全体ヨコナデ	淡灰色	3ケ所穿孔あり	00186
175	100		SP—49	須恵器・坏身	(13.5)		(3.3)	底部回転ヘラケズリ内，外面ヨコナデ	青灰色	1／10片	00188
176	100	41	SP—49	須恵器・坏身	(11.2)		(4.9)	底部回転ヘラケズリ内，外面，ヨコナデ	淡灰色	1／2片	00187
177	100		SP—57	須恵器・坏蓋	(12.4)			天井部回転ヘラケズリ内，外面，ヨコナデ	明灰色	1／8片	00189
178	100		SP—58	須恵器・坏蓋	(13.4)			天井部回転ヘラケズリ内部ナデヨコナデ，外面ヨコナデ	灰色	1／8片つまみ付きか？	00190
179	100		SP—58	須恵器・坏蓋 ツマミ				内面ナデ外面ヨコナデ	暗灰色		00191
180	100		SP—65	夜臼・高坏				全体マメツで不明	淡橙黄色	胎土，石英粒多量混	00192
181	100		SP—68	土師器・壺	(9)			内面ナデ，ヘラケズリ外面ヨコナデ	橙色	1／6片	00195
182	100		SP—70南西？	土師器・甕	(17)			内面ヨコナデ，ヘラケズリ	橙色	1／8片	00196
183	100		SP—70	土師器・鉢	(11)			内面ナデ外面ヨコナデ	橙褐色	1／10以下	00197
184	100		SP—70	須恵器・坩	(8.6)			内，外面ヨコナデ	明灰色	1／8片	00198
185	100		SP—81	須恵器・壺？				内，外面ヨコナデ	明灰色	1／3片	00200
186	100	41	SP—81	須恵器・坏身	(12.4)			底部回転ヘラケズリ，全体ヨコナデ	灰色	1／3片	00199
187	101	41	SP—57	玉・勾玉	最大幅2.39	直径8.5			黒色		00228
188	101	39	SC01上層	玉・臼玉	直径4.5	厚さ2	重量0.08g			滑石	00211
189	101	39	SC01	玉・臼玉	直径5	厚さ2	重量0.08g			滑石	00210

第146次調査

001	106	42	SA09—5	土師器・高坏				外面ナデ，ハケ目のちナデ	橙色	脚部片	00005
002	106		SD01	白磁・碗				口縁ナデ	明緑灰色	口縁部小片	00002
003	106		SX03 SD01	陶器・急須？	(71)			内，外面，施釉	白色(紬)	1／3片	00001
004	106		SP01	須恵器・高坏		(10.4)		内外，ヨコナデ	青灰色	1／3片	00004
005	106	42	SA09—8	玉，臼玉	直径4㎜	孔径15㎜	広さ0.1		白灰色	滑石	00006

第149次調査

001	109	46	SC05	土師器・甕	(13.2)		19.5	口縁，板ハケ，内面，板ナデ，指押え 外面ヨコのタタキ，板ナデ	明黄褐色	黒斑あり	00012
002	109	46	SC05	土師器・甕	(13.3)		(23)	口縁，タタキ，内面，板ナデ，指押え，外面 ナナメヨコのタタキ，板ナデ	にぶい黄橙		00017
003	109	46	SC05	土師器・甕	(16.0)		(18.8)	口縁ナデ，内面板ナデ，指押え，外面ナナメのタタキ 板ナデ，やや磨滅する	明黄褐色	黒斑あり	00024
004	109	46	SC05	土師器・甕	(15.2)		(20)	口縁，ナナメのタタキ，内面，板ナデ 外面ヨコのタタキ，タテのハケ目，板ナデ	浅黄橙		00027
005	109		SC05	土師器・甕		胴部(21.7)		外面，ヨコのタタキ，板ナデ，内面，ナナメの板ナデ 指押え	にぶい黄橙		00004

(単位cm)

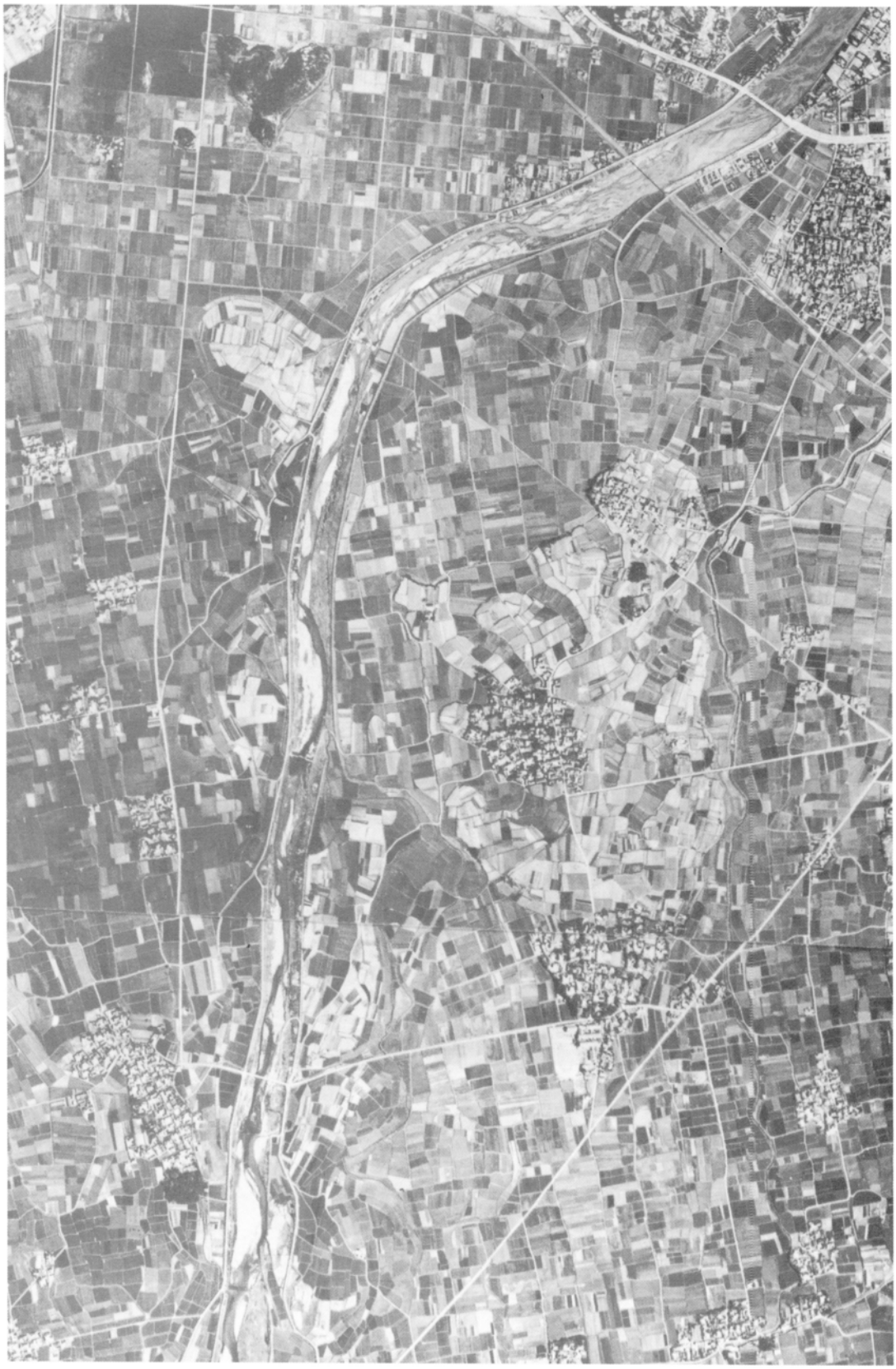
遺物番号	挿図	図版	出土遺横	遺物種類	口径	底径(脚)	器高	調　　整	包調(外面)	その他の特調	登録番号
006	109		SC05	土師器・甕	(19.9)			口縁内ナデ，口縁外ナデヨコのタタキ磨滅がひどい	浅黄色		00007
007	109	46	SC05	土師器・甕	18.2	胴部24.2	33.3	口縁，内板ナデヨコのハケ目口縁外タテの板ナデ外面ヨコのタタキ，板ナデ，内面板ナデ	明黄褐色	胎土，石英粒多量混	00025
008	110	46	SC05	土師器・大甕	(44.0)			口縁外横ナデ，板ナデのちナデ，外面タテ板ナデヨコのタタキ	淡黄色		00013
009	110	46	SC05	土師器・大甕	(52～53)			口縁外ナデ，ヨコ方向のナデ，右下がりの板ナデヨコのタタキ，口縁内ヨコ方向の板ナデ	にぶい褐色		00014
010	111	46	SC05	土師器・壺	14.0		16.0	外面マメツで不明，底部板ナデ，内面指押え板ナデ	橙色	胎土，石英粒多量混	00026
011	111		SC05	土師器・壺	(11.4)			外面マメツがひどいがハケ内面ナデ	橙色	1／4片	00001
012	111		SC05上下層Ⅰ区	土師器・壺	(13.5)			内外面マメツ	にぶい橙色	1／3片	00040
013	111	46	SC05	土師器・壺	(14)			外面，ハケのちナデ，内面，タテ板ナデ，指押え	橙色	胎土精良，焼成良好	00010
014	111	46	SC05	土師器・壺	16.6			外面一部ハケ目，マメツで不明，内面指押え，マメツで不明	橙色		00009
015	111		SC05	土師器・壺		頸部(15)		外面ヨコのタタキハケ目，内面ハケ目指押え	褐灰色		00003—1
016	111		SC05	土師器・壺				底部，外面，板ナデ，マメツで不明，内面マメツで不明	にぶい橙色	焼成良好	00003—2
017	111	46	SC05	土師器・壺	(13.0)	胴部(26.0)	23.7	外面，タタキ(？)，板ナデ(？)内面板ナデ(？)	橙色		00019
018	111	46	SC05	土師器・壺		胴部(39.2)		底部外面板ナデ内面，板ナデ	橙色	底部黒斑あり	00016
019	111	46	SC05	土師器・壺			15.0	内外面板ナデ	にぶい黄橙色	線刻あり	00028
020	112	46	SC05	土師器・高坏	20.3	15		口縁，ハケ目が残るナデ，底部指押えナデ	にぶい橙色	胎土精良，焼成良好	00021
021	112		SC05Ⅰ区北側	土師器・高坏	(19.0)	(11.8)	10.5	全体ナデ	橙色	形状は破片復元	00045
022	112	46	SC05	土師器・高坏		裾部径14.5	11.5	全体ナデ	橙色	3ケ所の透孔	00029
023	112		SC05Ⅱ区北側上層	土師器・器台	(12.0)	(15.0)		全体マメツで不明	橙色	焼成良好	00044
024	112		SC05Ⅱ区北側	土師器・器台	(15.0)			全体マメツで不明	橙色		00046
025	112	47	SC05	手づくね土器・鉢	8.8		7	全体指押え	浅黄橙色	ほぼ完形	00005
026	112	47	SC05ベルト上層	手づくね土器・鉢	10.8		10～11	口縁板ナデ全体指押え	浅黄橙色		00023
027	112	47	SC05	手づくね土器・鉢	(6.4)		2.0	全体マメツで不明	にぶい黄桃色	ほぼ完形	00022
028	112	47	SC05	手づくね土器・鉢	8.0		3.0	全体指押えのちナデ	明黄褐色		00018
029	112	47	SC05	手づくね土器・鉢	8.0		3.6	外面マメツで不明，内面指押え	明黄褐色		00006
030	112	47	SC05	手づくね土器・鉢	11.5		5.2	全体指押え	にぶい橙色		00008
031	112	47	SC05	土師器・鉢	12.5		5.5	全体板ナデ	橙色	胆土・精良	00031
032	112	47	SC05	土師器・鉢	11.9		6.4	外面マメツで不明，内面板ナデ，ナナメのハケ	橙色	胎土・精良	00032
033	112	47	SC05	土師器・鉢	12.4		6	外面，タテのタタキ，底部ナデ，内面指押え	浅黄色	器形はいびつ外面黒斑あり	00002
034	112		SC05	土師器・鉢	(15.9)			外面マメツで不明，内面ナナメの板ナデ	にぶい黄橙色	口縁部小片	00030
035	112	47	SC05	土師器・鉢	14.5		5.3	全体板ナデ	にぶい橙色	器形はひずむ	00033
036	114	47		石器・工作台							
037	115	47	SC05 SK—14	土師器・壺	9.3	胴23.7	16.8	外面ヨコハケ，左上りハケ，内面ヨコハケ右上がりのハケ目	灰白色	他と胎土が異質	00039
038	115	47	SC05 SK—14	土師器・甕	(13.5)		16.0	外面ナナメ，ヨコハケ，左上りハケ，内面ヨコハケ右上りのハケ目	にぶい黄橙色	1／3片	00034
039	115	47	SC05 SK—14	土師器・甕	(13.5)			外面ナナメヨコのタタキ，内面マメツで不明	橙色		00035
040	115	47	SC05 SK—14	土師器・甕	14.9		21.0	口縁外ナナメヨコのタタキ，内面，ナナメのタタキヨコのタタキ，内面，板ナデ	明黄橙色	ほぼ完形	00036

（単位cm）

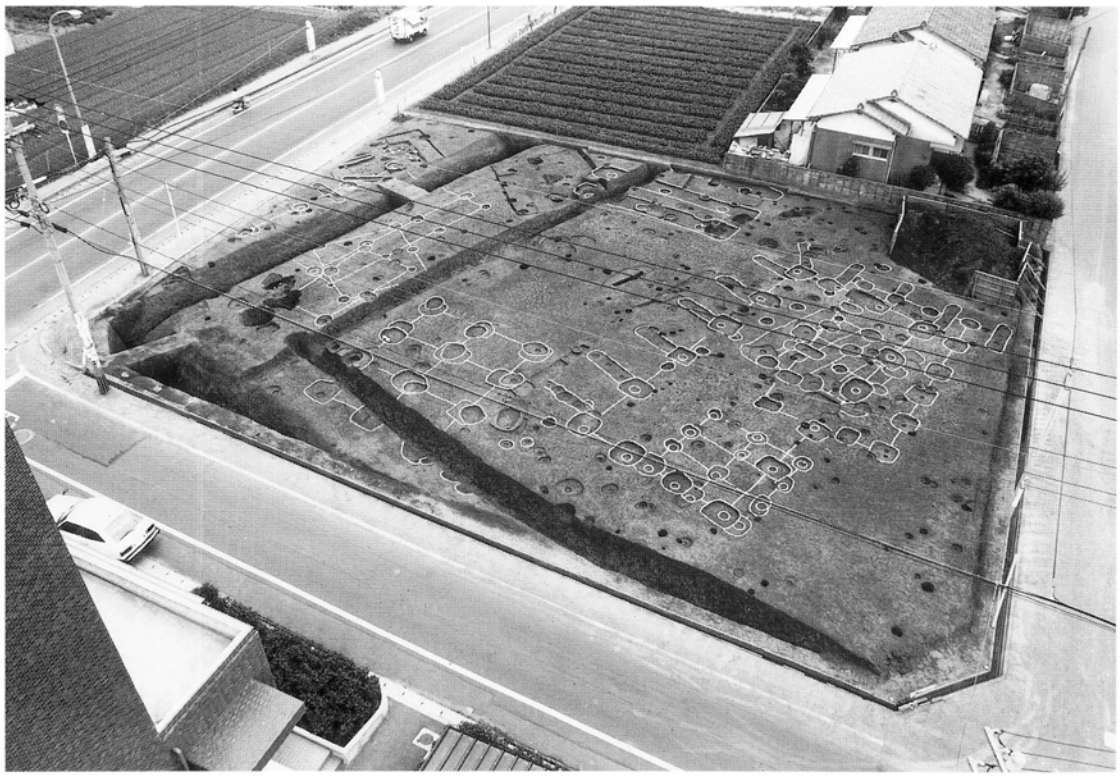
遺物番号	挿図	図版	出土遺構	遺物種類	口径	底径（脚）	器高	調整	包調(外面)	その他の特調	登録番号
041	115		SC05 SK—14	土師器・甕	(13.4)		18.6	口縁ナデ，外面，ナナメヨコのタタキ，内面，板ナデ指押え	にぶい黄橙色	1/5片	00038
042	115	47	SC05 SK—14	土師器・器台		18.8	21.0	口縁ナナメのタタキ，ヨコのタタキ，しぼりあとあり外面ナナメのハケ目，板ナデ，指押え，ナナメ板ナデ	橙色	完形	00037
043	117	47	SK04 Ⅰ区上層	青磁・碗		高台径(5.2)		全体に施釉	オリーブ黄色		00059
044	117		SK04	白磁・(碗？)				全体に施釉	灰白色		00060
045	117		SK04	瓦質土器 火舎				内面ハケ目	灰黄褐色	口縁部小片	00048
046	117	47	SK04	瓦質土器 火舎				全体ナデ	灰色	口縁部小片，石英粒多量混	00049
047	117	47	SK04	石器・石錘	長さ7.1		重量41.72g	全体スリ		滑石製	00075
048	117		SK04	石器・石錘	長さ2.9	最大幅7.2	重量244g	全体敲打痕	灰色	花崗岩	00058
049	117		SK04	石製品・板碑	現存長9.0	幅8.5	4.5	全体ノミ痕が残る	にぶい赤褐色	砂岩，二次加熱	00061
050	117		SK04	石器・砥石	長さ7.7	幅6.5			暗灰黄褐色	砂岩・4面が砥面	00076
051	117		SK04	瓦・丸瓦	玉縁部長3.0	筒部9.0		外面ナデケズリ，縄目のタタキ，タテのケズリ内面ヘラケズリ，紐状痕，板ナデ	にぶい黄橙色		00053
052	117		SK04	瓦・丸瓦				外面ケズリ，縄目のタタキ，タテのケズリ，内面ヘラケズリ，細かい布目ヨコの紐状痕	灰白色	焼成不良	00052
053	117	47	SK04	瓦・軒丸瓦 瓦当	瓦当径(10.2)	筒部20.0		外面タテ方向の板ナデ，内面ナデ布袋痕残る	灰白色	巴文	00047
054	117		SK04	瓦・塼	現存短辺10×5.0	厚さ3.0		側面，面取り上面砂粒，付着	褐灰色		00055
055	117	47	SK04	瓦・鬼瓦片？				外面，ケズリ	橙黄色		00054
056	118	47	SK06	青磁・碗		5.7		全体施釉，底部カンナ削り	灰白色	底部に黒書あり	00074
057	118	47	SK06ベット上	青磁・碗	(11.1)			全体施釉，内外面櫛描文あり	淡緑色	1/6片	00064
058	118		SK10	青磁				全体施釉	黄灰色	口縁部細片	00068
059	118		SK10	白磁				全体施釉	灰白色	口縁部細片	00069
060	118	47	SK06	石製品・板碑	長さ15.5	幅18.6	厚さ8.2	全体ノミ痕残る	暗赤褐色	砂岩二次加熱	00063
061	118	47	SK08	陶器・灰釉盤	(25.0)	21.2		施釉外面露胎	黄橙色	1/8片	00065
062	118	47	SK08	石器・磨石	長さ7.7	幅7.1	厚4.0	全体マメツで不明	灰白色	玄武岩	00067
063	119	47	SP01	染付・碗				施釉	青白色	細片，明染付？	00073
064	119		SP01	白磁・碗				施釉，細かい貫入が入る	灰白色	細片，明染付？	00071
065	119		SP01	瓦器・皿	(11.0)			全体マメツするがナデ	灰白色	1/6片	00072
066	119	47	SP09	石器・石鏃	3.5	厚さ0.5	重量2.22g			サヌカイト？	00070

図　　版

第107次調査作業風景



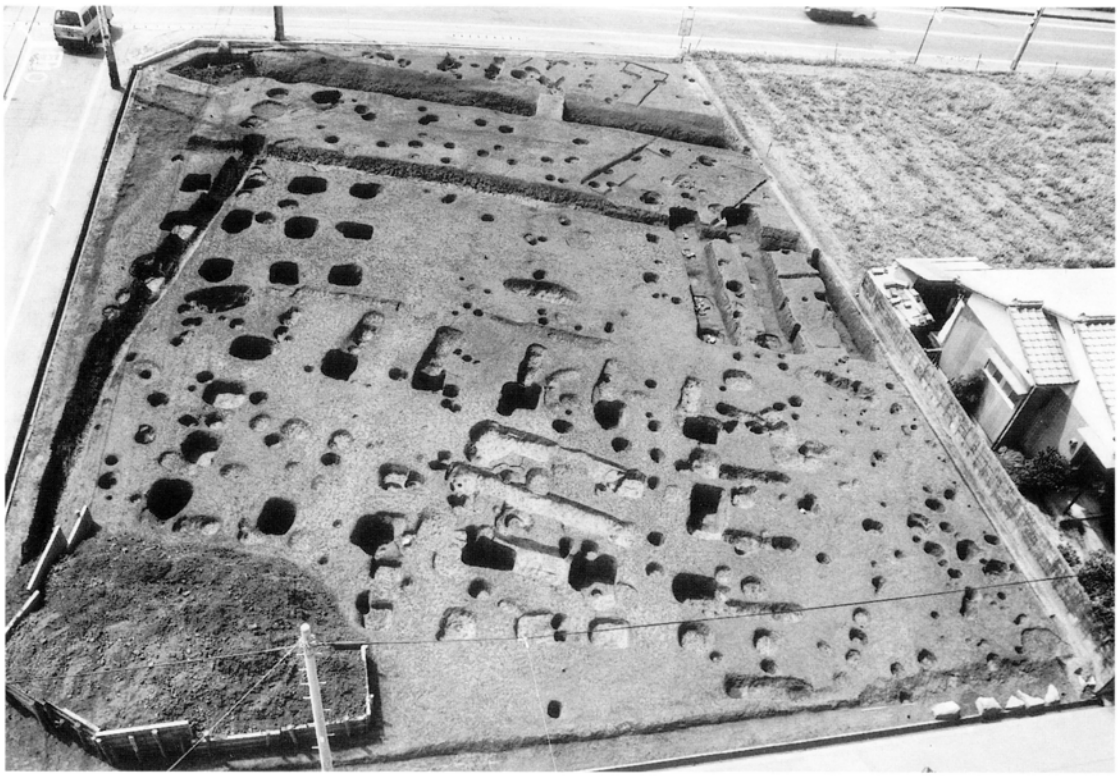
有田遺跡群周辺航空写真（1946年米軍撮影）



(1)

(2)

(1) 第107次調査区全景（東から）(2)同（北から）



(1)

(2)

(1) 第107次調査区完掘状況（北から）(2) SC01（北東から）

(1)

(3)

(2)

(4)

(1) SC01遺物出土状況（南から）(2)同（南から）(3) SC02（北西から）(4)水晶出土状況

PL. 5

(1)

(2)

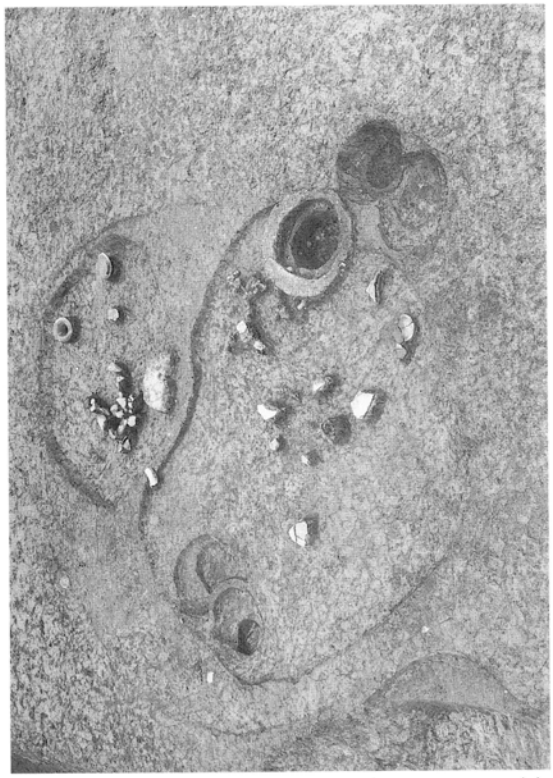
(3)

(4)

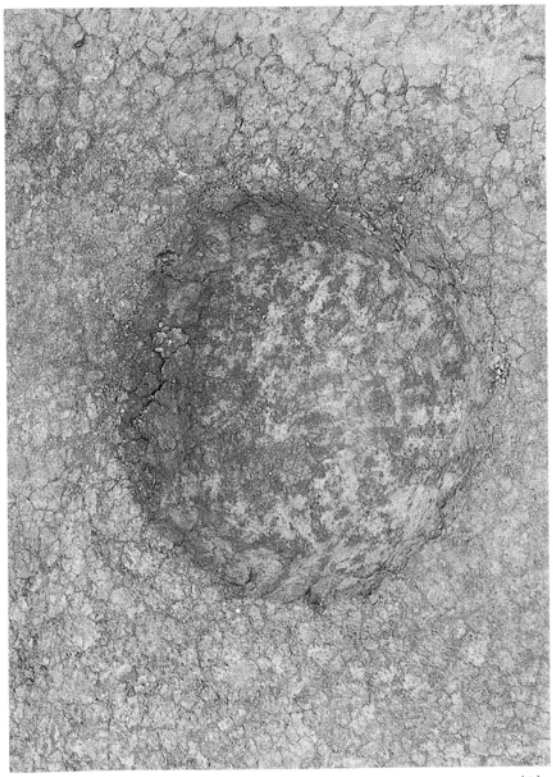
(5)

(1) SC03（東から）(2) SC04（東から）(3) SC05（東から）(4) SK01（北から）(5) SK02（北から）

(1)



(2)

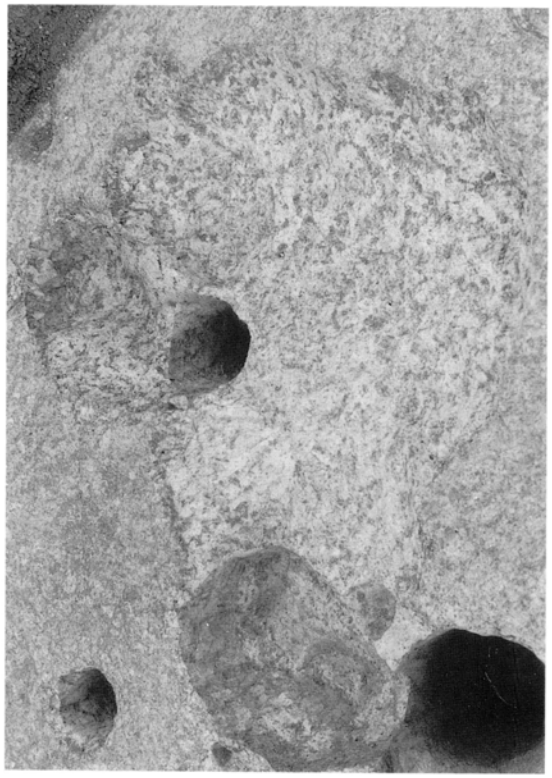


(3)

(4)

(1) SK04（北から）(2) SK05～07（西から）(3) SK15（北から）(4) SK16（北東から）

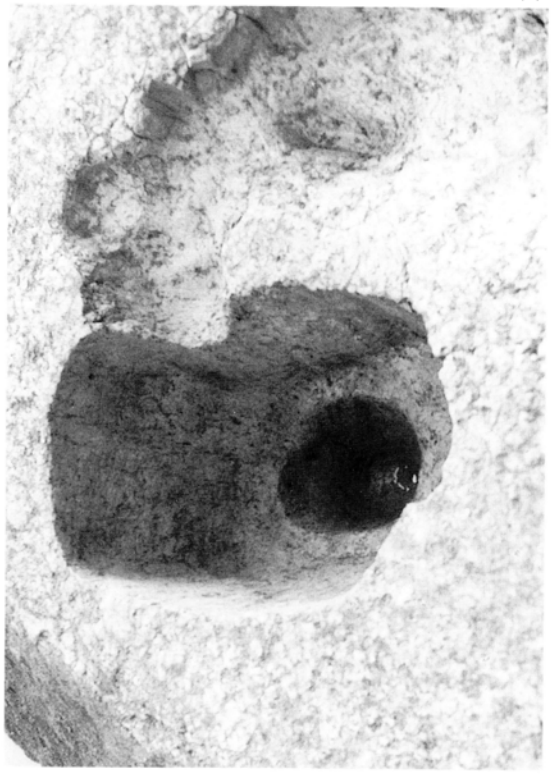
PL. 7



(1)

(2)

(3)



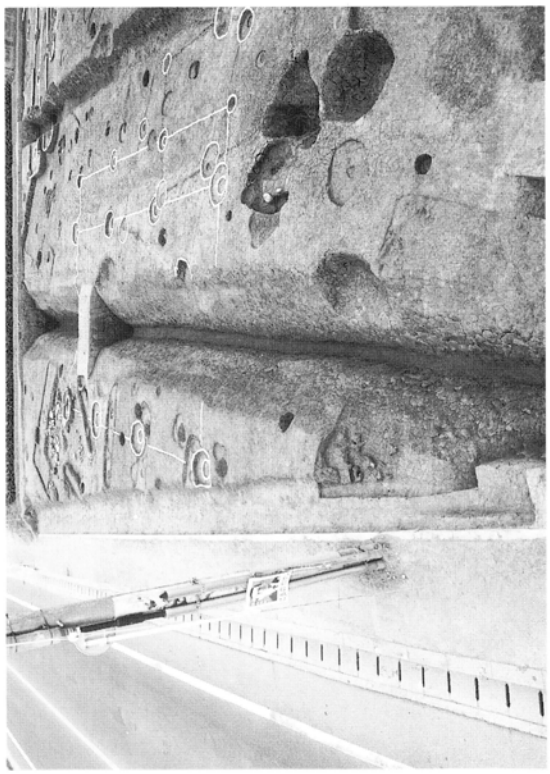
(4)

(1) SK28・31（東から）(2) SK39・40（北から）(3) SK49（北から）(4) SK03・43（東から）

(1)

(2)

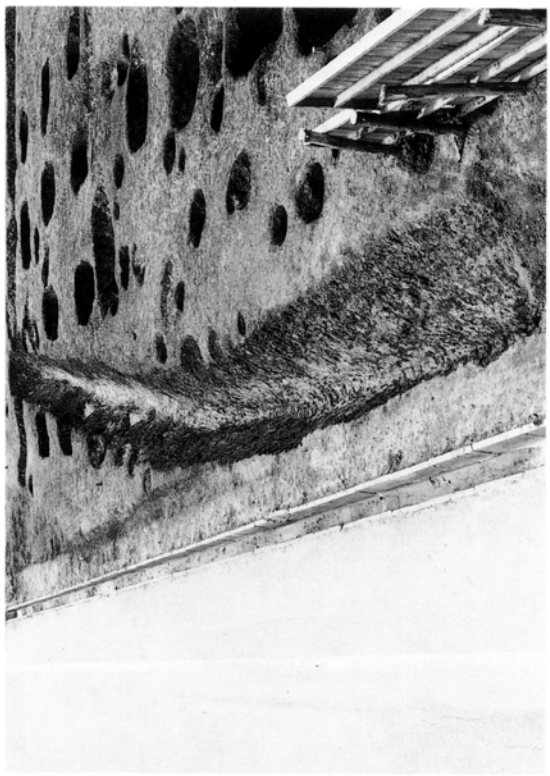
(3)



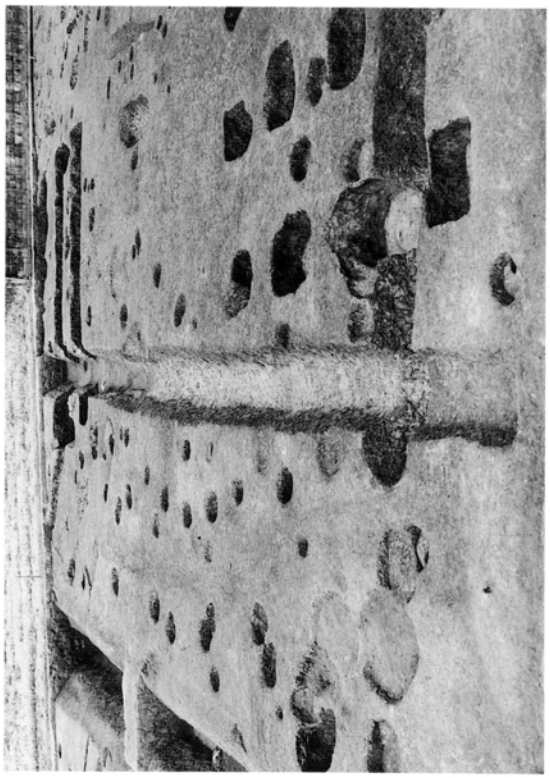
(4)

(1) SK45（東から）(2) SK50（南から）(3) SD01（北から）(4) SD02（東から）

PL. 9



(1)



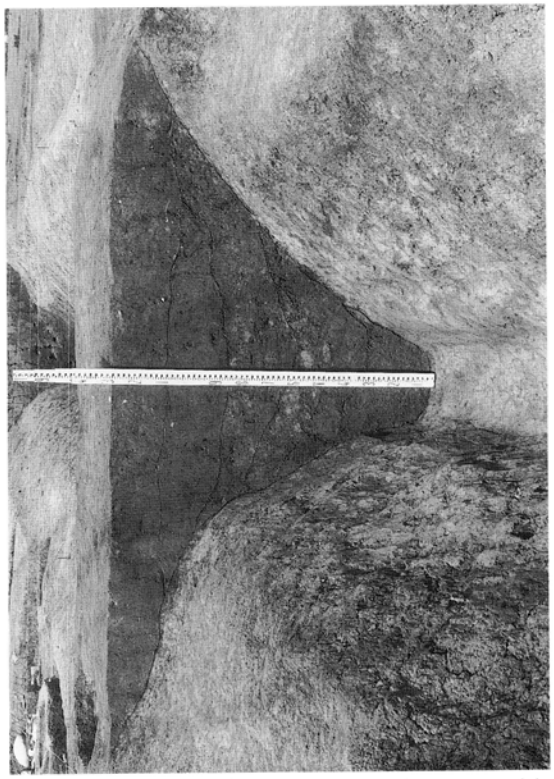
(2)

(3)

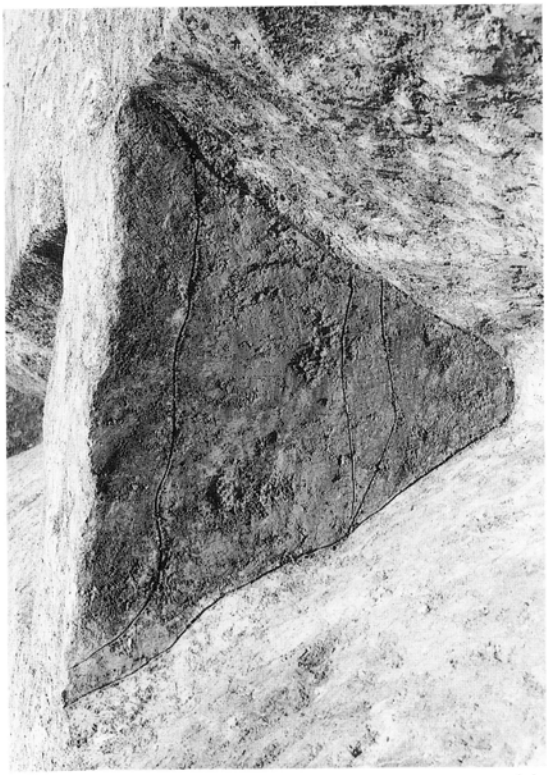
(4)

(1) SD03（北から）(2) SD04（東から）(3) SD06（東から）(4) SP271遺物出土状況

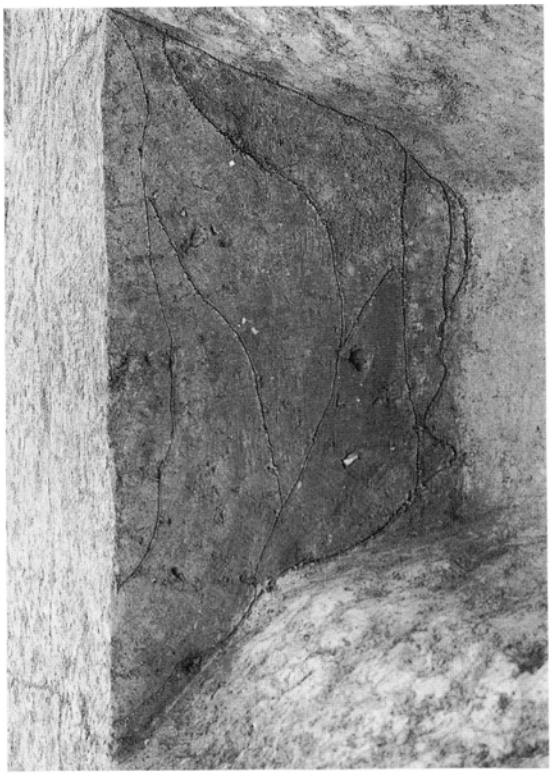
(1)



(2)



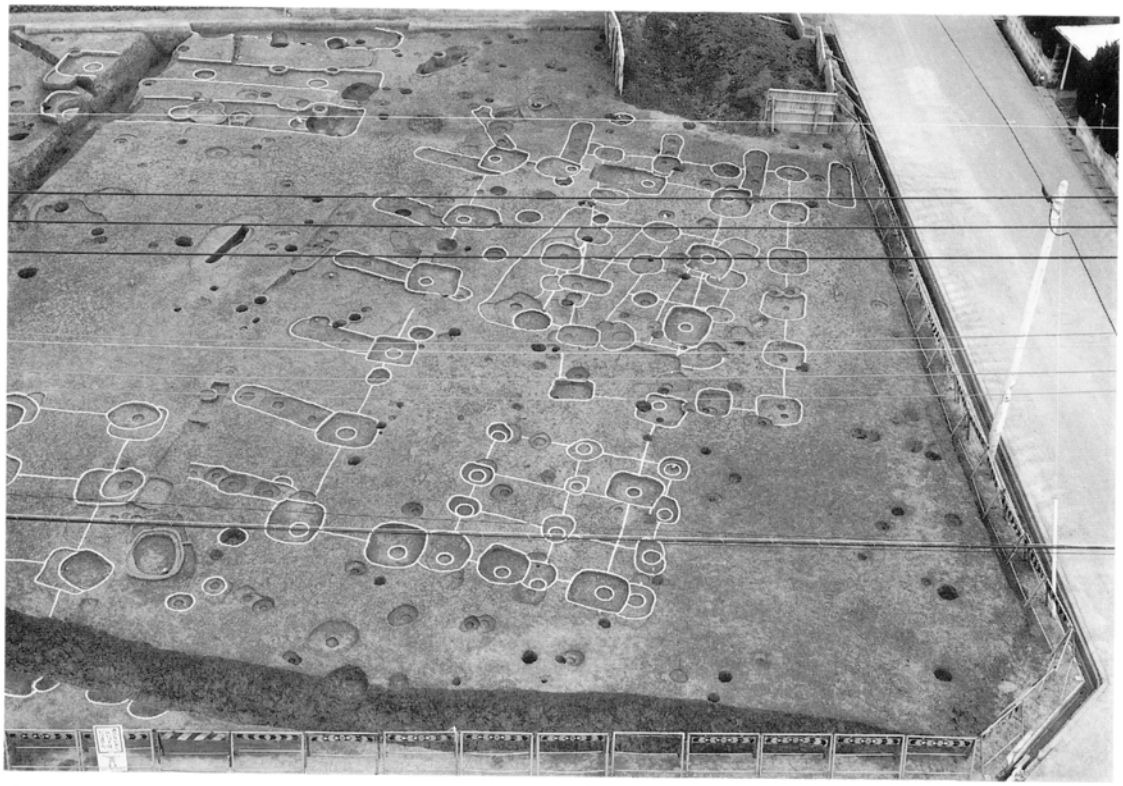
(3)



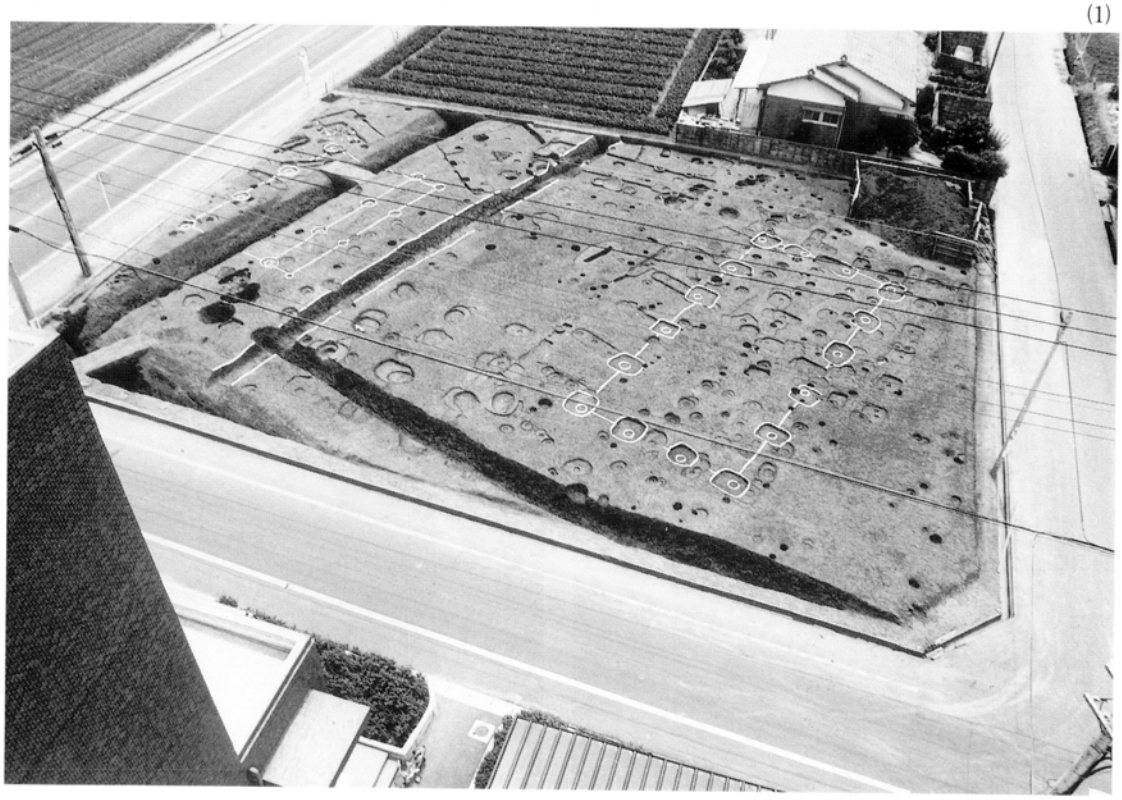
(4)

(1) SD01・02交差部土層 (2) SD02土層（東から）(3) SD03（南から）(4) SD04（東から）

PL. 11



(1)

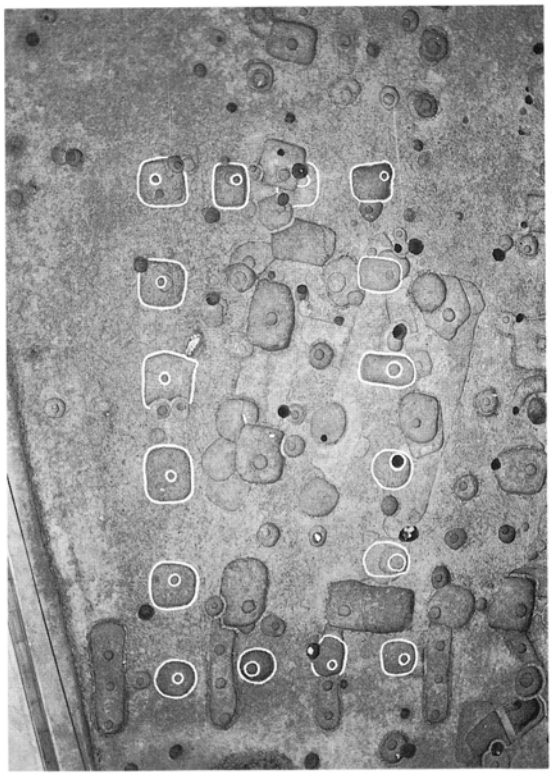


(2)

(1) 掘立柱建物群検出状況（東から）(2) SB01と SD04（東から）

(1)

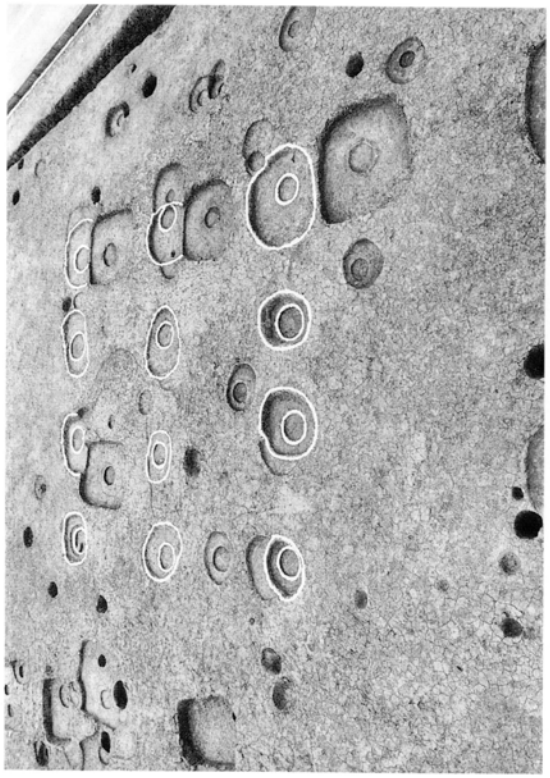
(2)



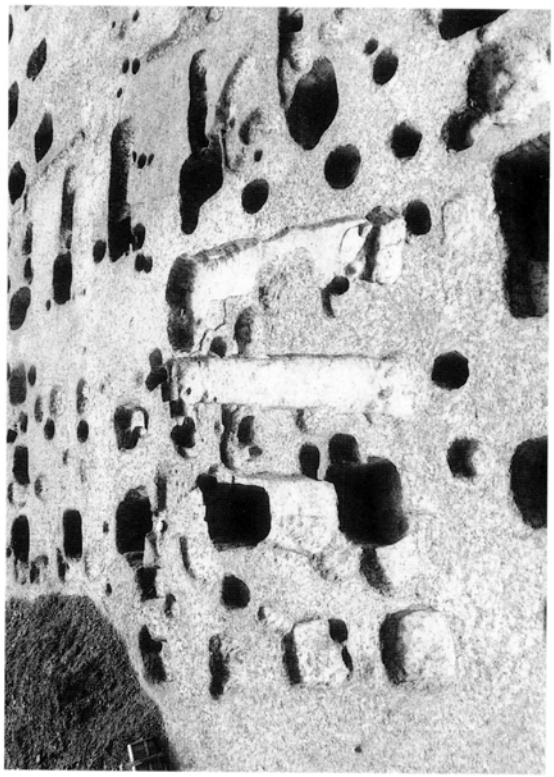
(3)

(1) SA01と SB03・05（北から）(2) SB01（北から）(3) SB02

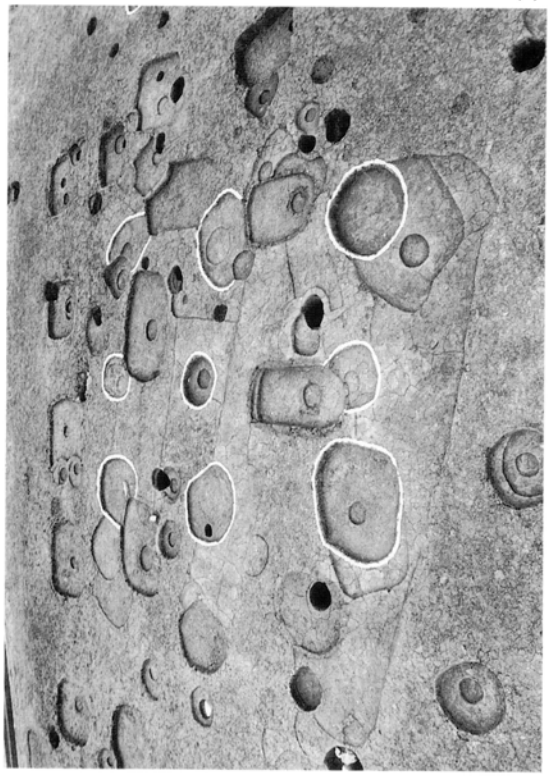
PL. 13



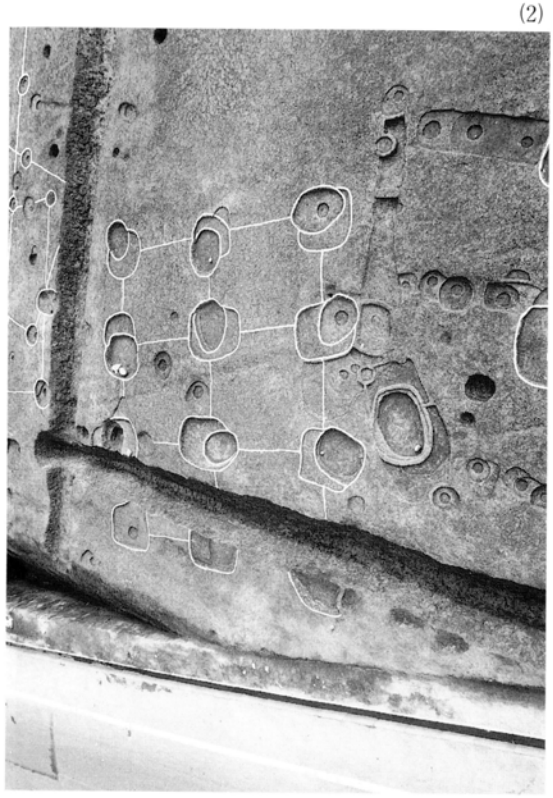
(1)



(2)

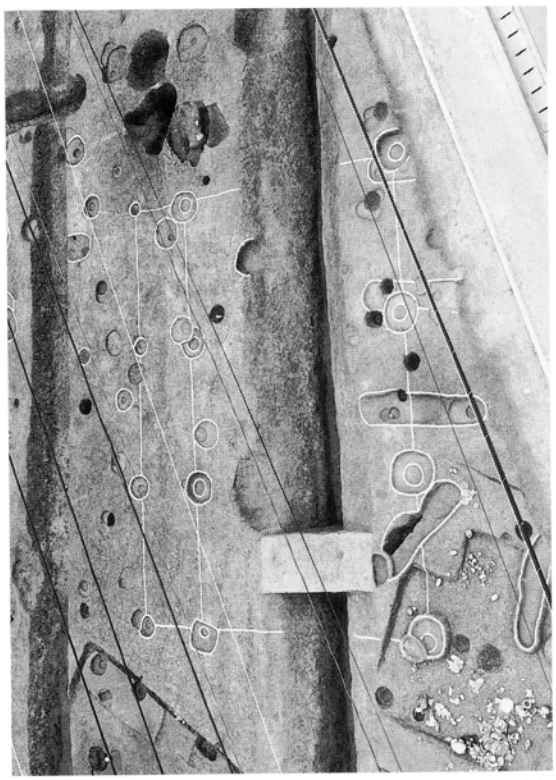


(3)

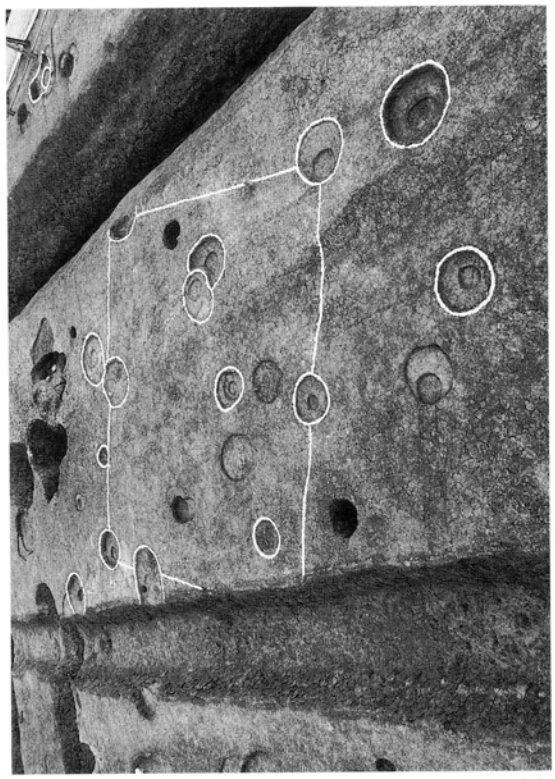


(4)

(1) SB03（南から）(2) SB04（西から）(3) SB05（南から）(4) SB06（北から）



(1)



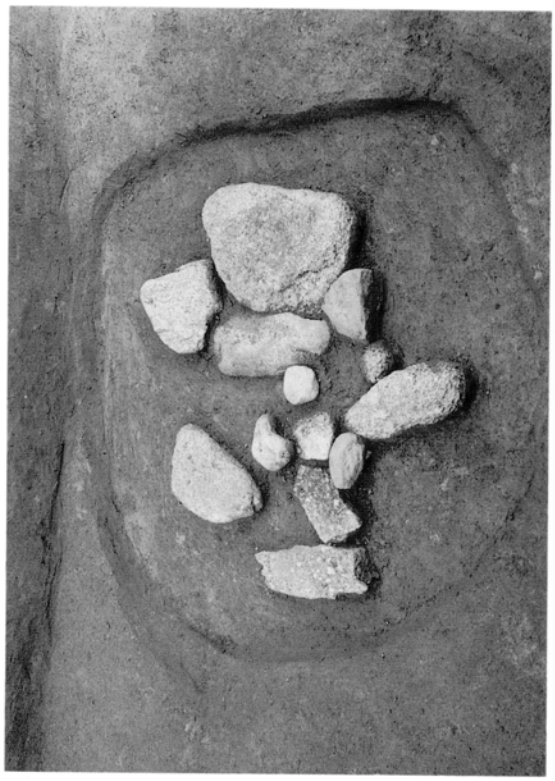
(2)

(3)

(4)

(1) SB07（南から）(2) SB08（西から）(3) SB09（東から）(4)同断割り状況（東から）

(1)



(2)

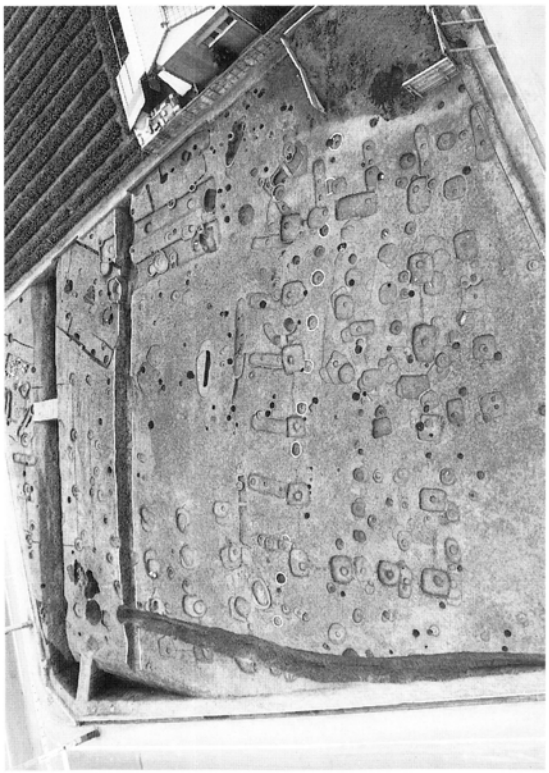
(3)

(4)

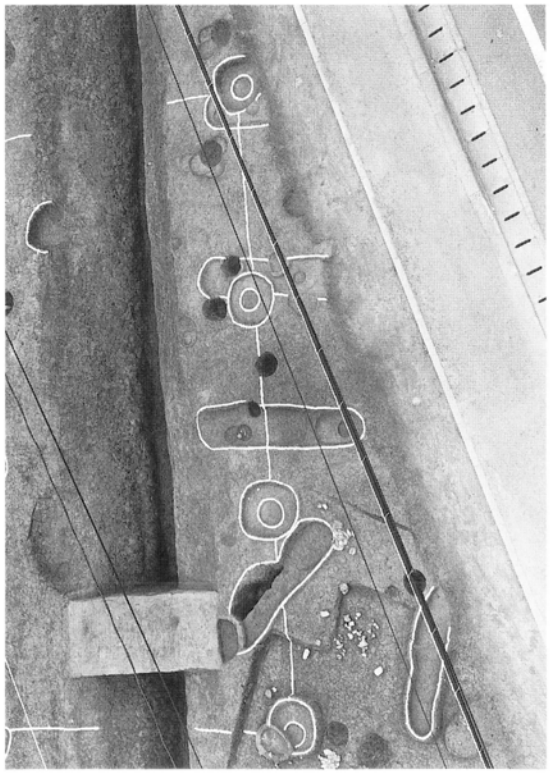
(1) SB09完掘状況 (2)同根石状況（東から）(3) SB01P2柱穴断割り（北から）(4)同 P4柱穴断割り（北から）

(1)

(2)



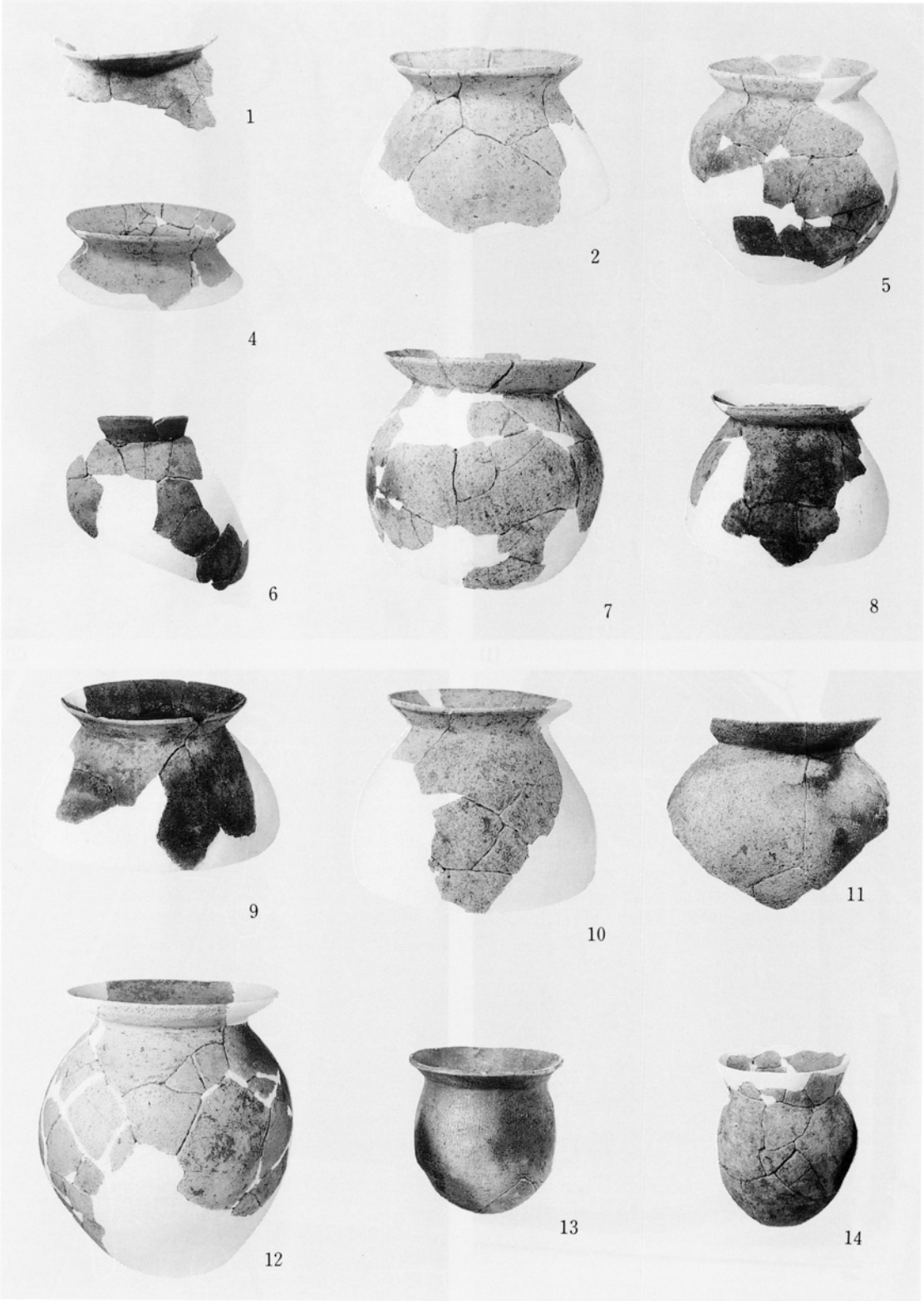
(3)



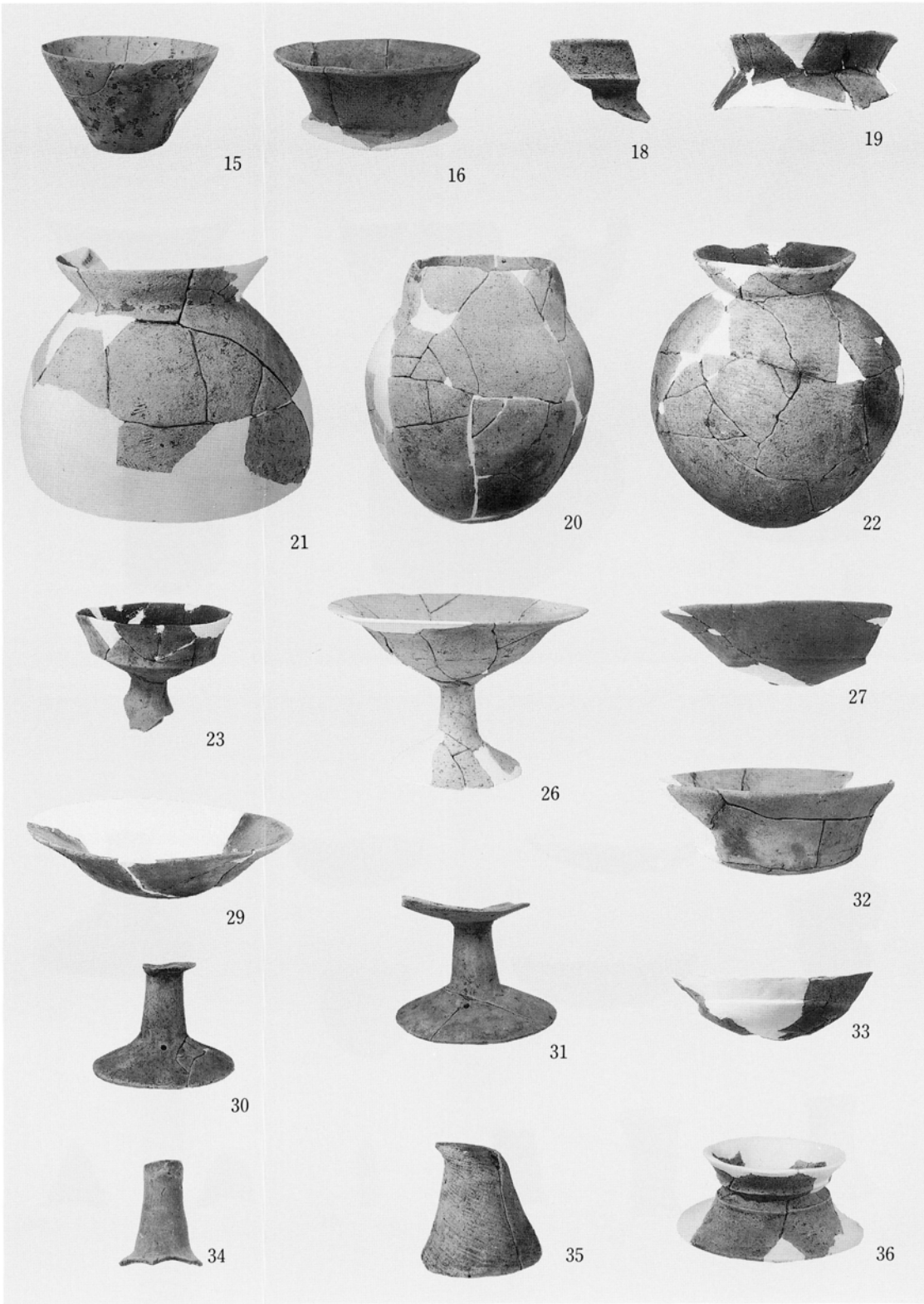
(4)

(1) SA01（北から）(2)同布掘断割り（北から）(3) SA02（北から）(4) SA03（南から）

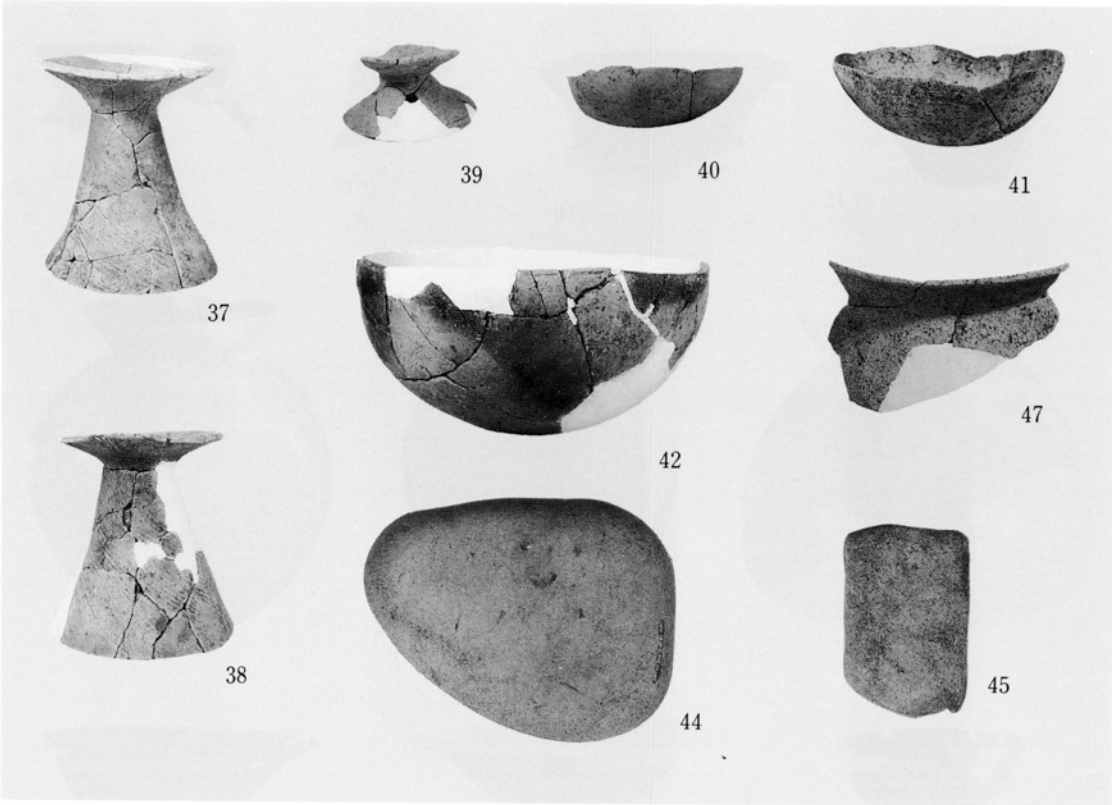
PL. 17



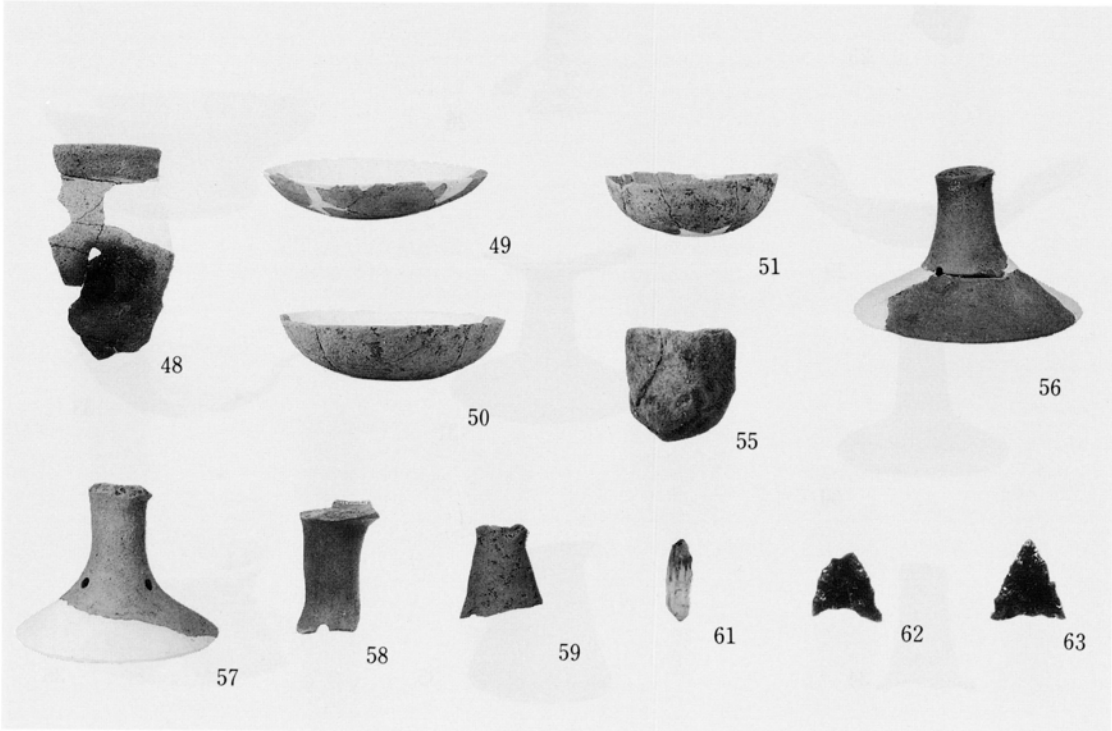
SC01出土遺物 I



SC01 出土遺物II

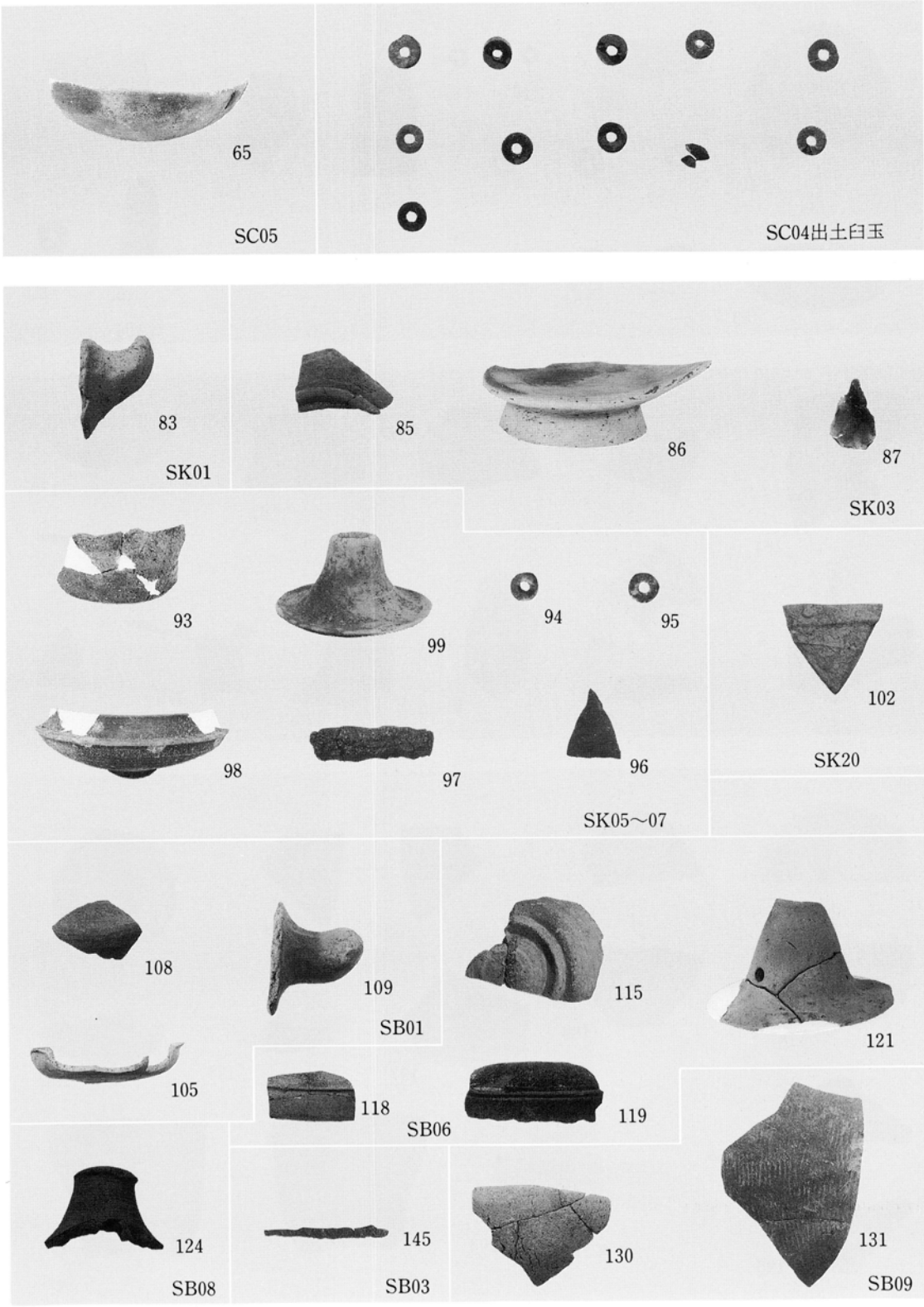


(1)



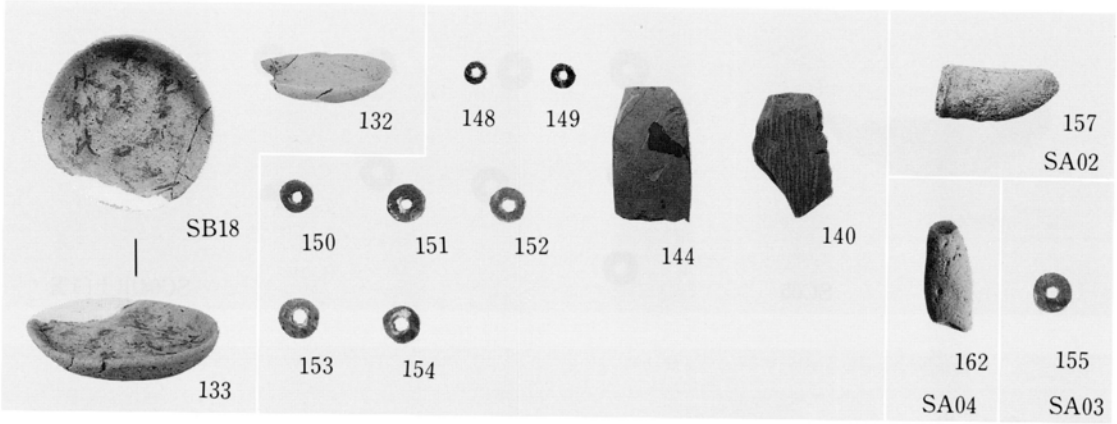
(2)

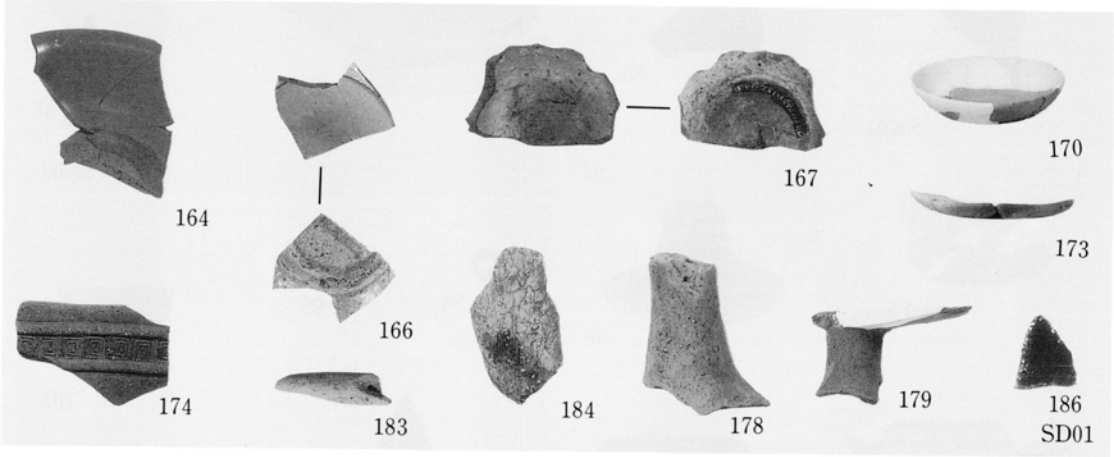
(1) SC01出土遺物Ⅲ・(2) SC02出土遺物

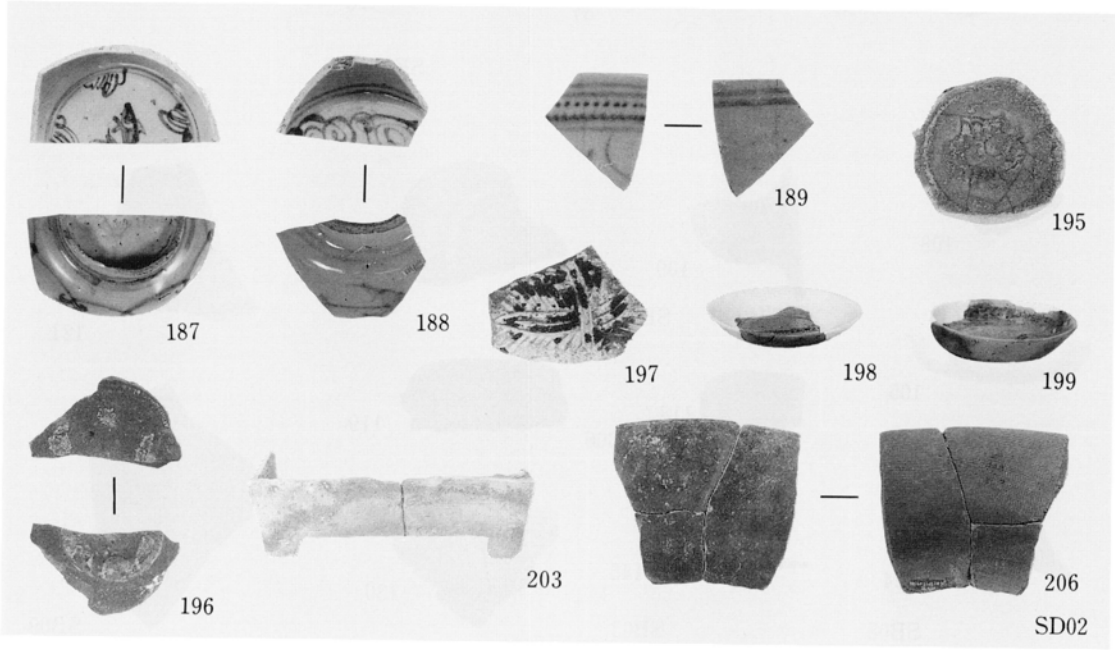


SC04・05・土坑・掘立柱建物出土遺物

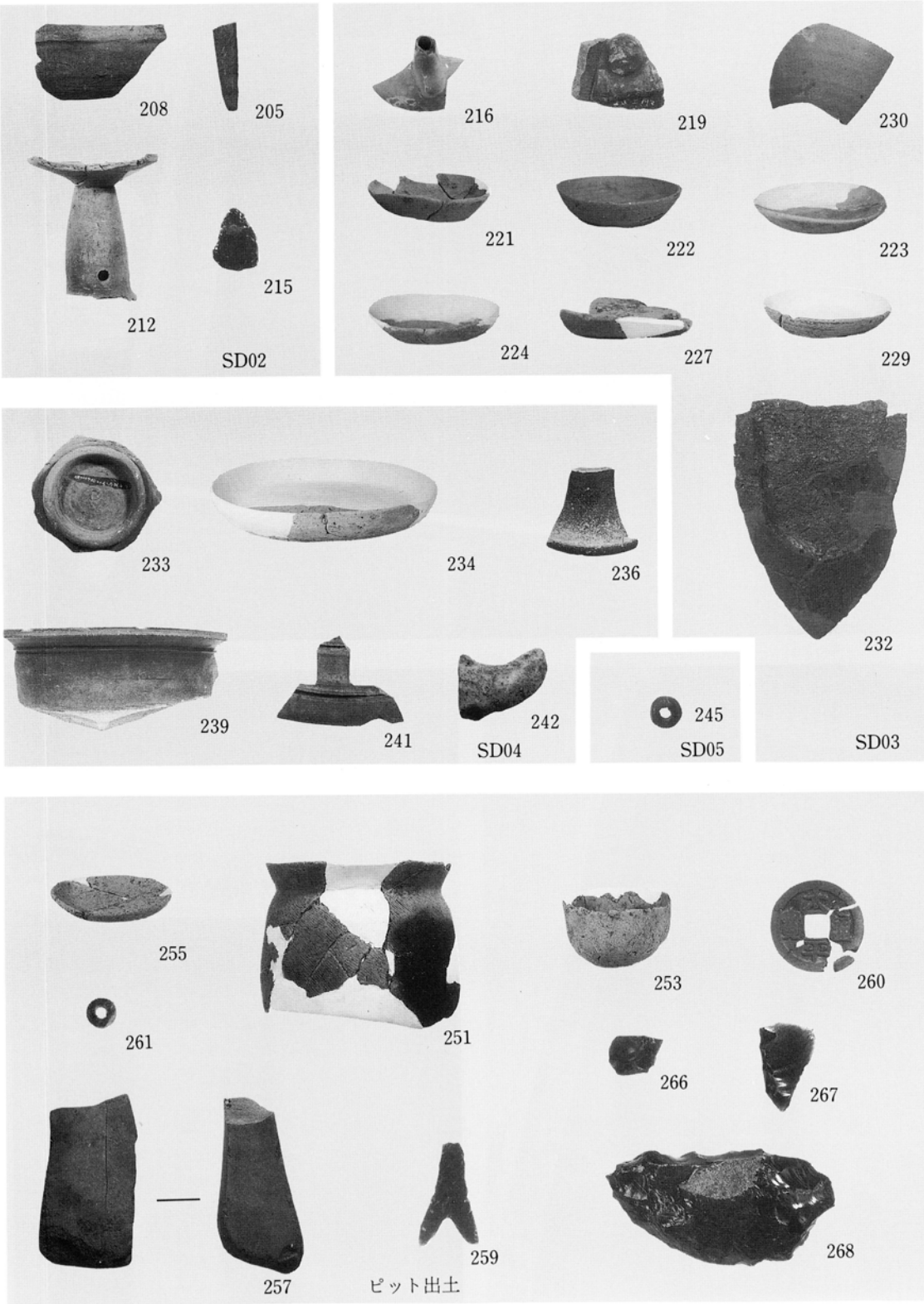
PL. 21







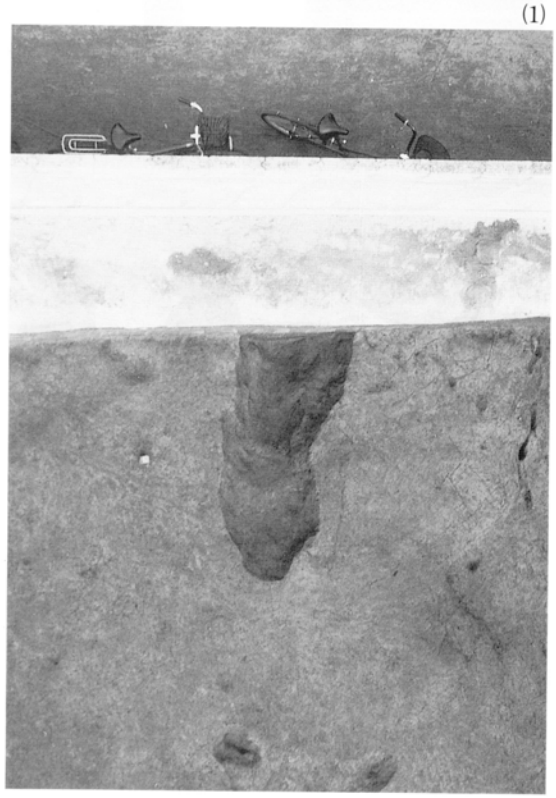
掘立柱建物・柵・SD01・02出土遺物



SD02～05・ピット出土遺物及び旧石器

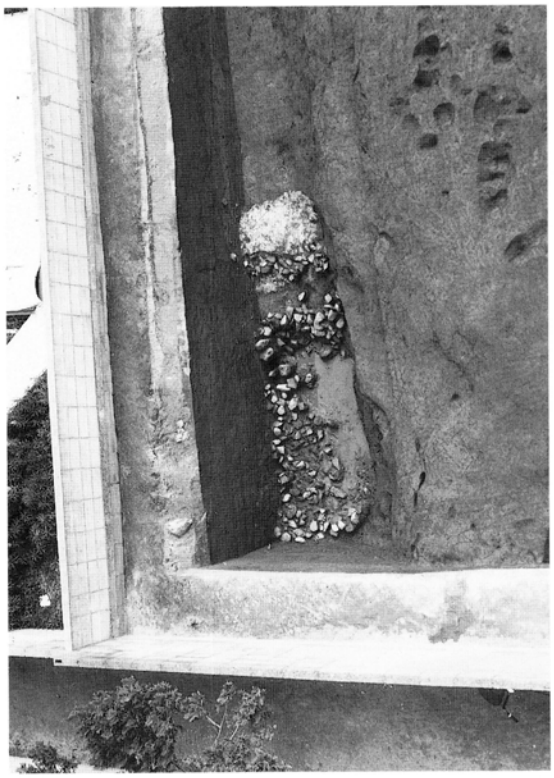
(1)

(2)



(3)

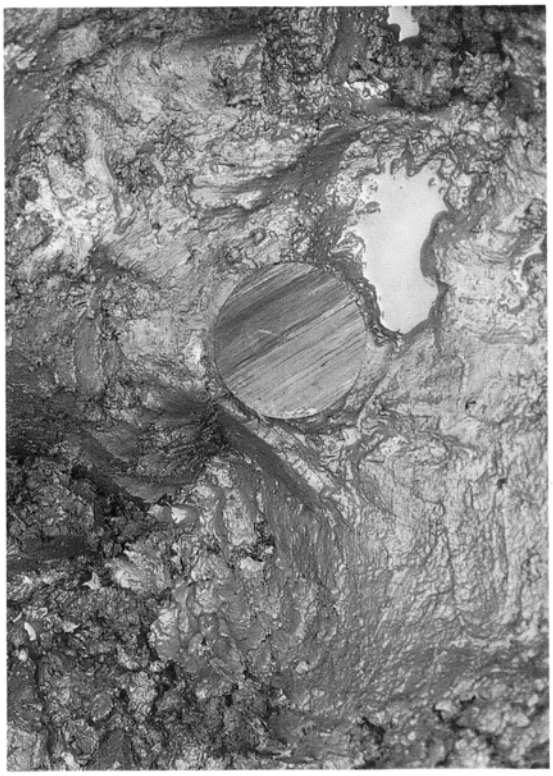
(1)第113次調査区全景（南から）(2) SD02（西から）(3) SD03（南から）



(1)

(2)

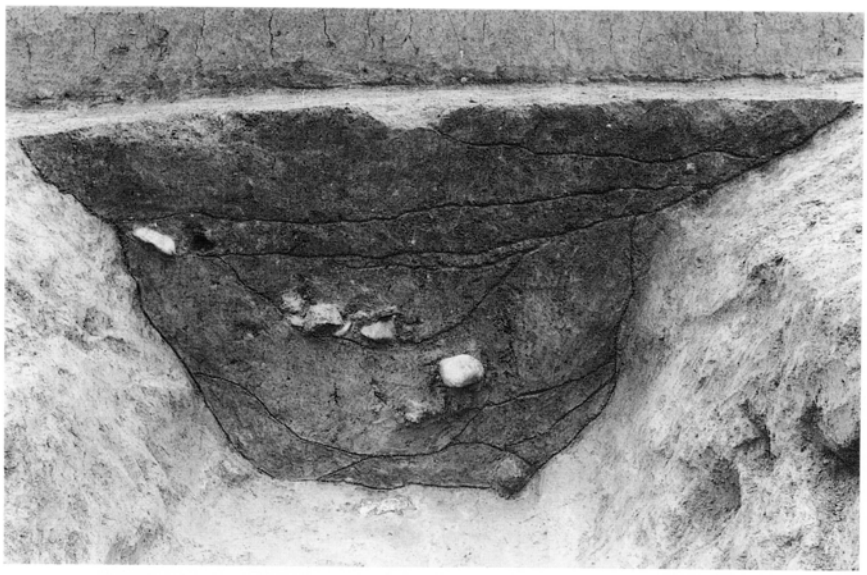
(3)



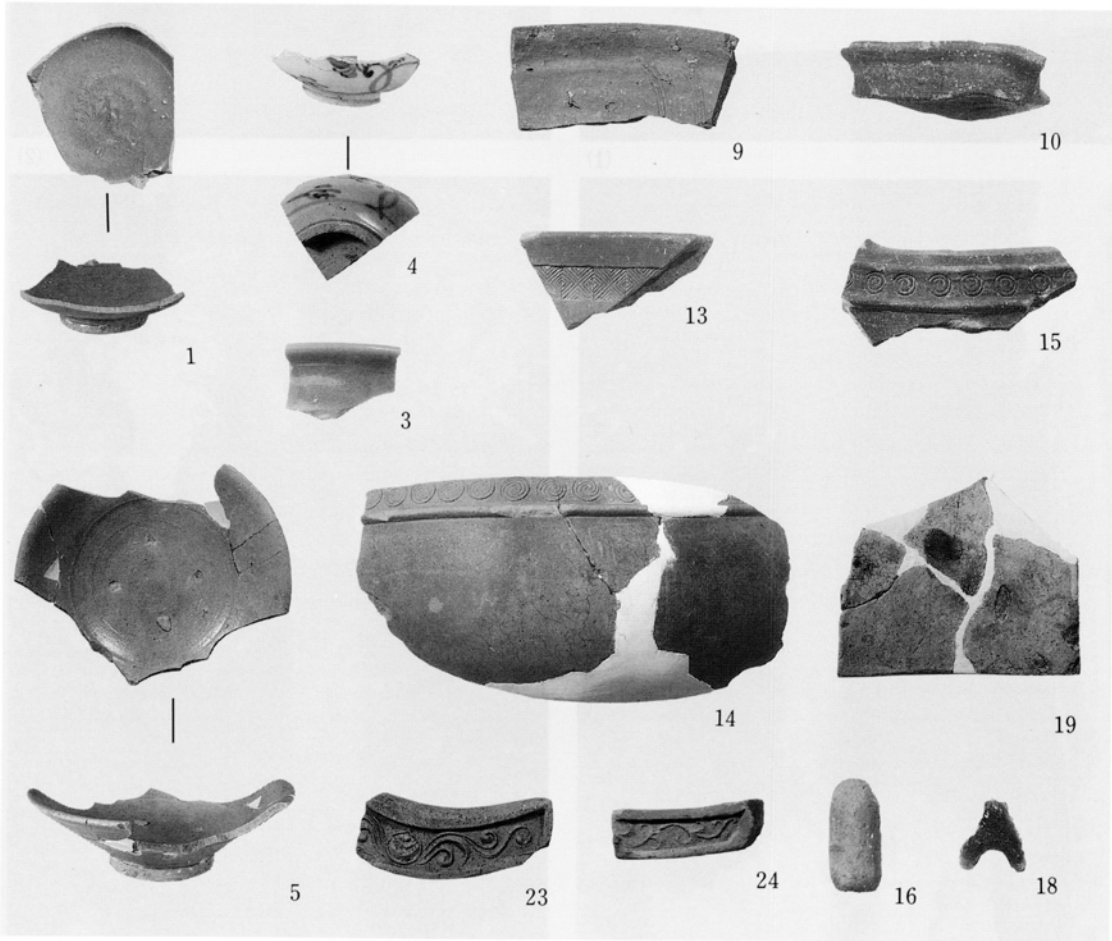
(4)

(1) SD01礫群（西から）(2)同完掘状況（東から）(3) SD01土層（南から）(4)同木製品出土状況

PL. 25

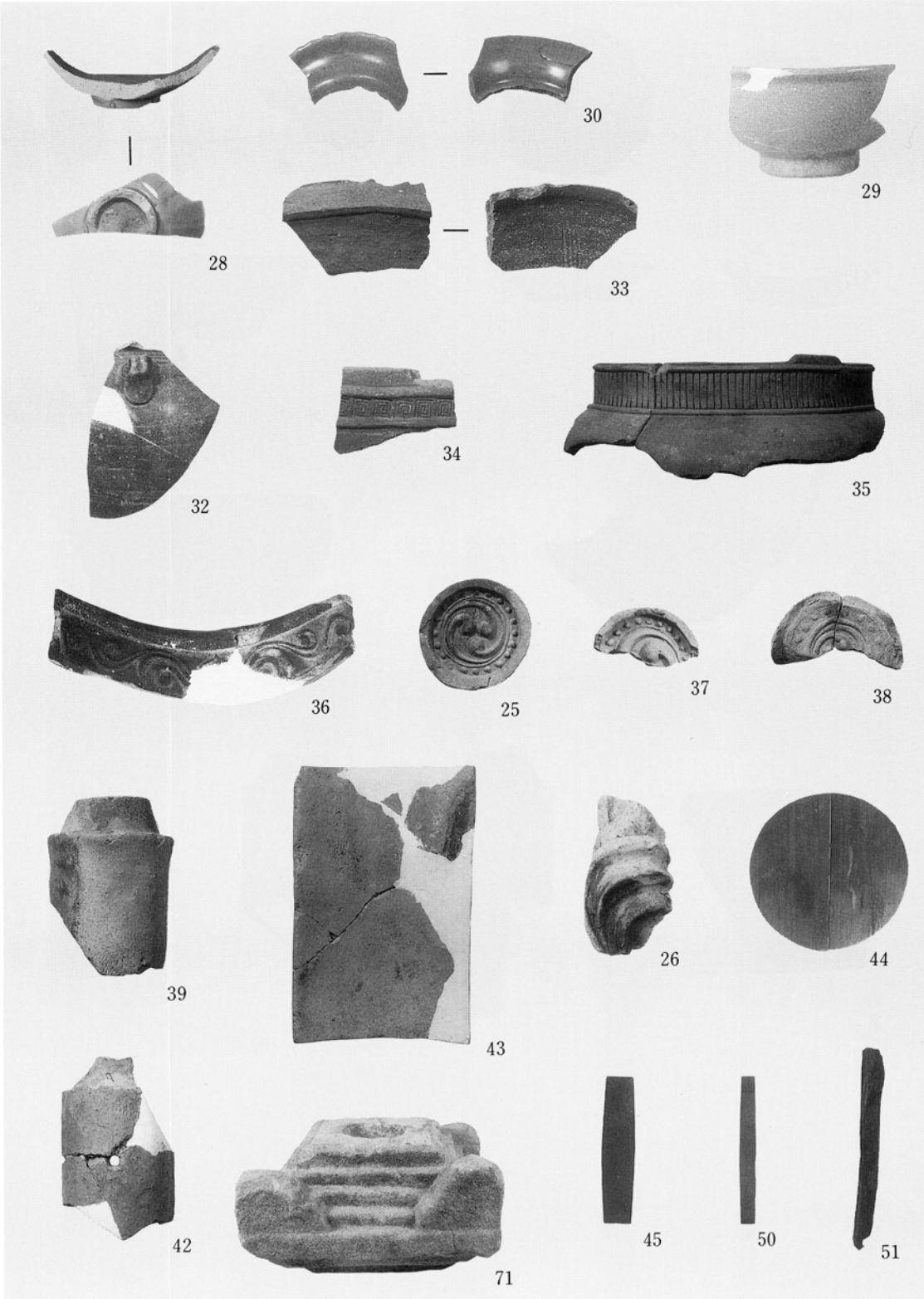


(1)



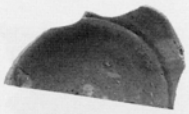
(2)

(1) SD02土層（南から）(2) SD01出土遺物Ⅰ



SD01出土遺物II （71はSD02出土）

PL. 27



66

64

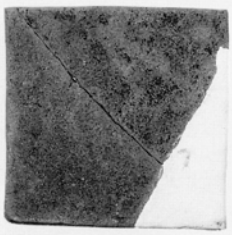
53

56

63

61

65



67

69

70

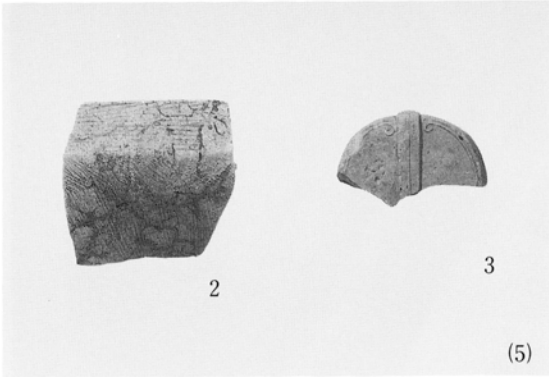
SD02出土遺物

(1)

(2)

(3)

(4)



(5)

(1)第120次調査区全景（西から）(2) SK01（南から）(3) SK02（南から）(4) SK03（北から）(5)出土遺物

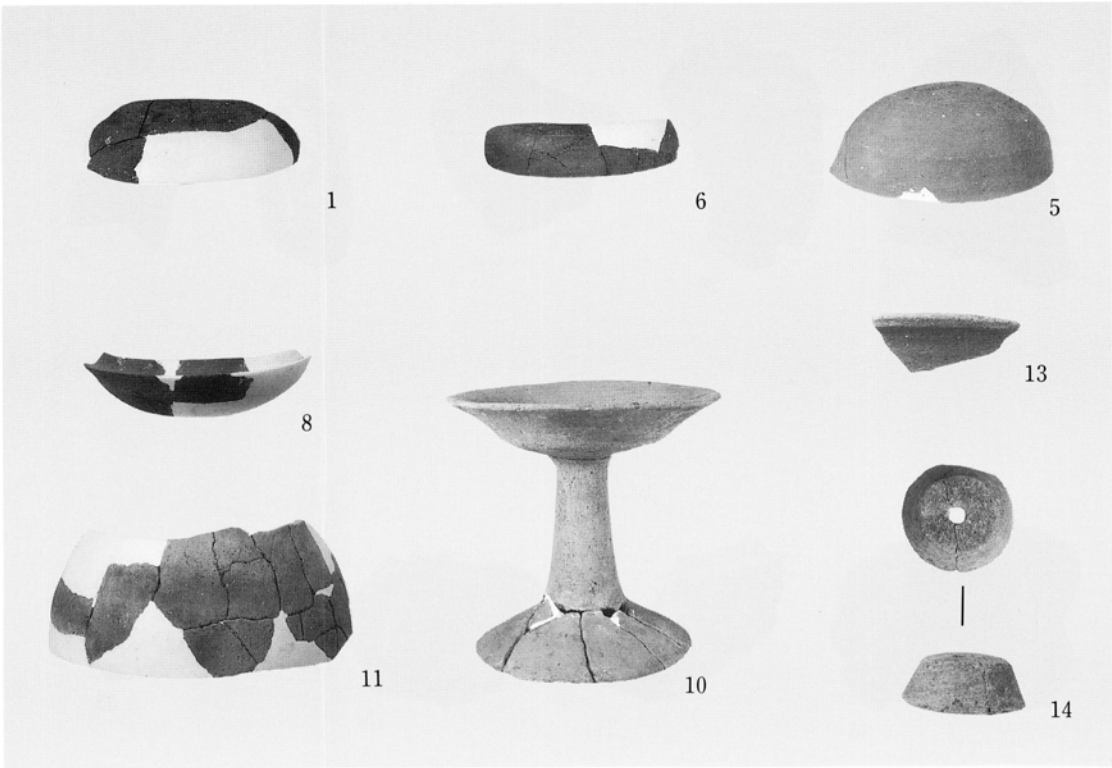
(1)

(2)

(3)

(1)第131次調査区全景（東から）(2) SC01（北から）(3)同カマド検出状況（東から）

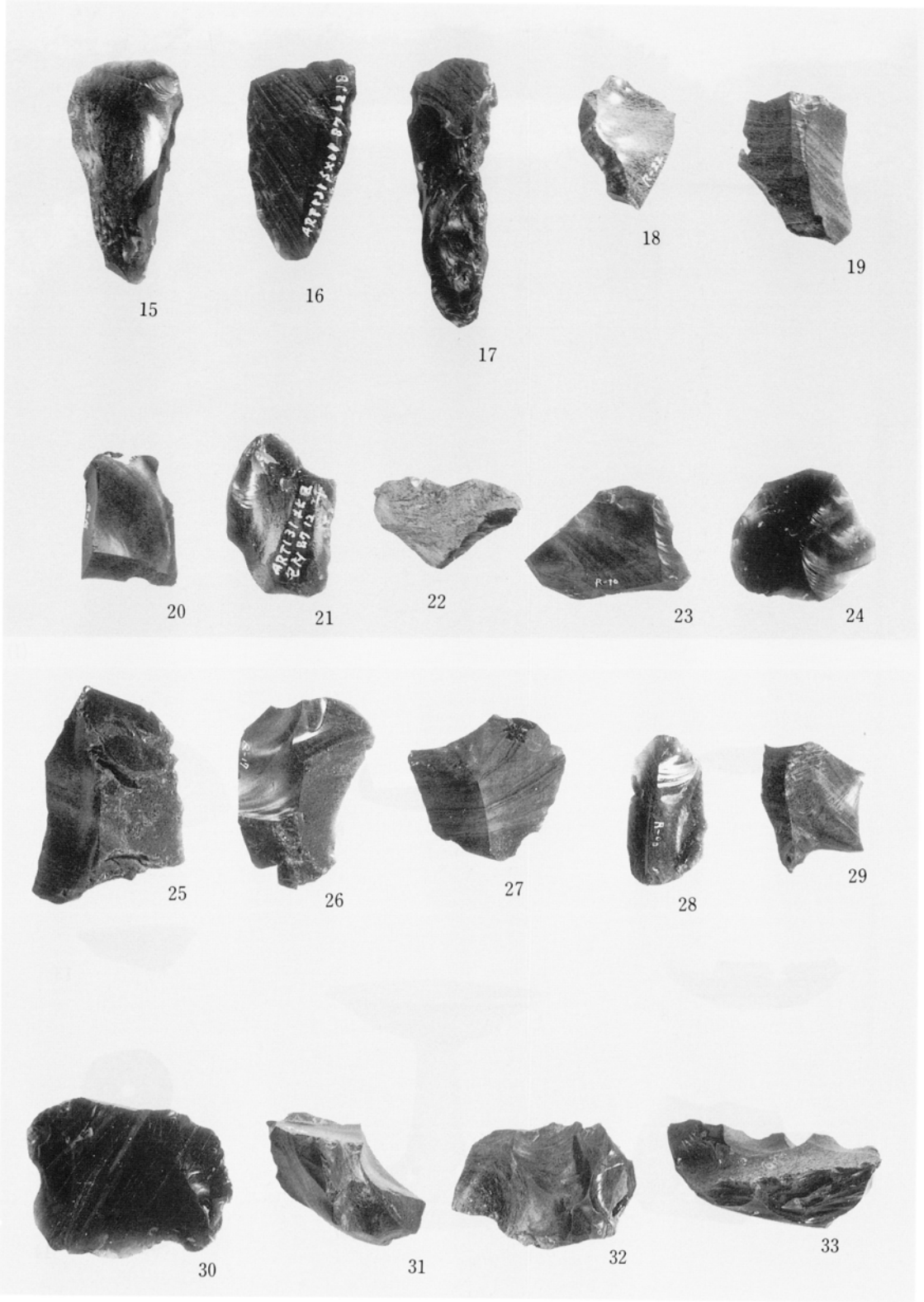
(1)



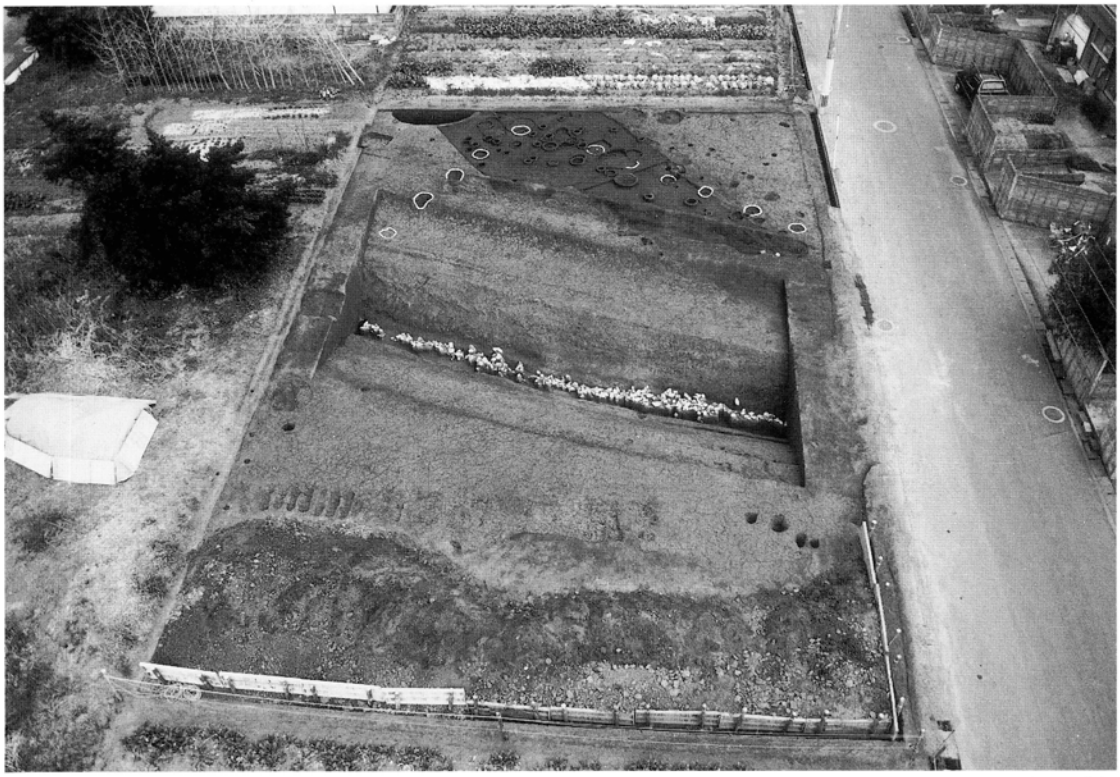
(2)

(1) 旧石器時代調査区全景（南から）(2) SC01出土遺物

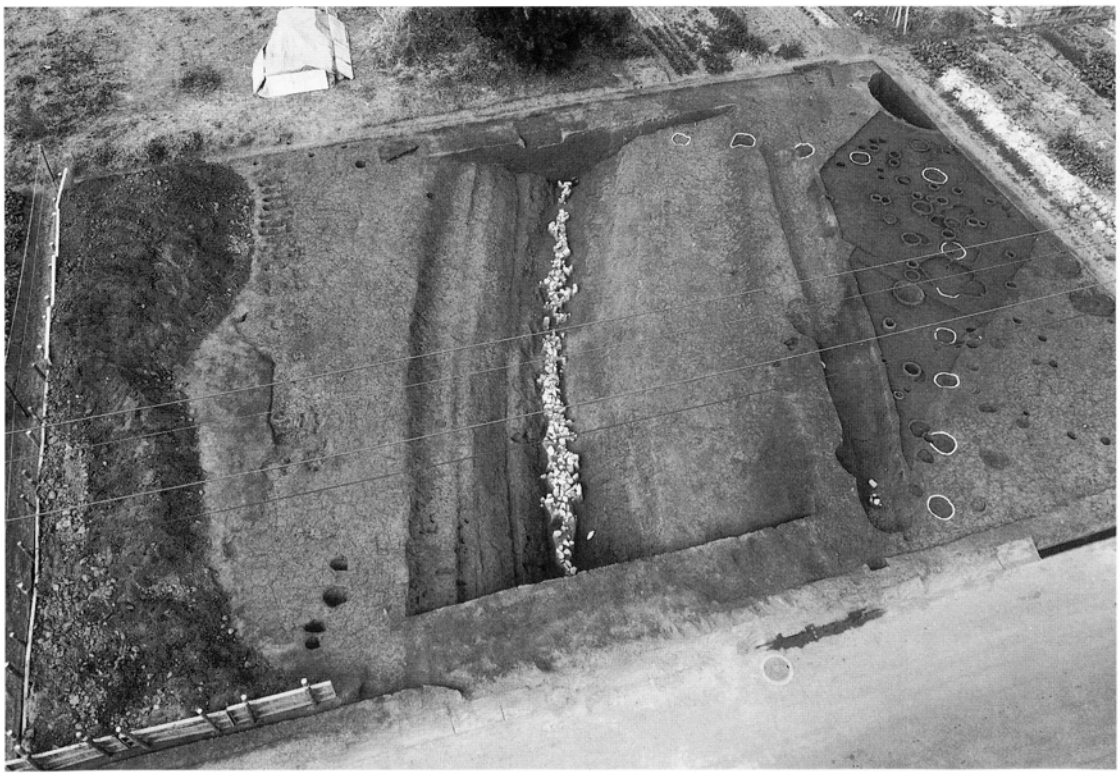
PL. 31



旧石器時代遺物

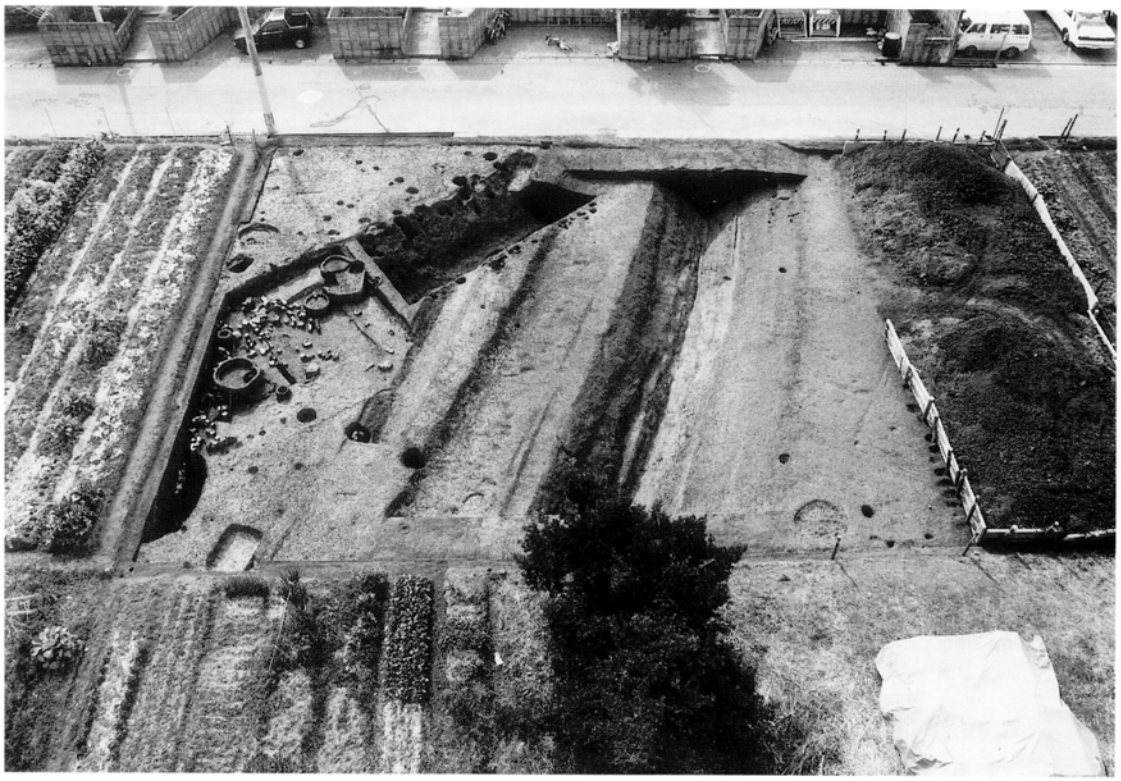


(1)



(2)

(1) 第133次調査区全景（西から）(2) SD01（南から）



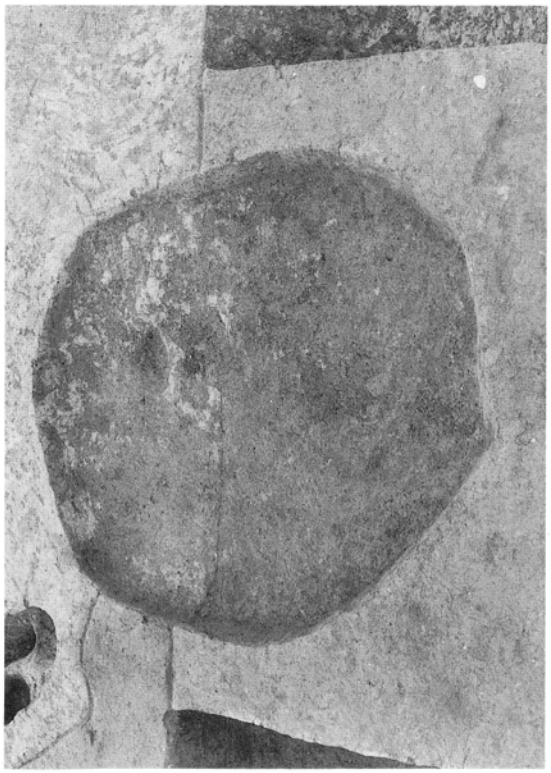
(1)

(2)

(1) 第133次調査区全景（北から）(2) SC01・SD03（北西から）

(1)

(2)



(3)

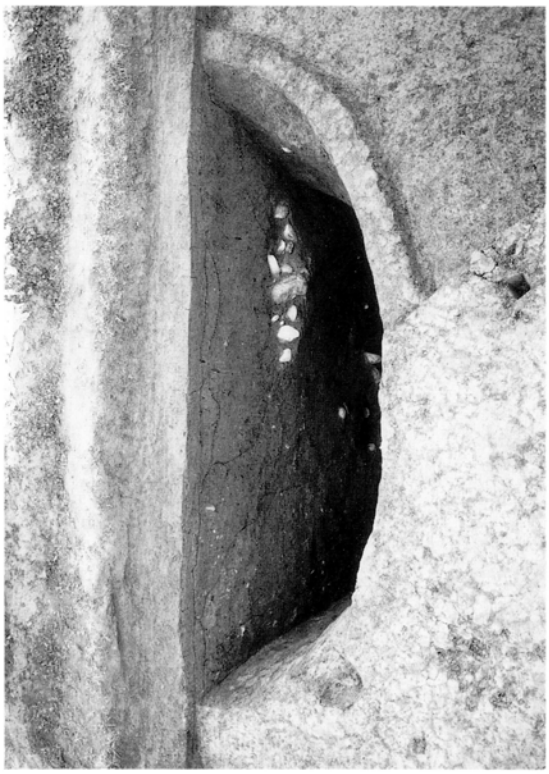
(4)

(1) SC01（西から）(2)同完掘状況（南東から）(3) SK01（東から）(4) SK02（南から）

(1)

(2)

(3)

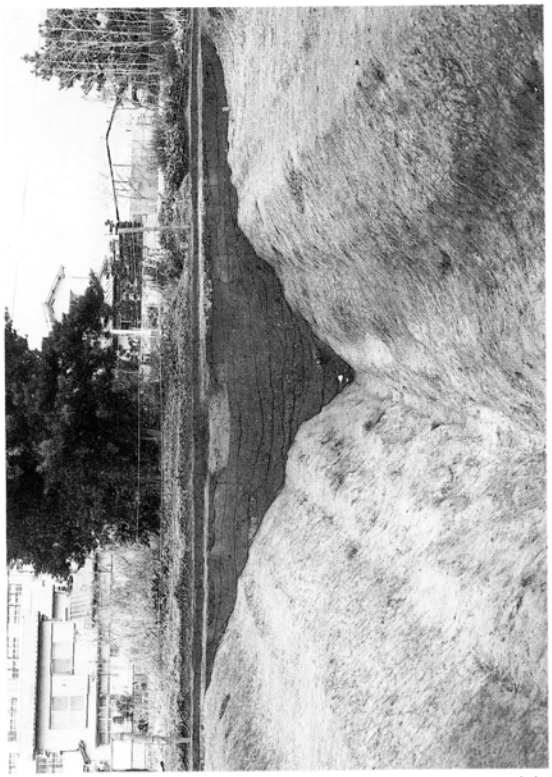


(4)

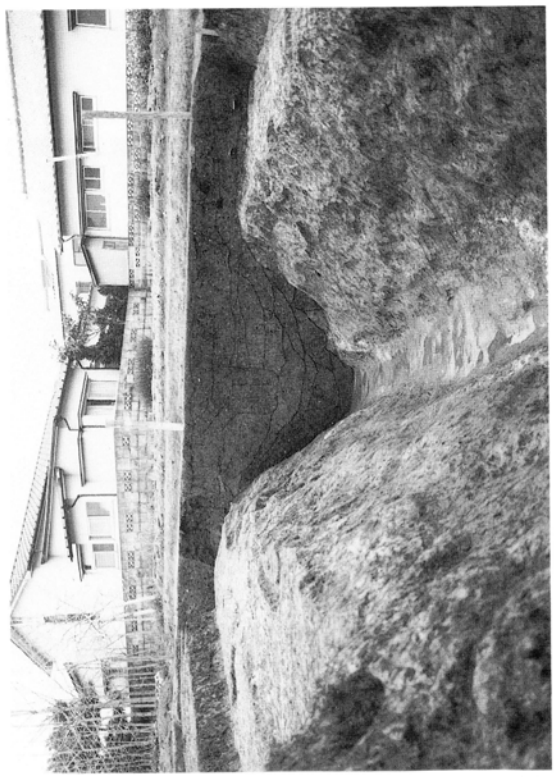
(1) SK03（西から）(2) SK04（北から）(3) SK05（南から）(4) SE01（西から）

(1)

(2)



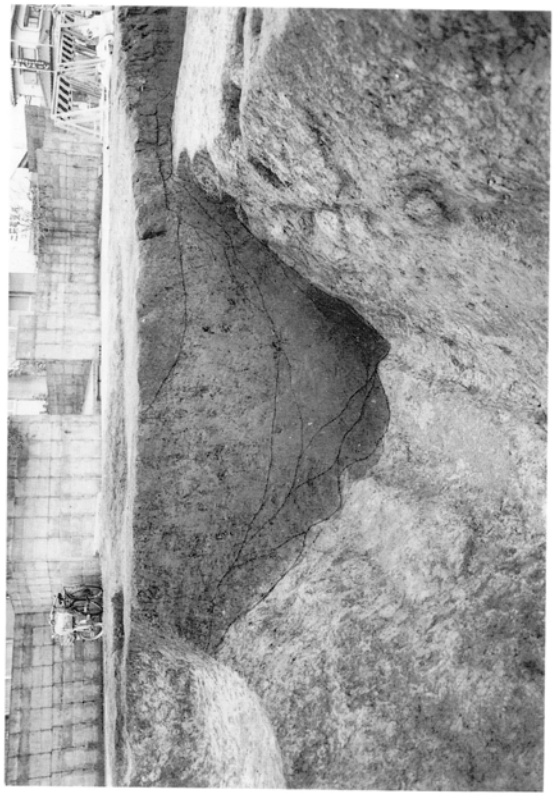
(3)



(4)

(1) SD02（南から）(2) SD03（南西から）(3) SD01北壁土層（南から）(4) SD03・SC01東壁土層（西から）

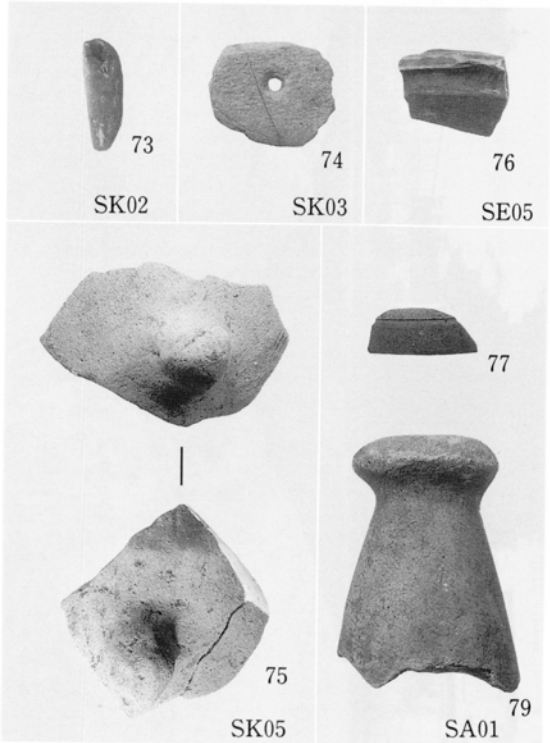
PL. 37



(1)

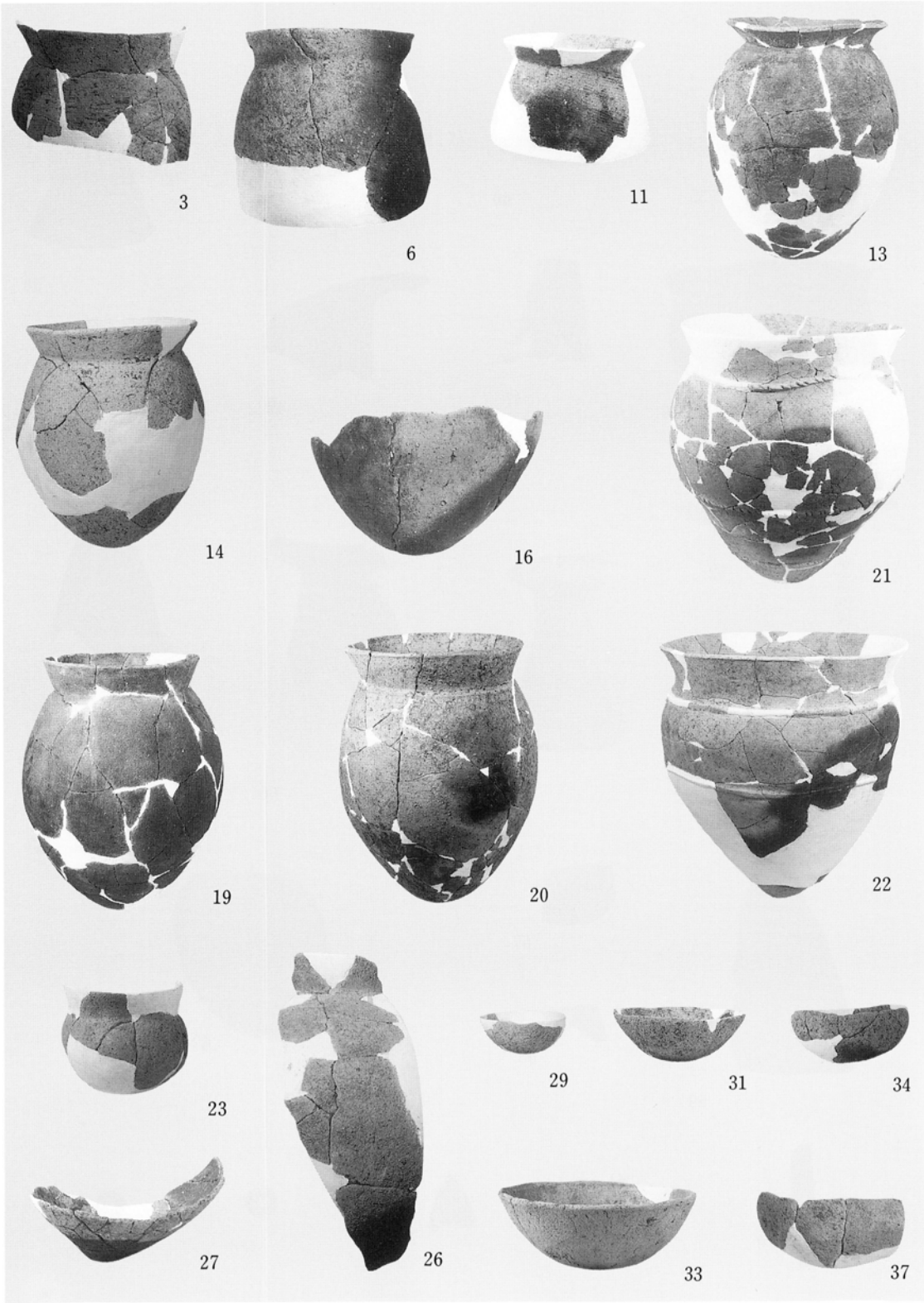
(2)

(3)

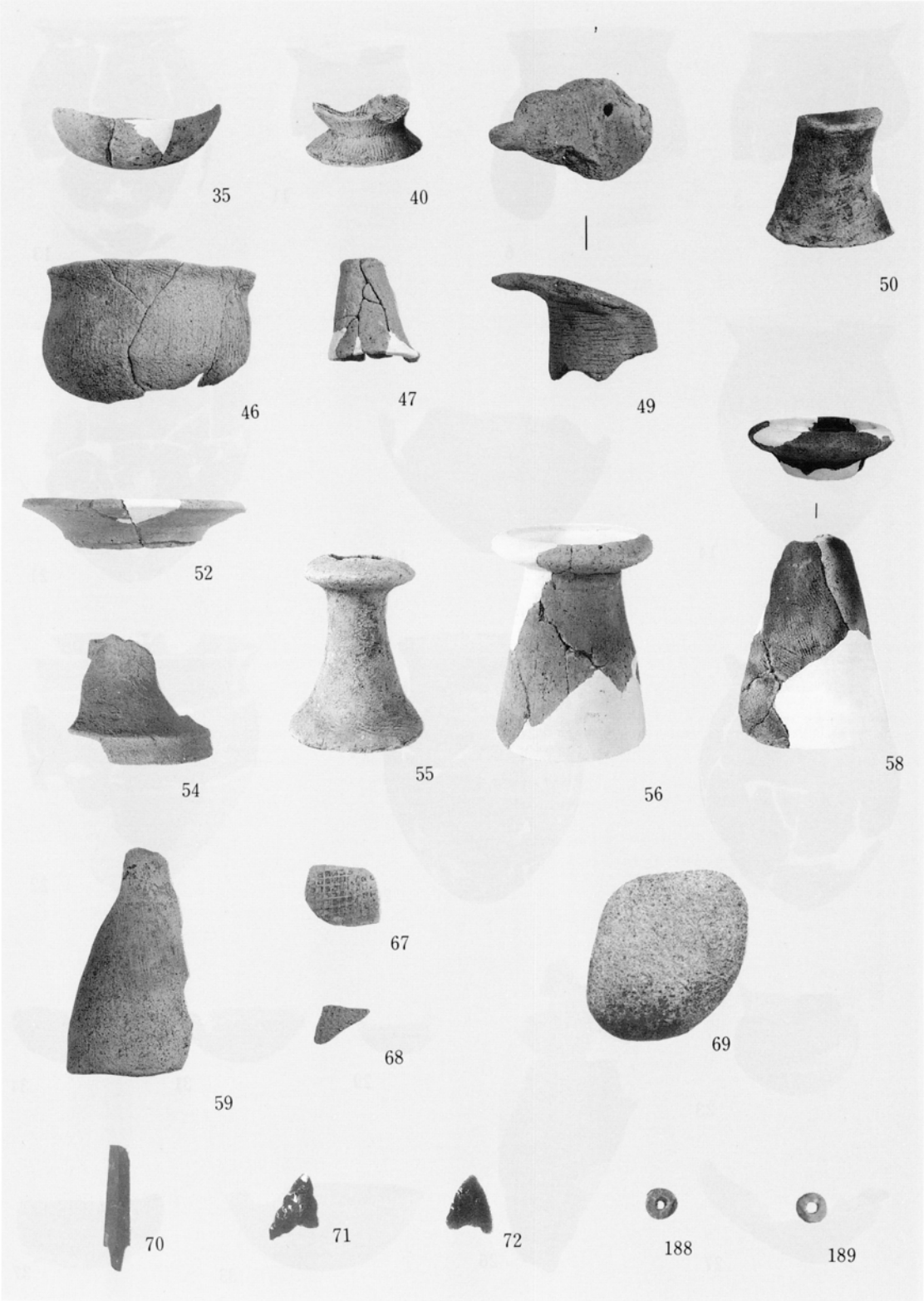


(4)

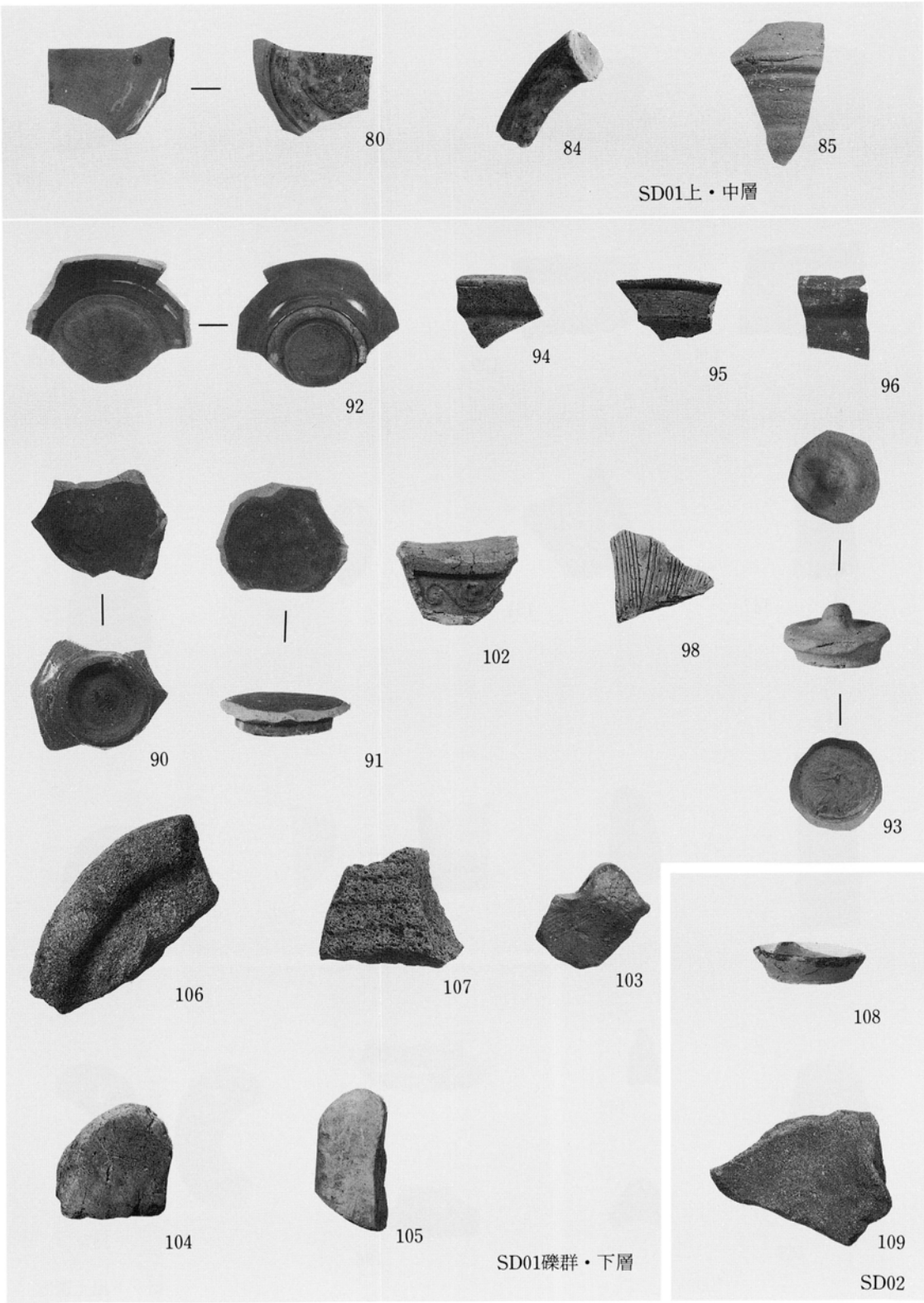
(1) SD03南壁土層（北から）(2)同中央土層（南西から）(3) SA01-10根石状況（東から）(4)土坑・井戸・柵出土遺物



SC01出土遺物 I

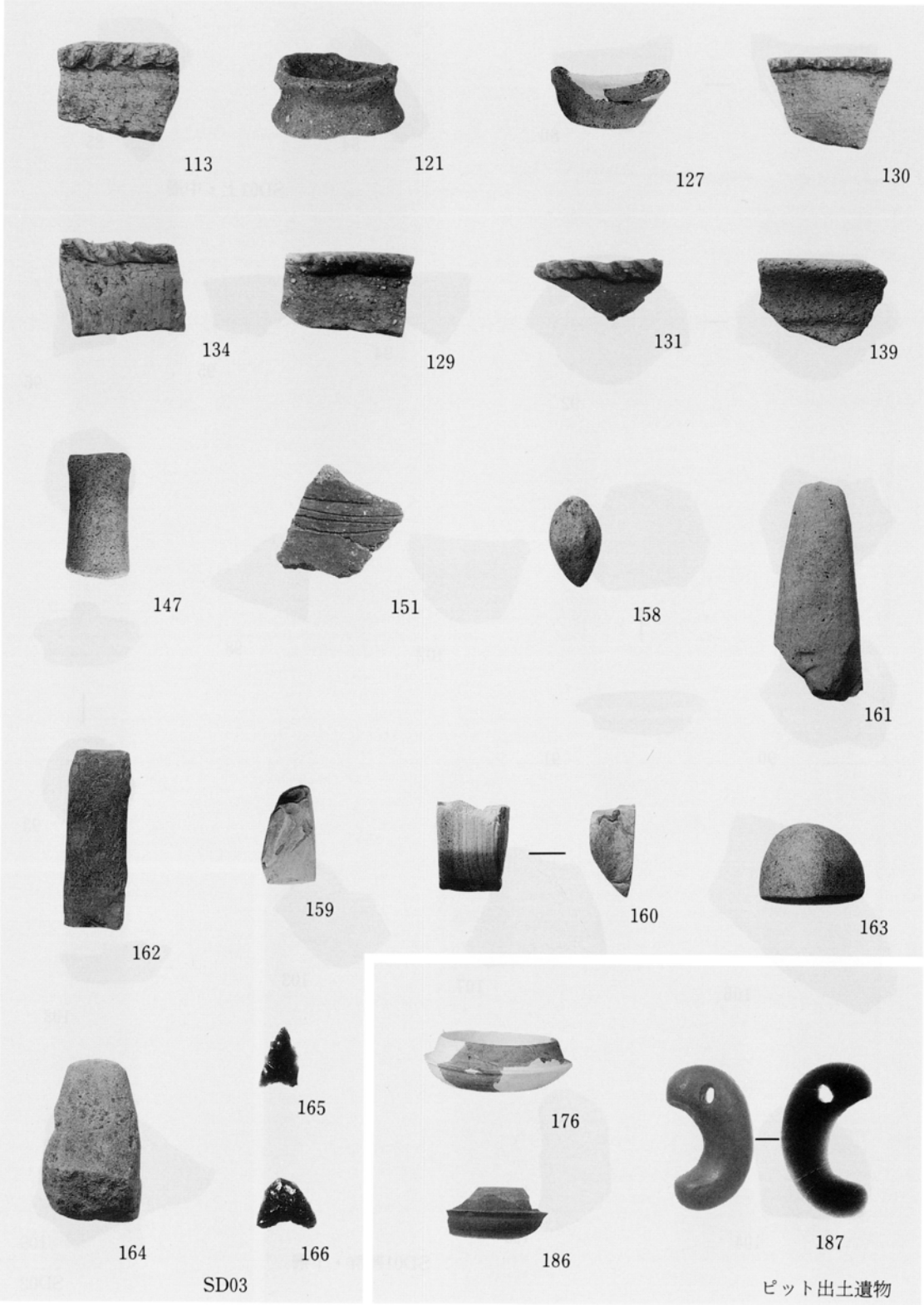


SC01出土遺物II


80
84
85
SD01上・中層
92
94
95
96
102
98
90
91
93
106
107
103
108
104
105
109
SD01礫群・下層
SD02

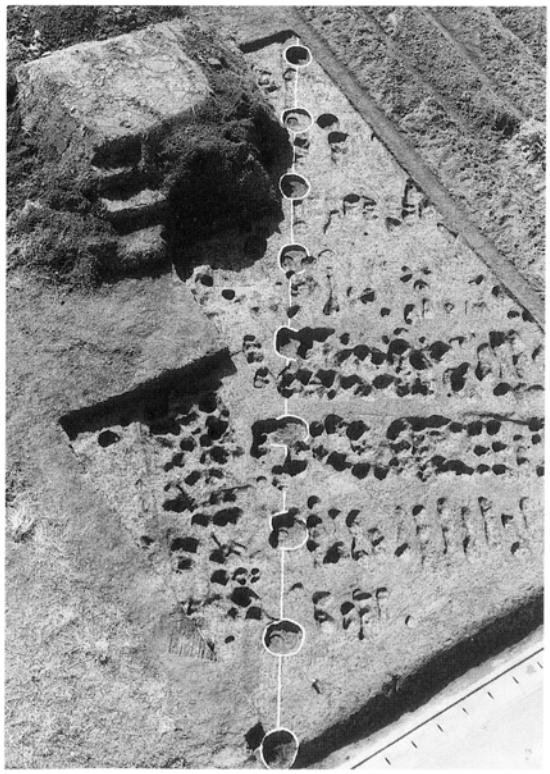
SD01・02出土遺物

PL. 41

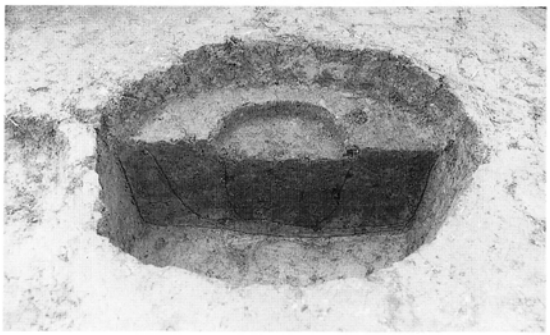


SD03・ピット出土遺物

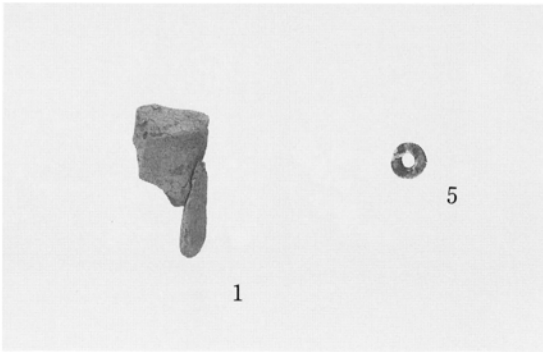
(1)



(2)



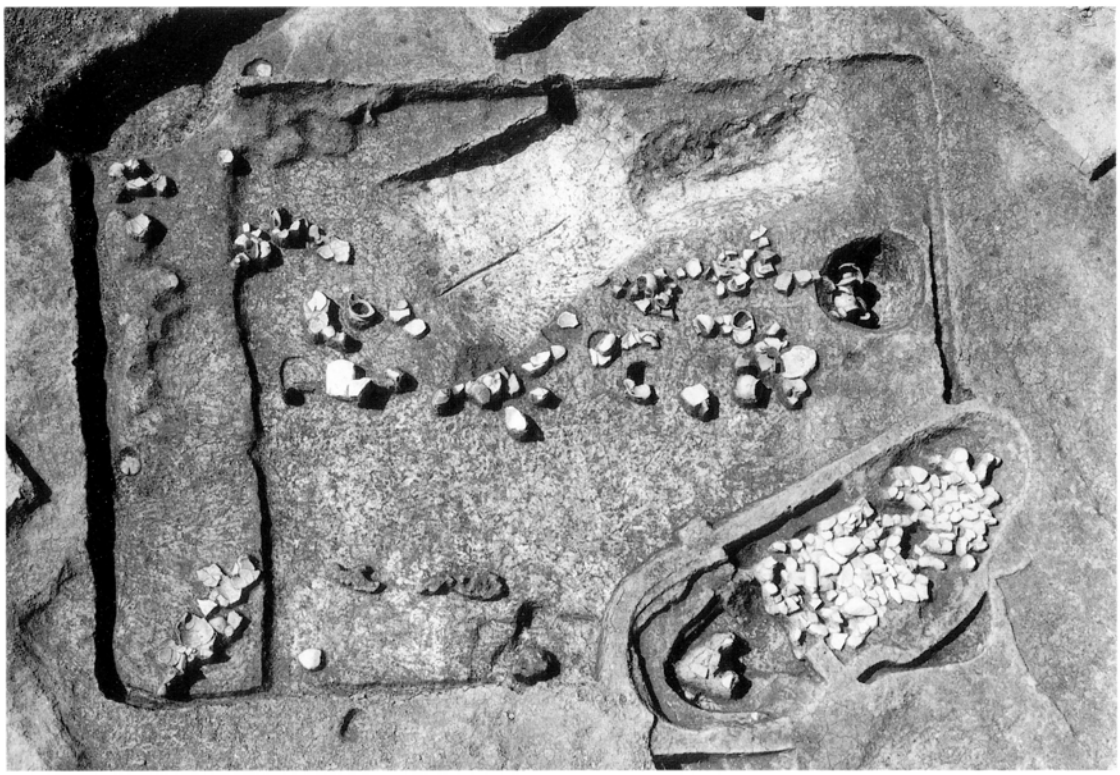
(3)



(4)

(1)第146次調査区全景（南西から）(2) SA09（北東から）(3) SA09柱穴断割り（北西から）(4)出土遺物

(1)



(2)

(1)第149次調査区全景（南から）(2) SC05（南東から）

(1)

(2)

(3)

(4)

(1) SC05遺物出土状況（東から）(2) SC05内 SK14（北から）(3) SK04（南から）(4)同遺物出土状況

PL. 45

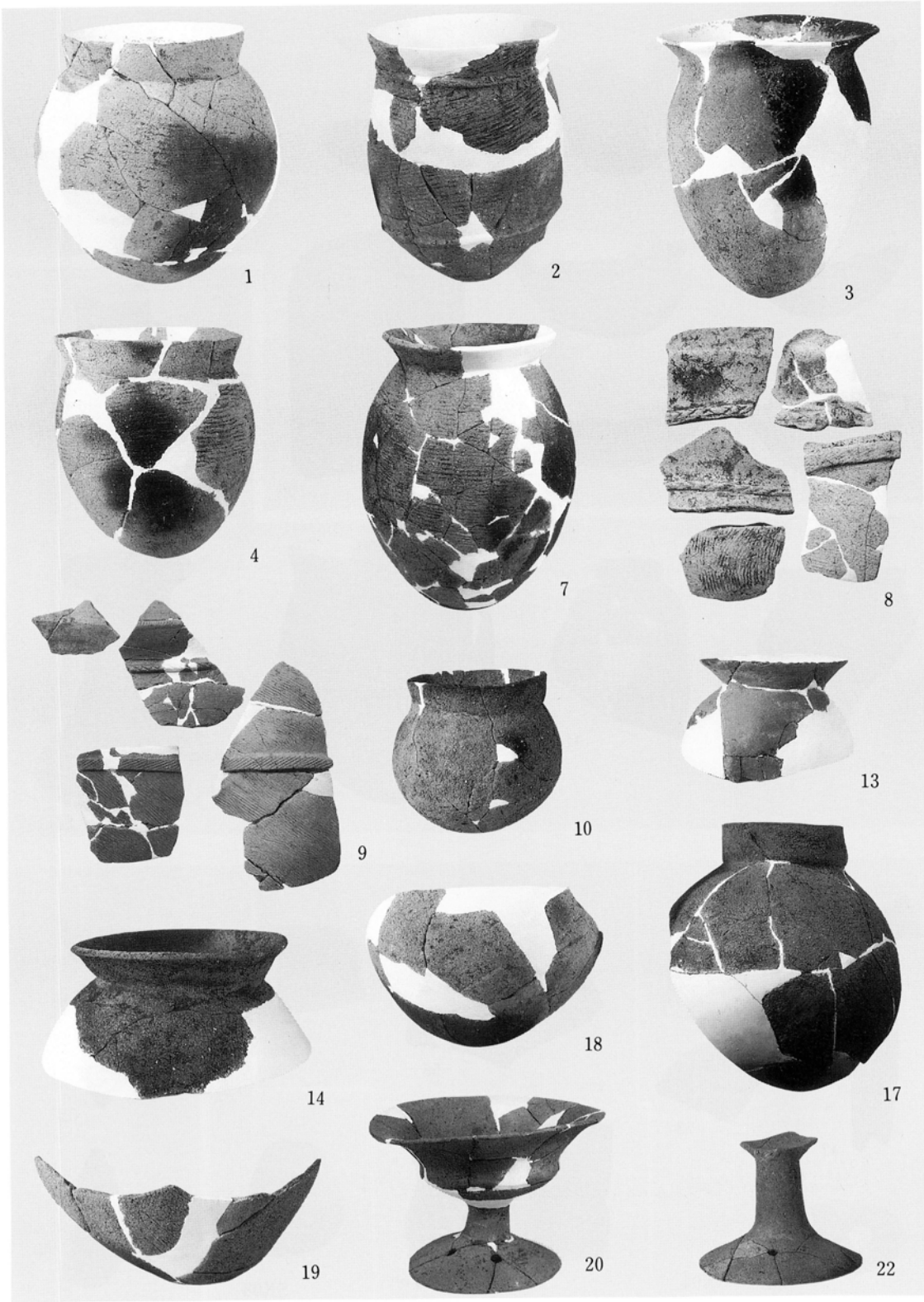
(1)

(2)

(3)

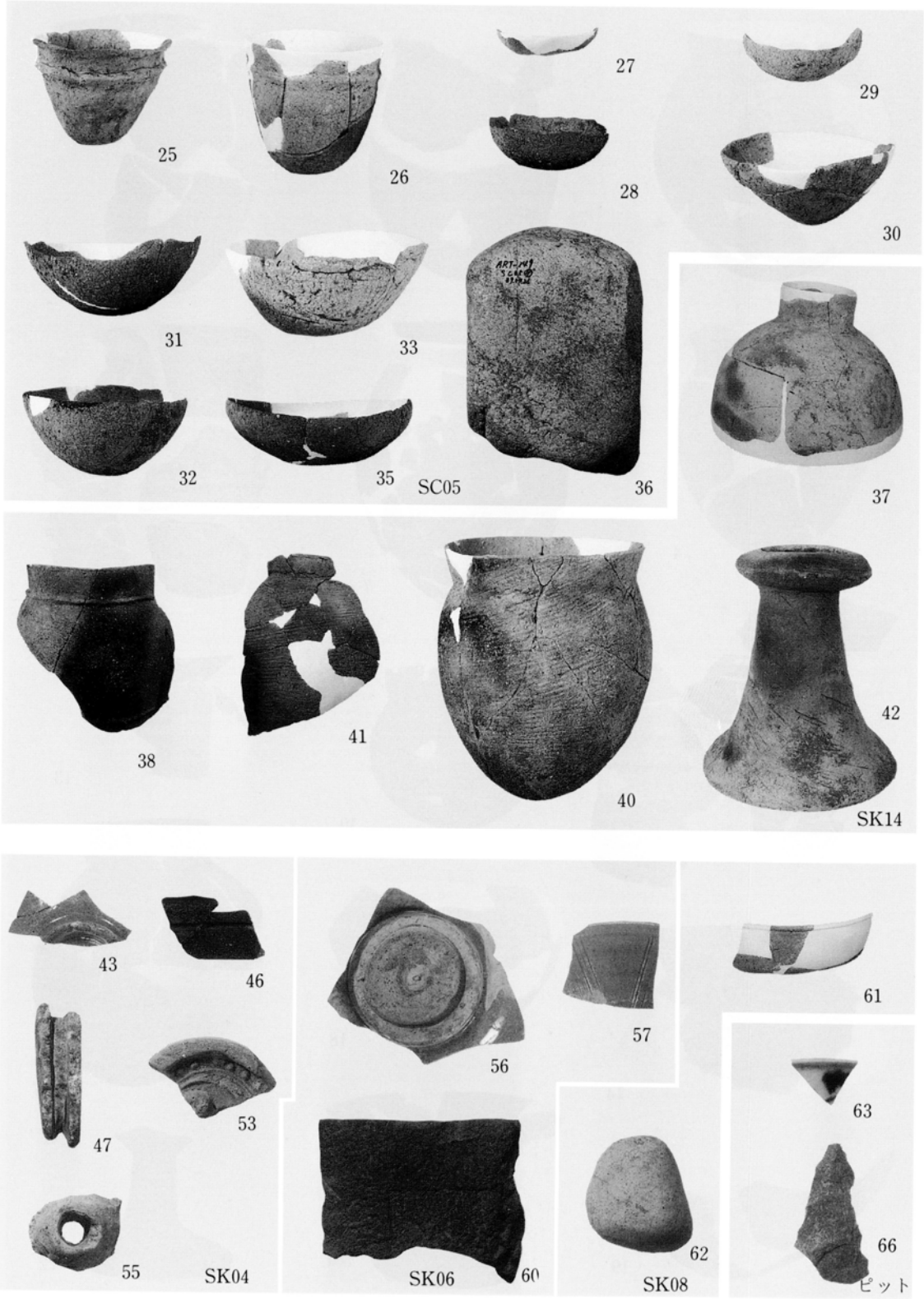
(4)

(1) SK06（東から）(2) SK08（西から）(3) SK11（北東から）(4) SK10・18（北から）



SC01 出土遺物 I

PL. 47



SC05・土坑・ピット出土遺物

有田・小田部 第11集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第234集

1990年　（平成２年）３月31日

発　行　福岡市教育委員会
〒810 福岡市中央区天神
１丁目8の1

印　刷　栄光印刷株式会社